鳥取県教育文化財団調査報告書119

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻家ノ上ノ内遺跡
KANA MAWARI IE NO UE NO UTI

越敷山古墳群（金廻地区）
KO SHIKI SAN KANA MAWARI

２０１３

財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県教育文化財団調査報告書119

一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻家ノ上ノ内遺跡
KANA MAWARI IE NO UE NO UTI

越敷山古墳群（金廻地区）
KO SHIKI SAN KANA MAWARI

２０１３

財団法人　鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする全国的にも注目されるような古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、それらの遺跡の調査成果に基づいて、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。こうした先人が残した素晴らしい地域の遺産である遺跡を後世に伝えることは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

さて、西伯郡伯耆町において国道181号線（岸本バイパス）の道路改良工事が着々と進められているところでありますが、この事業に先立ち、当財団は、鳥取県から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

このうち、平成23、24年度に調査を行った金廻家ノ上ノ内遺跡では、縄文時代の落とし穴や弥生時代の竪穴建物を確認しました。また、遺跡内にある越敷山古墳群（金廻地区）についても調査を行い、越敷山51号墳では５体の人骨が発見されたほか、副葬品も豊富に出土するなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を得ることができました。

そして、このたび、その発掘調査結果を報告書として上梓するはこびとなりました。この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるに当たり、鳥取県西部総合事務所県土整備局並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成25年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　井　上　善　弘

例　言

1．本報告書は、鳥取県の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団が、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成23、24年度に行った金廻家ノ上ノ内遺跡および越敷山古墳群（金廻地区）の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地および調査面積は以下のとおりである。
金廻家ノ上ノ内遺跡、越敷山古墳群（金廻地区）
：鳥取県西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内21-2番地ほか
調査面積：4,544.5㎡（平成23年度：3,580㎡、平成24年度：964.5㎡）

3．本報告書における方位は公共座標北を示し、Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。標高は海抜標高を示す。

4．本報告書に掲載した地形図は、岸本町（現伯耆町）発行の１／2,500地形図「岸本町全図」、および国土地理院発行の1/50,000「米子」を使用した。

5．本調査は、平成23年度を財団法人鳥取県教育文化財団の野口、馬路、平成24年度は同財団の玉木が担当した。なお、両年度ともに株式会社埋蔵文化財サポートシステムの支援を受けた。越敷山49号墳、越敷山51号墳の人骨の取り上げおよび鑑定は鳥取大学医学部の井上貴央教授、石棺内の赤色顔料および石材の分析は岡山理科大学生物地球学部の白石純教授に協力いただいた。

6．本報告書に掲載した遺構の図面作製は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、野口、馬路、玉木がこれを補佐した。出土遺物の実測・浄書は財団法人鳥取県教育文化財団調査室岸本調査事務所が行った。

7．本報告書で使用した遺跡の写真撮影は株式会社埋蔵文化財サポートシステムが行い、遺物の写真は玉木が撮影した。

8．本報告書の執筆と編集は玉木が行った。

9．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10．現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々、機関に御指導、御協力いただいた。明記して深謝いたします（五十音順、敬称略）。
足立昭子、井上貴央、江田真毅、岡﨑健治、財団法人米子市教育文化事業団、白石純、西部土地改良区、鳥取県教育委員会、伯耆町教育委員会、松原章範

凡　例

1．遺物の注記における遺跡名には、「金廻11」（平成23年度調査分）、「金廻12」（平成24年度調査分）を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号」を記入した。

2．本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SI：竪穴建物　SB：掘立柱建物　SS：段状遺構　SK：土坑、土坑墓、落とし穴

3．発掘調査時における遺構番号と報告書記載時の遺構番号を変更している。新旧の遺構名・番号対照表は第１表に示した。

4．遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。
土器：1/4、石器：1/2、金属製品：1/3、1/4、玉類・櫛：1/1

5．本書における土層色調、土器色調は『新版 標準土色帳』による。

6．遺物実測図に用いたトーンおよび記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
：布付着範囲

7．遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。

8．遺物観察表等の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

9．本報告書における遺構、遺物の時期決定は下記参考文献に基づいている。

参考文献

清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
清水真一　1978「第Ⅳ章第１節土器論」『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会
牧本哲雄　1999「第９章第１節古墳時代出土の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第６遺跡』鳥取県教育文化財団

目　次

序
例言
凡例

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査にいたる経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……1
　第３節　調査体制……5
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……6
第３章　調査の成果
　第１節　遺跡の概要と層序……10
　第２節　古墳の調査……18
　第３節　古墳以外の調査……86
　第４節　遺構に伴わない遺物……105
第４章　自然科学分析の成果
　第１節　越敷山51号墳埋葬施設１の赤色顔料および石棺石材について……（白石　純）106
　第２節　金廻家ノ上ノ内遺跡から検出された人骨について
　　……（井上貴央・松原章範・岡﨑健治・江田真毅・足立昭子）108
第５章　総括
　第１節　越敷山古墳群（金廻地区）について……121
　第２節　まとめ……124

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１章
第１図　調査地位置……２
第２図　調査区地割り模式図……３
第２章
第３図　遺跡位置……６
第４図　周辺遺跡分布図……８
第３章
第５図　調査前地形図……11
第６図　第１遺構面遺構配置図……12
第７図　第２遺構面遺構配置図……13
第８図　土層断面位置……14
第９図　調査区内土層断面……15
第10図　地山堆積状況模式図……17
第11図　越敷山121号墳 ……18
第12図　越敷山121号墳遺物出土状況 ……19
第13図　越敷山121号墳出土遺物 ……20
第14図　越敷山75号墳……21
第15図　越敷山75号墳埋葬施設①……22
第16図　越敷山75号墳埋葬施設②……23
第17図　越敷山75号墳
遺物出土状況・出土遺物……24
第18図　越敷山76号墳……25
第19図　越敷山76号墳遺物出土状況・
埋葬施設①……26
第20図　越敷山76号墳埋葬施設②……27
第21図　越敷山76号墳出土遺物……28
第22図　越敷山98号墳……29
第23図　越敷山98号墳埋葬施設……30
第24図　越敷山122号墳 ……32
第25図　越敷山122号墳埋葬施設① ……33
第26図　越敷山122号墳出土遺物 ……33
第27図　越敷山122号墳埋葬施設② ……34
第28図　越敷山123号墳 ……35
第29図　越敷山123号墳墳丘断面 ……36
第30図　越敷山123号墳埋葬施設① ……36
第31図　越敷山123号墳埋葬施設② ……37
第32図　越敷山123号墳出土遺物 ……38
第33図　越敷山77号墳検出状況……39
第34図　越敷山77号墳……40
第35図　越敷山77号墳墳丘除去後……40
第36図　越敷山77号墳墳丘断面……41
第37図　越敷山77号墳埋葬施設①
・出土遺物……43
第38図　越敷山77号墳埋葬施設②……44
第39図　越敷山49号墳……46
第40図　越敷山49号墳墳丘除去状況①……47
第41図　越敷山49号墳墳丘除去状況②……48
第42図　越敷山49号墳墳丘断面……49
第43図　越敷山49号墳埋葬施設１①……51
第44図　越敷山49号墳埋葬施設１②……52
第45図　越敷山49号墳埋葬施設１③……53
第46図　越敷山49号墳埋葬施設２①……54
第47図　越敷山49号墳埋葬施設２②……55
第48図　越敷山49号墳出土遺物……56
第49図　越敷山51号墳検出状況……57
第50図　越敷山51号墳……58
第51図　越敷山51号墳墳丘除去状況①……59
第52図　越敷山51号墳墳丘除去状況②……60
第53図　越敷山51号墳墳丘除去後……61
第54図　越敷山51号墳墳丘断面図①……62
第55図　越敷山51号墳墳丘断面図②……63
第56図　越敷山51号墳周溝断面図……65
第57図　越敷山51号墳埋葬施設１追葬時
掘り方……66
第58図　越敷山51号墳埋葬施設１①……67
第59図　越敷山51号墳埋葬施設１②……68
第60図　越敷山51号墳埋葬施設１
石棺内人骨・遺物出土状況……69
第61図　越敷山51号墳埋葬施設１
石棺石材施溝状況……71
第62図　越敷山51号墳埋葬施設１
石棺調整剥片散乱状況……72
第63図　越敷山51号墳埋葬施設２①……74
第64図　越敷山51号墳埋葬施設２②……75
第65図　越敷山51号墳埋葬施設２③……76
第66図　越敷山51号墳出土遺物①……77
第67図　越敷山51号墳出土遺物②……78
第68図　越敷山51号墳出土遺物③……79

第69図　越敷山51号墳出土遺物④……80
第70図　越敷山51号墳出土遺物⑤……81
第71図　越敷山99号墳……82
第72図　越敷山99号墳埋葬施設①……83
第73図　越敷山99号墳埋葬施設②……84
第74図　越敷山99号墳
遺物出土状況・出土遺物……85
第75図　SI1 ……87
第76図　SI1埋没状況模式図・出土遺物 ……88
第77図　SI2① ……89
第78図　SI2②・埋没状況模式図 ……90
第79図　SI2出土遺物 ……90
第80図　SB1 ……91
第81図　SS1・2 ……92
第82図　SK1・2 ……93
第83図　SK3 ～ 7 ……95
第84図　SK8・9 ……96
第85図　SK10 ……97
第86図　SK11 ～ 16 ……98
第87図　SK17 ～ 19 ……99
第88図　SK20・21 …… 100
第89図　SK22 ～ 27 …… 102
第90図　SK28 …… 103
第91図　遺構に伴わない遺物…… 104
第４章
第92図　越敷山51号墳埋葬施設１石棺石材
および周辺露頭石材の偏光顕微鏡
写真（直交二コル）…… 107
第93図　越敷山49号墳埋葬施設１の人骨の
検出状況…… 108
第94図　越敷山51号墳埋葬施設１の人骨の
検出状況…… 111
第95図　越敷山51号墳埋葬施設２の人骨の
検出状況…… 115
第96図　人骨に付着した赤色顔料の
分析結果…… 117

挿表目次

第１表　新旧遺構対照表
第３章
第２表　越敷山51号墳墳丘盛土針貫入強度…65
第４章
第３表　越敷山51号墳埋葬施設１
赤色顔料分析結果…… 107
第４表　越敷山51号墳埋葬施設１
石棺石材分析値…… 107
第５表　出土人骨一覧表…… 119
第５章
第６表　越敷山古墳群（金廻地区）一覧…… 121

文中写真

写真１　調査地遠景……10
写真２　越敷山121号墳遺物出土状況 ……19
写真３　越敷山76号墳検出状況……26
写真４　越敷山76号墳埋葬施設検出状況……26
写真５　越敷山76号墳遺物出土状況……28
写真６　越敷山122号墳埋葬施設 ……33
写真７　越敷山123号墳遺物出土状況 ……38
写真８　越敷山77号墳埋葬施設……45
写真９　越敷山49号墳遺物出土状況……56
写真10　SI1 １層除去状況 ……86
写真11　SI2検出状況 ……88
写真12　SI2床面検出状況 ……88

図版目次

PL.1　越敷山49・51・77・99号墳（西から）
PL.2　越敷山49号墳埋葬施設１（南西から）
PL.3　越敷山51号墳埋葬施設１（南西から）
PL.4　越敷山51号墳埋葬施設２（北東から）
PL.5　１．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト、西から）
　２．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト北側、南西から）
　３．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト中央、南西から）
　４．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト南側、南西から）
PL.6　越敷山51号墳埋葬施設１出土遺物
PL.7　越敷山51号墳埋葬施設１出土遺物
PL.8　越敷山49・51号墳出土人骨
PL.9　越敷山51号墳出土人骨
PL.10　遺物番号
PL.11　１．越敷山75・76・98・121～123号墳調査前状況（北東から）
　２．越敷山75・76・98・121～123号墳（北東から）
PL.12　１．越敷山75・76・98・122・123号墳（北から）
　２．越敷山49・51号墳（北から）
PL.13　１．越敷山121号墳完掘状況（東から）
　２．越敷山75号墳検出状況（北から）
　３．越敷山75号墳埋葬施設検出状況（北から）
PL.14　１．越敷山75号墳完掘状況（西から）
　２．越敷山75号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）
　３．越敷山75号墳埋葬施設完掘状況（西から）
PL.15　１．越敷山76号墳完掘状況（西から）
　２．越敷山76号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）
　３．越敷山76号墳埋葬施設完掘状況（西から）
PL.16　１．越敷山98号墳完掘状況（西から）
　２．越敷山98号墳埋葬施設検出状況（西から）
　３．越敷山98号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）
PL.17　１．越敷山98号墳埋葬施設完掘状況（西から）
　２．越敷山122号墳検出状況（南から）
　３．越敷山122号墳埋葬施設検出状況（南から）
PL.18　１．越敷山122号墳完掘状況（西から）
　２．越敷山122号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）
　３．越敷山122号墳埋葬施設完掘状況（西から）
PL.19　１．越敷山123号墳完掘状況（西から）
　２．越敷山123号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）
　３．越敷山123号墳埋葬施設完掘状況（西から）
PL.20　１．越敷山77号墳調査前状況（南から）
　２．越敷山77号墳墳丘検出状況（南から）
　３．越敷山77号墳完掘状況（南から）
PL.21　１．越敷山77号墳完掘状況（上空から）
　２．越敷山77号墳墳丘盛断面（南から）
　３．越敷山77号墳墳丘除去後（南から）
PL.22　１．越敷山77号墳埋葬施設検出状況（南西から）
　２．越敷山77号墳埋葬施設棺内完掘状況（南西から）
　３．越敷山77号墳埋葬施設石棺検出状況（南西から）
　４．越敷山77号墳埋葬施設完掘状況（南西から）

PL.23　1．越敷山49号墳調査前状況（南から）
　　2．越敷山49号墳完掘状況（南から）
PL.24　1．越敷山49号墳第３工程盛土除去状況（南から）
　　2．越敷山49号墳盛土除去後（南から）
PL.25　1．越敷山49号墳埋葬施設１蓋石検出状況（東から）
　　2．越敷山49号墳埋葬施設１棺内人骨検出状況（東から）
　　3．越敷山49号墳埋葬施設１完掘状況（西から）
PL.26　1．越敷山49号墳埋葬施設１人骨検出状況（東から）
　　2．越敷山49号墳埋葬施設１棺内完掘状況（西から）
　　3．越敷山49号墳埋葬施設２棺内完掘状況（西から）
　　4．越敷山49号墳埋葬施設２完掘状況（西から）
PL.27　1．越敷山51号墳調査前状況（北東から）
　　2．越敷山51号墳完掘状況（北東から）
PL.28　1．越敷山51号墳完掘状況（上空から）
　　2．越敷山51号墳埋葬施設１・２棺内完掘状況（上空から）
PL.29　1．越敷山51号墳第５・６工程盛土除去状況（北から）
　　2．越敷山51号墳盛土除去後（北から）
PL.30　1．越敷山51号墳埋葬施設１追葬時掘り方断面（北東から）
　　2．越敷山51号墳埋葬施設１蓋石検出状況（東から）
　　3．越敷山51号墳埋葬施設１蓋石検出状況（西から）
PL.31　1．越敷山51号墳埋葬施設１人骨検出状況（南西から）
　　2．越敷山51号墳埋葬施設１棺内１号人骨（南西から）
　　3．越敷山51号墳埋葬施設１棺内２号人骨（北東から）
　　4．越敷山51号墳埋葬施設１棺内３号人骨（南西から）
PL.32　1．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況（F5・7～10、南西から）
　　2．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況（W1、南西から）
　　3．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況（F6、北東から）
　　4．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況（J1～15、北東から）
　　5．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況（J16～28、北から）
PL.33　1．越敷山51号墳埋葬施設１剥片散乱状況（北から）
　　2．越敷山51号墳埋葬施設１石棺検出状況（南西から）
　　3．越敷山51号墳埋葬施設１石棺検出状況（西から）
PL.34　1．越敷山51号墳埋葬施設２蓋石検出状況（南西から）
　　2．越敷山51号墳埋葬施設２棺内完掘状況（北東から）
　　3．越敷山51号墳埋葬施設２石棺検出状況（北東から）
　　4．越敷山51号墳埋葬施設２完掘状況（北東から）
PL.35　1．越敷山99号墳完掘状況（西から）
　　2．越敷山99号墳埋葬施設石蓋検出状況（北東から）
　　3．越敷山99号墳埋葬施設棺内完掘状況（北東から）
PL.36　SI1・2完掘状況（南から）
PL.37　1．SI1完掘状況（南から）
　　2．SI1貼床除去後（南から）
　　3．SI1断面（南東から）
PL.38　1．SI2完掘状況（南東から）
　　2．SI2貼床除去後（南東から）
　　3．SI2断面（南西から）
PL.39　1．SB1完掘状況（北から）
　　2．SS1完掘状況（北から）
　　3．SS2完掘状況（北から）
PL.40　1．SK1完掘状況（東から）

2．SK2完掘状況（北東から）
3．SK3完掘状況（北から）
4．SK4完掘状況（東から）
5．SK5完掘状況（東から）
6．SK6完掘状況（東から）
PL.41　1．SK8完掘状況（北から）
2．SK9完掘状況（北から）
3．SK10完掘状況（北から）
4．SK11完掘状況（西から）
5．SK12完掘状況（西から）
PL.42　1．SK13完掘状況（東から）
2．SK14完掘状況（北から）
3．SK15完掘状況（東から）
4．SK16完掘状況（南から）
5．SK17完掘状況（東から）
6．SK18完掘状況（北から）
PL.43　1．SK19完掘状況（西から）
2．SK20完掘状況（南から）
3．SK21完掘状況（南から）
4．SK22完掘状況（北から）
5．SK23完掘状況（北から）
6．SK24完掘状況（南から）
PL.44　1．SK25完掘状況（東から）
2．SK26完掘状況（南から）
3．SK27完掘状況（北から）
4．SK28完掘状況（北から）
PL.45　1．越敷山121号墳出土遺物
2．越敷山75号墳出土遺物
3．越敷山76号墳出土遺物
4．越敷山122号墳出土遺物
PL.46　1．越敷山123号墳出土遺物
2．越敷山77号墳出土遺物
3．越敷山49号墳出土遺物
4．越敷山51・75・77・99号墳出土遺物
PL.47　1．越敷山99号墳出土遺物
2．越敷山76号墳・遺構に伴わない遺物
3．SI1・2・遺構に伴わない遺物
PL.48　越敷山51号墳埋葬施設１出土管玉X線写真

第１表　新旧遺構対照表

掲載遺構名	調査時遺構名	掲載遺構名	調査時遺構名	掲載遺構名	調査時遺構名
越敷山49号墳	金廻11号墳	SS1	No.0008（H23）	SK15	No.0011（H23）
埋葬施設１	第２主体部	SS2	No.0030（H23）	SK16	No.0009（H23）
埋葬施設２	第１主体部	SK1	11号墳墳頂部土坑（H23）	SK17	No.0029（H23）
越敷山51号墳	金廻12号墳			SK18	No.0028（H23）
埋葬施設１	03主体部	SK2	No.0027（H23）	SK19	No.0006（H24）
埋葬施設２	05主体部	SK3	No.0018（H23）	SK20	No.0004（H24）
越敷山75号墳	金廻２号墳	SK4	No.0017（H23）	SK21	No.0014（H24）
越敷山76号墳	金廻３号墳	SK5	No.0014（H23）	SK22	No.0008（H24）
越敷山77号墳	金廻10号墳	SK6	No.0012（H23）	SK23	No.0007（H24）
越敷山98号墳	金廻４号墳	SK7	No.0026（H23）	SK24	No.0016（H24）
越敷山99号墳	金廻14号墳	SK8	No.0017（H24）	SK25	No.0013（H24）
越敷山121号墳	金廻１号墳	SK9	No.0015（H24）	SK26	No.0001（H24）
越敷山122号墳	金廻５号墳	SK10	No.0005（H24）	SK27	No.0011（H24）
越敷山123号墳	金廻６号墳	SK11	No.0020（H23）	SK28	No.0012（H24）
SI1	No.0003（H24）	SK12	No.0019（H23）		
SI2	No.0002（H24）	SK13	No.0021（H23）		
SB1	No.0018（H24）	SK14	No.0013（H23）		

※　括弧内は調査年度を示す。

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

金廻家ノ上ノ内遺跡は、標高226mの越敷山から北東側にのびる丘陵上に位置する。この一帯には120基ほどからなる越敷山古墳群があり、遺跡のある丘陵上にも越敷山49～55・72～77・98・99・121～125号墳が分布する。

ここに、一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事が行われることとなり、工事計画地内の遺跡の状況を把握すべく伯耆町教育委員会が、国（文化庁）および県の補助金を受け、平成22年度に試掘調査を実施した。その結果、古墳や段状遺構を確認した。

この結果を受け、鳥取県西部総合事務所県土整備局と鳥取県教育委員会文化財課が遺跡の取り扱いについて協議を行ったところ、遺跡の現状保存は困難であり記録保存を実施するとの結論にいたった。この結論に基づき、鳥取県西部総合事務所長は、文化財保護法第94条の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育長に提出したところ、事前調査の指示を受けた。このため、鳥取県西部総合事務所長は財団法人鳥取県教育文化財団に発掘調査を委託することとなった。

発掘調査を受託した当財団は、鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第92条に基づく発掘調査の届出を提出し、当財団調査室岸本調査事務所が平成23年５月から行うこととなった。調査対象地は当初、越敷山75・76・98・121～123号墳のある丘陵斜面を平成23年５月～11月の期間で調査を行う予定であったが、工事の設計変更により工事範囲が拡大したため、丘陵頂部まで調査対象範囲が広がることとなった。この範囲には、用地を取得していない範囲が含まれていたため、ひとまず用地の取得が終了した越敷山49・51・77・99号墳周辺について、期間を延長して行うこととなった。

ところで遺跡の名称であるが、調査に取り掛かる時点では金廻古墳群と呼称していたが、文化財課からの指示を受け、古墳群の名称を越敷山古墳群（金廻地区）と改めている。また、古墳の墳丘下から弥生時代の竪穴建物などが確認されたことから、金廻家ノ上ノ内遺跡と変更している。

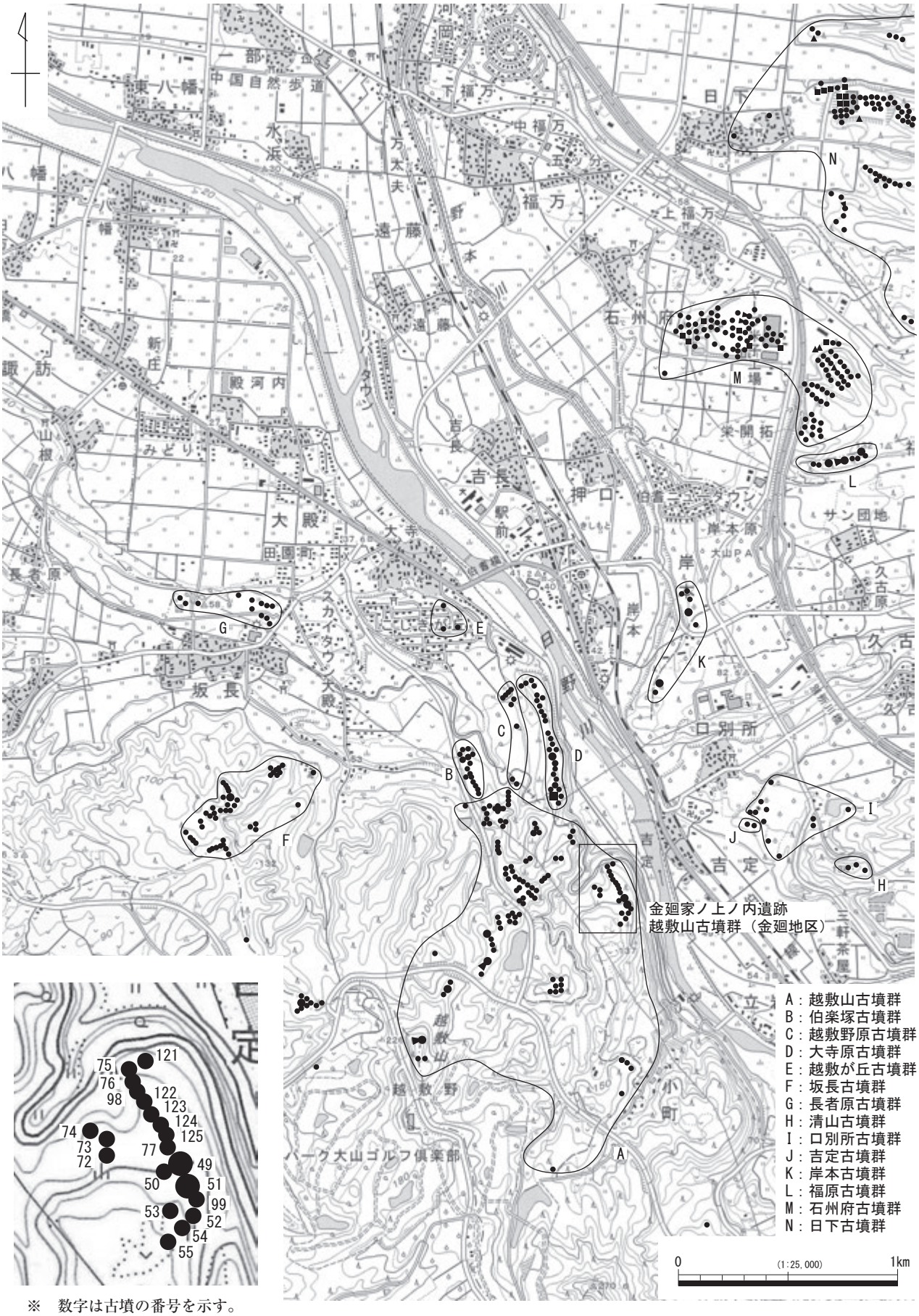
第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

調査地の基準点および方眼測量は、世界測地系公共座標による４級基準点測量を行い、鳥取県の属する平面直角座標（Ｖ系）に基づいて10mを単位とした方眼の交点に杭を設置した。グリッドの名称は、当財団が実施している鳥取西道路の調査において用いられている方法に従って設定した（例：T73-10d-2H-7a）。これは、第Ⅰ～Ⅳ区画の４つの階層によって設定するものであり、各階層については以下に示すとおりである。

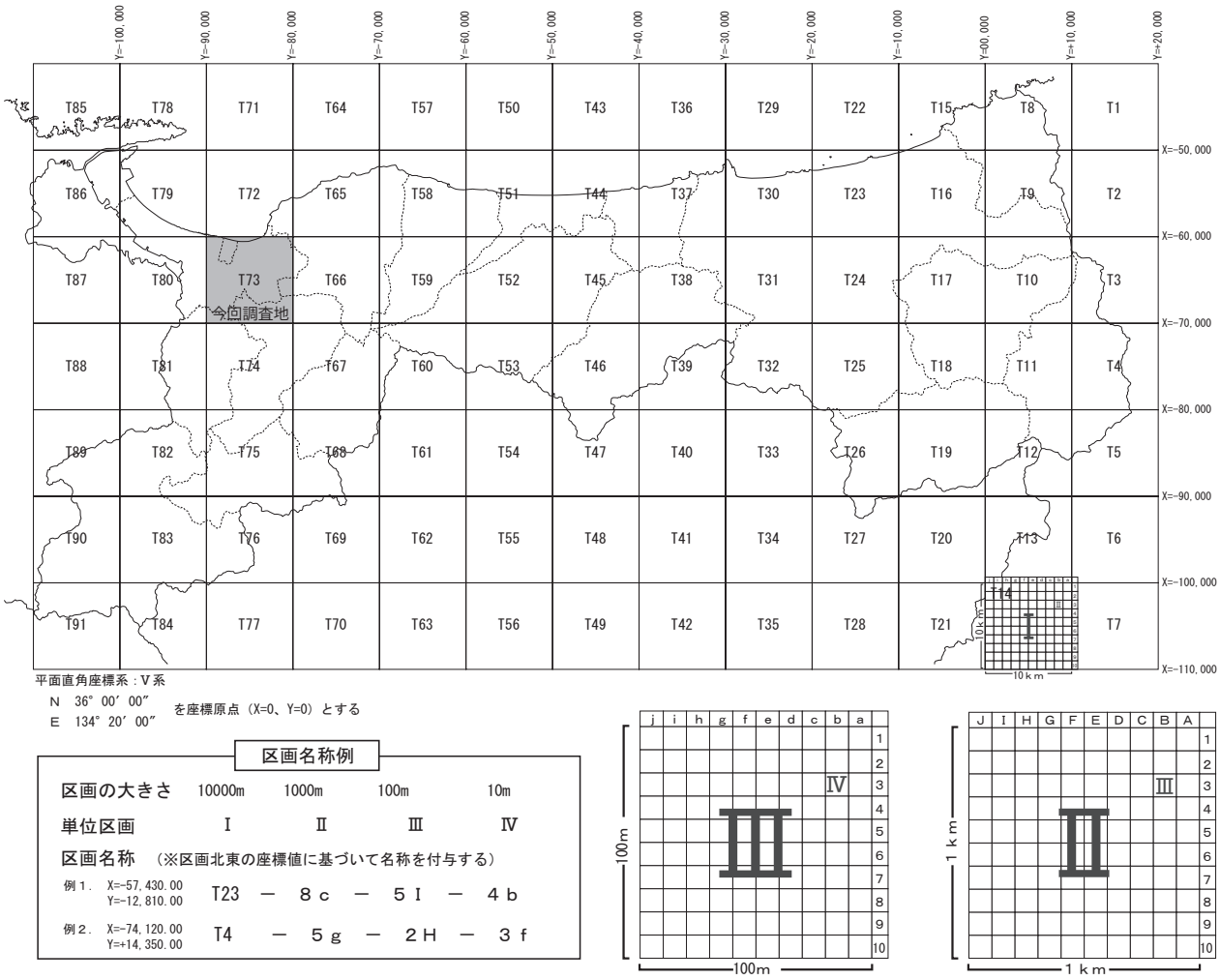
第Ⅰ区画

鳥取県全域を91の区画に分割したものであり、T1～91の記号を付している。１つの区画に範囲は10,000×10,000mである。



※　数字は古墳の番号を示す。

第１図　調査地位置



第２図　調査区地割り模式図

第Ⅱ区画

第Ⅰ区画の１つを100等分したものであり、南北軸に１～10、東西軸にa～jを付し、各区画を東西―南北軸の北東側交点の名称で呼称している（1a～10j）。１つの区画の範囲は1,000×1,000mである。

第Ⅲ区画

第Ⅱ区画の１つを100等分したものであり、南北軸に１～10、東西軸にA～Jを付し、各区画を東西―南北軸の北東側交点の名称で呼称している（１A～10J）。１つの区画の範囲は100×100mである。

第Ⅳ区画

第Ⅲ区画の１つを100等分したものであり、南北軸に１～10、東西軸にa～jを付し、各区画を東西―南北軸の北東側交点の名称で呼称している（１a～10j）。１つの区画の範囲は10×10mである。なお、この第Ⅳ区画は遺構の位置表示や遺物の取り上げに使う最も基本のグリッドとなる。

表土の掘削は、古墳は人力、古墳以外では重機を用いた。遺構および包含層、墳丘盛土の掘削は、人力で行うことを基本とし、補助的に重機を用いた。なお、廃土はベルトコンベアや重機によって隣接地に集積した。

検出した遺構や出土した遺物の図化には、電子平板、トータルステーション、手測り、写真測量のうち、最も適したものを選択し実施した。遺物の取り上げについては設定したグリッドごとに行うこ

とを基本とし、状況によって図化および位置の記録、写真撮影をしたうえで取り上げを行った。写真撮影については、35㎜判、ブローニー（６×７）判、デジタルカメラ（1,220万画素以上）を用い、地上もしくは写真撮影用の足場から撮影した。なお、遺跡の調査前の状況や完掘後の写真などには、空中写真撮影も使用しており、これについてはブローニー（６×６）判、デジタルカメラ（1,220万画素以上）を用いた。写真フィルムには白黒ネガフィルム、カラーポジフィルムを使用した。

２．調査の経過

調査の経緯でもふれたが、当初、越敷山75・76・98・121～123号墳およびその周辺の調査を平成23年５月から11月まで実施する予定であったが、工事の設計変更に伴い調査範囲が拡大したことから、越敷山49・51・77・99号墳およびその周辺の調査も行うこととなり、平成23年度は５月から12月まで、平成24年度は５月から７月までの２ヶ年にわたり調査を実施した。各年度の調査の経過は以下に示すとおりである。

平成23年度

平成23年度は、５月13日から基準点測量や水準点測量、16日から調査前の地形測量を実施した。19日にはラジコンヘリコプターによる調査前状況の写真撮影､23日からは重機による表土掘削を開始し、26日からは人力による古墳を覆う表土の掘削に着手した。６月22日には古墳の周溝や埋葬施設の検出、７月22日からこれらの掘削を開始し、８月まで実施した。この間、東側の丘陵緩斜面の包含層掘削および遺構検出を行い、段状遺構２基や土坑13基（落とし穴を含む）を確認した。９月１日には棺内を完掘した状態でのラジコンヘリコプターによる写真撮影を実施し、埋葬施設の掘り方や古墳に切られている落とし穴の掘削に取り掛かった。９月29日には、調査区全体の写真をラジコンヘリコプターで撮影し、その後、古墳の断ち割りや遺構掘削、調査後の測量などの記録作業を実施した。10月７日には当初予定していた範囲の調査が終了した。

10月27日からは追加範囲の調査に着手した。27・28日には基準点測量や水準点測量を実施し、31日には調査前の地形測量を行った。11月７日からは人力による表土掘削を開始した。16日には古墳の周溝や埋葬施設の検出作業に着手し、越敷山49・51・77・99号墳の周溝のほか、越敷山49号墳の埋葬施設２や越敷山99号墳の埋葬施設を確認した。17日からはこれらの掘削に取り掛かった。25日には墳頂部に設定したトレンチにおいて埋葬施設１に伴う箱式石棺の蓋石を確認した。この蓋石を除去すると、２体の人骨が認められたことから、鳥取大学の井上貴央教授に依頼し、12月５日にこれらの人骨の取り上げを行った。14日からは49号墳の墳丘の断ち割りや記録作業を行い、15日には調査が終了した。なお、次の調査まで期間があくことから、養生を行うこととなり、19日までにこれを済ませ、現地での作業が終了した。

平成24年度

平成24年度は、４月26日に基準点測量や水準点測量を実施し、５月７日から人力による掘削を開始した。14日には越敷山51号墳、16日には越敷山77号墳の検出を行い、越敷山51号墳では２基の埋葬施設、越敷山77号墳では１基の埋葬施設と周溝を確認した。17日にはこれらの掘削を開始した。28日には越敷山51号墳の埋葬施設１、29日には埋葬施設２の蓋石を外した。蓋石の除去後、ともに人骨を確認したため、鳥取大学の井上貴央教授に依頼し、６月１日にこれを取り上げた。この間、ラジコンヘリコプターによる写真撮影や棺内の人骨や副葬品の出土状況の記録作業を行い、越敷山49号墳の墳丘

掘削を開始した。７日には越敷山51号墳の埋葬施設２、越敷山77号墳の埋葬施設の調査が終了し、墳丘の掘削に取り掛かった。14日からは越敷山49・77号墳の下面の遺構検出を行い、竪穴建物２棟、土坑７基（土坑墓、落とし穴を含む）を確認した。越敷山51号墳の下面の遺構検出については29日から行い、掘立柱建物１棟、土坑６基（落とし穴を含む）を確認した。７月４日には確認した遺構の掘削が概ね終了し、６日には記録作業など現地での作業がすべて終了した。

第３節　調査体制

発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

平成23年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　井上　善弘

事務局長　漆原　貞夫

事務職員　岡田美津子

（兼務　調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室　　長　松井　　潔

（鳥取県教育委員会　派遣）

次　　長　石本　富正

事務職員　岡田美津子

福田早由里

植木　智子

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

岸本調査事務所

所　　長　國田　俊雄

主任文化財主事　野口　良也

（鳥取県教育委員会　派遣）

文化財主事　馬路　晃祥

（鳥取県教育委員会　派遣）

平成24年度

○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理　事　長　井上　善弘

事務局長　漆原　貞夫

事務職員　岡田美津子

（兼務　調査室事務職員）

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

室　　長　松井　　潔

（鳥取県教育委員会　派遣）

次　　長　石本　富正（平成24年５月まで）

中川　眞一（平成24年６月から）

事務職員　岡田美津子

福田早由里

植木　智子

○調査担当

財団法人鳥取県教育文化財団調査室

岸本調査事務所

所　　長　國田　俊雄

副主幹　玉木　秀幸

（文化財主事　鳥取県教育委員会　派遣）

○発掘調査支援業者

平成23年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

現場代理人　野口　岩雄、島内　浩輔

支援調査員　島内　浩輔、小石　龍信

調査補助員　小石　龍信、七島　陽子、豊田沙和美、中田　裕樹、嘉村　哲也

平成24年度

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

現場代理人　島内　浩輔

支援調査員　島内　浩輔、小石　龍信

測量士　藤﨑伸一郎

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

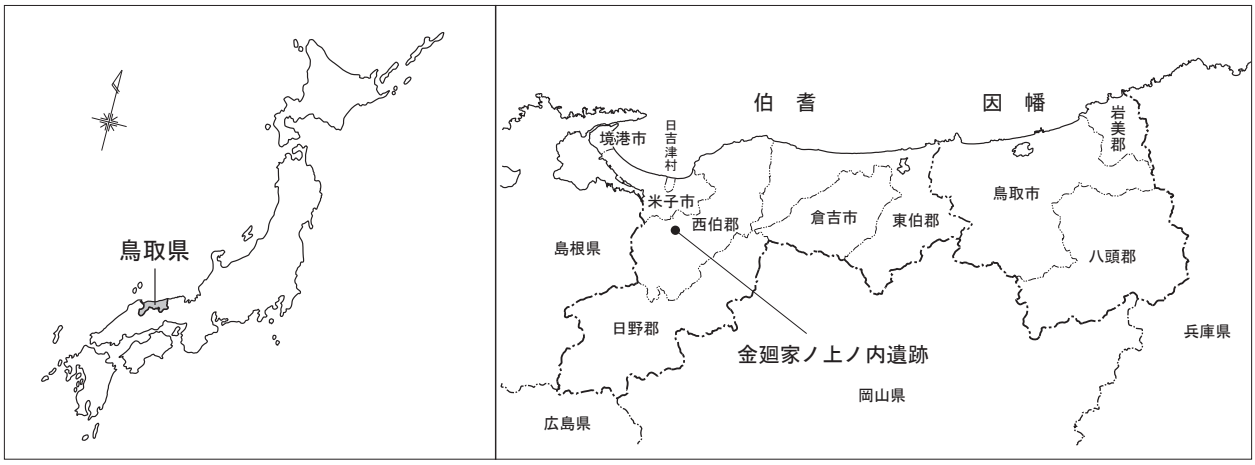
金廻家ノ上ノ内遺跡は、鳥取県西部、西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内に所在する。ここは越敷山から派生する丘陵先端部に位置しており、周囲には越敷山古墳群や伯楽塚古墳群、越敷野原古墳群、大寺原古墳群など数多くの古墳が分布している。

この周辺の地形および地質は、日野川を挟んで大きく様相を変えるようである。日野川の右岸は、大山の火山噴出物からなる緩やかな台地となっており、第四紀更新世に形成されている。一方、金廻家ノ上ノ内遺跡の位置する日野川左岸は、標高270mの高塚山と標高226mの越敷山を中心とした南北８㎞東西３㎞にわたる起伏に富んだ丘陵地帯と、長者原台地と呼ばれる平坦な洪積台地とで構成される。丘陵地帯は、第三期鮮新世の粗面玄武岩を基盤とし、部分的に大山上中部火山灰に覆われている。洪積台地は、南側では安山岩質の砂礫層を、北側では火山砕屑物を主体とする古期扇状地堆積物を基盤とし、上部は丘陵地帯と同様、大山上中部火山灰で覆われている。この他、日野川付近には、低位段丘や扇状地などの地形もみられる。なお、日野川は中世までは岸本集落の北から東北方向に流れて佐陀川に合流していたが、天文19年（1550）と元禄15年（1702）の洪水により、現在のような西寄りの流路になったようである。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

この時代のものとして確認されている遺跡は少ない。長者原台地上の諏訪西山ノ後遺跡（24）では、石刃を二側縁加工した珪岩製のナイフ形石器がローム層中から２点出土しているほか、坂長村上遺跡（50）から黒曜石製のナイフ形石器が１点出土している。泉中峰遺跡（79）や小波原畑遺跡（80）においてもナイフ形石器が出土しているが、石器群が原位置でまとまって出土した例はまだない。



第３図　遺跡位置

縄文時代

草創期においても確認されている遺跡は少ない。坂長村上遺跡から多様な石材と形態の５点の尖頭器を中心とする石器群が出土したほか、貝田原遺跡（61）や奈喜良遺跡（20）などで、サヌカイト製有茎尖頭器がみつかっている。 早期後半になると、大山西麓では押型文土器を出土する遺跡が多く知られるようになり、このうち上福万遺跡（73）では集石遺構や土坑が多数検出されている。前期になると、中海沿岸にも集落が形成されるようになり、目久美遺跡（８）や陰田第９遺跡（９）では、土器や石器のほか、動植物遺体が豊富に出土している。中期では、新たに出現する遺跡は少ないが、後期になると再び増加するようである。晩期には、古市河原田遺跡（12）をはじめ突帯文土器を伴う遺跡が多くみつかっている。周辺地域では非常に多くの落とし穴が確認されており、妻木晩田遺跡(83)で963基、青木遺跡（22）で228基、越敷山遺跡群（45）で341基を数える。年代の判明したものでは、後晩期の例が多い。

弥生時代

前期の代表的な遺跡としては、目久美遺跡（８）や長砂第２遺跡（４）などの低湿地遺跡がある。両遺跡では、前期から中期にかけての水田跡が重層して検出され、農耕具などの木製品も多く出土している。この時期の集落は丘陵上にもあり、宮尾遺跡（28）や諸木遺跡（29）では環壕が発掘されている。特に清水谷遺跡（17）の環壕は、その内部に竪穴建物などが認められない点で注目される。

中期後葉以降になると遺跡数が増加し、丘陵上には妻木晩田遺跡（83）、青木遺跡（22）、福市遺跡（21）など大規模な拠点的集落が出現する。越敷山遺跡群（45）は高い丘陵上に位置する集落跡で、多数の鉄器をもつ。同時期にこの地域には四隅突出型墳丘墓が分布し、妻木晩田遺跡洞ノ原地区、仙谷地区の墳丘墓群や父原墳丘墓群などが代表である。日下１号墓（75）は中期の木棺墓群に、尾高浅山１号墓（76）はほぼ同時期の環壕集落に隣接して築造されているのが注目される。

古墳時代

前期の主要な古墳には、三角縁神獣鏡が出土した前方後方墳と方墳の普段寺１・２号墳（35）、方墳で６基の埋葬施設をもつ日原６号墳（19）がある。この頃の古墳は、墳丘規模20m前後の比較的小さなものが多い。中期古墳については、全長108mの前方後円墳の三崎殿山古墳（26）が著名であるが、最近の研究では、前期古墳である可能性が指摘されている。そのほかには画文帯神獣鏡が出土した浅井11号墳（36）、宮前３号墳（32）といった小型の前方後円墳が築造されている。後期になると、古墳数は爆発的に増加し、多くの群集墳が営まれる。長者原台地上では諏訪古墳群や長者原古墳群（53）などが形成される。なお、後期の古墳の中には、吉定１号墳（63）の割石小口積みによる横穴式石室のほか、東宗像５号墳（18）の横口式箱式棺などのように、九州地方との関連性を窺わせるものがある。終末期になると、陰田横穴墓群（９）や日下横穴墓群（75）などの横穴墓が造営されるようになる。

集落遺跡については、主に台地上や丘陵上に分布しており、福市遺跡（21）や青木遺跡（22）のように、弥生時代後期から継続して営まれたものがみられるほか、坂長第８遺跡（89）や坂長尻田平遺跡（95）のように中期から集落が形成されるものもある。

古代

白鳳期になると、大寺廃寺（52）が創建される。大寺廃寺は、東向きの法起寺式伽藍配置をとる寺院であり、金堂の瓦積基壇と三段舎利孔を持つ塔心礎のほか、全国的に数少ない石製鴟尾が確認されている。この寺院に使用された瓦については、創建時のものと同一文様の瓦が金田瓦窯（39）から出

1	錦町第１遺跡	17	清水谷遺跡	33	田住古墳群	49	坂長下屋敷遺跡	65	番原遺跡群	81	井手胯遺跡
2	久米第１遺跡	18	東宗像古墳群	34	宮前遺跡	50	坂長村上遺跡	66	須村遺跡	82	今津岸の上遺跡
3	米子城	19	日原古墳群	35	普段寺１号墳	51	坂中廃寺	67	真野ブナ遺跡	83	妻木晩田遺跡
4	長砂第１・２遺跡	20	奈喜良遺跡	36	浅井 11 号墳	52	大寺廃寺	68	藍野遺跡	84	晩田遺跡
5	長砂第３遺跡	21	福市遺跡	37	浅井土居敷遺跡	53	長者原古墳群	69	林ケ原遺跡	85	向山古墳群
6	水道山古墳	22	青木遺跡	38	天王原遺跡	54	坂中第５遺跡	70	下山南遺跡	86	上淀廃寺跡
7	池ノ内遺跡	23	樋ノ口第４遺跡	39	金田瓦窯	55	岸本大成遺跡	71	長山馬籠遺跡	87	今在家下井ノ原遺跡
8	目久美遺跡	24	諏訪西山ノ後遺跡	40	両部太郎窯	56	岸本古墳群	72	石州府古墳群	88	坂長第７遺跡
9	陰田遺跡群	25	別所新田遺跡	41	荻名遺跡群	57	岸本遺跡	73	上福万遺跡	89	坂長第８遺跡
10	奥陰田遺跡群	26	三崎殿山古墳	42	田住松尾平遺跡	58	岸本要害跡	74	日下寺山遺跡	90	坂長下門前遺跡
11	新山遺跡群	27	天萬土居前遺跡	43	朝金古墳群	59	岸本下の原遺跡	75	日下古墳群	91	大殿狐谷遺跡
12	古市遺跡群	28	宮尾遺跡	44	朝金小チヤ遺跡	60	久古第３遺跡	76	尾高浅山遺跡	92	坂長前田遺跡
13	吉谷遺跡群	29	諸木遺跡	45	越敷山遺跡群	61	貝田原遺跡	77	尾高城	93	坂長武寿羅遺跡
14	橋本遺跡群	30	後埒山古墳	46	手間要害跡	62	口別所古墳群	78	尾高御建山遺跡	94	坂長ブジラ遺跡
15	福成石佛前遺跡	31	天万遺跡	47	荒神上遺跡	63	吉定１号墳	79	泉中峰・前田遺跡	95	坂長尻田平遺跡
16	福成早里遺跡	32	宮前３号墳	48	長者屋敷遺跡	64	久古北田山遺跡	80	小波原畑遺跡	96	金廻家ノ上ノ内遺跡

第４図　周辺遺跡分布図

土したようであり、そこで焼かれた可能性がある。この他、長者原台地上には坂中廃寺（51）があり、塔心礎が残り、奈良末から平安初め頃の瓦が散布するものの、伽藍配置等は明らかでない。

ところでこの周辺地域は、『和名類聚抄』によると伯耆国相見郡に編成されている。このうち長者原台地上には相見郡衙が存在していたとみられ、長者屋敷遺跡（48）や坂長第６遺跡（92）などのように郡衙に伴う施設と考えられる大型の掘立柱建物跡が確認されているほか、坂長村上遺跡（50）や坂長第７遺跡（88）から円面硯や刻書土器など、官衙的な性質が強い遺物が出土している。さらに北方の台地上では諏訪西山ノ後遺跡（24）で和同開珎と墨などを納めた胞衣壺、樋ノ口第４遺跡（23）で石帯が出土している。

古代山陰道については、大寺廃寺、坂中廃寺、長者屋敷遺跡を通って、伯耆町岩屋谷から南部町天万を抜ける南側のルート、もしくは米子市諏訪から古市を抜ける北側のルートが想定されているが、発掘調査による明確な遺構の確認にはいたっていない。

中世

大山寺の鉄製厨子には、承安元年（1171）の火災の翌年に伯耆の豪族紀成盛が大山権現御神体と厨子を奉納したことが記されている。伯耆町坂長には紀成盛が居宅を構えたという伝承があり、坂長前田遺跡（92）では平安時代末期から鎌倉時代の甲冑に用いられた小札が出土している。

南北朝時代になると、大寺に安国寺が置かれた。要衝の地であり、名和氏などの南朝勢力を抑える目的があったとされる。42坊を数える大寺院であったが、永禄８年（1565）に、杉原盛重に焼き討ちされている。坂中地区の旦那寺である普門寺は、もとはこの安国寺の奥の院であったといわれている。

南北朝から戦国時代の動乱期には、山陰道沿いの要地を中心に、数多くの城砦が築かれた。小波城（80）、尾高城（77）、手間要害（46）は、文献にも登場する代表的な城跡である。坂長熊谷遺跡上方の字岩コゴロにも坂中丹波なる人物の陣屋があったという伝承が残る。坂中の賀茂神社の棟札には慶長４年（1599）に坂中九兵衛が建立したことが記されていて、その古宮跡は字熊谷にあるという。

近世

西伯耆は、吉川広家、中村一忠、加藤貞泰と領主交代を繰り返した末に、元和３年（1617）に、因幡、伯耆32万石を領する鳥取藩の一部として池田光政が領主になる。寛永９年（1632）国替えにより池田光仲が封入すると、周辺地域は藩の直轄領と寺社領を除いた大半が米子城主荒尾家の給所に属し、以後明治２年（1869）まで荒尾氏による鳥取藩独特の自分手政治が行われた。

参考文献

地質調査所　1962『５萬分の１地質図幅説明書　米子』（岡山―第18号）
山名巌　1964「山陰地方における第四紀末の諸問題」『鳥取県立科学博物館研究報告』
岸本町　1983『岸本町誌』
会見町　1996『会見町誌　続編』
米子市　2003『新修　米子市史』

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要と層序

１．遺跡の概要

金廻家ノ上ノ内遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内にある。ここは標高226mの越敷山から北東側へと派生する丘陵の先端にある。調査区内の標高は84～113mであり、平地との比高差は37～66mほどである。本遺跡からの眺望はよく、北東側では日野川や米子平野、さらには日本海を、南東側では中国地方の最高峰である大山を望むことができる。

この周辺には、丘陵上に120基ほどの古墳からなる越敷山古墳群のほか、伯楽塚古墳群、越敷野原古墳群、大寺原古墳群、長者原台地上には長者原古墳群、日野川を挟んだ東側には、吉定古墳群、清山古墳群、口別所古墳群、岸本古墳群、さらに北西側には石州府古墳群、日下古墳群など、数多くの古墳が分布する。

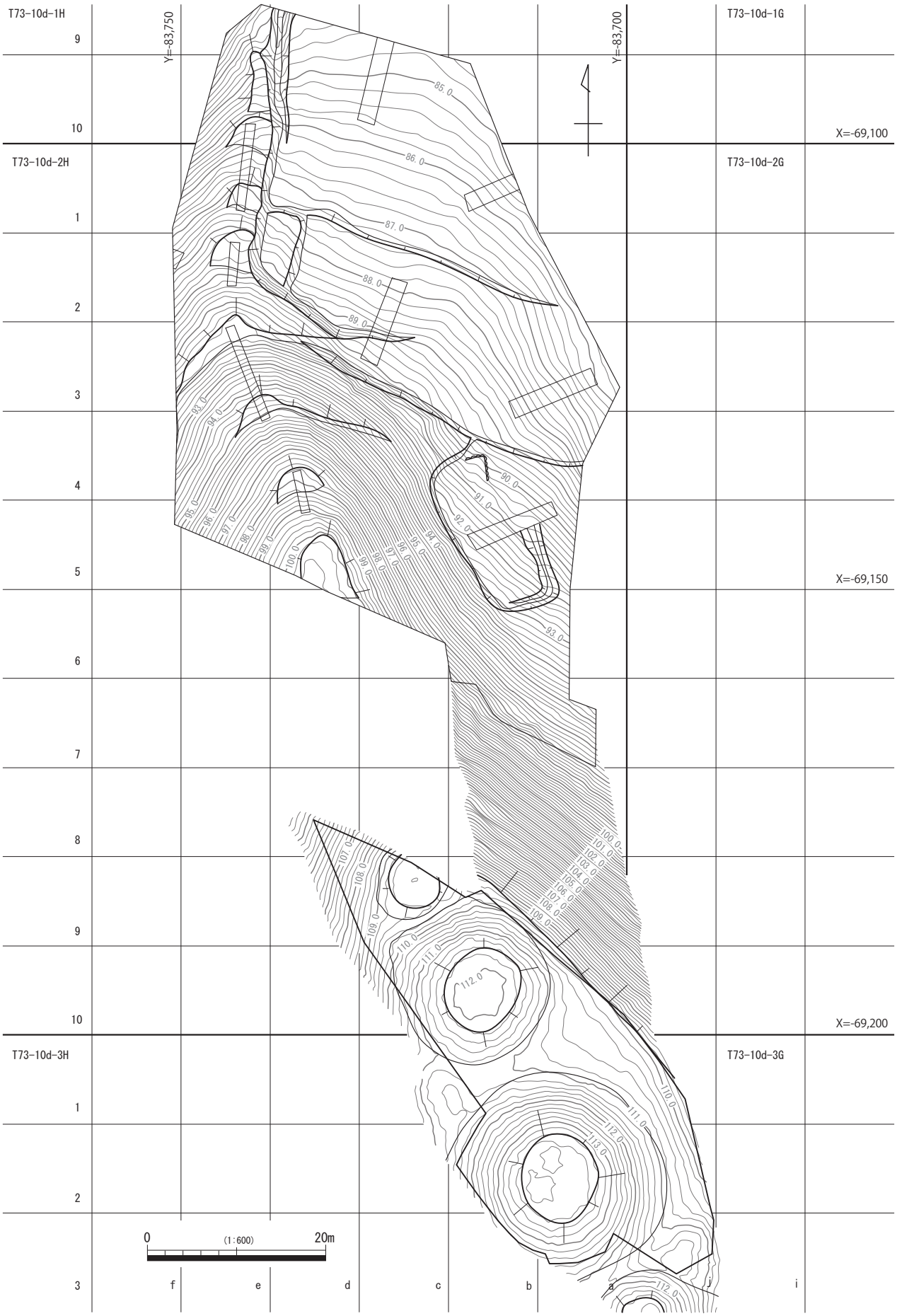
さて、本遺跡周辺には、20基の古墳が所在する（越敷山49～55・72～77・98・99・121～125号墳）。そのうち越敷山75・76、98・121～123号墳が工事範囲内にかかることから、これらの古墳の調査を行うこととなった。なお、工事の設計変更に伴い工事範囲が拡大することとなり、その範囲にある越敷山49・51・77・99号墳についても追加で調査を行うこととなった。

調査の結果、これらの古墳は古墳時代中期から後期にかけて築造されたものであり、そのうち最も古いものは越敷山121号墳の古墳時代中期前葉頃と考えられ、この頃から、この丘陵上に古墳が築造されるようになったとみられる。

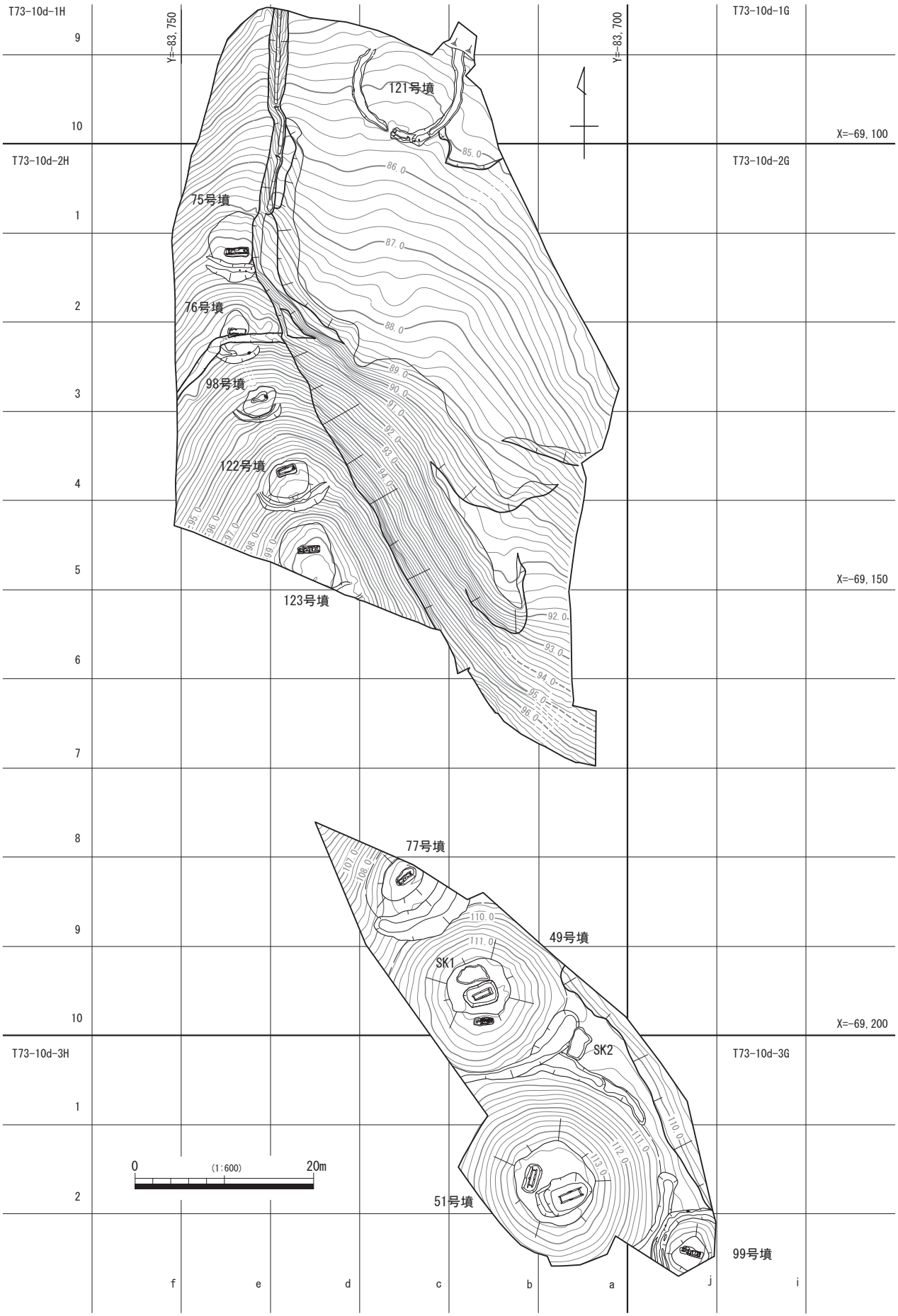
越敷山121号墳については、後世の削平のため詳細は不明であるが、次に古いとみられる越敷山51号墳は、丘陵頂部の調査地の中で最も標高の高い位置にあり、直径が約25mと最も大きく、この主体部である埋葬施設１は長軸2.23m、短軸0.67mと最も大型で、鉄刀、鉄剣、鉄鉾、鉄斧、玉類など多彩な副葬品が出土している。また、５体の人骨が確認されており、追葬が何度か行われており、この尾根状にある古墳の中で突出した存在である。これ以降、古墳の規模は徐々に縮小していき、後期前葉にかけて丘陵の下方へと構築されていく。その後、後期前半頃になると、再び丘陵頂部へと移り、南側へと古墳が築かれるようである。

写真１　調査地遠景

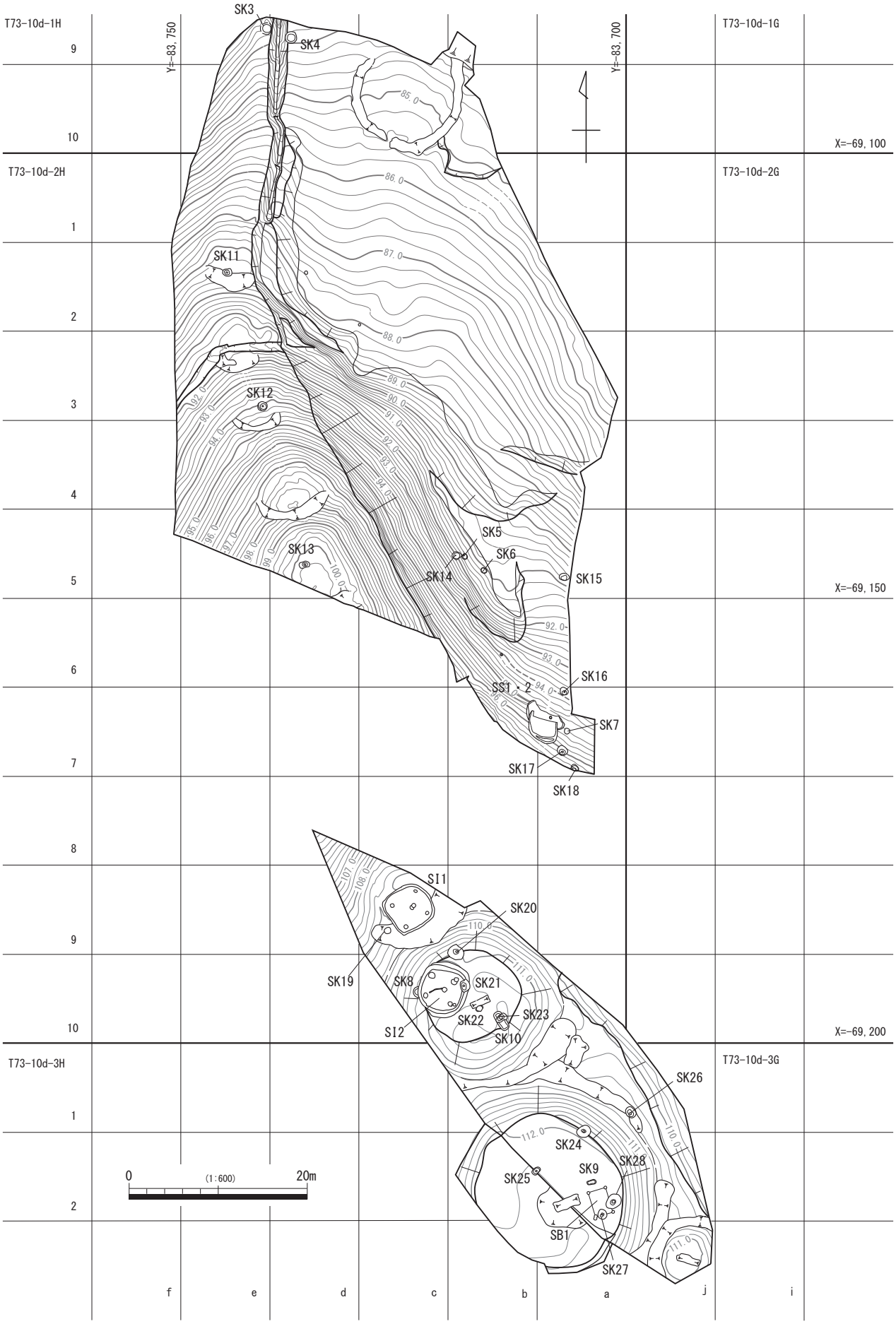
古墳以外の遺構としては、弥生時代後期中葉から後葉頃の竪穴建物２棟、縄文時代と考えられる落とし穴18基のほか、段状遺構２基、土坑墓１基、土坑９基を確認した。このうち竪穴建物は、平地からの比高差が60m以上の場所にあり、集落を営むにしては狭い丘陵尾根の頂部に


T73-10d-1H
T73-10d-1G
T73-10d-2H
T73-10d-2G
T73-10d-3H
T73-10d-3G
Y=-83,750
Y=-83,700
X=-69,100
X=-69,150
X=-69,200
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
f
e
d
c
b
a
j
i
85.0
86.0
87.0
88.0
89.0
90.0
91.0
92.0
93.0
94.0
95.0
96.0
97.0
98.0
99.0
100.0
101.0
102.0
103.0
104.0
105.0
106.0
107.0
108.0
109.0
110.0
111.0
112.0
113.0
0
(1:600)
20m

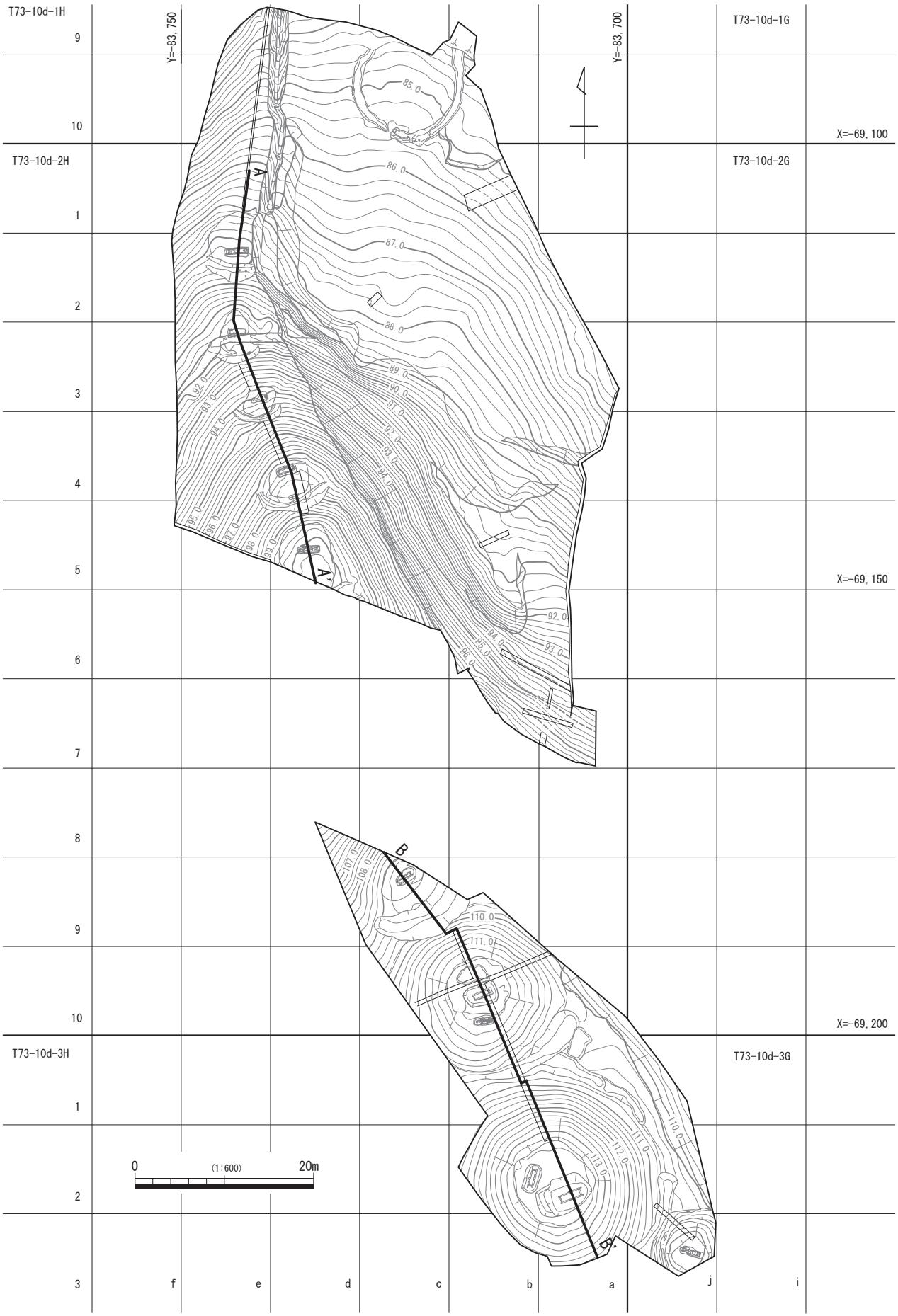
第５図　調査前地形図



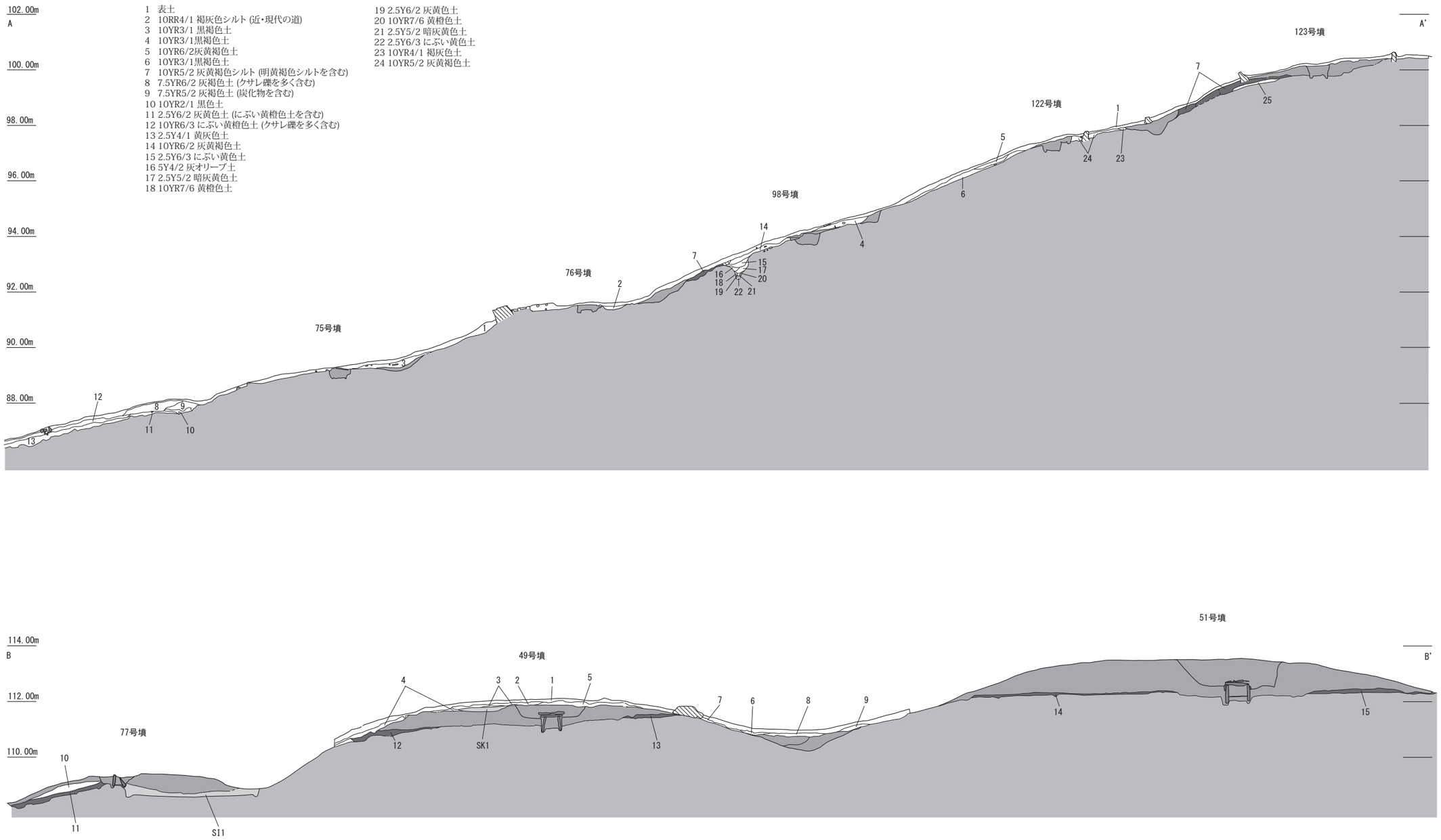
第６図　第１遺構面遺構配置図



第７図　第２遺構面遺構配置図


T73-10d-1H
T73-10d-1G
T73-10d-2H
T73-10d-2G
T73-10d-3H
T73-10d-3G
Y=-83,750
Y=-83,700
X=-69,100
X=-69,150
X=-69,200
A
A'
B
B'
85.0
86.0
87.0
88.0
89.0
90.0
91.0
92.0
93.0
94.0
95.0
96.0
97.0
98.0
99.0
107.0
108.0
110.0
111.0
112.0
113.0
0
(1:600)
20m
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
f
e
d
c
b
a
j
i

第８図　土層断面位置



1 表土
2 10RR4/1 褐灰色シルト (近・現代の道)
3 10YR3/1 黒褐色土
4 10YR3/1黒褐色土
5 10YR6/2灰黄褐色土
6 10YR3/1黒褐色土
7 10YR5/2 灰黄褐色シルト (明黄褐色シルトを含む)
8 7.5YR6/2 灰褐色土 (クサレ礫を多く含む)
9 7.5YR5/2 灰褐色土 (炭化物を含む)
10 10YR2/1 黒色土
11 2.5Y6/2 灰黄色土 (にぶい黄橙色土を含む)
12 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (クサレ礫を多く含む)
13 2.5Y4/1 黄灰色土
14 10YR6/2 灰黄褐色土
15 2.5Y6/3 にぶい黄色土
16 5Y4/2 灰オリーブ土
17 2.5Y5/2 暗灰黄色土
18 10YR7/6 黄橙色土
19 2.5Y6/2 灰黄色土
20 10YR7/6 黄橙色土
21 2.5Y5/2 暗灰黄色土
22 2.5Y6/3 にぶい黄色土
23 10YR4/1 褐灰色土
24 10YR5/2 灰黄褐色土

1 腐葉土
2 10YR4/1 褐灰色微砂
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト
4 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
5 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
6 2.5Y7/4 浅黄色シルト
7 7.5YR6/1 褐灰色シルト
8 2.5Y5/1 黄灰色シルト
9 10YR5/1 褐灰色シルト
10 10YR4/2 灰黄褐色土
11 10RY2/1 黒色土
12 10YR3/1 黒褐色シルト
13 10YR4/1 褐灰色シルト
14 10YR3/1 黒褐色土 (粘性有)
15 10YR3/2 黒褐色土

第９図　調査区内土層断面

位置することから、この丘陵では、弥生時代後期中葉から後葉頃において、広義の高地性集落が営まれていたと考えられる。

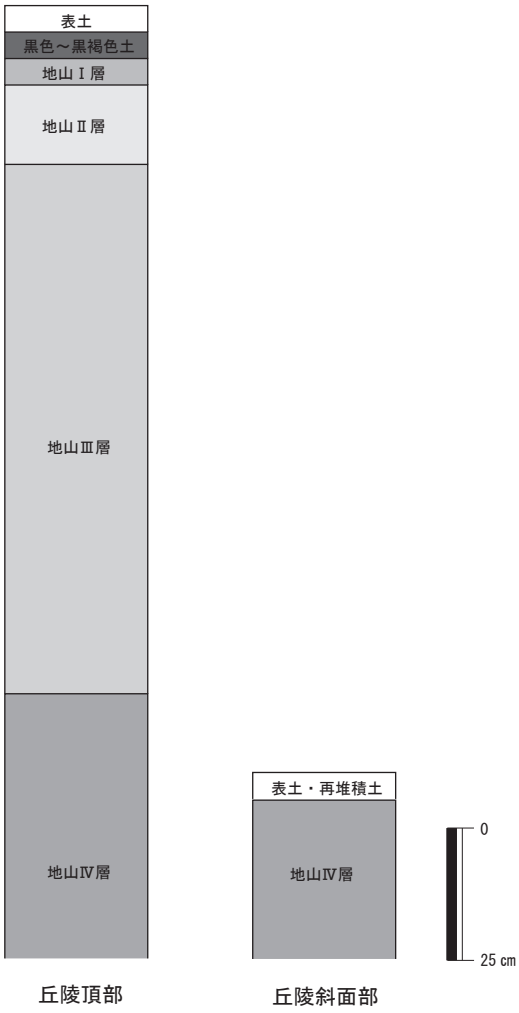
これらの遺構の詳細については、次節で報告する。

２．層序

調査地は越敷山49・51・77・99号墳のある丘陵頂部と、そこからやや下った越敷山123号墳以下の斜面部である。丘陵頂部は細尾根であり、傾斜は緩やかであるが、平坦面は少ない。斜面部は尾根を境に西側が急斜面となるが、東側は比較的傾斜が緩やかである。東側の緩斜面では近世に耕作が行われていたらしく、広い範囲で掘削が及んでおり、平坦面が認められる。

調査区内の堆積状況についてみると、丘陵頂部は表土の下に古墳の流出などによる再堆積土が若干堆積するが、概ね古墳の墳丘盛土や地山となる。墳丘盛土の下については、黒色や黒褐色を呈する旧表土が堆積し、その下は地山となる。

越敷山77号墳の斜面下方にあたる丘陵頂部から北西方向へ下る斜面については、表土、黒色土、地山の順に堆積しており、丘陵頂部とやや堆積状況が異なる。



第10図　地山堆積状況模式図

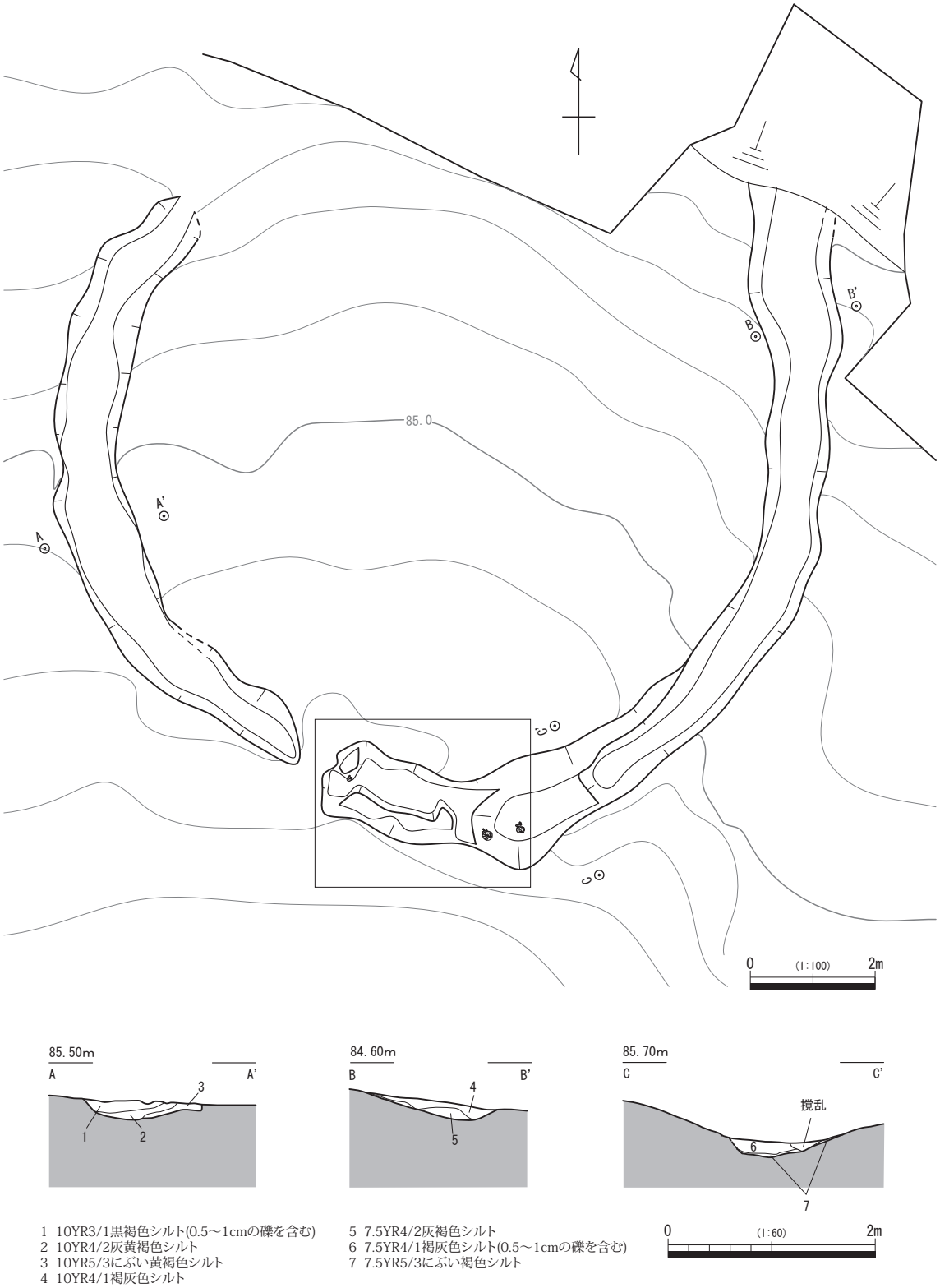
斜面部の尾根および西側斜面については、表土の下に古墳の流出などによる再堆積土が若干堆積するが、概ね墳丘盛土ないし地山となる。また、墳丘盛土の下など部分的に旧表土が認められる。斜面部との境は耕作土の下に黒色土が厚く堆積するが、それ以外の耕作土の下は地山となる。

ところで、丘陵頂部と斜面部では地山の堆積物に違いが認められる。丘陵頂部はにぶい黄褐色土（Ⅰ層）、橙色土（Ⅱ層）が薄く堆積し、その下に軽石を含む黄色土（Ⅲ層）が1.00m以上と厚く堆積しており、その下に風化した礫や板状に剥離する岩を含む赤色土（Ⅳ層）が堆積する。斜面部はⅠ～Ⅲ層が認められず、Ⅳ層となる。なお、越敷山51号墳の第４・６工程に使用されるA類、追葬の掘り方に充填された土は主にⅢ層からなる（第２節参照）。また、古墳の埋葬施設に使用された石材は、分析結果から、Ⅳ層に含まれる岩を使用したとみられる（第４章第１節参照）。

第２節　古墳の調査

越敷山121号墳（第11～13図、PL.13・45）

T73-10d-1H-9b・10b・10c・10dグリッドにある。ここは北へと緩やかに下る比較的平坦な場所で



第11図　越敷山121号墳

ある。標高85m前後と調査区の中で最も低い位置にあるが、すぐ北側は急斜面となるため、比較的眺望が良い。周辺は近世の耕作等によって削平を受けている。このため、埋葬施設や墳丘が失われており、検出できた遺構は周溝のみである。なお、本遺跡内にある古墳は、丘陵尾根に沿って築造されているが、本古墳は北東側へやや外れた場所にある。

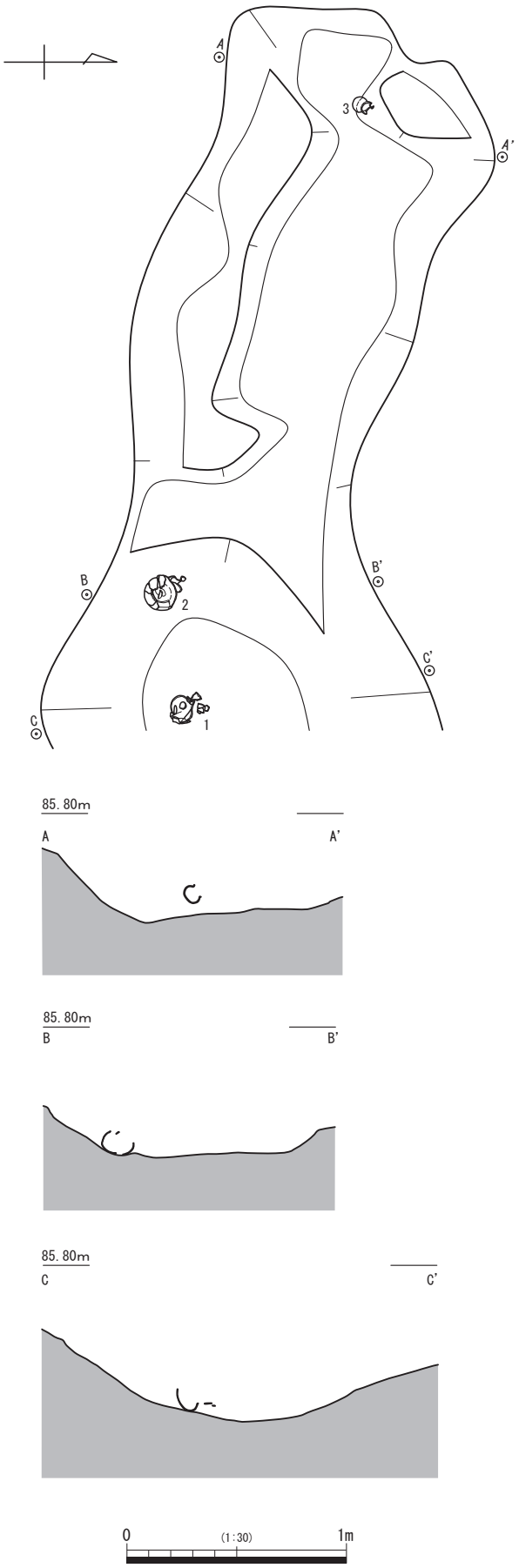
墳丘・周溝

墳丘は先にも述べたとおり、近世の削平により失われており、周溝しか残っていない。このため詳細は不明であるが、周溝が円形に巡ることから、本古墳は円墳であったと考えられる。古墳の規模は、周溝の内面で直径10.50m、周溝を含めると13.00mを測る。

周溝は、幅1.65m、深さ0.28mを測る。南側では0.50mほど途切れており、北側は土砂の流出のために失われている。なお、途切れた部分については、陸橋状に掘り残された可能性がある。

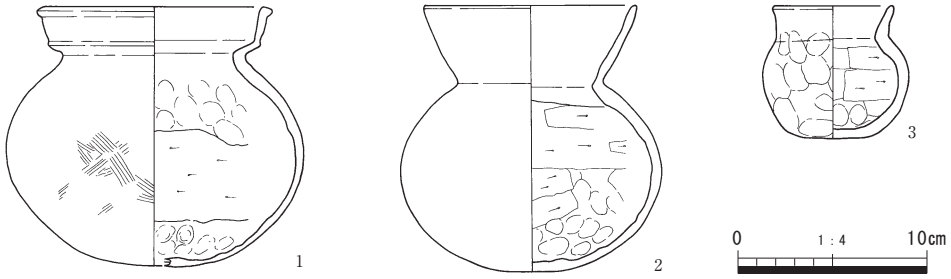
出土遺物

遺物は、南側の周溝底面において、１～



第12図　越敷山121号墳遺物出土状況

写真２　越敷山121号墳遺物出土状況



第13図　越敷山121号墳出土遺物

第13図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
1	周溝	埋土	甕	※11.4	13.6	―	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤付着
2	周溝	埋土	壺	※11.0	14.0	―	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器
3	周溝	埋土	小型丸底壺	※ 6.2	7.0	―	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	土師器

３がほぼ完形の状態で出土した。１は甕であり、口縁部端部が外側へ肥厚して平坦面をもち、端部が外側に突出し、口縁部下端が鈍く突出する。２は直口壺、３は小型丸底壺である。時期は出土遺物の特徴から、古墳時代中期前葉頃と考えられる。

越敷山75号墳（第14～17図、PL.13・14・45）

T73-10d-2H-1e・2eグリッドにある。北へと下る丘陵尾根上にあり、標高89m付近にある。丘陵尾根に沿って築造された古墳の中で最も低い位置にある。本古墳のすぐ南側には越敷山76号墳があり、その比高差は3.00mほどである。

墳丘・周溝

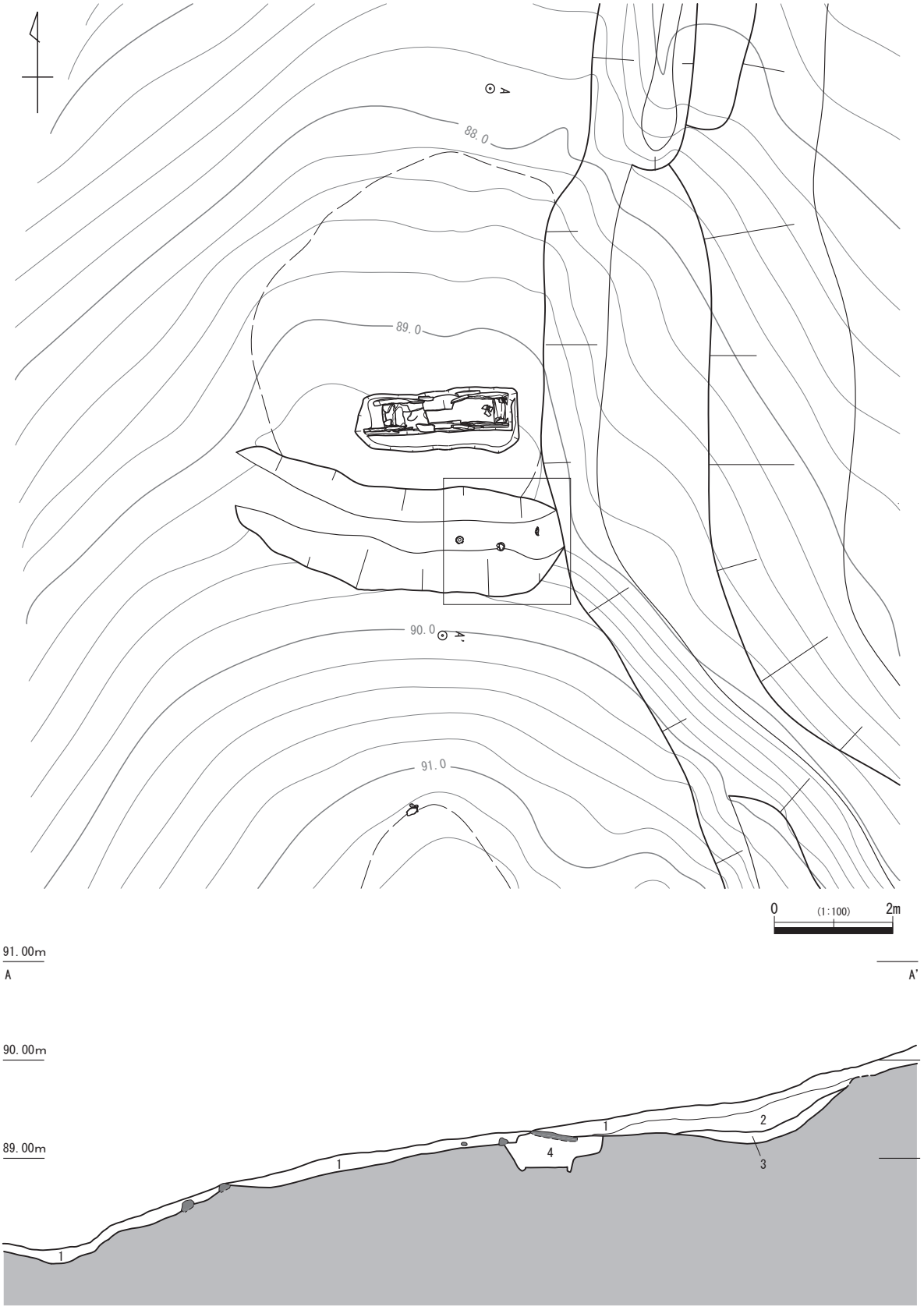
墳丘は尾根の形状を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられるが、土砂の流出によって盛土が失われ、形状は不明瞭である。しかし、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、本古墳は円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約6.00m、周溝を含めると約8.00mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.60m、南側の周溝底面から墳頂部までが0.15mである。

周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれているが、西側は土砂の流出、東側は近世の耕作により失われている。規模は検出長5.50m、幅1.78m、深さ0.10mを測り、断面形は皿状を呈する。

埋葬施設

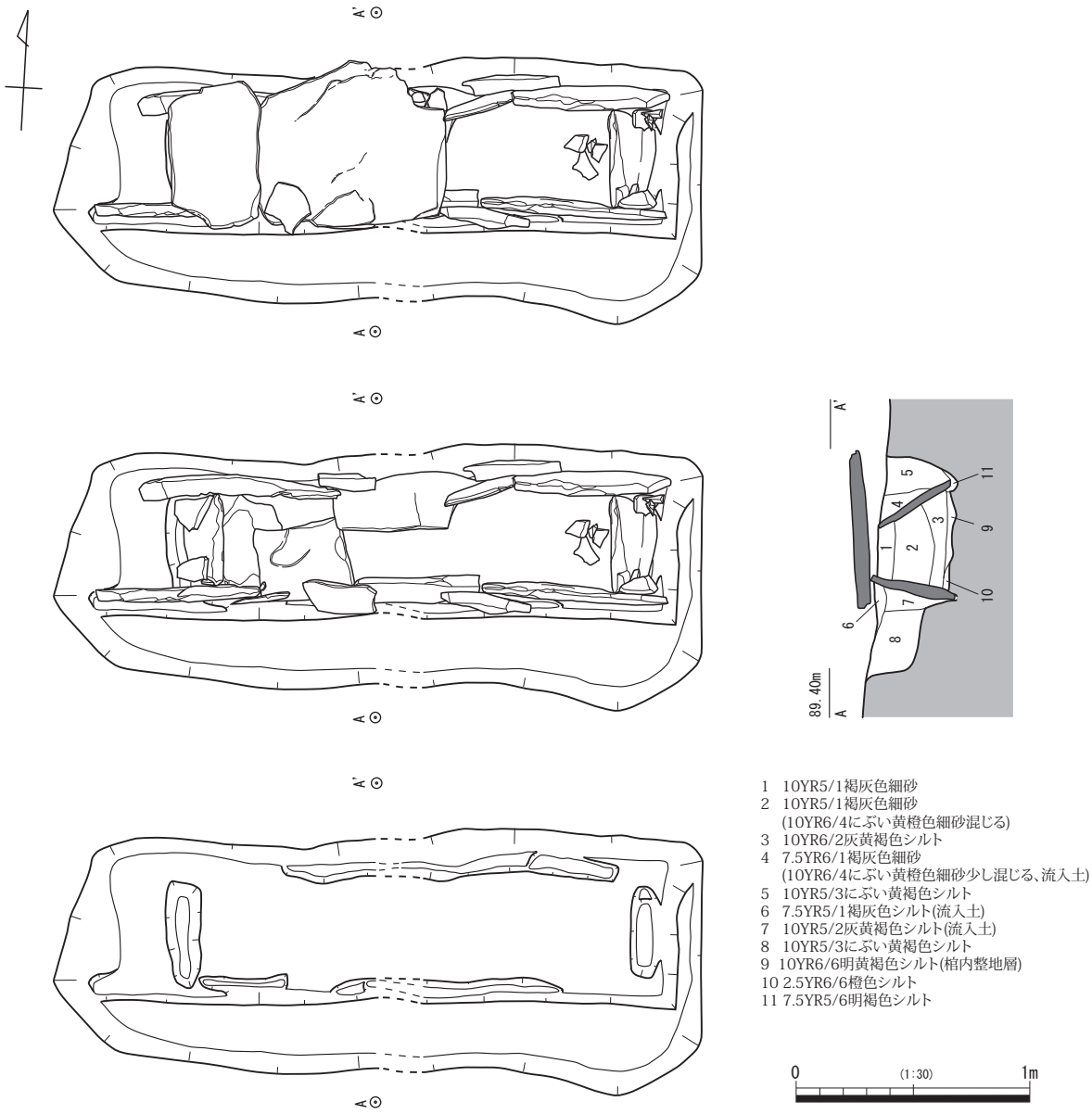
埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の南側に位置する。棺の規模は、長軸1.77m、短軸0.41m、深さ0.30mを測る。主軸の方向はE－5°－Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺内には敷石等はなく、東側において石枕が認められた。なお、副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに縦長の板石を３枚用い、平継ぎによって並べられる。長側石や短側石の継ぎ目には、板石が置かれている。棺に用いられた板石の厚さは、長側石が５㎝、短側石が10㎝と、短側石の方がやや厚



1　表土
2　10YR3/1黒褐色土
3　2.5Y4/1黄灰色土 (にぶい黄色土を下層に多く含む、周溝埋土)
4　75号墳埋葬施設

第14図　越敷山75号墳



第15図　越敷山75号墳埋葬施設①

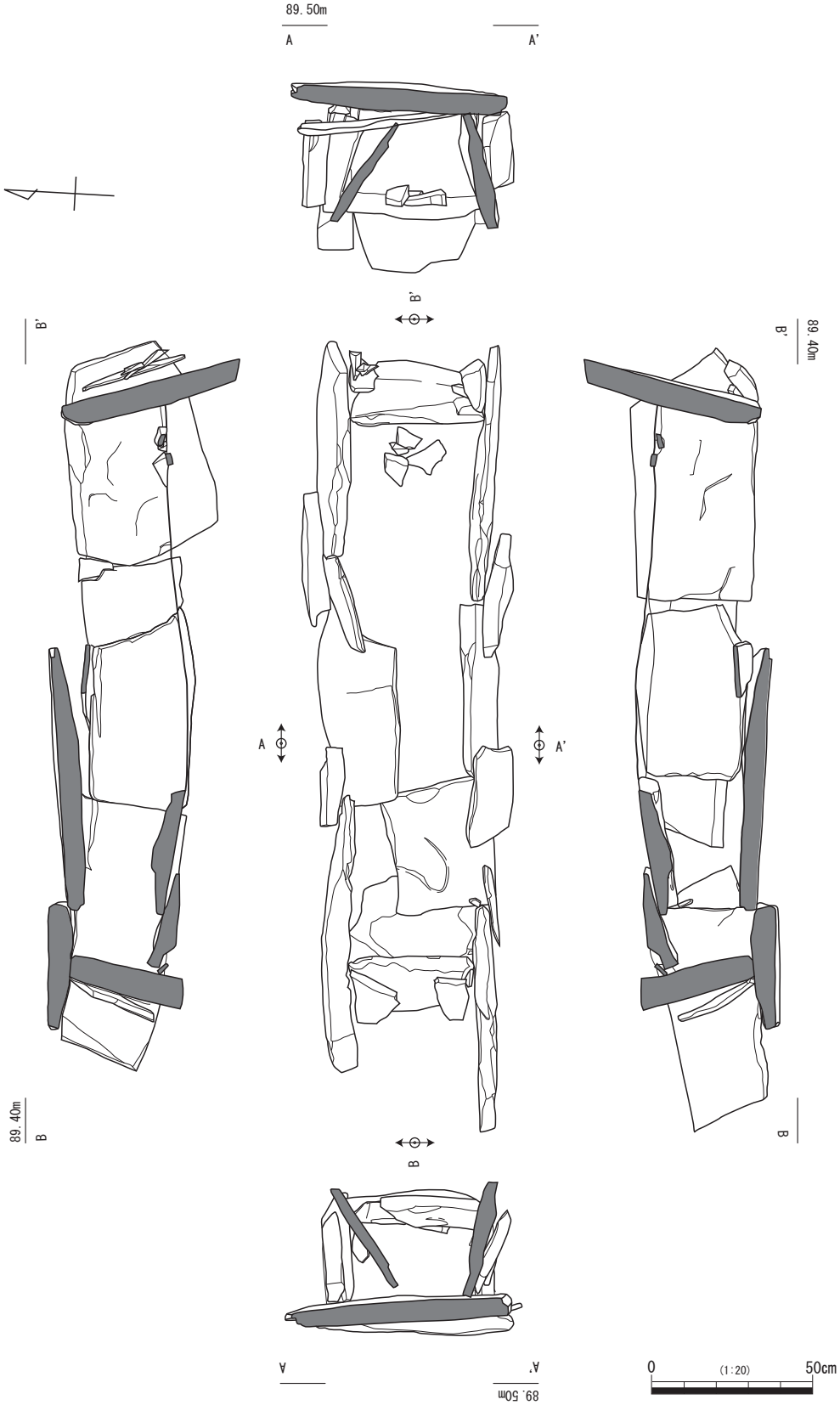
くなる。

蓋石は棺の西側において２枚確認したが、東側は後世に抜き取られており、失われていた。板状に割った石を使用しており、東側が大きい。これらは東から順に置かれており、西側の蓋石が東側の蓋石の上に乗る。

棺の掘り方は、歪な隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.72m、短軸1.03m、深さ0.32mを測る。底面は二段に掘り込まれており、南側は底面に比べて12cmほど高くなる。北側の底面には石材を設置するための溝があり、これらは棺の上面を揃えるために、石材の大きさに合わせて掘り込まれている。

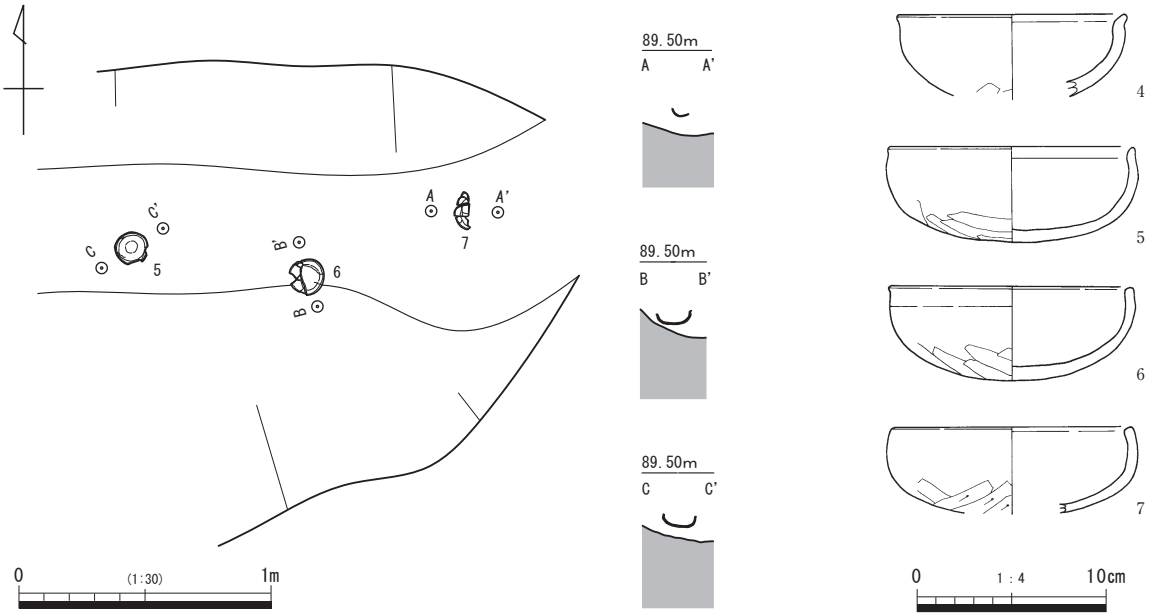
出土遺物

遺物は周溝の東側において、底面からやや浮いた状態で５～７が出土したほか、埋土中から４が出土した。４～７は椀であり、底部においてヘラケズリが施される。時期は遺物の特徴から、古墳時代



第16図　越敷山75号墳埋葬施設②

中期後葉から後期前葉頃と考えられる。



第17図　越敷山75号墳遺物出土状況・出土遺物

第17図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色調	備考
4	周溝	埋土	椀	※11.8	△4.3	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	橙色	土師器
5	周溝	埋土	椀	12.7	5.0	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	橙色	土師器
6	周溝	埋土	椀	12.7	5.0	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	橙色	土師器
7	周溝	埋土	椀	※12.5	△4.6	—	外面：ナデ、ヘラケズリ、内面：ナデ	橙色	土師器

越敷山76号墳（第18～21図、PL.15・45・46）

T73-10d-2H-2e・3eグリッドにある。北へと下る丘陵の細い尾根上にあり、標高92m付近にある。すぐ北側には越敷山75号墳、南側には越敷山98号墳があり、その比高差は3.00mほどである。なお、本古墳の直上には近世以降と考えられる道があり、墳丘や埋葬施設の一部を溝状に破壊している。

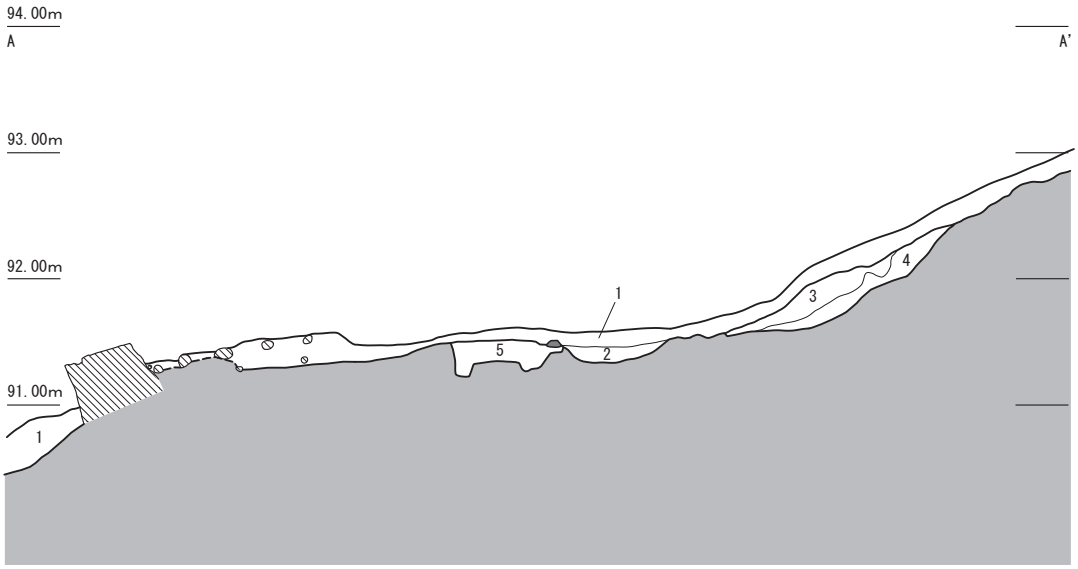
墳丘・周溝

墳丘は尾根の形状を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられるが、土砂の流出によって盛土が失われ、形状は不明瞭である。しかし、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、本古墳は円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約5.00m、周溝を含めると約6.00mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.26mであるが、南側の周溝底面と墳頂部では周溝底面の方が0.14m高くなる。

周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれているが、西側は近世の道によって失われている。規模は検出長4.60m、幅1.65m、深さ0.35mを測り、断面形は皿状を呈する。

埋葬施設

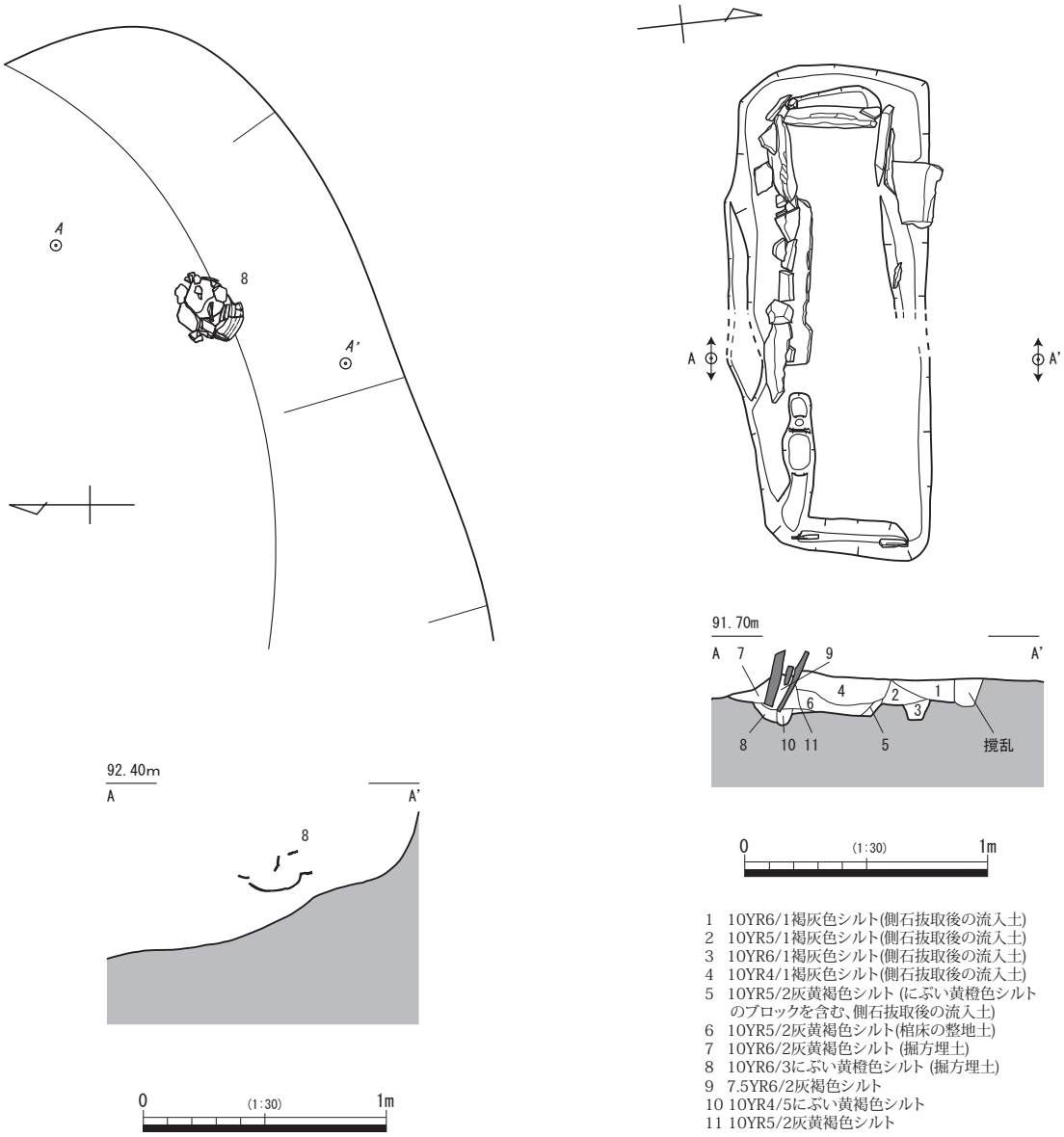
埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の南側に位置する。後世の溝によって著しく壊されており残りは悪い。棺の規模は推定で、長軸1.64m、短軸0.34m、深さ0.24mを測る。主軸の方向はW－7°－Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。



1　表土
2　10YR4/1褐灰色シルト (近・現代の道)
3　10YR3/1黒褐色土 (周溝埋土)
4　10YR6/1褐灰色土 (明黄褐色土を下層に多く含む、周溝埋土)
5　76号墳埋葬施設

0　(1:60)　2m

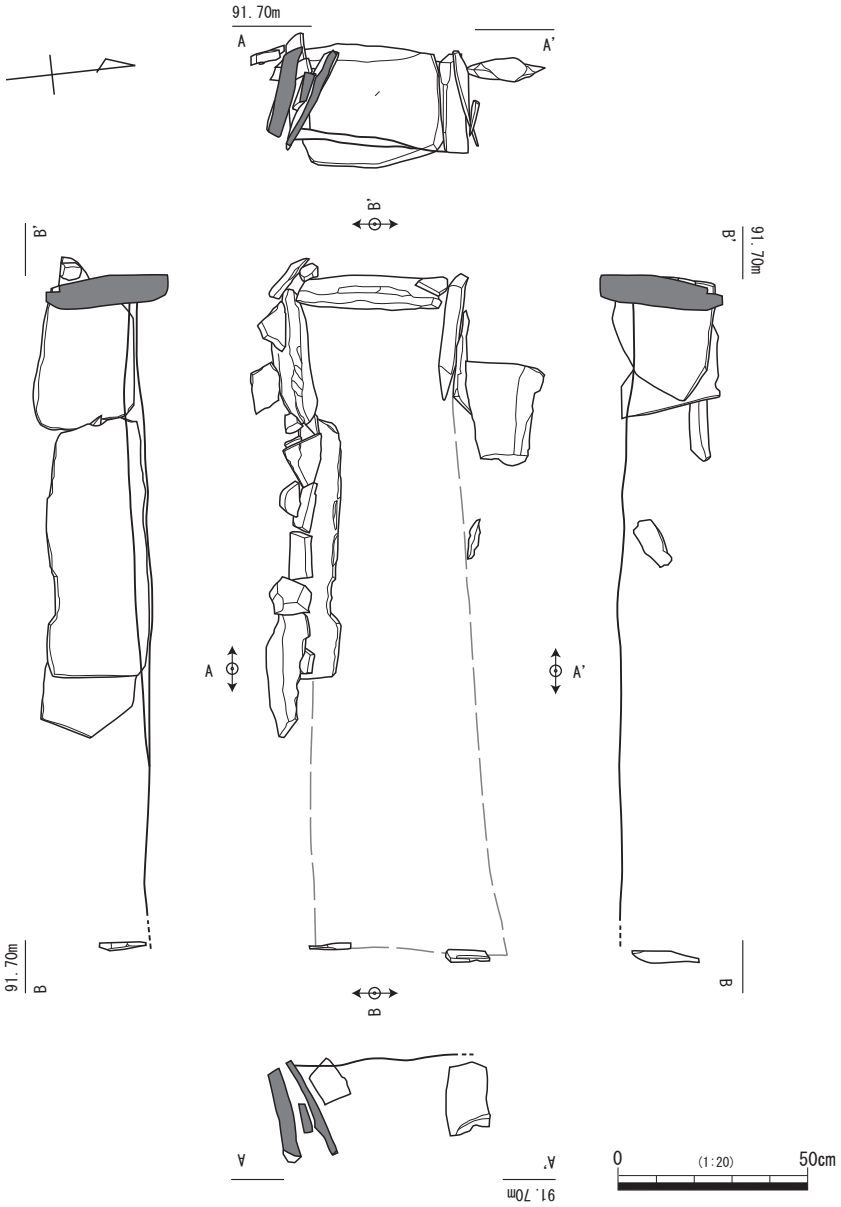
第18図　越敷山76号墳



第19図　越敷山76号墳遺物出土状況・埋葬施設①

写真３　越敷山76号墳検出状況

写真４　越敷山76号墳埋葬施設検出状況



第20図　越敷山76号墳埋葬施設②

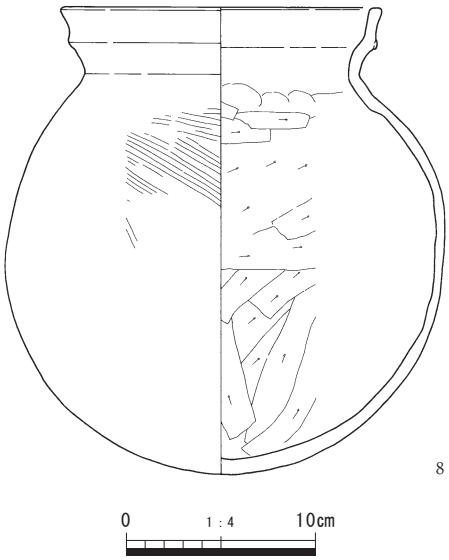
棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。板石の厚さは、長側石が５㎝、短側石が10㎝と、短側石の方がやや厚くなる。なお、掘り方と長側石や短側石の間には、板石が置かれる。棺床は灰黄褐色シルトが８㎝ほど盛られ整地がなされているが、敷石等は認められなかった。

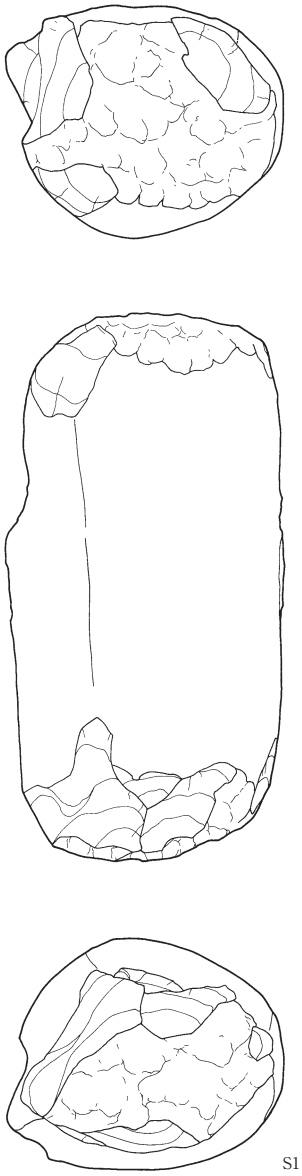
掘り方は、隅丸長方形を呈しており、規模は長軸2.01m、短軸0.81m、深さ0.16mを測る。二段に掘り込まれており、中心部分は一段低くなる。

出土遺物

遺物は周溝の南東側において、底面からやや浮いた状態で８が出土したほか、埋土中からS1が出土した。８は甕であり、口縁部下端において鈍い稜が認められる。S1は敲石である。時期は出土遺

写真５　越敷山76号墳遺物出土状況





第21図　越敷山76号墳出土遺物

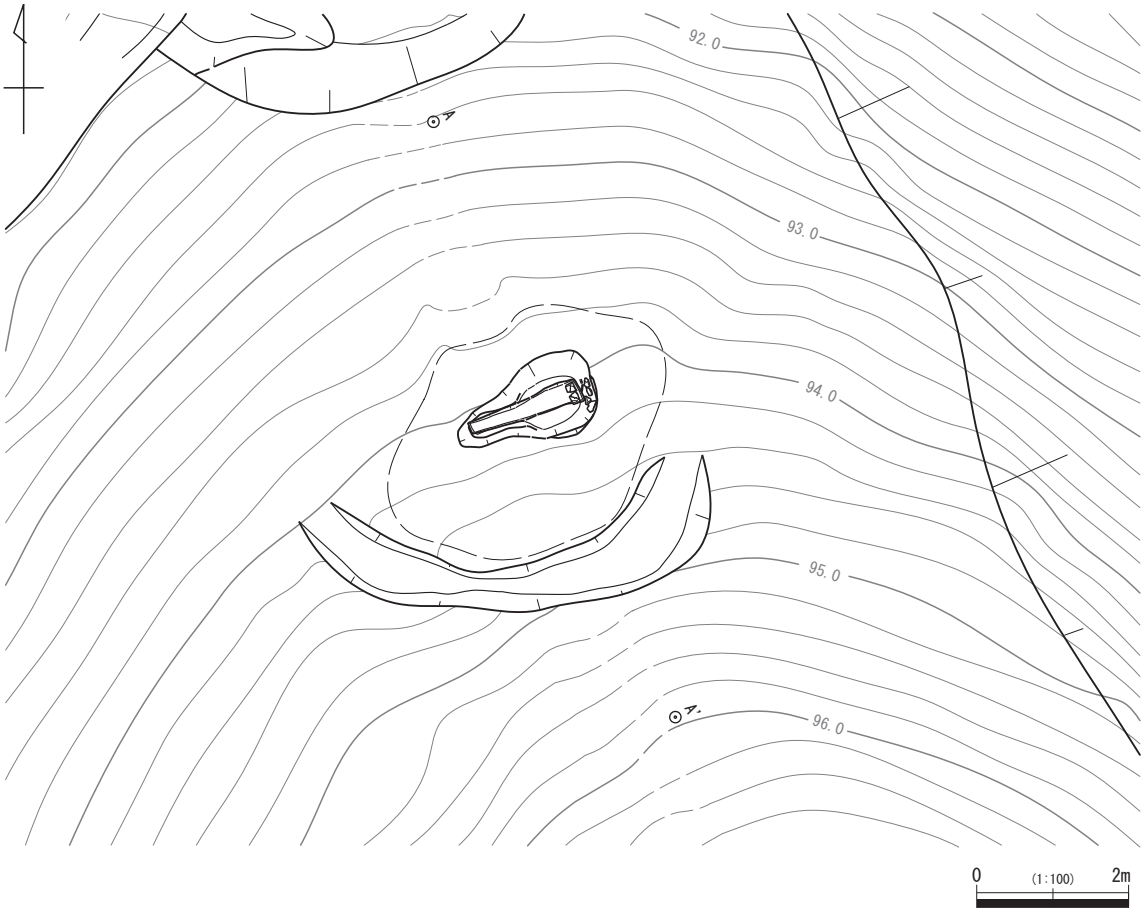
第21図　土器観察表

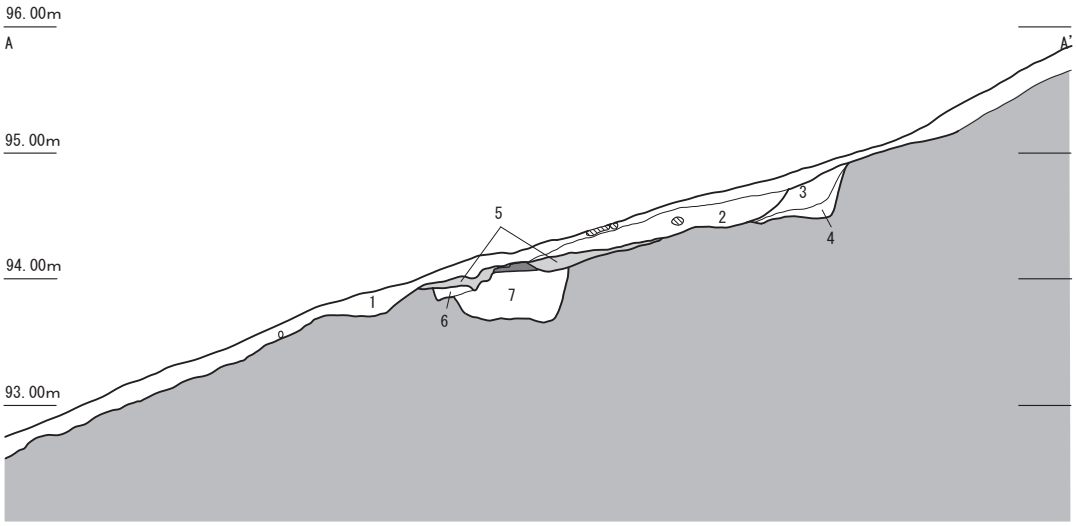
遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
8	周溝	埋土	甕	※15.7	△24.5	―	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤付着

第21図　石器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	法量（cm・g）	備　考
S1	周溝	埋土	敲石	最大長：14.5、最大幅：7.3、最大厚：6.1、重量：915.0	

物から、古墳時代中期後葉から後期前葉と考えられる。





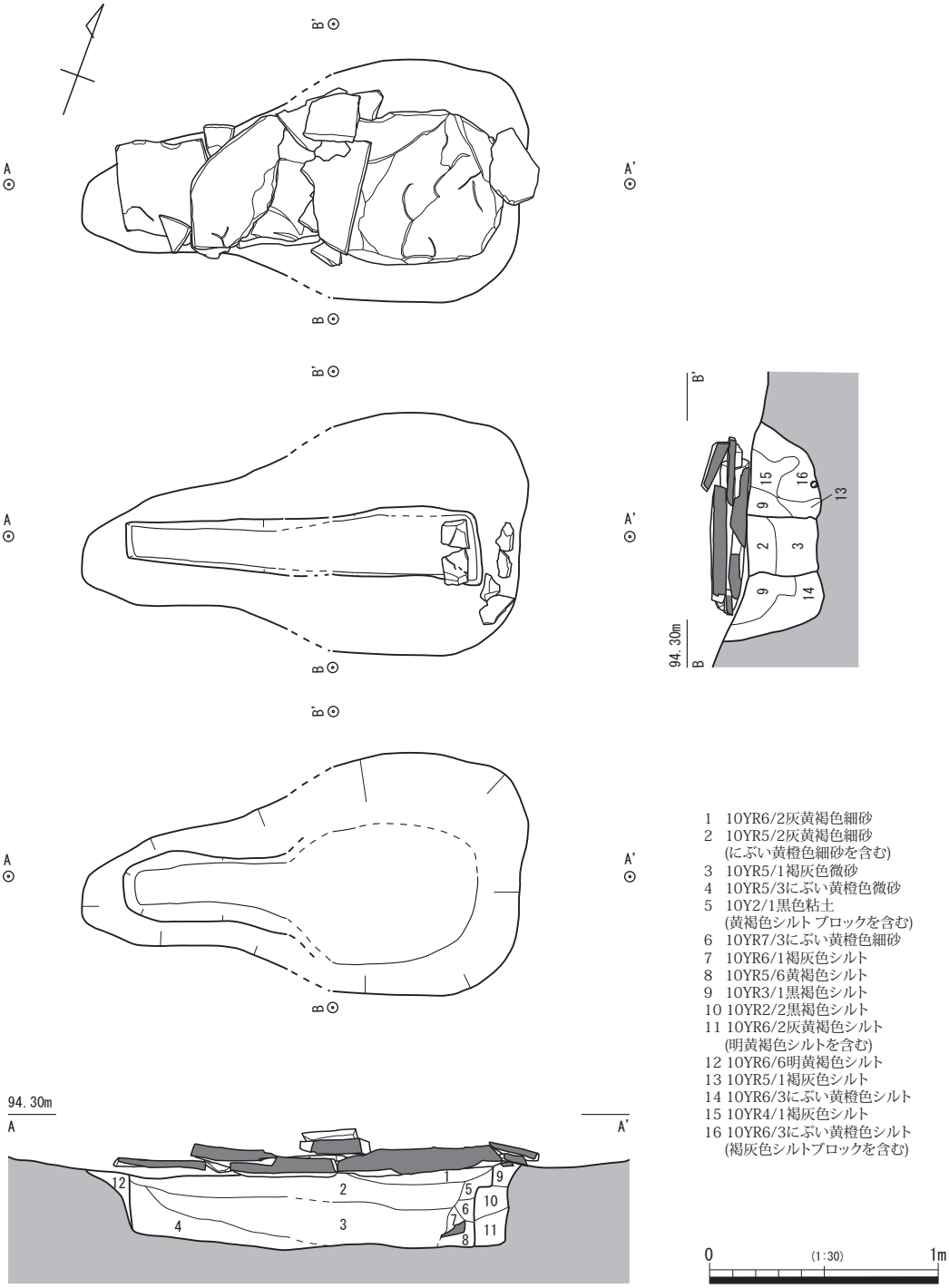
1　表土
2　10YR3/1黒褐色土
3　10YR5/4にぶい黄褐色土 (周溝埋土)
4　10YR4/2灰黄褐色土 (周溝埋土)
5　10YR5/2灰黄褐色土 (にぶい黄橙色土を少し含む、盛土)
6　10YR6/1褐灰色土 (墓坑掘方埋土)
7　98号墳埋葬施設

0　(1:60)　2m

第22図　越敷山98号墳

越敷山98号墳（第22・23図、PL.16・17）

T73-10d-2H-3d・3e・4d・4eグリッドにある。北へと下る丘陵尾根上にあり、標高94m付近にある。



第23図　越敷山98号墳埋葬施設

すぐ北側には越敷山76号墳、南側には越敷山122号墳があり、その比高差はそれぞれ3.00m、3.70mほどである。

墳丘・周溝

墳丘は尾根の形状を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられるが、盛土の

大半は流出してしまい埋葬施設の上面において僅かに残るのみである。このため、古墳の形状は不明瞭であるが、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約3.30m、周溝を含めると約4.00mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.43mであるが、南側の周溝底面と墳頂部では、周溝底面の方が0.31m高くなる。

周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれている。規模は検出長5.40m、幅1.10m、深さ0.36mを測り、断面形は「L」字形を呈する。

埋葬施設

埋葬施設は蓋石を伴う土坑墓であり、墳頂部平坦面のほぼ中央に位置する。棺の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.55m、短軸0.24m、深さ0.33mを測る。主軸の方向はE－20°－Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺床の東側には石枕が置かれるが、副葬品は認められなかった。

蓋石は板石が３枚並べられ、石の継ぎ目には板石が置かれる。また、その周辺においても隙間を埋めるためとみられる板石が置かれる。なお、棺の東側では、蓋石の下にそれを安定たせるために置かれたと考えられる石を確認した。

墓壙の掘り方は、東側が幅広い歪な楕円形を呈しており、規模は長軸1.91m、短軸1.25m、深さは0.32mを測る。

出土遺物

遺物は周溝や埋葬施設から出土しなかった。時期は周囲の古墳の状況から古墳時代中期後葉から後期前葉と考えられる。

越敷山122号墳（第24～27図、PL.17・18・45）

T73-10d-2H-4d・4e・5d・5eグリッドにある。北へと下る丘陵の細い尾根上にあり、標高98m付近にある。本古墳のすぐ北側には越敷山98号墳があり、南側には123号墳がある。その比高差はそれぞれ3.70m、2.40mほどである。

墳丘・周溝

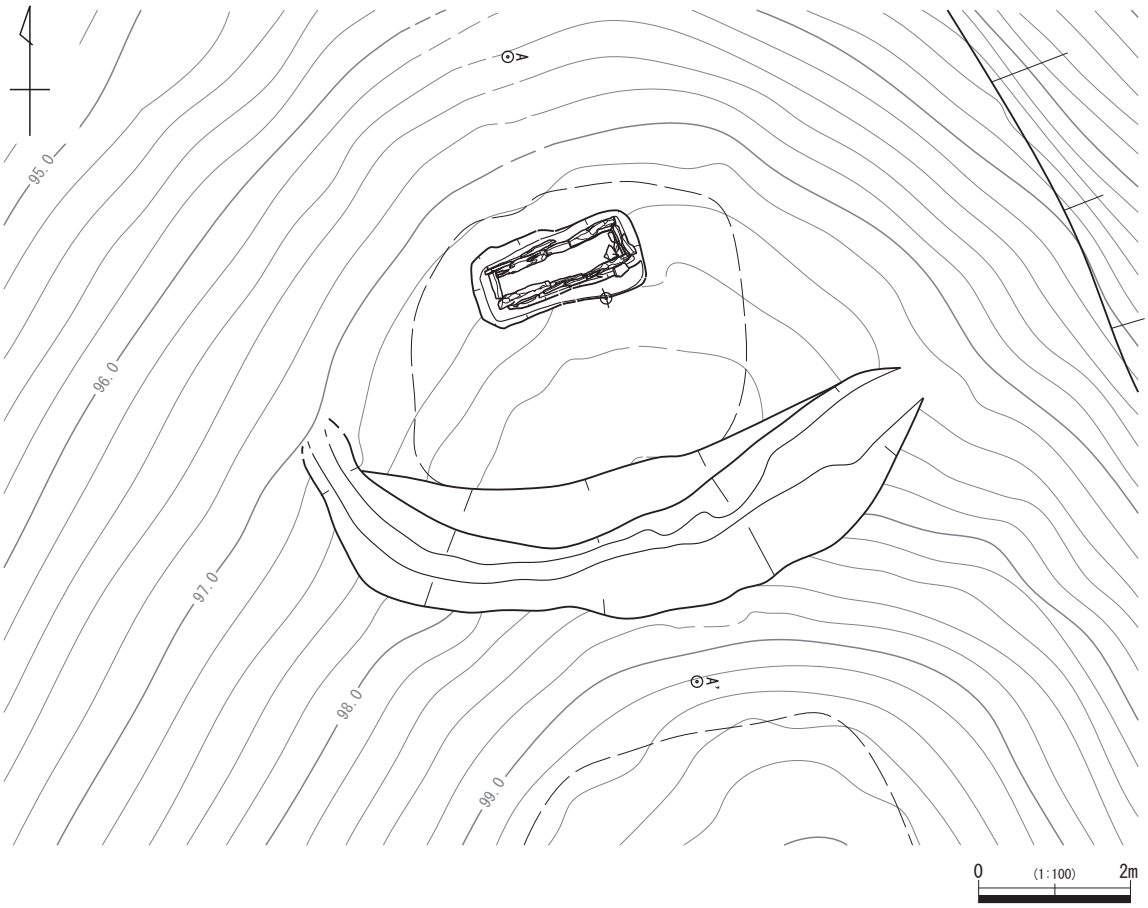
墳丘は尾根の形状を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものとみられる。土砂の流出によって盛土が失われ、形状は不明瞭であるが、南側において三日月形に周溝が掘り込まれていることから、本古墳は円墳であったと考えられる。規模は周溝内側で直径約4.30m、周溝を含めると約5.80mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.35mであるが、南側の周溝底面と墳頂部では、周溝底面の方が0.24m高くなる。

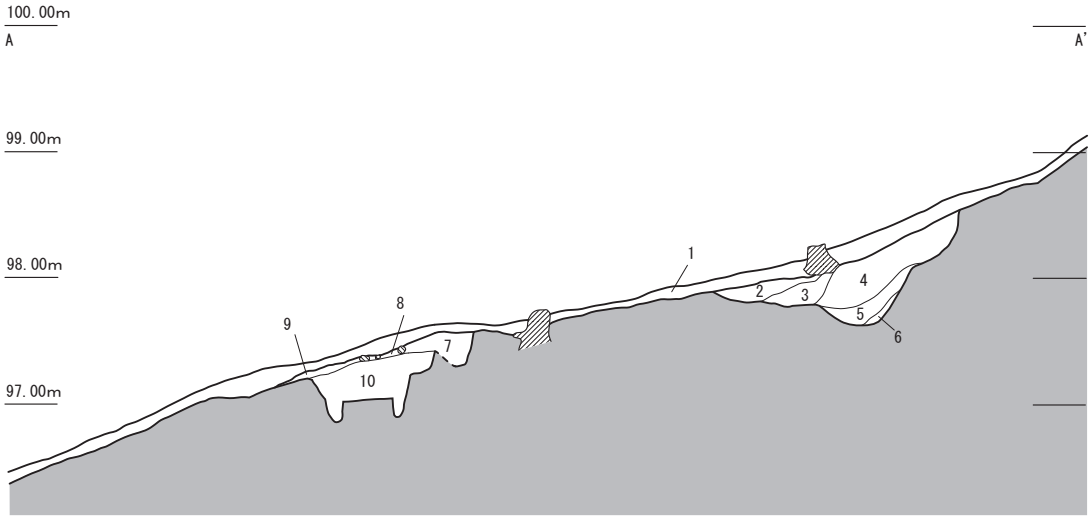
周溝は、尾根と直交する形で三日月形に掘り込まれている。規模は検出長8.00m、幅2.01m、深さ0.89mを測り、断面形は皿状を呈する。

埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の北側に位置する。棺の規模は、長軸1.71m、短軸0.39m、深さ0.30mを測る。主軸の方向はE－20°－Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺内には敷石等はなく、東側において石枕が認められた。なお、副葬品は確認できなかった。

棺の構造は、南東側と北西側の長側石の端部に短側石を配置した「ロ」字形をなす。長側石は左右ともに縦長の板石を３枚用い、平継ぎによって並べられる。長側石の継ぎ目には、板石が配置される。棺に用いられた板石の厚さは５～10㎝と、厚さの異なる石を用いている。蓋石との設置面は平坦にな

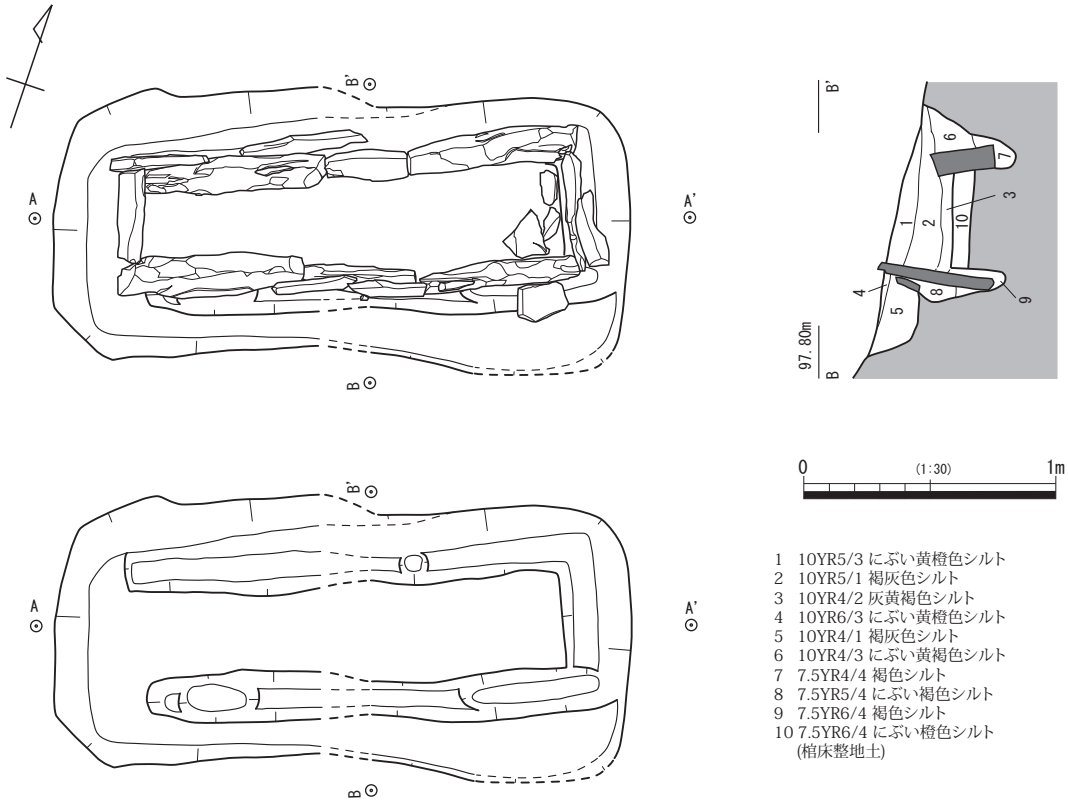




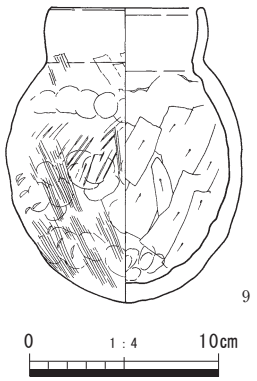
1　表土
2　10YR2/2 黒褐色土 (周溝埋土)
3　10YR3/2 黒褐色土 (周溝埋土)
4　10YR2/1 黒色土 (周溝埋土)
5　10YR4/3 にぶい黄褐色土 (周溝埋土、礫を含む)
6　10YR5/4 にぶい黄褐色土 (周溝埋土)
7　7.5YR4/2 灰褐色土 (墓坑埋土)
8　10YR6/3 にぶい黄橙色土 (墓坑埋土)
9　7.5YR5/3 にぶい褐色土 (墓坑埋土)
10 122号墳埋葬施設

0　(1:60)　2m

第24図　越敷山122号墳



第25図　越敷山122号墳埋葬施設①



第26図　越敷山122号墳出土遺物

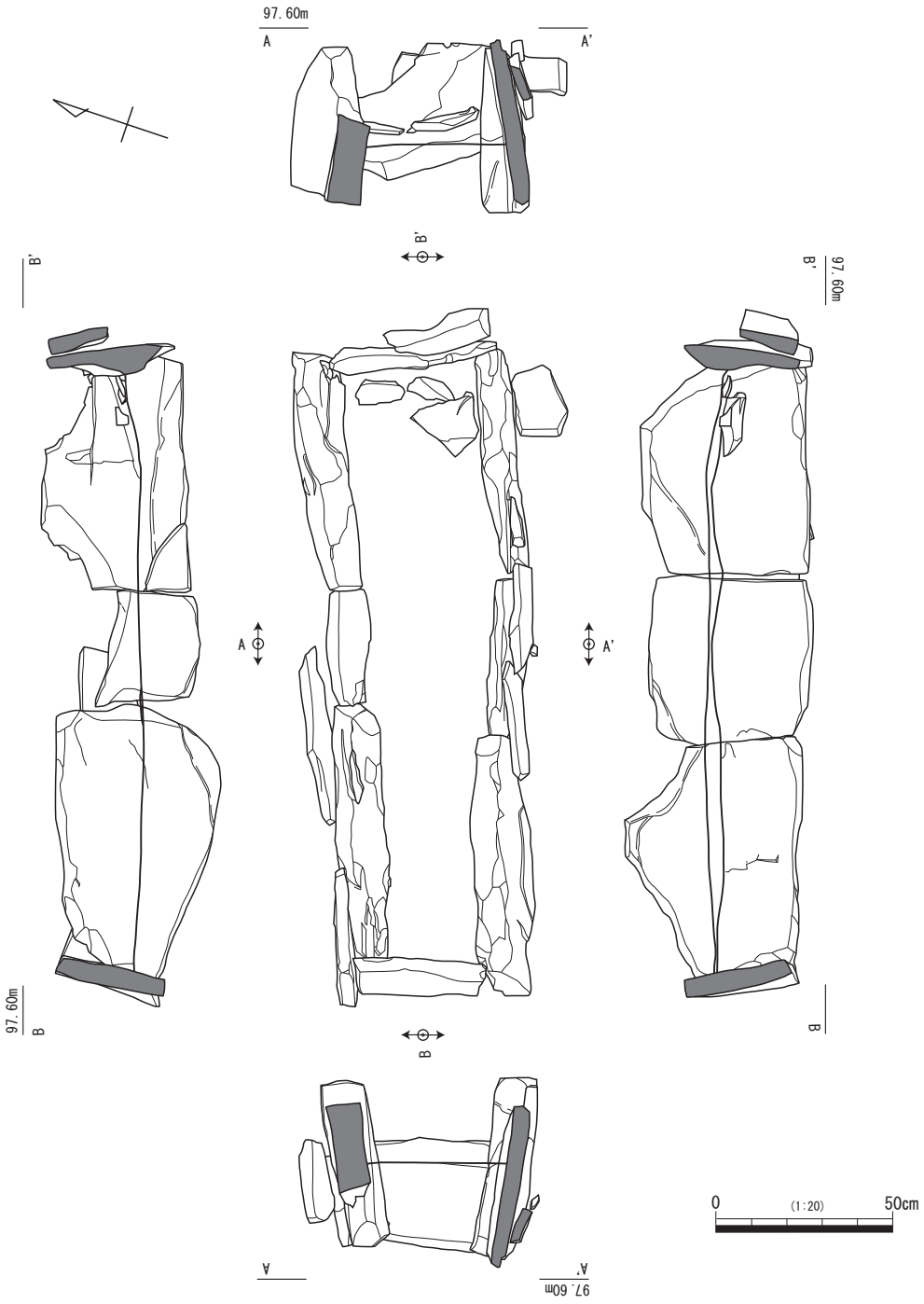
写真６　越敷山122号墳埋葬施設

第26図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
9	周溝	底面	甕	※7.9	15.5	―	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、爪跡、黒斑有

るよう整えられる。

棺の掘り方は、隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.28m、短軸1.03m、深さ0.32mを測る。底面は二段に掘り込まれており、南側は底面より20cmほど高い段となる。北側の底面には石材を設置するため

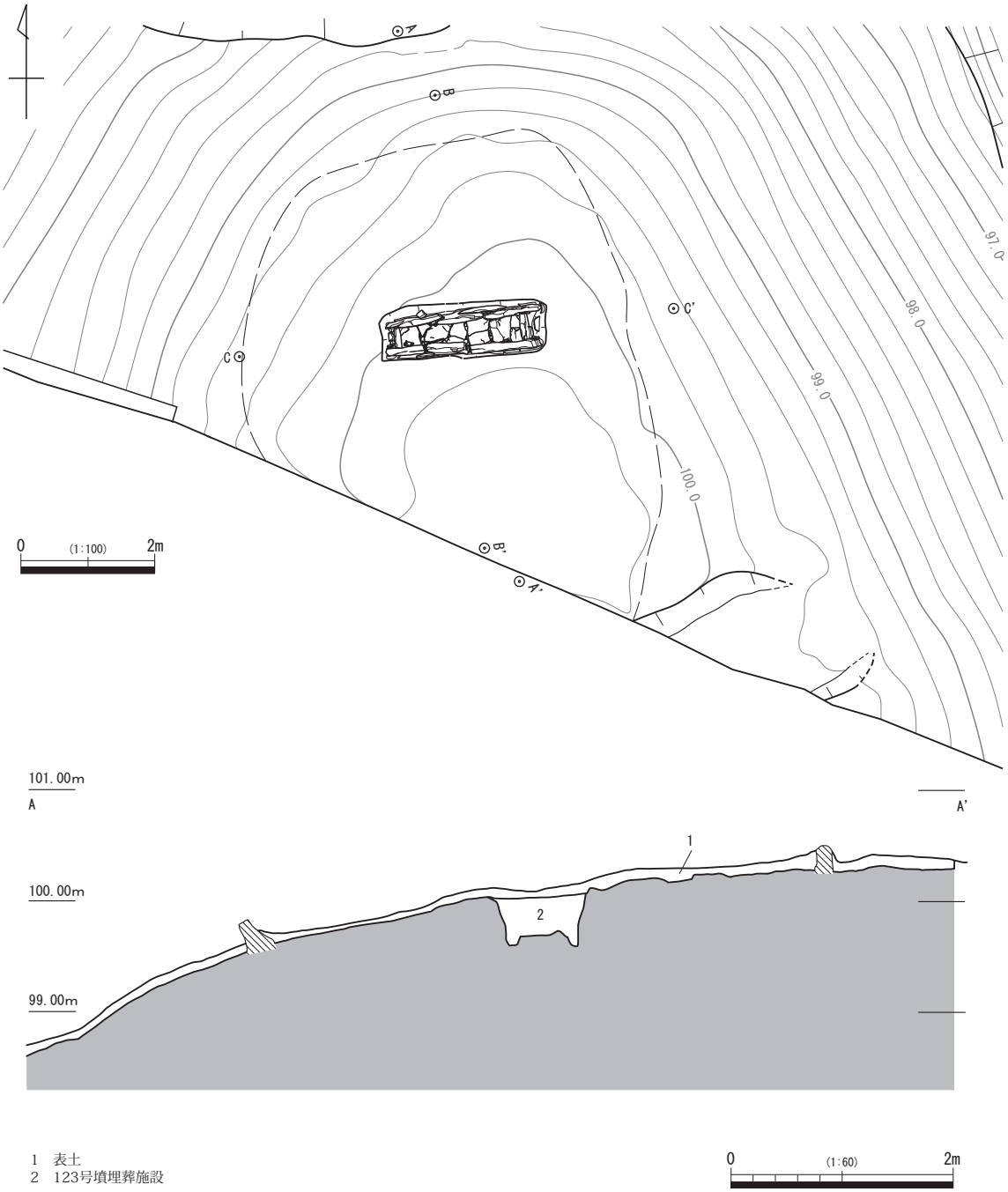


第27図　越敷山122号墳埋葬施設②

の溝が掘り込まれる。なお、底面には石棺の設置後に７cmほど土が盛られており、それを棺床としている。

出土遺物

遺物は周溝埋土から９が出土した。９は土師器の甕であり、外面に指の圧痕が顕著にみられる。時

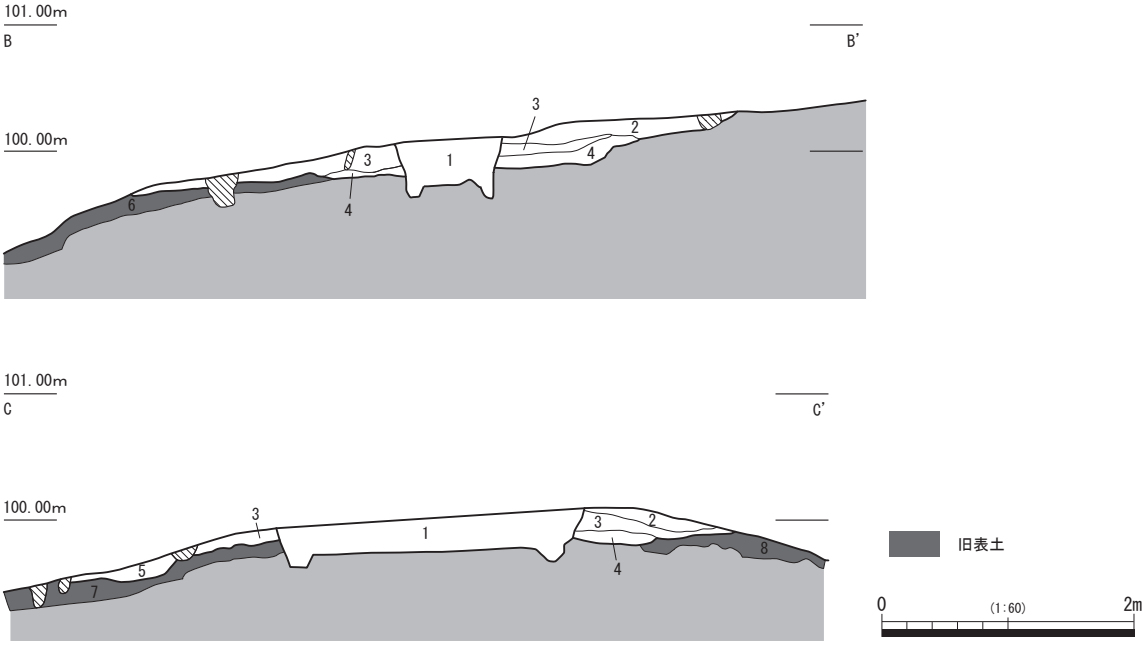


第28図　越敷山123号墳

期は出土遺物から、古墳時代後期前葉頃と考えられる。

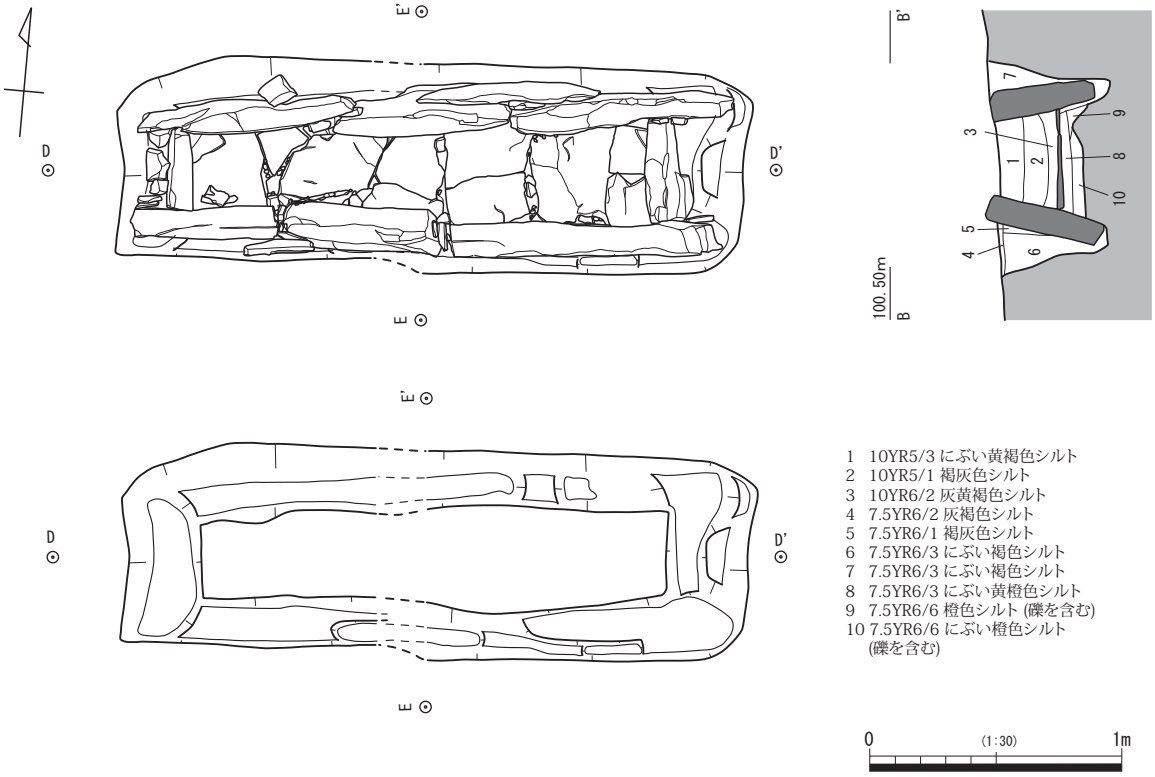
越敷山123号墳（第28～32図、PL.19・46）

T73-10d-2H-5d・6dグリッドにある。北へと下る丘陵の細い尾根上にあり、標高100m付近にある。

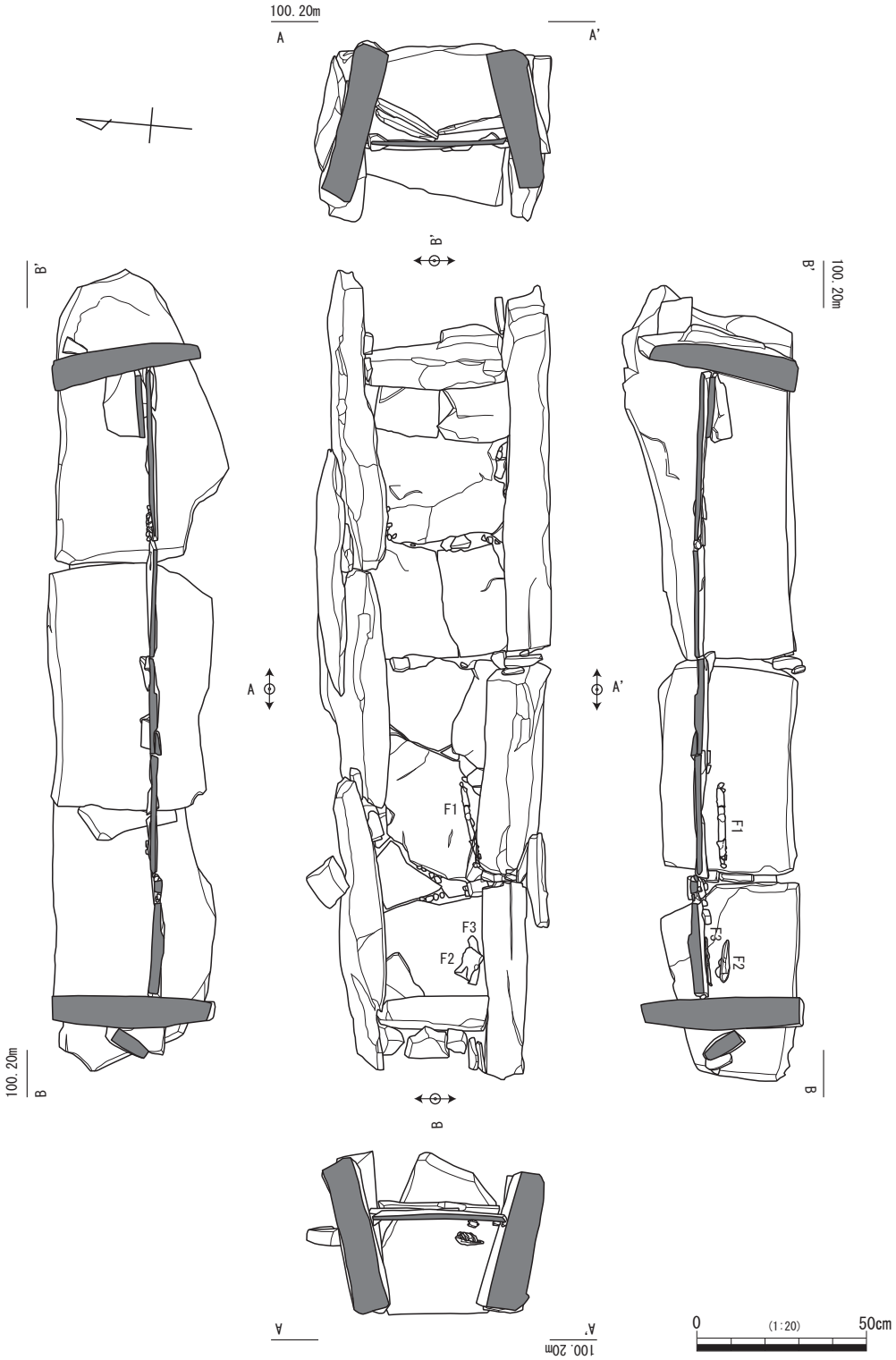


1　123 号墳埋葬施設
2　7.5YR5/3 にぶい褐色シルト (明褐色土を含む、墳丘盛土)
3　7.5YR5/6 明褐色シルト (墳丘盛土)
4　7.5YR3/1 黒褐色シルト
(明褐色シルトをブロック状に含む、墳丘盛土)
5　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (墳丘盛土)
6　10YR5/2 灰黄褐色シルト (明黄褐色シルトを含む、旧表土)
7　10YR4/4 褐灰色シルト (旧表土)
8　10YR4/1 褐灰色シルト (旧表土)

第29図　越敷山123号墳墳丘断面

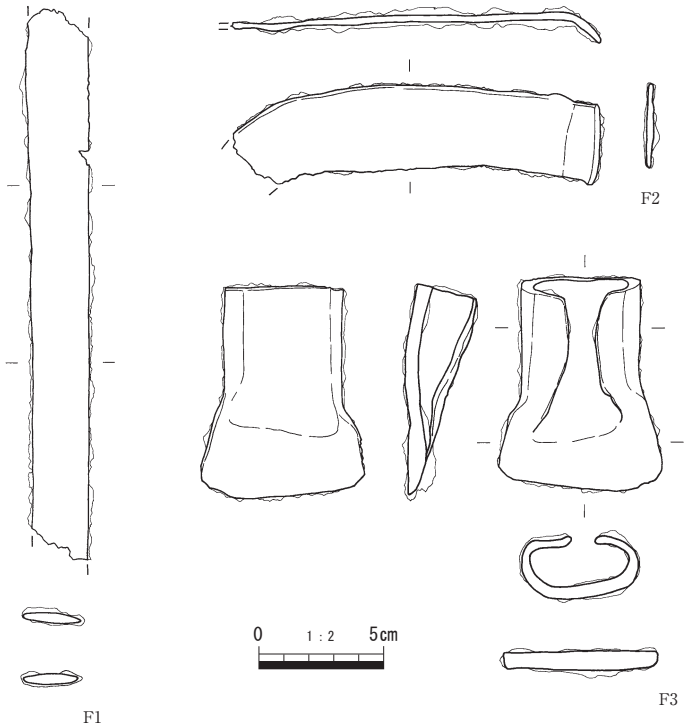


第30図　越敷山123号墳埋葬施設①



第31図　越敷山123号墳埋葬施設②

南側約1/3は調査区外となるため、調査を行っていない。本古墳のすぐ北側には越敷山122号墳があり、その比高差は2.40mほどである。



第32図　越敷山123号墳出土遺物

墳丘・周溝

墳丘は尾根の形状を利用し、周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものと考えられる。盛土は埋葬施設を中心に2.50m四方で認められ、厚さは最大で0.45mであるが、相当量流出しているとみられる。古墳の形状は盛土の流出のため不明瞭だが、円墳と考えられる。規模は周溝内側で直径約8.00m、周溝を含めると10.50mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが0.60m、南東側の周溝底面から墳頂部までが0.80mである。

第32図　鉄器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	法量（cm）	備　　考
F1	埋葬施設	3	鉄剣	最大長：△21.8、最大幅：2.6、最大厚：0.7、重量：△62.7	
F2	埋葬施設	3	鉄鎌	最大長：14.6、最大幅：3.5、最大厚：0.6、重量：45.3	
F3	埋葬施設	3	鉄斧	最大長：8.5、最大幅：6.5、最大厚：1.2、重量：167.4	

周溝は、尾根と直交する形で掘り込まれているようだが、大半が調査区外のため不明である。

埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳頂部平坦面の北側に位置する。棺の規模は、長軸1.85m、短軸0.40m、深さ0.28mを測る。主軸の方向はE－5°－Nと東西方向を向き、尾根に対して直交する。棺床には板石が敷かれ、東側には石枕がある。副葬品は棺の南西側で出土した。

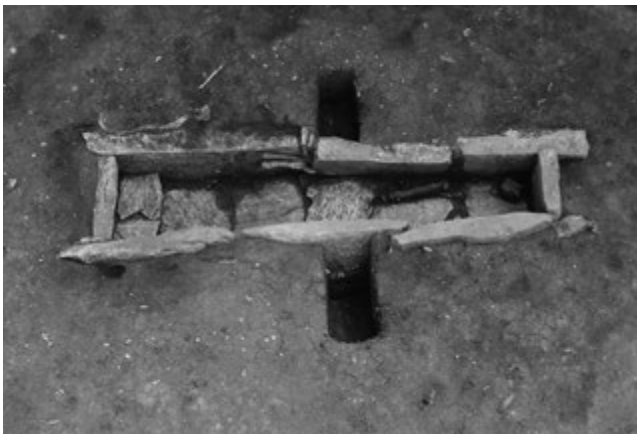


写真７　越敷山123号墳遺物出土状況

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに縦長の板石を３枚用い、平継ぎによって並べられる。長側石や短側石の継ぎ目には、板石が置かれる。棺に用いられた板石の厚さは10cmほどであり、厚手の石を使用している。長側石、短側石ともに蓋石との設置面は平坦に加工される。石の幅は40～50cmであり、概ね揃えられている。敷石は厚さ３cmほどの板石

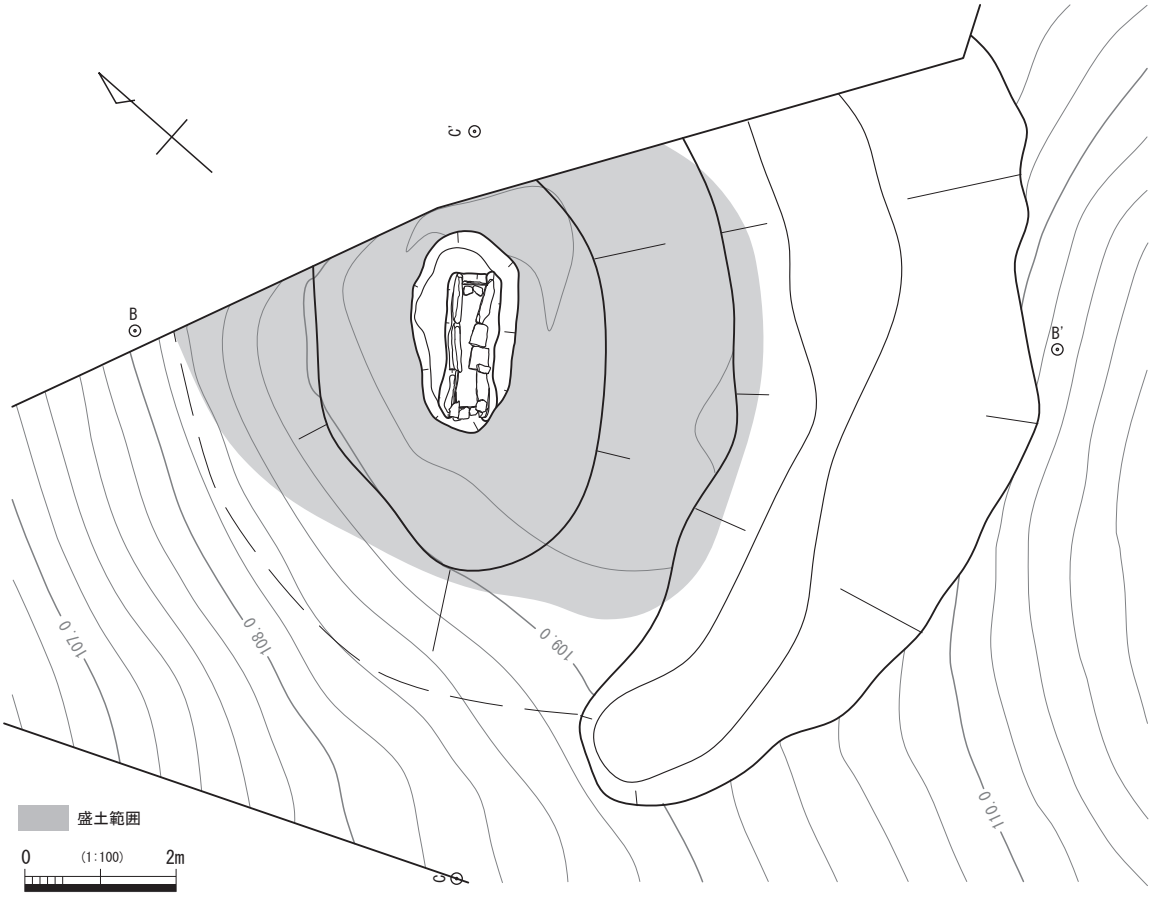
第33図　越敷山77号墳検出状況

を横長に配置し、石の隙間には小石が充填される。

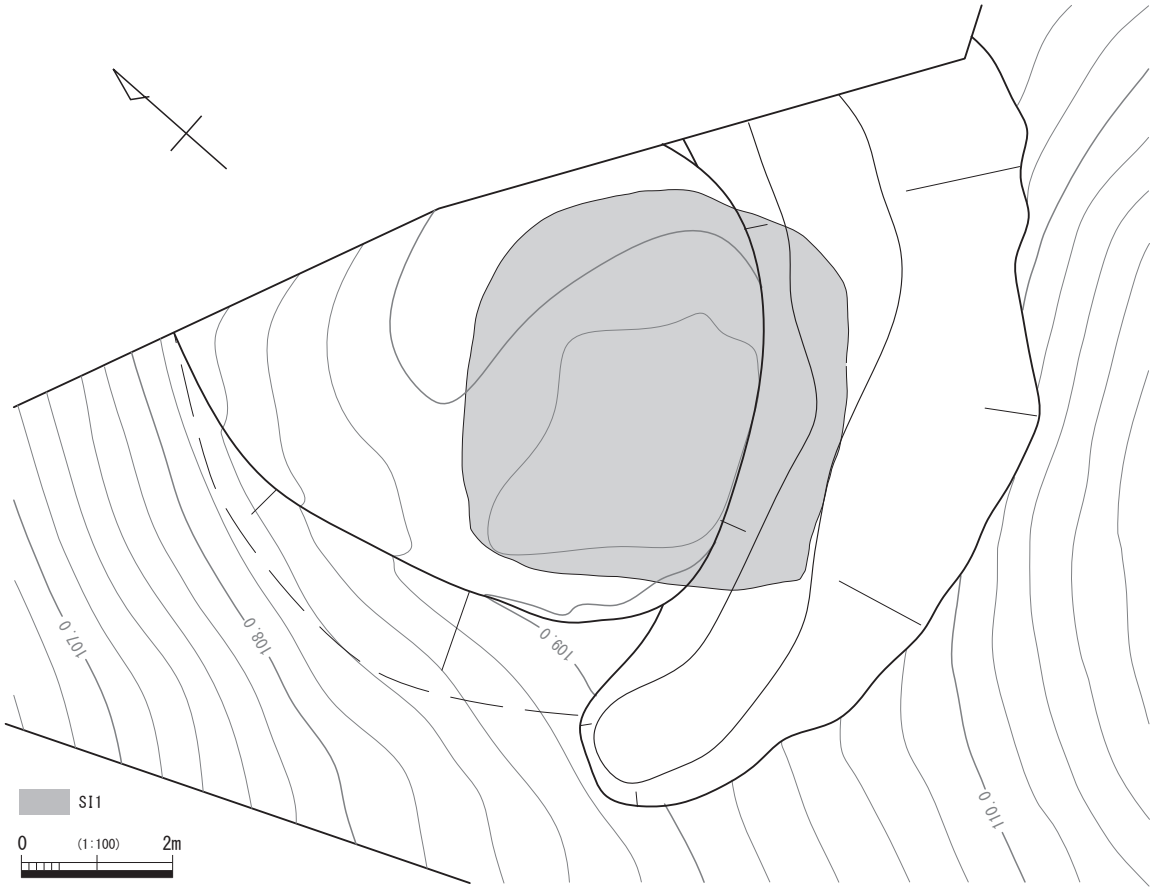
棺の掘り方は、隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.44m、短軸0.83m、深さ0.43mを測る。底面周囲には石材を設置するための溝が掘り込まれる。なお、底面には石棺の設置後に７㎝ほど土が盛られ、その上に板石を配置し、棺床としている。

出土遺物

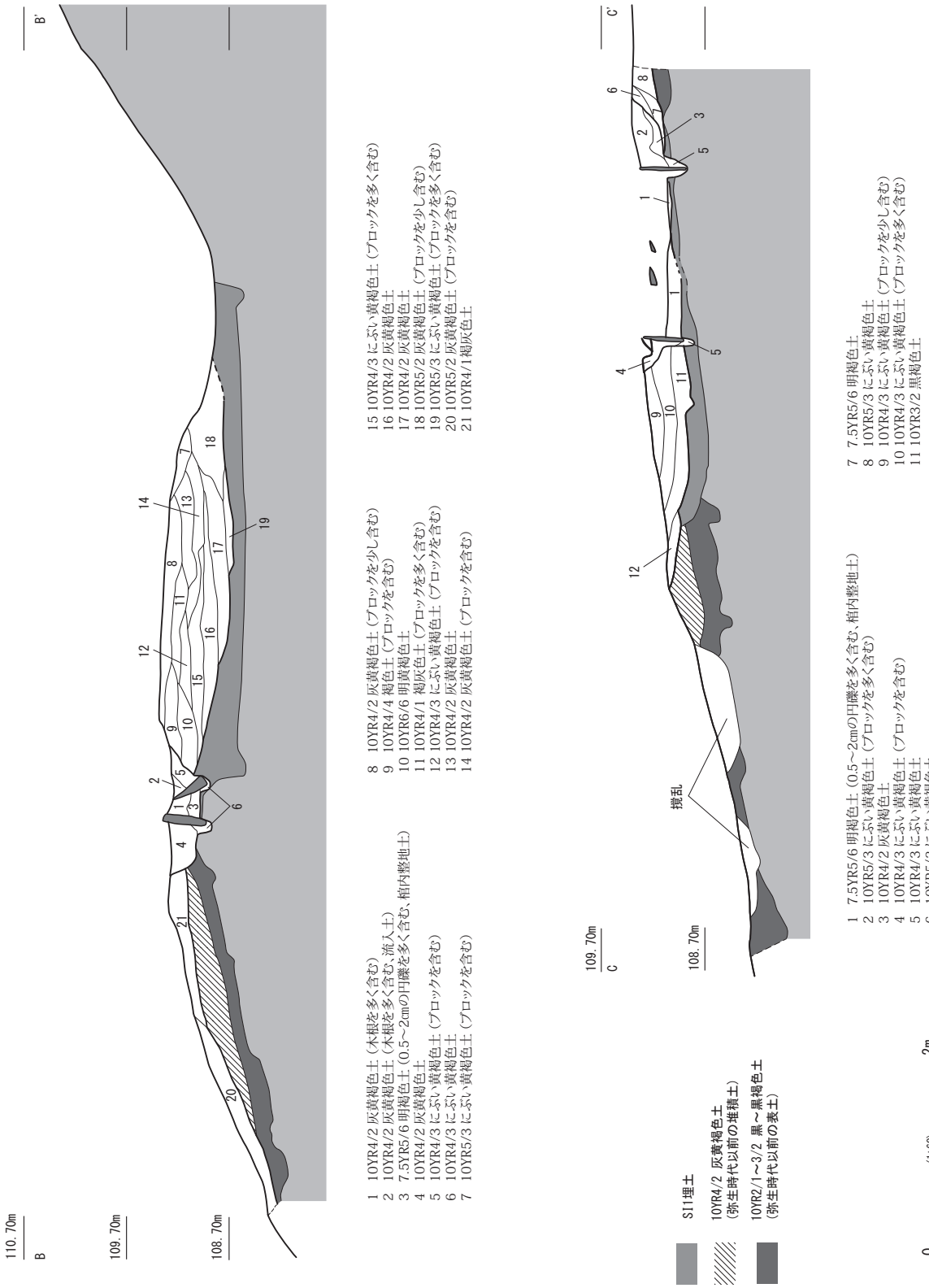
遺物は棺の南西側において、F1～3が出土した。F1は鉄剣であり、両端を欠く。F2は鉄鎌、F3は鉄斧である。時期は周囲の古墳の年代などから古墳時代中期後葉から後期前葉頃と考えられる。



第34図　越敷山77号墳



第35図　越敷山77号墳墳丘除去後



第36図　越敷山77号墳墳丘断面

越敷山77号墳（第33～38図、PL.20～22・46）

T73-10d-2H-8c・9b・9cグリッドにあり、標高109m付近にある。ここは丘陵尾根の頂部の先端にあたり、古墳のすぐ北側は北西へと下る斜面となる。南東側には越敷山49号墳があり、これを切る。また、北側には越敷山125号墳がある。なお、西側の1/3は調査区外となるため、今回調査を行っていない。

調査前は墳丘の中心付近に若干落ち込みがみられ、埋葬施設に伴うと考えられる石材の一部が露出していた。表土除去後、墳丘の東側と北西側において蓋石とみられる石材を確認した。これらは後世に動かされており、元の位置を保っていなかった。また、調査前に落ち込みがみられた場所には埋葬施設の掘り方が認められた。

調査はまず埋葬施設から着手し、次いで墳丘に取り掛かることとした。調査の結果、周溝や盛土のほか、埋葬施設１基を確認した。なお、墳丘の盛土除去後において竪穴建物（SI1）を検出した。SI1は窪んだ状態で確認されたことから、この周辺は古墳築造直前まで窪地であったとみられ、丘陵尾根をカットした段状の地形となっていたと考えられる。本古墳はこのような地形を利用して築造されたと思われる。

墳丘・周溝

本古墳は盛土や周溝の状況から円墳と考えられる。規模は周溝内側で直径約8.00m、周溝を含めると12.00mを測る。墳丘の高さは、北西側の墳端から墳頂部までが1.00m、南東側の周溝底面から墳頂部までが0.50mである。

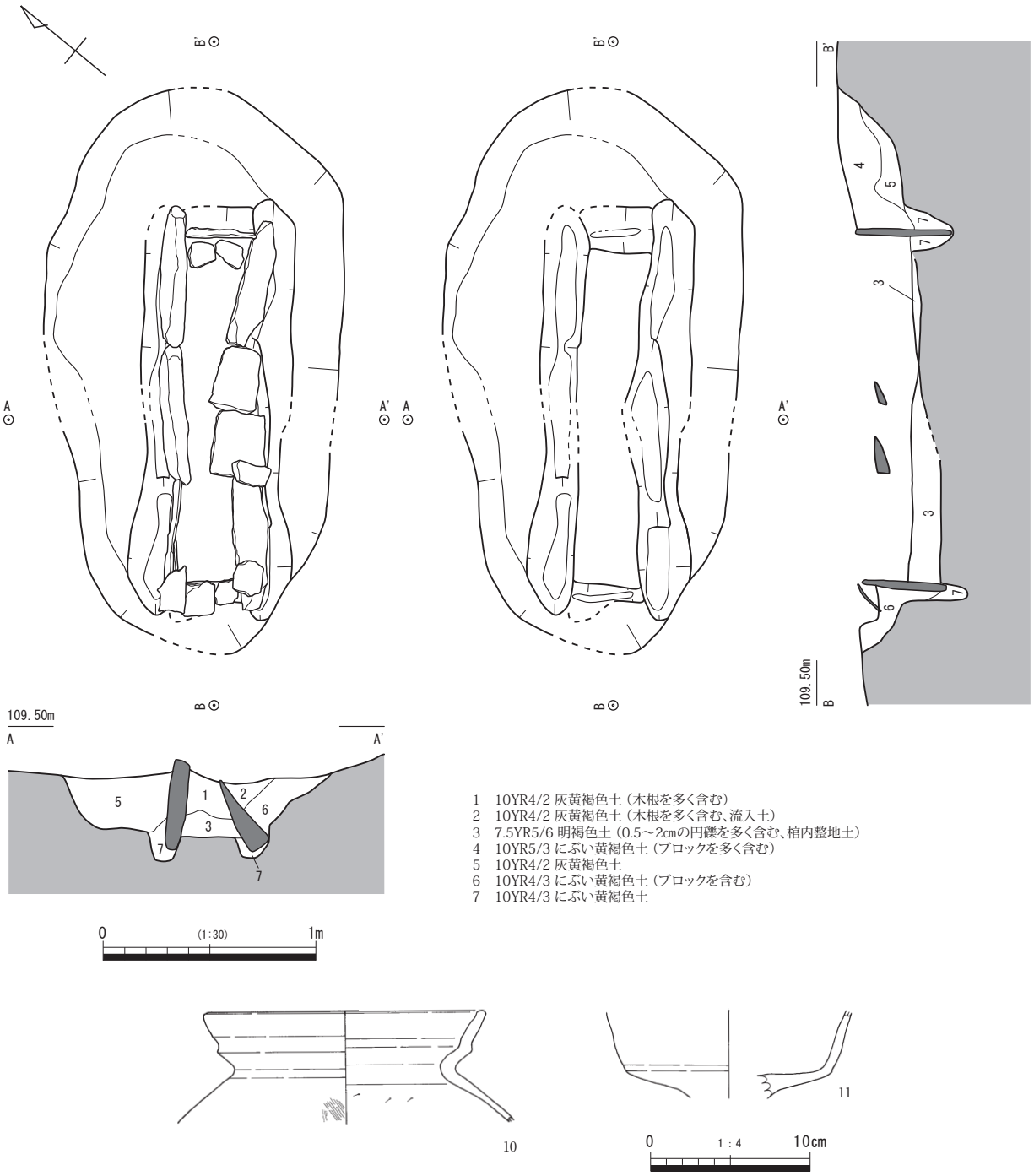
墳丘は周囲を掘削し、墳形を整えた後、盛土をして築造したと考えられる。ただし、先にも述べたとおり、盛土除去後に窪んだ竪穴建物（SI1）を確認したことから、越敷山49・51号墳のように、盛土を行う前に周辺を平坦に整えなかったと思われる。盛土の厚さは最大で0.67mであり、盛土の総数は約11.00㎥である。

盛土については、その外表側に土手を巡らせ、土手の内部を充填していく方法で土が盛られており、越敷山49・51号墳と概ね共通する。その手順については、以下の５つの工程によって行われたと考えられる。

第１工程：墳丘の外表側に土手を築く（B-B’：17～19層C-C’：11・12層）。
第２工程：土手の間の窪みに盛土を充填し、平坦にする（B-B’ 14～16層）。
第３工程：墳丘の外表側に土手状に土を盛る（B-B’：11～13・21層）。
第４工程：中心部の窪みに土を充填する（B-B’：９・10層、C-C’：９・10層）。
第５工程：土を盛り、形を整える（B-B’：７・８層）。

なお、埋葬施設については、第４工程が終了以降に築かれたと考えられるが、第５工程との関係については定かでない。また、盛土には旧表土と地山を破砕した土の混合土を用いているが、第１工程と第３工程で用いられた土には旧表土が多く含まれている。

周溝は、尾根と直交するようにして斜面上方を半月形に掘削しており、検出長9.80m、幅4.00m、深さ0.36mを測る。



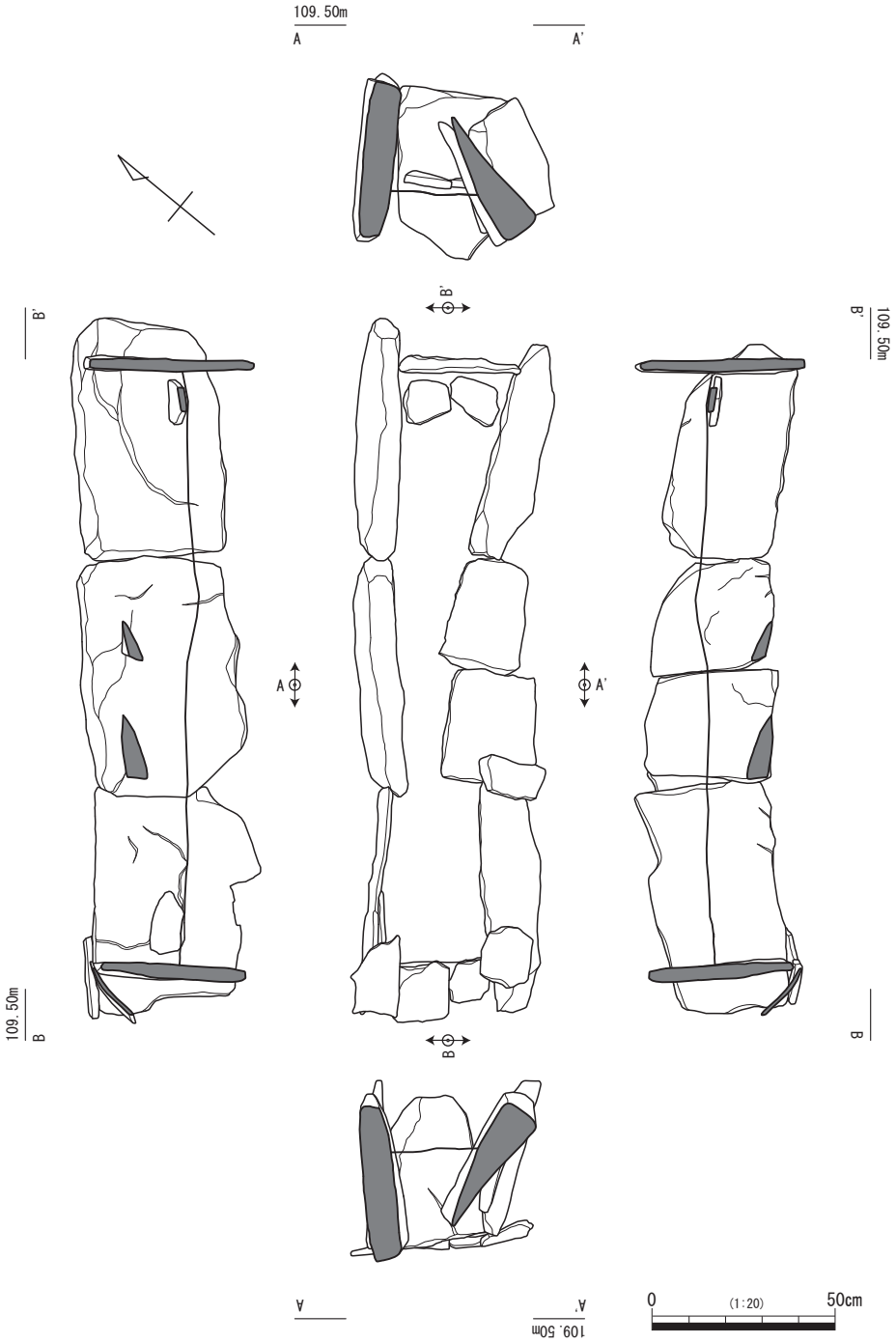
第37図　越敷山77号墳埋葬施設①・出土遺物

第37図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
10	墳丘	最下層	甕	※17.2	△7.0	—	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	黄橙色	土師器、黒斑有
11	周溝	埋土	高杯	—	△5.6	—	外面：ナデ、内面：調整不明	橙色	土師器

埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳丘のやや南西よりに位置する。調査前の状況は、蓋石の大半は抜き取られており、丘陵の北西側や埋葬施設付近で動かされた状態で認められた。また、棺内は窪んでお



第38図　越敷山77号墳埋葬施設②

り、腐植土が充填していた。

石棺の規模は長軸1.63m、短軸0.24m、深さ0.35mを測る。主軸の方向はW－40°－Nと北東から南西方向を向く。棺床は円礫の混じる土で整地されているが敷石などは認められなかった。東側には石枕があり、長さ15cmほどの板石を２枚、並べて置かれる。副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左

右ともに３枚の板石を用い、平継ぎによって並べられる（北東側は４枚に見えるが、中央の石が２枚に割れただけであり、３枚である）。石の継ぎ目には部分的に板石が配置され、西側の短側石の上には、蓋石との隙間を埋めるためであろうか、板石が４枚置かれる。長側石や短側石に用いられた板石は、長さ58～65㎝、幅34～43㎝とほぼ同じ大きさである。厚さは北東側の２枚が約10㎝と厚みがあるのに対し、そのほかは約５㎝と薄い。長側石、短側石ともに蓋石との設置面は平坦に加工される。

写真８　越敷山77号墳埋葬施設

棺の掘り方は、東側がやや膨らむ歪な楕円形を呈しており、一部、地山まで到達する。規模は長軸2.90m、短軸1.29m、深さ0.44mと棺に対してやや広くなる。この南西隅に棺を配置しており、その底面では石棺を設置するための溝が認められる。

出土遺物

遺物は、SI1の検出面にあたる盛土の最下面において10、盛土中から11が出土した。ともに土師器であり、10が甕、11が高杯である。時期は出土遺物から古墳時代中期中葉頃と考えられる。

越敷山49号墳（第39～48図、PL.23～26・46）

T73-10d-2H-9a・9b・9c・10a・10b・10c、3H-1a・1b・1cグリッドにあり、標高111m付近にある。丘陵尾根の頂部の比較的平坦な場所に位置しており、眺望が良い。北西側は越敷山77号墳によって切られ、南東側は越敷山51号墳を切る。

調査の結果、墳丘、周溝の他、埋葬施設２基を確認した。

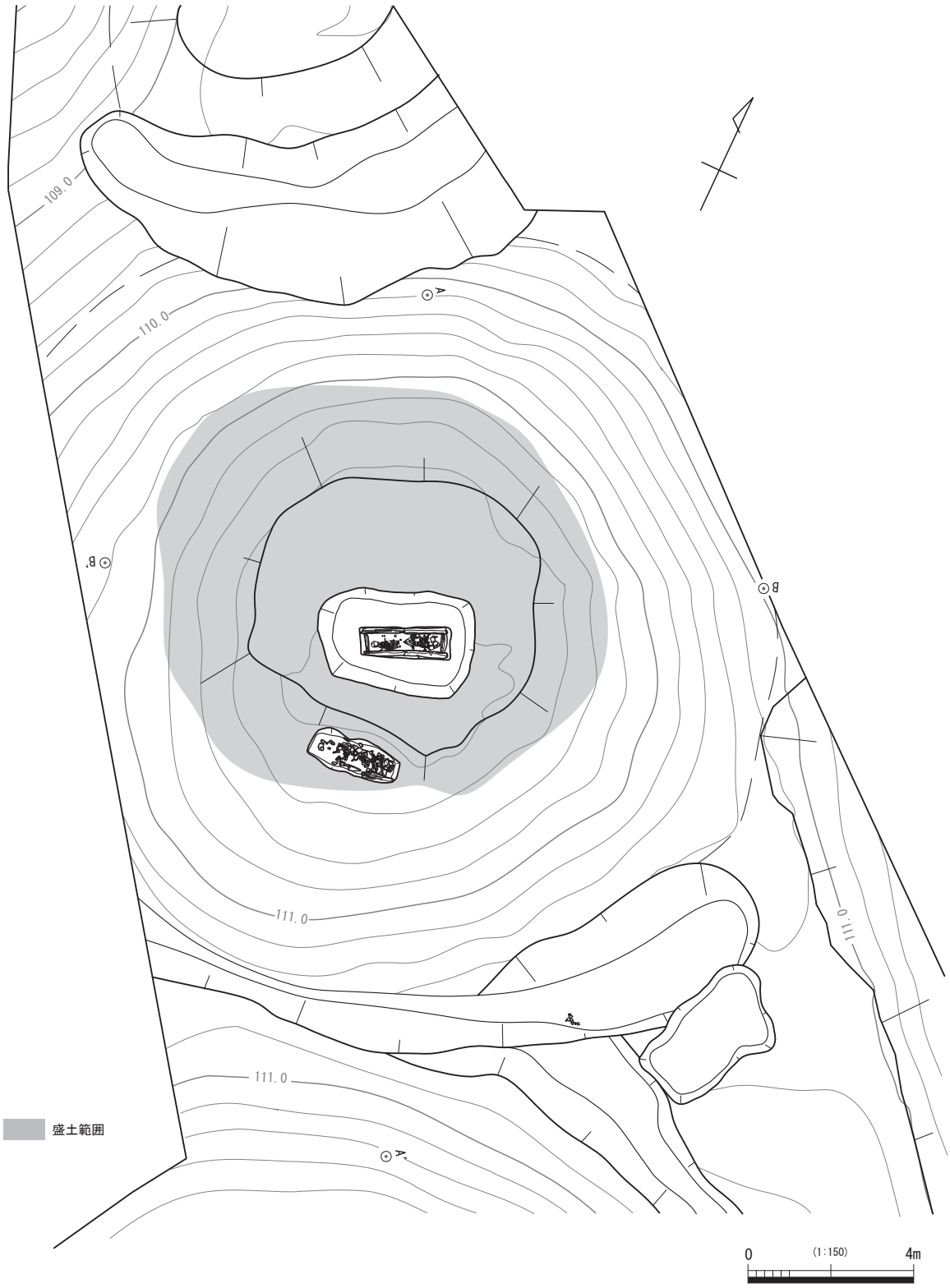
墳丘・周溝

本古墳は円墳であり、南側には幅1.60m、深さ0.32mの周溝が認められる。墳丘は周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものと考えられる。盛土の厚さは最大で0.70mほどであり、その総数は約45.8㎥である。規模は周溝内側で直径19.00m、周溝を含めると20.3mを測る。墳丘の高さは、北側の墳端から墳頂部までが約2.30m、周溝底面から墳頂部までが約1.90mである。

墳丘盛土の下には竪穴建物があり（SI2）、この埋土上層には人為的に埋めたとみられる地山ブロックを多量に含む土が堆積していることから、墳丘構築直前まで窪地であったと思われる。また、越敷山77号墳の直下にも竪穴建物があり、北西側は段状の地形であったと考えられる。

墳丘は周囲を円形に削り出し、古墳の形状を整え、盛土を行う範囲にある窪地を埋め、周囲を削り平坦な状態にしたうえで、土を盛り築造したと考えられる。盛土を行う手順については、窪地を埋める工程を含め、以下に示す３つの工程で行われたと思われる。なお、埋葬施設は第３工程の後に設置されたようである。

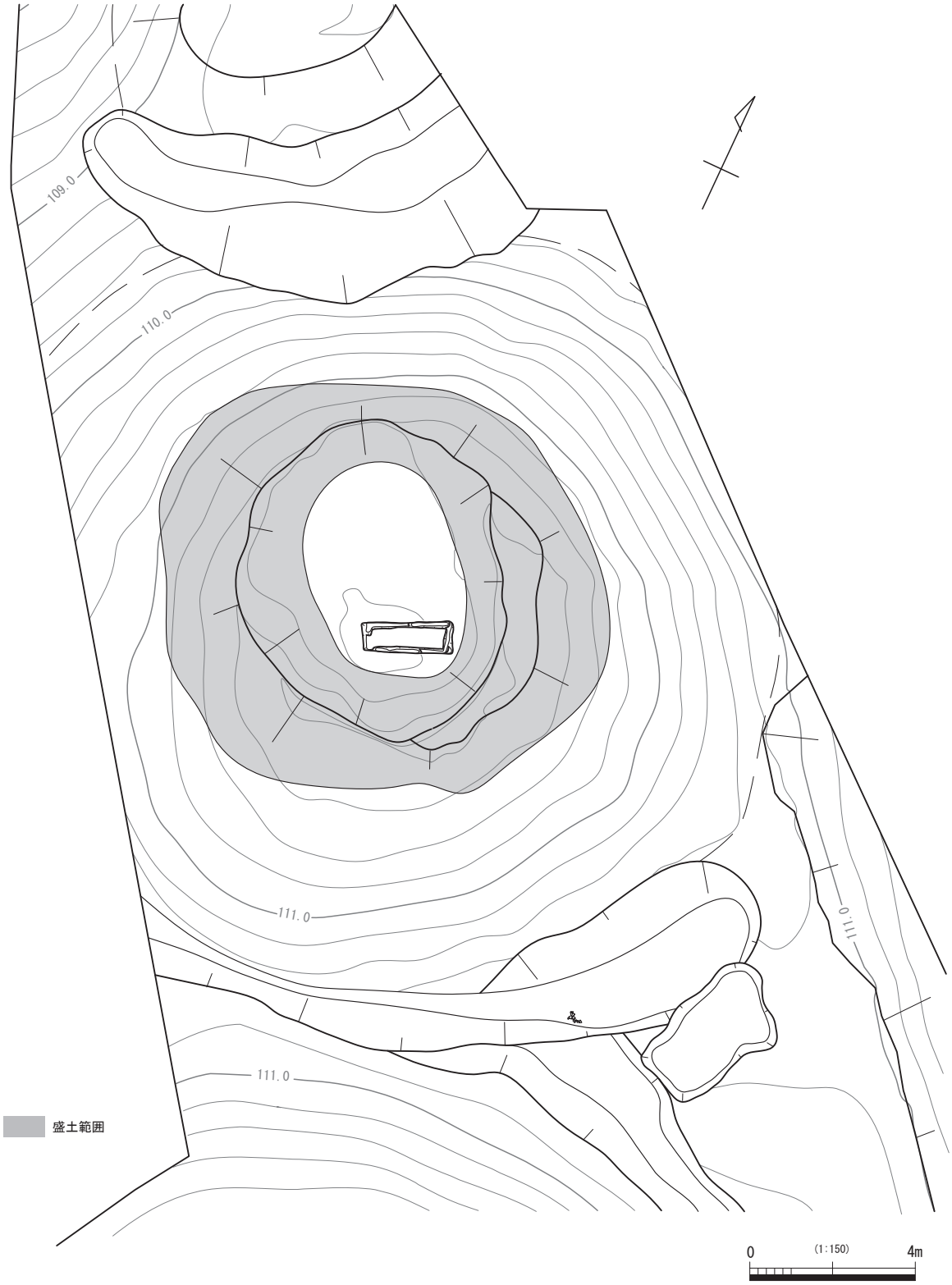
第１工程：窪地を埋める（B-B'：25～28層）。埋め方は南東から北西方向、すなわち斜面上方から下方へと順に埋めていき、さらに中心部の窪んだ場所へ、平坦になるまで土を充填する



第39図　越敷山49号墳

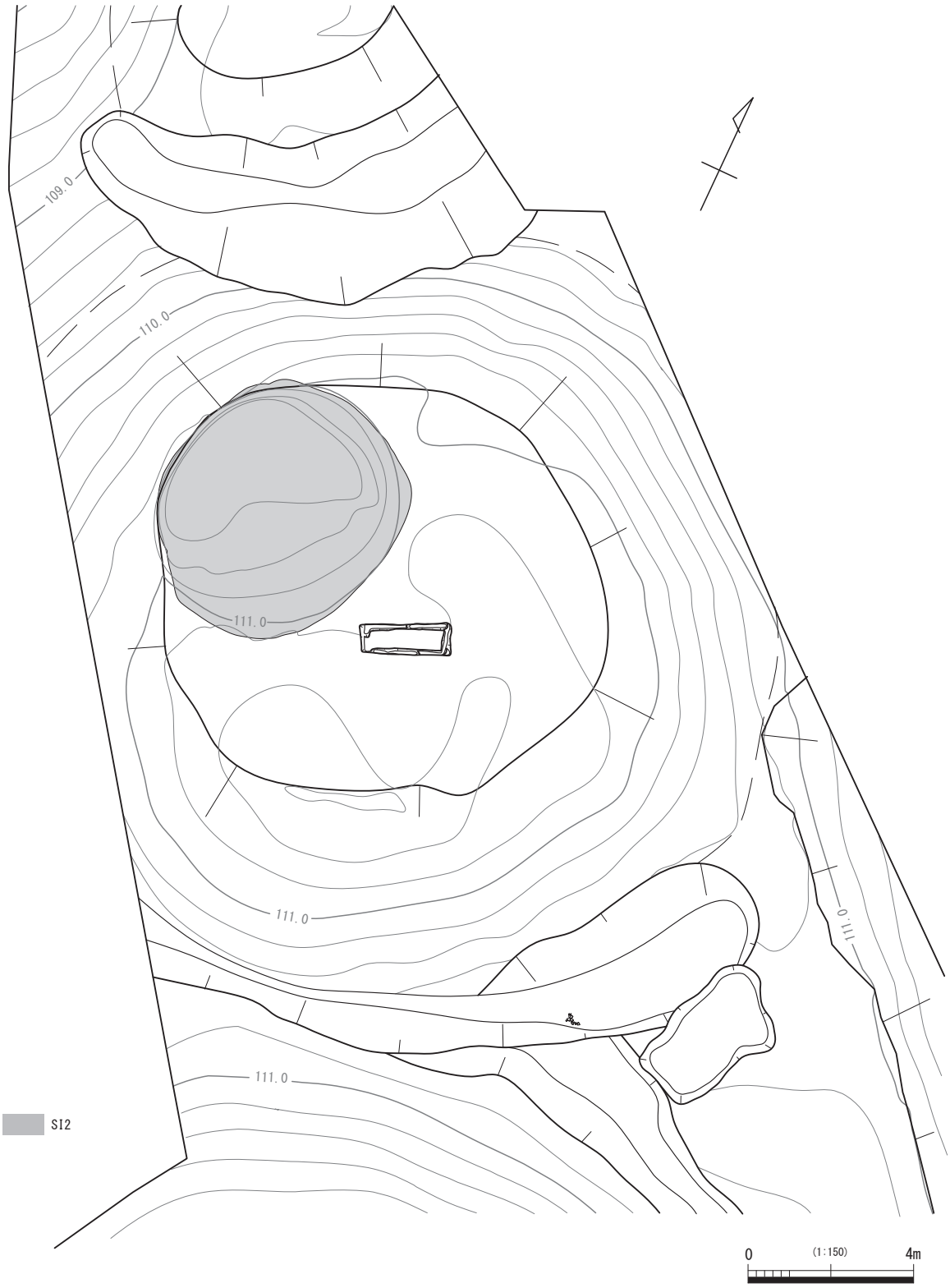
（竪穴建物の埋まり方については第77・78図参照）。

第２工程：墳丘の外表側に土手を巡らす（A-A'：26～31層、B-B'：13～24層）。ここには旧表土とみられる黒褐色土や黒褐色土と地山ブロックを混ぜ合わせた土が主に用いられる。



第40図　越敷山49号墳墳丘除去状況①

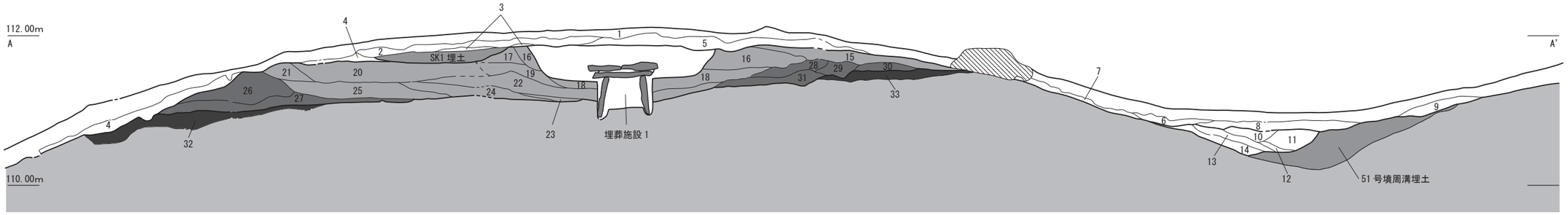
第３工程：土手の中心の窪みに土を充填する（A-A'：15～25層、B-B'：８～12層）。ここには主に地山を破砕した土が用いられる。



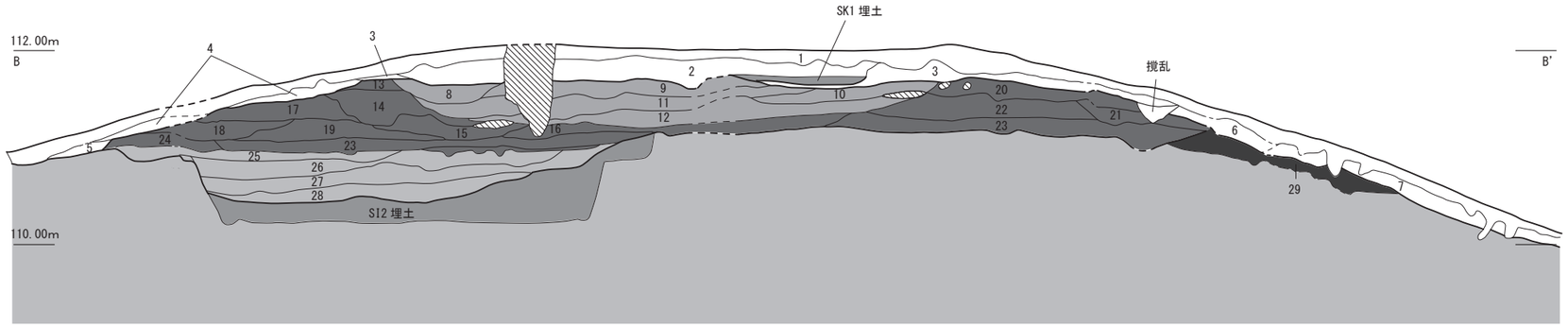
第41図　越敷山49号墳墳丘除去状況②

埋葬施設１

埋葬施設１は、墳丘のやや南側に位置する。墓壙の掘り方を約30㎝掘り下げたところで箱式石棺を確認した。この石棺は未盗掘の状態であった。規模は、長軸1.75m、短軸0.49m、深さ0.31mを測る。



1 腐葉土
2 10YR4/1 褐灰色微砂
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト
4 10YR6/2 灰黄褐色シルト
5 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
6 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
7 2.5Y7/4 浅黄色シルト
8 7.5YR6/1 褐灰色シルト
9 2.5Y5/1 黄灰色シルト
10 10YR5/1 褐灰色シルト
11 10YR2/1 黒色シルト
12 10YR4/1 褐灰色シルト
13 2.5Y5/2 明灰黄色シルト
14 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (明黄褐色シルトを含む)
15 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト
16 10YR6/9 にぶい黄橙色シルト (黄色シルトブロックを含む)
17 2.5Y6/1 黄灰色シルト
18 7.5YR6/3 にぶい褐色シルト (黄色シルトブロックを含む)
19 10YR6/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルトを含む)
20 10YR7/4 明黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを多く含む)
21 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト (明黄褐色シルトを含む)
22 10YR7/6 明黄褐色シルト (パミス、黄色細砂を含む)
23 7.5YR7/4 にぶい橙色シルト
24 10YR5/1 褐灰色シルト (明褐色シルトブロックを含む)
25 10YR6/1 褐灰色シルト (明褐色シルトブロックを少し含む)
26 10YR6/1 褐灰色シルト
27 7.5YR6/2 灰褐色シルト
28 10YR3/1 黒褐色シルト
29 10YR6/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
30 7.5YR5/1 褐色シルト
31 10YR5/1 褐灰色シルト (明褐色シルトブロックを含む)
32 10YR3/1 黒褐色シルト
33 10YR4/1 褐灰色シルト

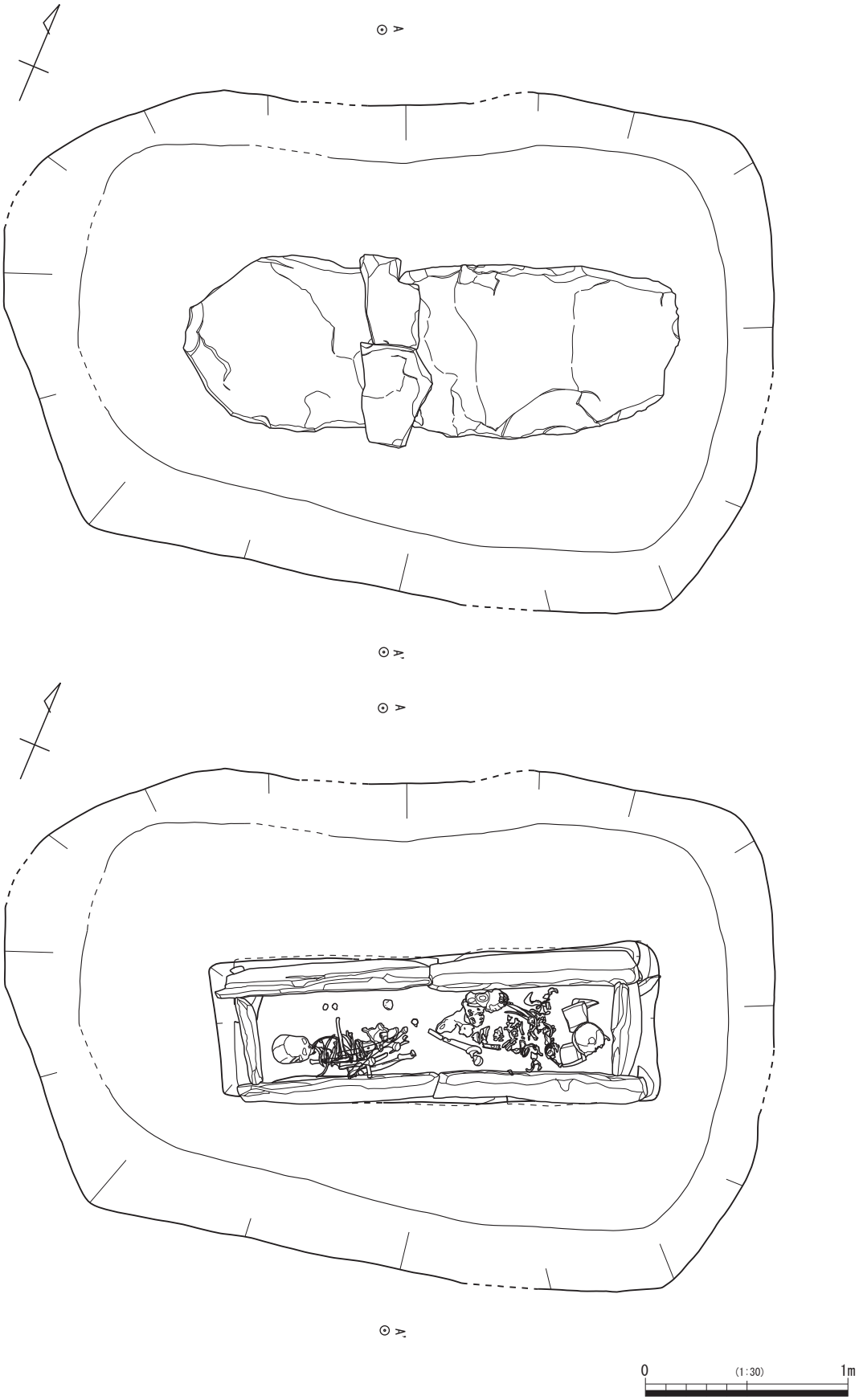


1 腐葉土
2 10YR4/1 褐灰色微砂
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト
4 10YR5/1 褐灰色シルト (にぶい黄橙色シルトブロックを含む)
5 10YR6/1 褐灰色シルト
6 10YR5/5 にぶい黄褐色シルト
7 10YR3/1 黒褐色シルト
8 10YR6/1 褐灰色シルト
9 2.5Y6/1 黄灰色シルト
10 7.5YR6/3 にぶい褐色シルト (黄色シルトブロックを含む)
11 10YR6/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルトを含む)
12 10YR7/6 明黄褐色シルト (パミス、黄色細砂を含む)
13 10YR5/1 褐灰色シルト (にぶい黄橙色シルトブロックを含む)
14 10YR6/1 灰黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
15 7.5YR3/1 黒褐色シルト (橙色シルトブロックを含む)
16 10YR5/1 褐灰色シルト (明褐色シルトブロックを含む)
17 10YR5/1 褐灰色シルト
18 10YR4/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルトブロックを多く含む)
19 10YR4/1 褐灰色シルト
20 10YR6/1 灰黄褐色シルト (黄橙色シルトを含む)
21 10YR4/2 灰黄褐色シルト
22 10YR5/1 褐灰色シルト (にぶい黄橙色シルトブロックを含む)
23 10YR3/1 黒褐色シルト
24 10YR4/1 褐灰色シルト
25 10YR5/2 灰黄褐色土
26 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
27 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く、炭を少し含む)
28 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを少し含む)
29 10YR4/1 褐灰色シルト (旧表土)

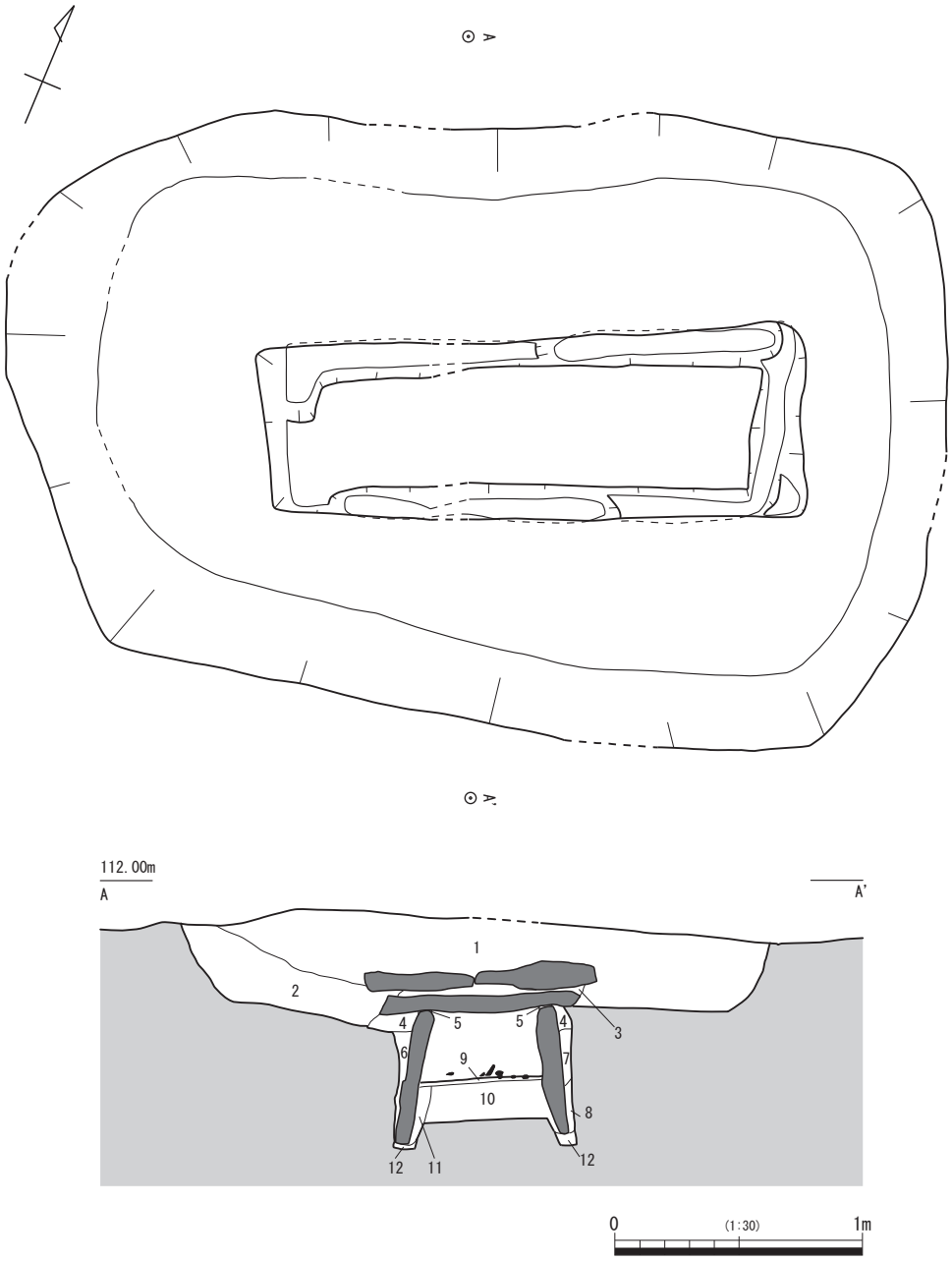
遺構埋土
第1工程盛土 : A-A' — 、B-B' 25～28層
第2工程盛土 : A-A' 26～31層、B-B' 13～24層
第3工程盛土 : A-A' 15～25層、B-B' 8～12層
旧表土 : A-A' 32、33層、B-B' 29層

0 (1:60) 2m

第42図 越敷山49号墳墳丘断面



第43図　越敷山49号墳埋葬施設１①

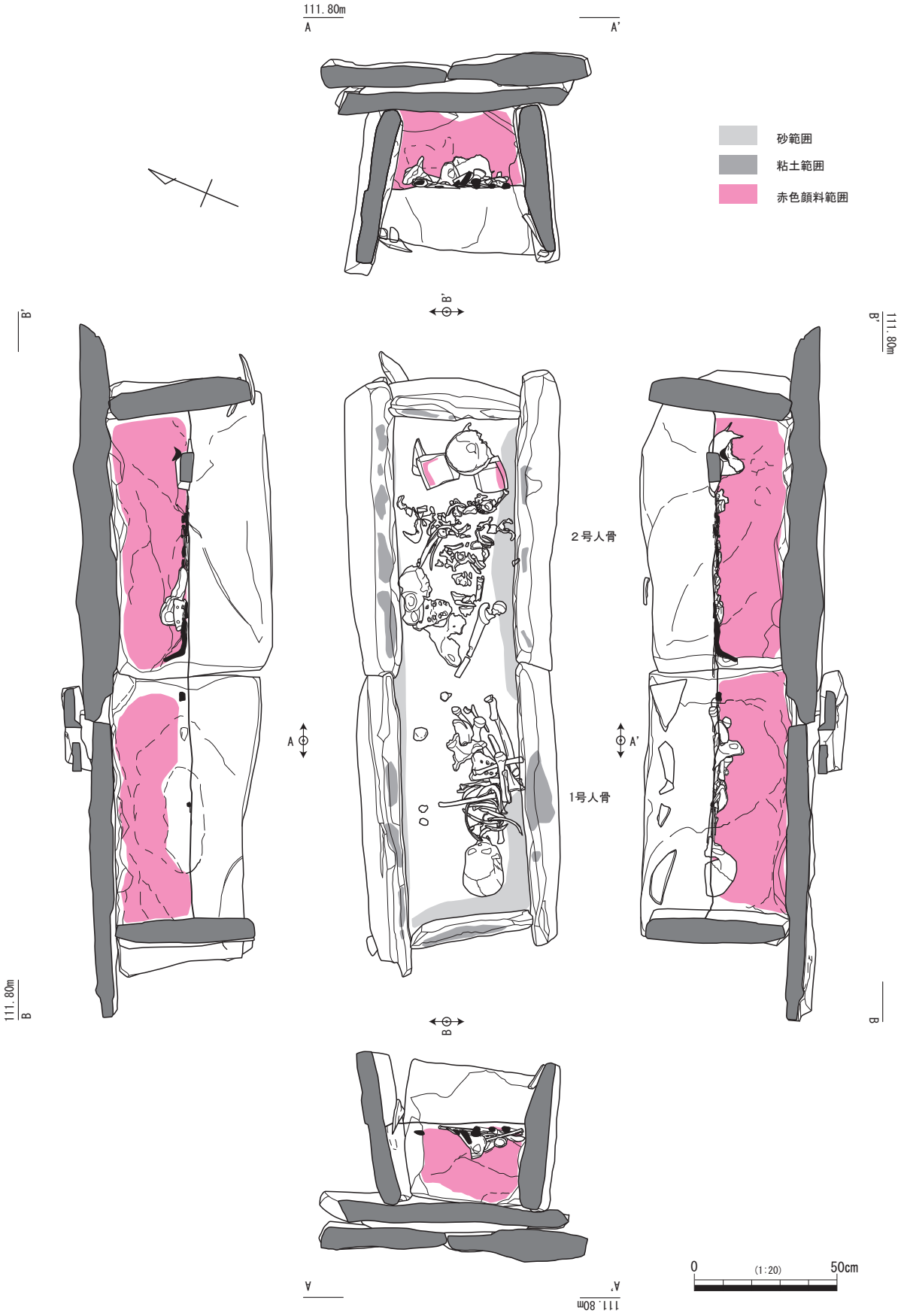


1　7.5YR4/3 褐色シルト
　(しまり弱、にぶい褐色のロームブロック含む)
2　7.5YR3/3 暗褐色シルト
　(にぶい褐色のロームブロック含む)
3　10YR 7/4にぶい黄橙色粘土
4　10YR 4/4褐色細砂
5　7.5YR 7/3にぶい橙色粘土(蓋石と側石の間の目張り)
6　10YR 6/6明黄褐色シルト
7　10YR 6/3 にぶい黄褐色シルト (黄橙色シルトブロック含む)
8　10YR 4/3 にぶい黄橙色シルト
9　10YR 5/2 灰黄褐色細砂崩落土
10 7.5YR 5/6 明黄褐色細砂 (安山岩チップを多く含む)
11 10YR 7/6 明黄褐色細砂
12 7.5YR 4/1 褐灰色シルト

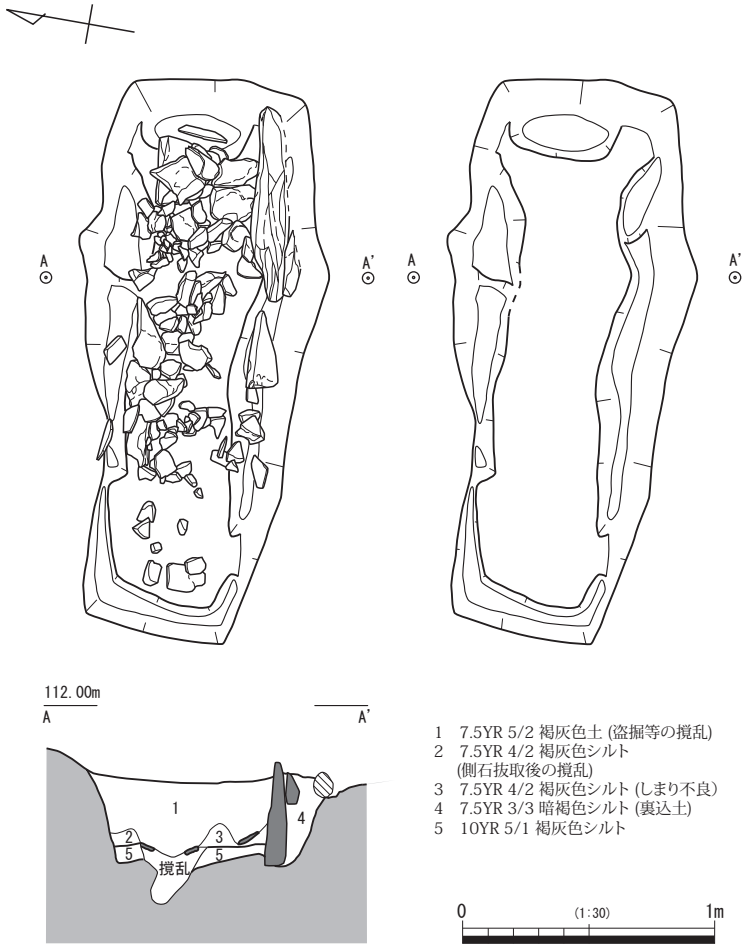
第44図　越敷山49号墳埋葬施設１②

主軸の方向はW－14°－Nと東西方向を向く。棺内には人骨が２体確認されたが、副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。北東側の長



第45図　越敷山49号墳埋葬施設１③



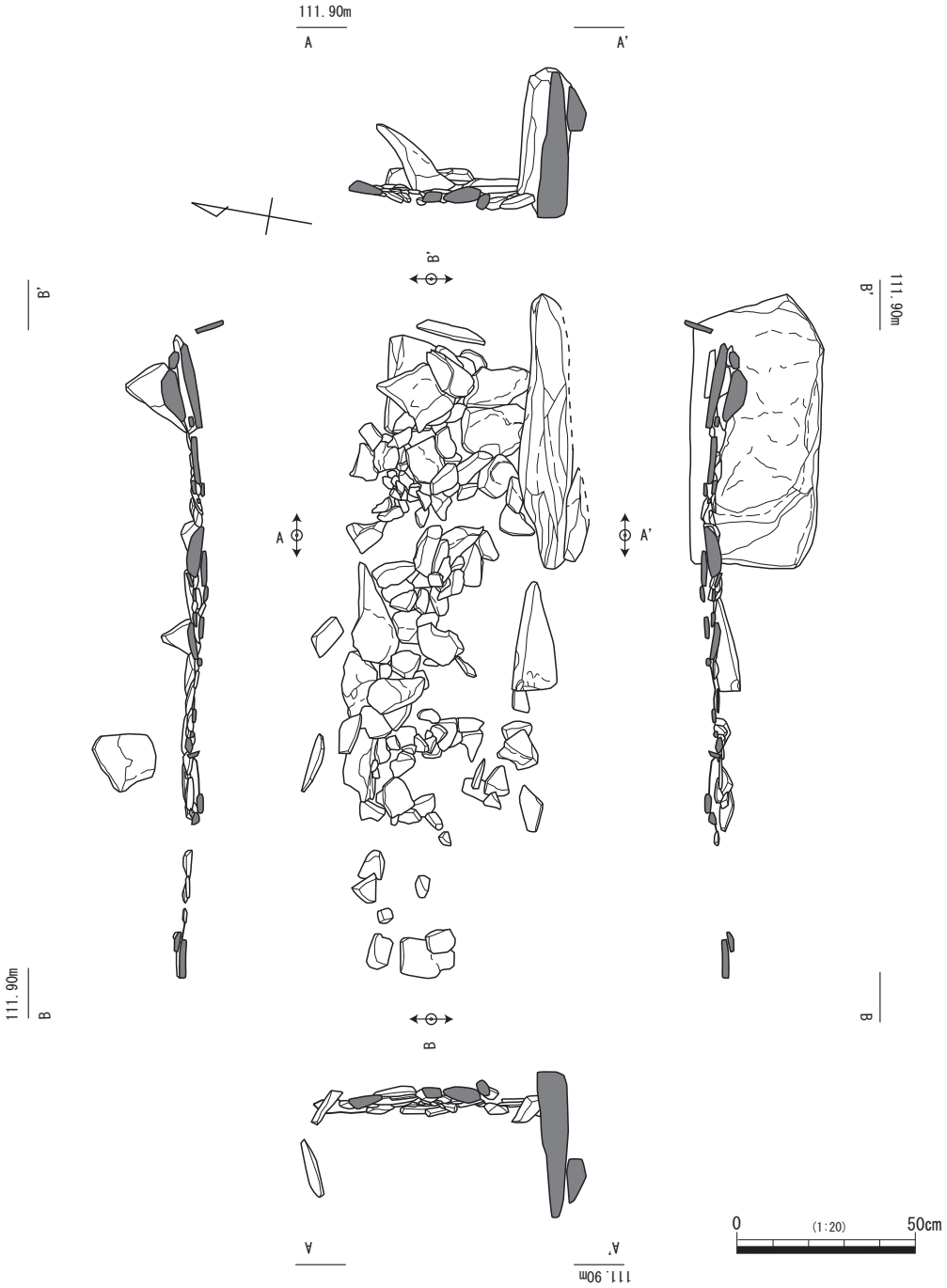
第46図　越敷山49号墳埋葬施設２①

側石の端部、短側石との接合部分には溝が彫られる。長側石は左右ともに２枚の板石を用い、平継ぎによって並べられる。長側石や短側石に用いられた板石は、ほぼ統一されており、長側石は長さ1.00m、幅0.60m、厚さ0.08mほどの長方形、短側石は長さ0.50m、幅0.50m、厚さ0.10mほどの方形を呈する。長側石、短側石ともに蓋石との設置面は平坦に加工され、そこには石棺を密閉するための目張りとして用いられた粘土がみられる。内面には赤色顔料が塗布されている。

蓋石は、大型の板石２枚からなり、東側は長さ1.39m、幅0.86m、厚さ0.07mの長方形、西側は長さ1.04m、0.88m、0.07m五角形状を呈する。蓋石の継ぎ目には粘土で目張りをした後、２つに分割した板石を配置する。

棺の掘り方は、２段に掘り込まれており、上段は長軸3.73m、短軸2.38m、深さ0.35mを測る歪な楕円形を呈し、下段はそのほぼ中央にあり、長軸2.16m、短軸0.72m、深さ0.48mの長方形をなす。下段の底面には石棺を設置するための溝が掘られる。なお、底面には石の剥片を多く含む土が15㎝ほど盛られ、その上に薄く白色の砂を敷き、棺床としている。

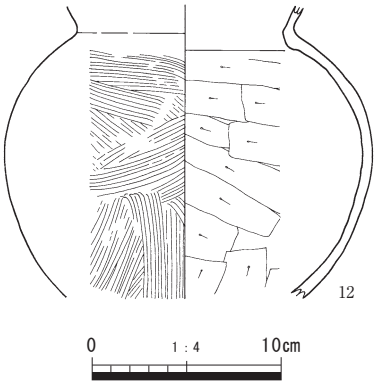
棺内には２体の人骨が埋葬されていた。西側にある人骨（１号人骨）は、顔面を東側に向けた状態で置かれているが、その下に石枕は配置されていない。頭蓋骨以外の骨は、その東側にまとめられており、人体の正常な位置を保っていない。このため、追葬時に動かされたか、再葬されたものと考えられる。なお、顔の表面に赤色顔料（水銀朱）が塗布されている。性別は女性であり、年齢は15～17歳頃と考えられる。２号人骨は赤色顔料が付着した石枕の上に頭蓋骨が置かれている。頭蓋骨以外の骨は、棺の東半分にわたり散乱しており、埋葬後に動かされた可能性がある。性別は男性であり、年齢は熟年である。なお、人骨については第４章第２節に鑑定結果を掲載しているため、そちらを参照されたい。



第47図　越敷山49号墳埋葬施設２②

埋葬施設２

埋葬施設２は箱式石棺であり、墳丘の南側に位置する。長側石、短側石ともに大半が抜き取られており、南東側の長側石のみが残存する。このため棺の詳細は不明である。棺の規模は推定で長軸1.92m、短軸0.66m、深さ0.34mを測る。主軸の方向はW－7°－Nと埋葬施設１とほぼ同じ方向を向く。棺床には拳大もしくはそれ以下の石が敷かれており、東側の隅では石枕が置かれている。副葬品は出土しな



第48図　越敷山49号墳出土遺物

写真９　越敷山49号墳遺物出土状況

第48図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
12	周溝	上層	甕	―	△15.4	―	外面：ナデ、ハケメ、内面：ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	土師器、煤付着、黒斑有

かった。

棺の掘り方は歪な長方形を呈し、規模は長軸2.23m、短軸0.90m、深さ0.32mを測る。底面の周囲には石棺を設置するための溝が掘られる。

出土遺物

遺物は埋葬施設内から出土しなかったが、周溝の埋土中から12が出土した。12は土師器の甕である。時期は出土遺物や越敷山51号墳と77号墳との関係から、古墳時代中期中葉頃と考えられる。

越敷山51号墳（第49～70図、PL.３～７・27～34・46・48）

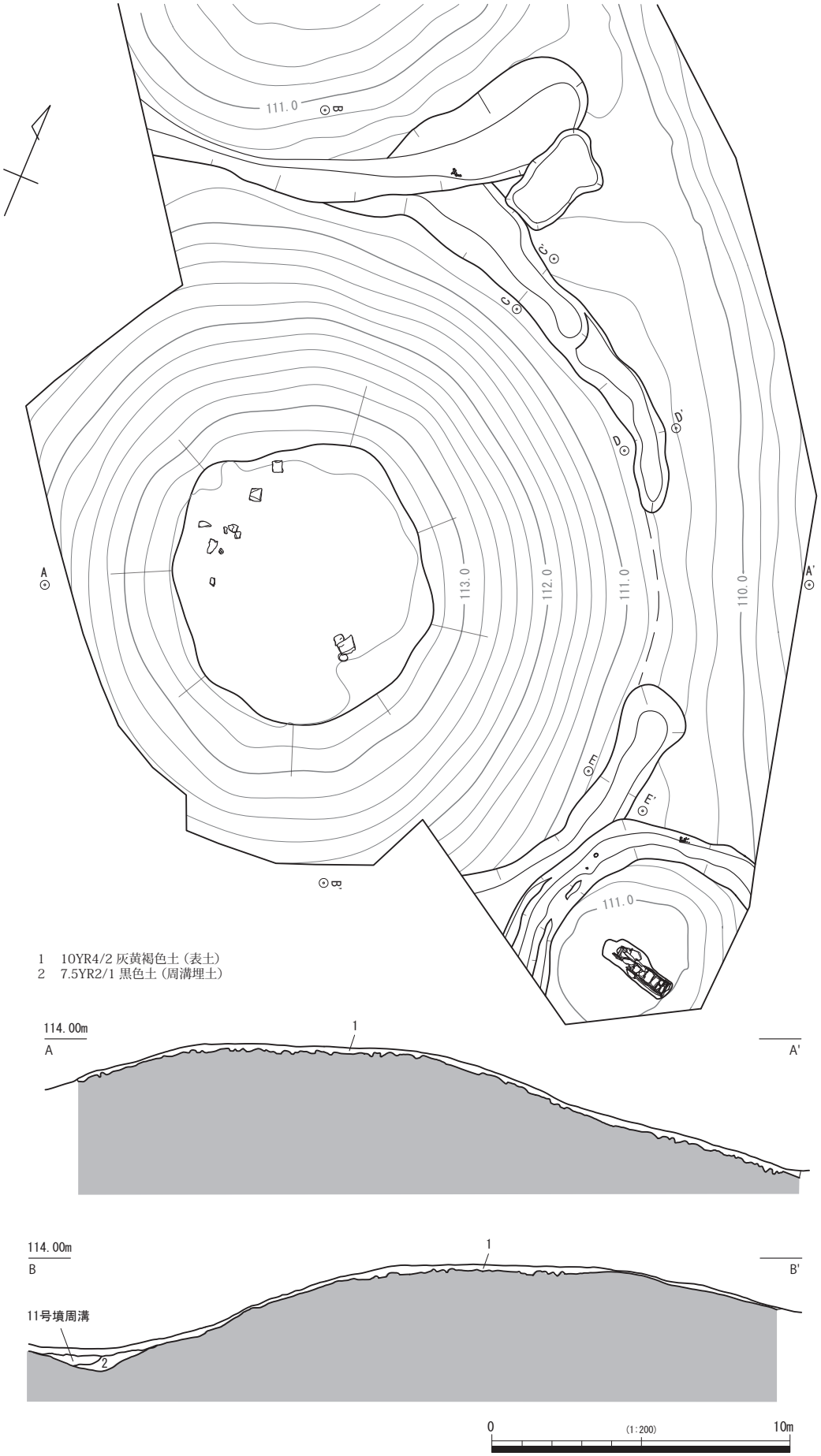
T73-10d-3G-1j・2j・3j、3H-1a・2a・3a・1b・2b・3bグリッドにある。ここは丘陵尾根の頂部にあたり、比較的平坦な地形となる。標高113m付近と調査区の中でも最も高所にあり、眺望が良い。北側には越敷山49号墳、南東側には越敷山99号墳があり、これらに切られる。また、南西側には越敷山52号墳がある。なお、西側の1/4は調査区外となるため、今回調査を行っていない。

調査前は墳頂部に石材の一部が露出していた。表土除去後、東側と西側において箱式石棺の一部とみられる石材が散乱していた。なお、墳頂部には盗掘坑とみられる土坑や破壊された埋葬施設などが確認されなかったことから、本古墳の埋葬施設に伴う石材ではないと思われる。

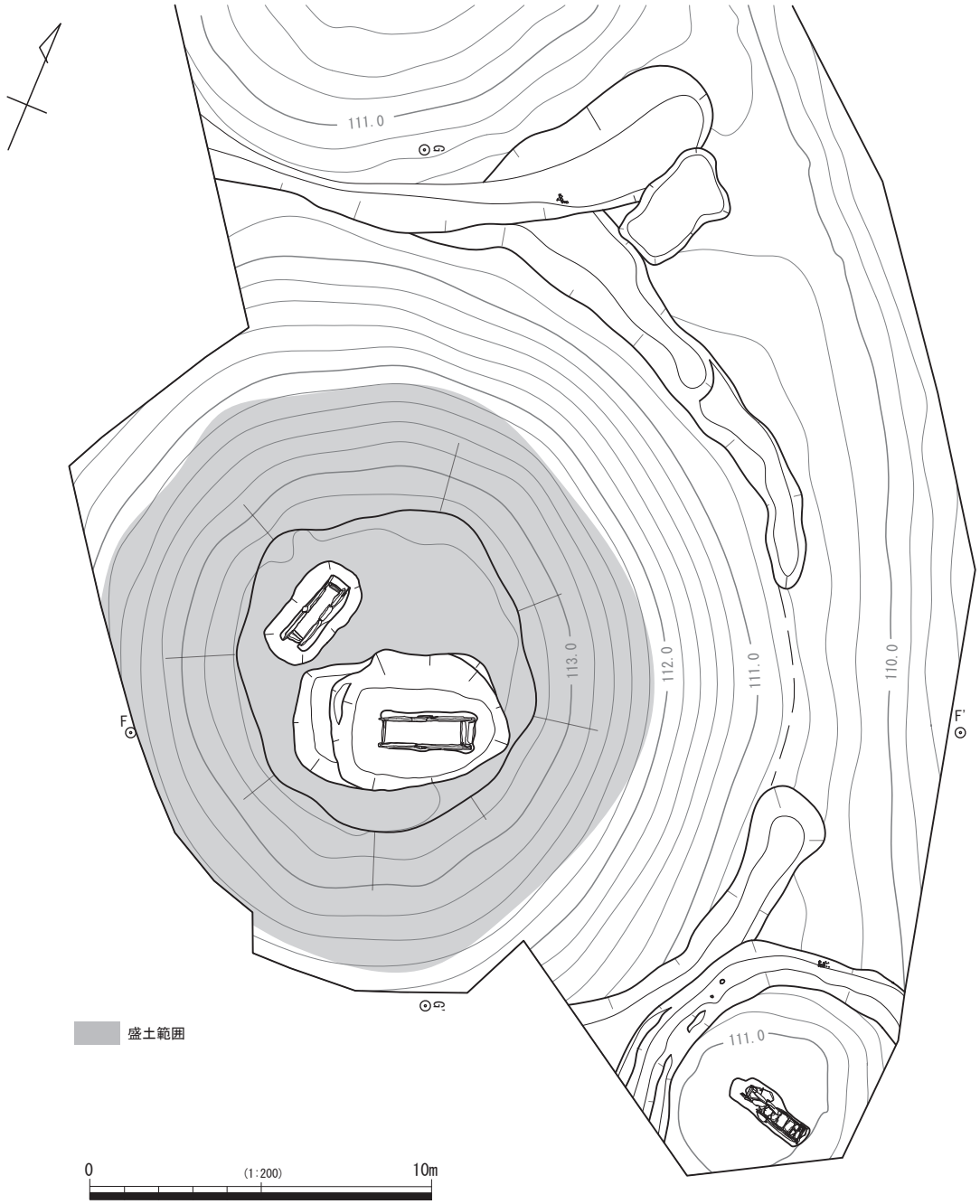
調査の結果、墳丘、周溝のほか、埋葬施設２基を確認した。このうち埋葬施設１は構築墓壙であり、埋葬施設の設置および埋葬と墳丘の築造が同時進行で行われている。また、埋葬施設１は追葬が行われており、墳丘頂部には、この時の掘り方が認められる。

墳丘・周溝

本古墳は円墳であり、東側には幅2.00m、深さ0.40mの周溝が巡る。ただし、途中で5.50mほど途切れる。なお、西側については、越敷山49・99号墳に切られること、調査区外にあることから確認できなかった。



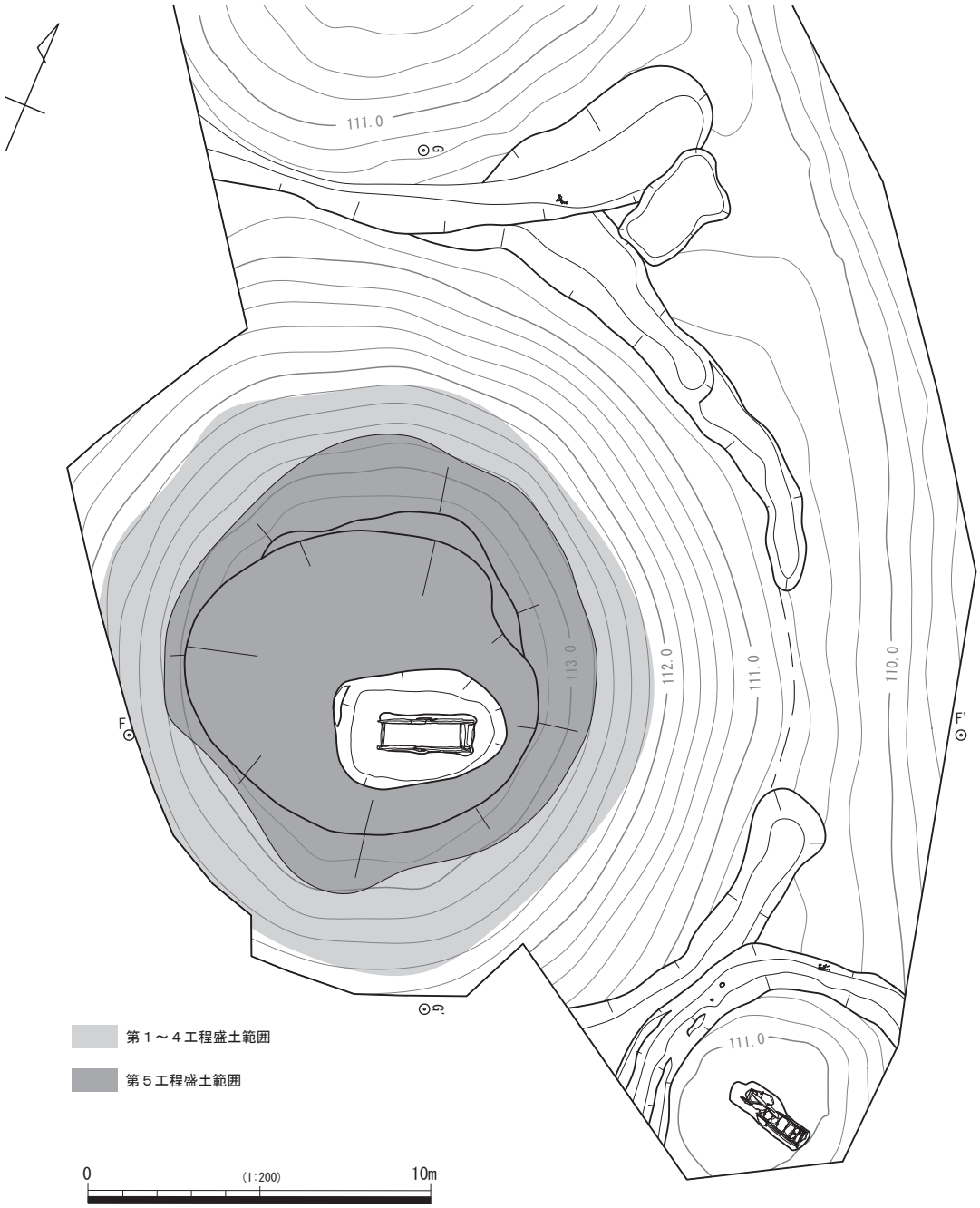
第49図　越敷山51号墳検出状況



第50図　越敷山51号墳

墳丘は周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしており、盛土の厚さは最大で1.15mを測る。また、盛土の総数は205.50㎥である。規模は周溝内側で直径25.00m、周溝を含めると27.00mを測る。墳丘の高さは、墳端から墳頂部までが約2.90m、周溝底面から墳頂部までが約3.00mである。

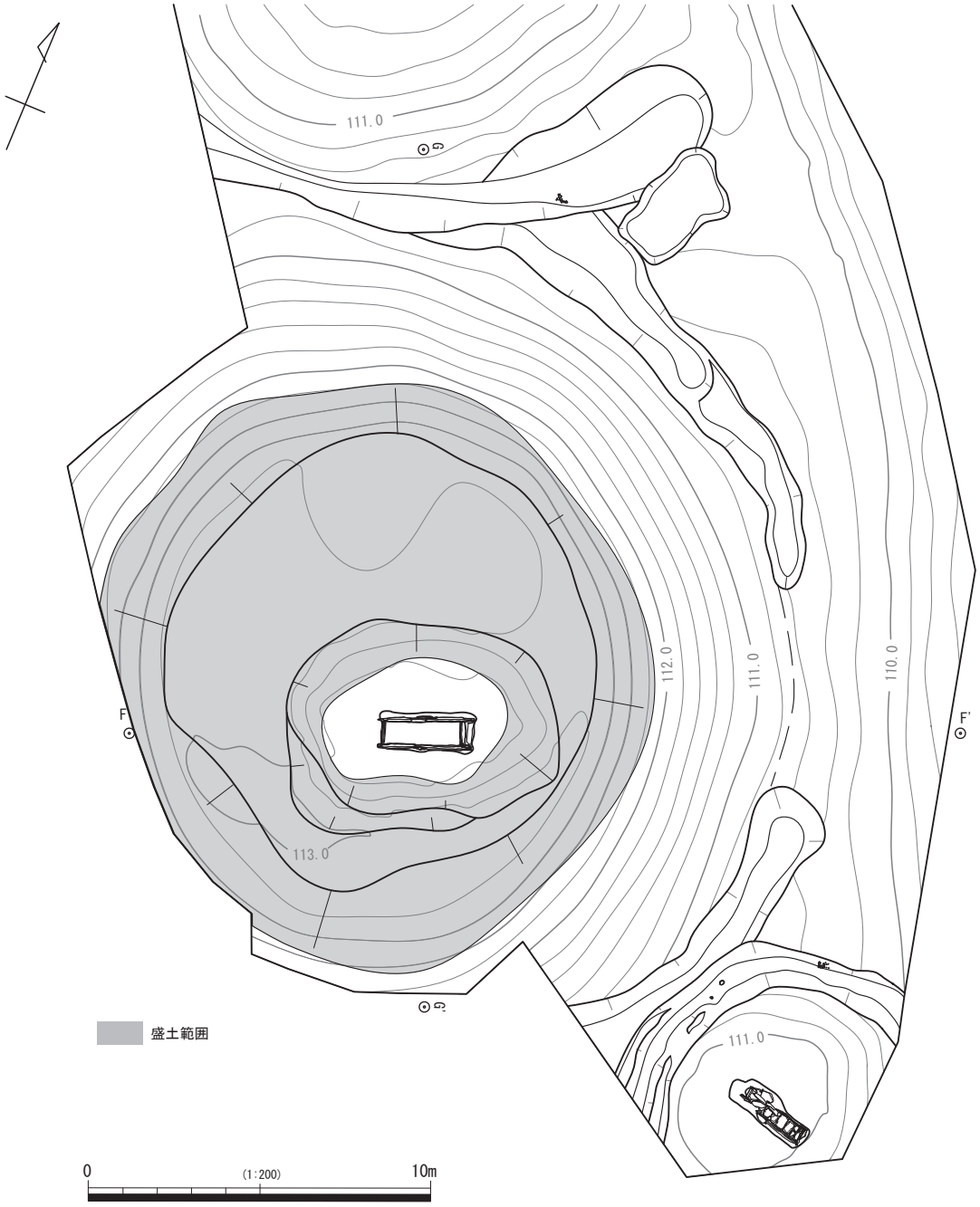
墳丘は周囲を円形に削り出し、古墳の形状を整え、盛土を行う範囲を削り、平坦な状態にしたうえで土を盛り、築造したと考えられる。盛土を行う手順については、以下に示す６つの工程で行われた



第51図　越敷山51号墳墳丘除去状況①

と思われる。なお、先にも述べたが、埋葬施設１は構築墓壙であり、埋葬行為と墳丘の築造が並行して行われている。

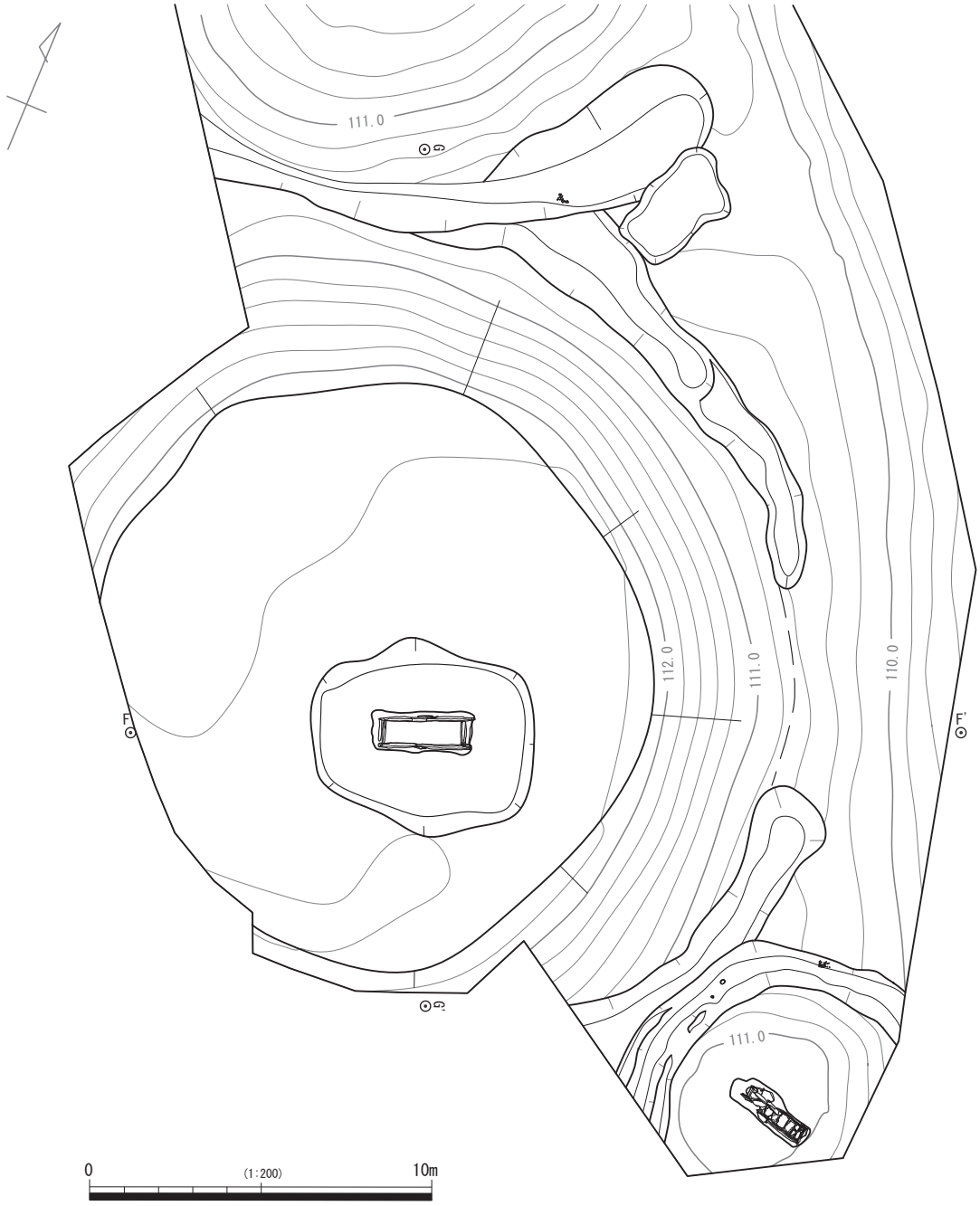
第１工程：埋葬施設１の周辺を除く、ほぼ全域にわたり薄く土を盛る（F-F'：68～79層、G-G'：80～87層）。



第52図　越敷山51号墳墳丘除去状況②

第２工程：石棺を設置し、その周囲に土を盛り固定する（F-F'：62～66層、G-G'：72～78層）。この盛土中には石棺を調整する際に生じたと考えられる剥片が含まれており、この時点で石材の最終調整をしたとみられる。

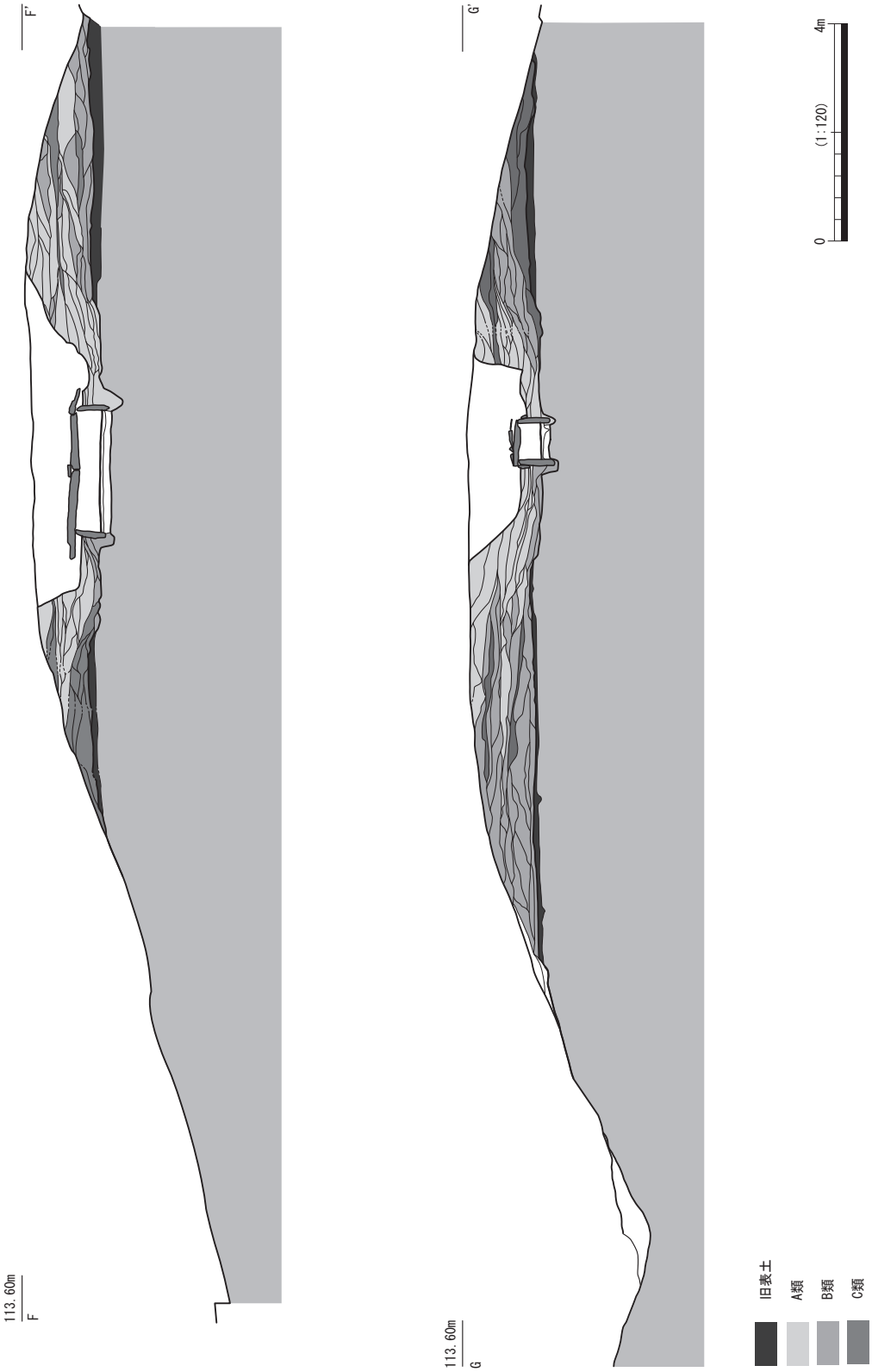
第３工程：墳丘の外表側に土手を巡らす（F-F'：36～59層、G-G'：32～69層）。北側の土手の幅が広くなる部分については、断面三角形の小丘をつくり（F-F'：58層、G-G'：52・53層）、その外側と内側に土を盛り拡張する。



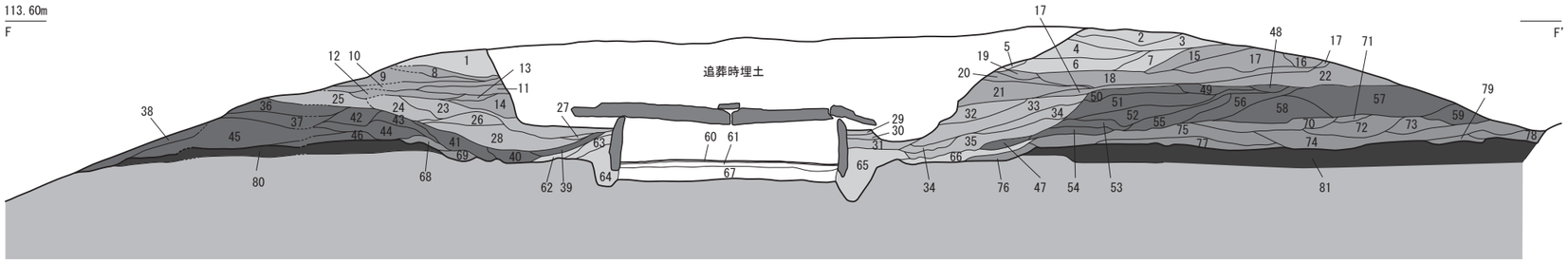
第53図　越敷山51号墳墳丘除去後

第４工程：土手の中心の窪みに土を充填する（F-F'：23～35層、G-G'：18～31層）。なお、第４工程の盛土の高さは、ほぼ石棺の蓋石と同じになることから、この工程の終了時にはすでに被葬者の埋葬が終えていたと考えられる。

第５工程：墳丘の外表側に土手を巡らす（F-F'：８～22層、G-G'：９～17層）。この工程の盛土の下層には腐植土とみられる黒色土や黒褐色土が薄く筋状に堆積しており（F-F'：22層、G-G'：13層）、全体を腐植土で薄く覆った後、土手を盛ったと考えられる。



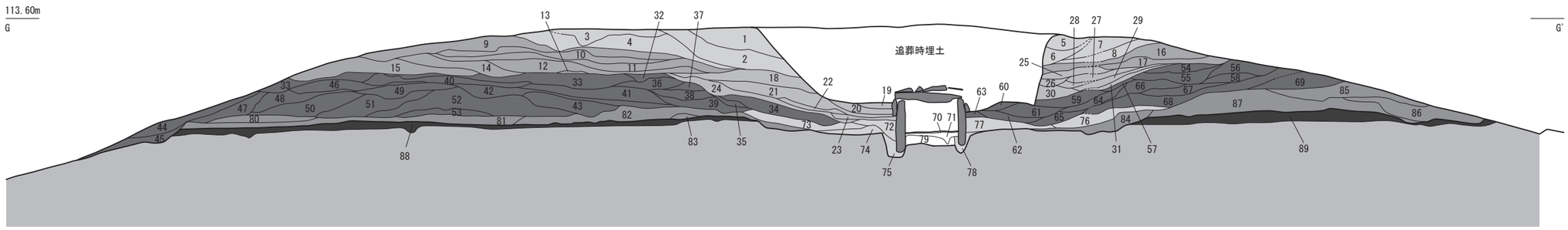
第54図　越敷山51号墳墳丘断面図①



第６工程：F-F’　1～ 7層、 G-G’　1～ 8層
第５工程：F-F’　8～22層、 G-G’　9～17層
第４工程：F-F’ 23～35層、 G-G’ 18～31層
第３工程：F-F’ 36～59層、 G-G’ 32～69層
第２工程：F-F’ 62～66層、 G-G’ 72～78層
第１工程：F-F’ 68～79層、 G-G’ 80～87層
旧表土　：F-F’ 80、81層、 G-G’ 88、89層

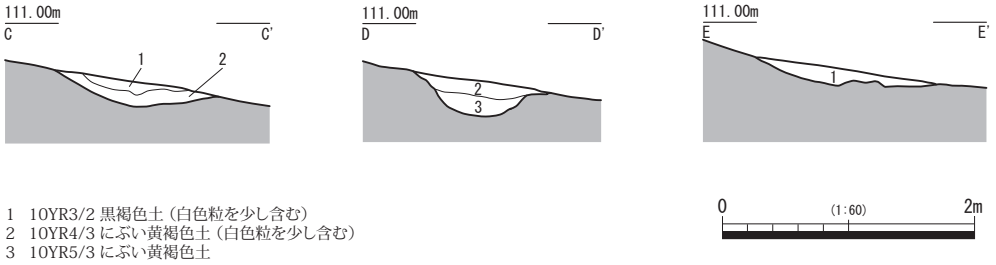
1　10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを含む)
2　10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
3　7.5YR6/6 橙色土 (白色粒、ブロックを多く、にぶい黄褐色土を含む)
4　7.5YR6/6 橙色土 (白色粒、ブロックを多く、にぶい黄褐色土を少し含む)
5　10YR7/8 黄橙色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
6　10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを少し、炭を少し含む)
7　10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロック、炭を少し含む)
8　10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを僅かに含む)
9　10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
10 2.5YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを多く含む)
11 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
12 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
13 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
14 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
15 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロック、炭を少し含む)
16 10YR5/4 にぶい黄褐色土
17 7.5YR6/6 橙色土 (白色粒、ブロック、炭を少し含む)
18 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く、炭を含む)
19 10YR4/2 灰黄褐色土 (灰色粒、ブロック、炭を少し含む)
20 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く、炭を少し含む)
21 7.5YR6/6 橙色土 (白色粒、ブロックを多く含む)
22 7.5YR2/1 黒色土 (ブロックを少し、炭を少し含む)
23 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを少し含む)
24 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを多く含む)
25 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを少し含む)
26 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
27 10YR5/3 にぶい黄褐色土(ブロックを多く、褐灰色土を少し含む)
28 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを含む)
29 10YR6/6 黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
30 7.5YR5/3 にぶい褐色土 (ブロックを多く含む)
31 2.5Y6/8 明黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
32 10YR6/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを多く含む)
33 10YR5/4 にぶい黄橙色土 (白色粒、ブロックを多く含む)
34 7.5YR6/4 にぶい橙色土 (白色粒を多く、ブロックを含む)
35 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (しまりやや不良、白色粒、ブロックを多く含む)
36 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを僅かに含む)
37 10YR3/1 黒褐色土
38 10YR4/3 にぶい黄褐色土
39 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
40 10YR5/6 黄褐色土 (ブロックを多く含む)
41 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを多く含む)
42 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
43 10YR3/2 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
44 10YR3/2 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
45 10YR3/2 黒褐色土
46 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
47 7.5YR5/4 にぶい褐色土 (ブロックを多く含む)
48 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを少し含む)
49 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを含む)
50 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く、炭を含む)
51 7.5YR5/6 明褐色土 (ブロックを多く含む)
52 10YR4/1 褐灰色土 (白色粒、ブロックを含む)
53 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
54 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを多く含む)
55 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
56 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く含む)
57 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
58 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを多く含む)
59 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
60 棺床 (0.5～３㎝の円形の礫)
61 10YR6/8 明黄褐色砂 (しまり不良)
62 10YR6/6 明黄褐色土
63 10YR6/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く、褐灰色土を少し含む)
64 10YR6/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
65 7.5YR5/2 褐灰色土 (ブロックを多く含む)
66 7.5YR5/4 にぶい褐色土 (ブロックを多く含む)
67 7.5YR4/6 明赤褐色土 (粘性有)
68 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを含む)
69 10YR3/1 黒褐色土 (しまりやや不良、ブロックを含む)
70 10YR3/1 黒褐色土 (しまりやや不良、ブロックを僅かに含む)
71 10YR3/1 黒褐色土 (しまりやや不良、ブロックを少し含む)
72 10YR7/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く、灰黄褐色土を少し含む)
73 10YR5/1 褐灰色土 (しまり不良、ブロックを多く含む)
74 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを含む)
75 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを少し含む)
76 10YR3/1 黒褐色土 (しまりやや不良)
77 10YR3/1 黒褐色土 (しまりやや不良、ブロックを僅かに含む)
78 10YR4/1 褐灰色土 (しまりやや不良)
79 10YR3/1 黒褐色土 (しまりやや不良)
80 7.5YR3/1 黒褐色土
81 7.5YR2/1 黒色土 (粘性有、炭を少し含む)

0　(1:60)　2m



1　7.5YR6/6 橙色土 (白色粒を多く含む)
2　10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
3　10YR4/3 にぶい黄褐色土
4　7.5YR6/6 橙色土 (白色粒、ブロックを多く含む)
5　7.5YR6/6 橙色土
6　10YR6/6 明黄褐色土
7　7.5YR5/4 にぶい褐色土 (ブロックを多く含む)
8　7.5YR5/6 明褐色土 (ブロックを多く含む)
9　7.5YR4/2 灰褐色土 (ブロック土を含む)
10 10YR3/1 黒褐色土 (白色粒を少し、ブロックを少し含む)
11 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
12 10YR5/2 灰黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
13 10YR3/2 黒褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
14 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
15 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを僅かに含む)
16 10YR3/2 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
17 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロック土を含む)
18 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
19 7.5YR6/6 橙色土 (白色粒を含む)
20 10YR5/6 黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
21 10YR6/6 明黄褐色土 (白色粒、ブロックを多く含む)
22 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
23 7.5YR6/4 にぶい橙色土 (ブロックを含む)
24 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを含む)
25 10YR6/8 明黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
26 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを含む)
27 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (白色粒を多く、ブロックを含む)
28 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
29 10YR6/6 明黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
30 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを含む)
31 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
32 10YR5/6 黄褐色土 (ブロックを含む)
33 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを多く含む)
34 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒、ブロックを僅かに含む)
35 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
36 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを多く含む)
37 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む、中程に褐灰色土が堆積)
38 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを含む)
39 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを含む)
40 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを少し含む)
41 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
42 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを僅かに含む)
43 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
44 10YR3/1 黒褐色土
45 10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを少し含む)
46 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
47 10YR6/3 にぶい黄橙色土
48 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを含む)
49 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
50 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
51 10YR5/2 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
52 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く含む)
53 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
54 10YR5/1 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
55 10YR3/2 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
56 10YR4/2 灰黄褐色土
57 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを含む)
58 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを少し含む)
59 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (白色粒を多く、ブロックを少し含む)
60 10YR5/6 黄褐色土 (ブロックを多く含む)
61 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (白色粒を多く、ブロックを多く含む)
62 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
63 10YR5/2 にぶい黄褐色土 (しまりやや良)
64 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
65 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く含む)
66 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
67 10YR4/1 灰褐色土 (しまりやや不良、ブロックを少し含む)
68 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
69 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを少し含む)
70 棺床 (0.5～３㎝の円形の礫)
71 10YR6/8 明黄褐色砂
72 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く、炭を僅かに含む)
73 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
74 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (粘性有、ブロックを含む)
75 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
76 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
77 10YR6/6 明黄褐色土
78 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
79 7.5YR4/6 明赤褐色土 (粘性有)
80 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
81 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
82 10YR3/2 黒褐色土 (ブロックを多く含む)
83 7.5YR4/1 褐灰色土 (ブロックを少し含む)
84 10YR3/2 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
85 10YR3/2 黒褐色土
86 10YR3/1 黒褐色土
87 10YR2/1 黒色土
88 10YR3/1 黒褐色土 (粘性有)
89 10YR3/2 黒褐色土

第55図　越敷山51号墳墳丘断面図②



第56図　越敷山51号墳周溝断面図

第６工程：土手の中心の窪みに土を充填する（F-F'：１～７層、G-G'：１～８層）。

これら各工程で用いられた盛土については、地山を破砕した土（A類）、旧表土と見做せる黒色土と地山を破砕した土の混合土（B類）、旧表土とみられる黒色土や黒褐色土で地山ブロックがあまり含まれない土（C類）の３種類が用いられたようである。これらの分布状況をみると、A類は概ね土手の内部を充填する第４・６工程、B類は土手を形成する第３・５工程、C類は基盤となる第１工程や第５工程の下層で用いられており、使い分けられていた可能性がある。ただし、これら各類型の強度をみると、ばらつきがあり傾向をつかむことができないため、強度を増すなど構造上の効果を狙ったというよりも、視覚的な要因によって使い分けられたと思われる。なお、この硬度の状況をみると、盛土下層にあたる第１・２工程と上層の第６工程では硬くなる傾向がみられ、第１工程では強固な基盤をつくるため、第６工程では土砂の流出を防ぐためにつき固めたと考えられる。

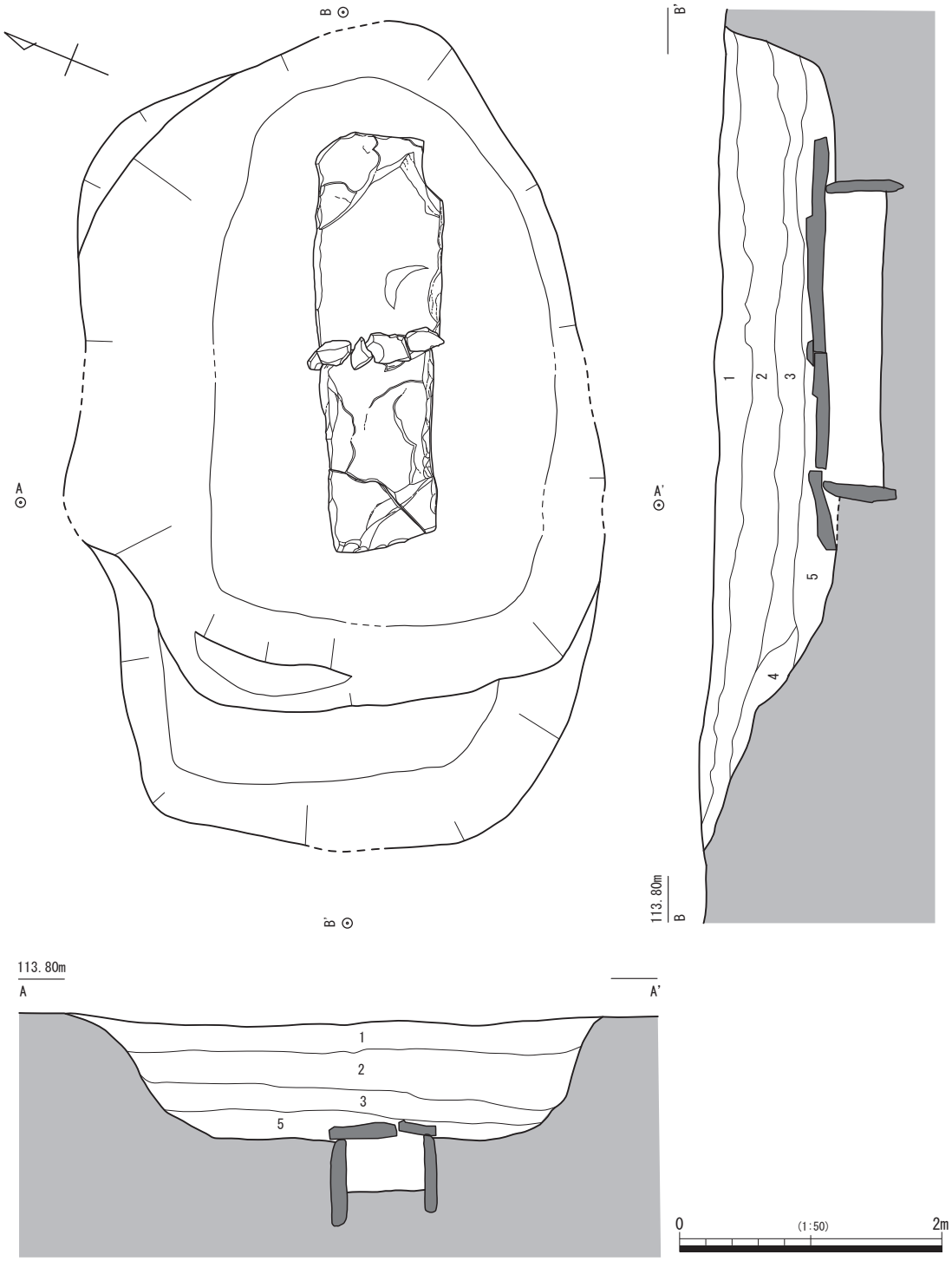
第２表　越敷山51号墳墳丘盛土針貫入強度

層位	工程	埋土	硬度計測値（N）					平均（N）
1	6	A	380	150	150	150	190	204
2	6	A	140	200	120	160	190	162
3	6	A	350	220	160	200	250	236
4	6	A	150	180	260	160	190	188
9	5	B	70	100	140	140	140	118
10	5	C	80	170	140	120	120	126
11	5	B	120	200	140	170	140	154
12	5	B	150	270	130	130	120	160
14	5	B	140	130	140	120	160	138
15	5	B	160	150	150	150	130	148
18	4	A	80	120	100	100	100	100
21	4	A	150	250	90	160	160	162
24	4	A	100	160	200	60	120	128
33	3	A	320	120	120	80	150	158
34	3	A	260	140	200	120	180	180
34	3	A	150	160	200	160	160	166
36	3	B	170	100	150	120	180	144
40	3	B	240	340	160	200	280	244
41	3	B	220	200	220	130	180	190
42	3	C	140	170	250	200	130	178
43	3	B	140	170	190	220	210	186
46	3	B	180	120	190	150	120	152
49	3	B	180	120	220	140	150	162
51	3	B	110	80	130	140	170	126
52	3	B	260	200	160	250	160	206
53	3	B	70	150	100	50	70	88
73	2	B	380	140	160	170	280	226
81	1	B	150	140	140	150	130	142
82	1	B	260	380	420	410	410	376
85	1	C	460	430	250	350	260	350
86	1	C	350	430	350	200	330	332
87	1	C	230	270	350	240	260	270
	旧表土		180	220	160	160	200	184
	旧表土		230	260	400	380	400	334

埋葬施設１

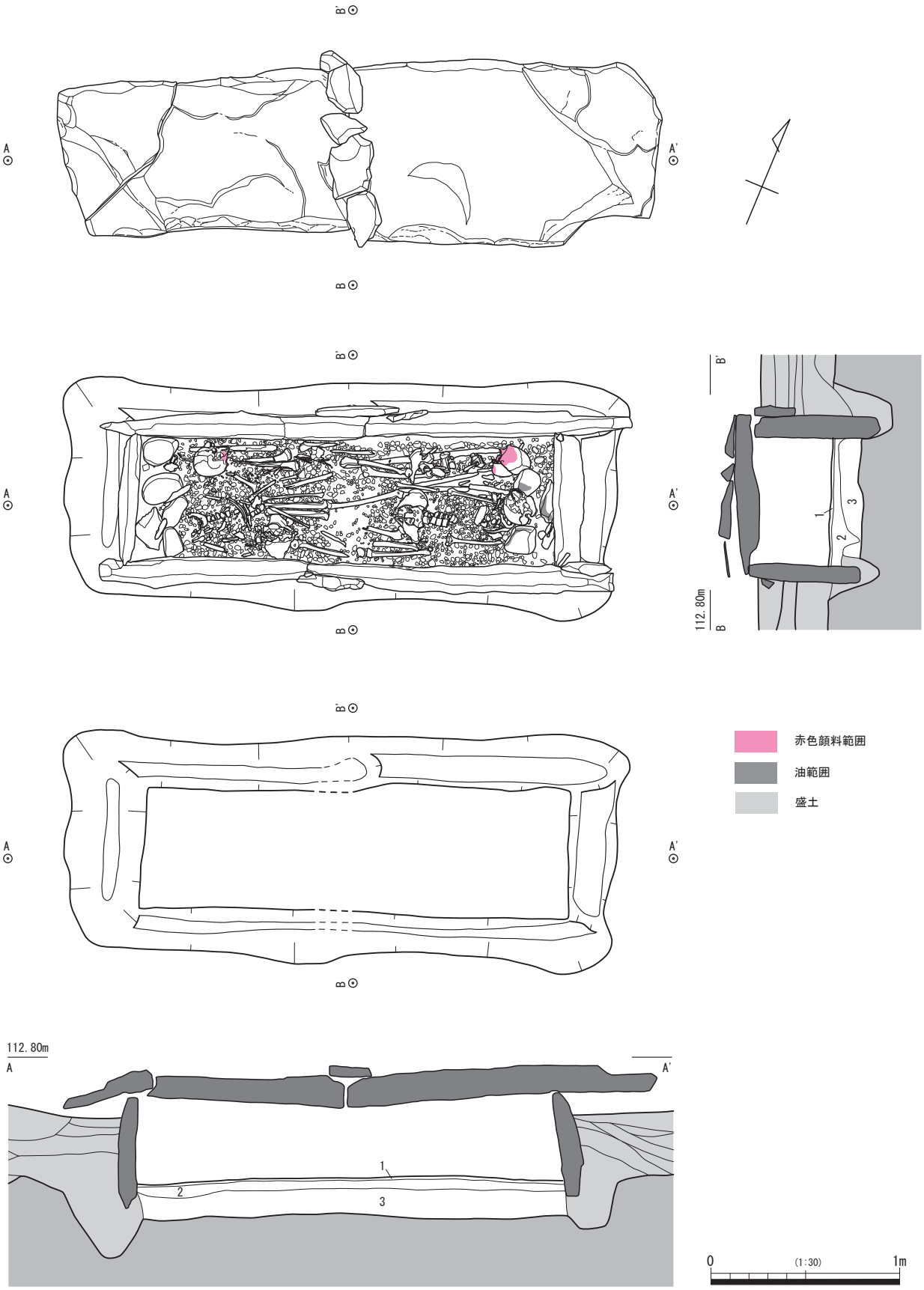
前述したとおり、埋葬施設１は構築墓壙であり、追葬が行われている。

追葬は墳頂部から土坑を掘り込んで行われている。この土坑は、平面形は歪な隅丸方形を呈し、規模は長軸6.30m、短軸5.40m、深さ0.80mを測る。西側の壁面は緩やかに傾斜しており、中間に段がある。



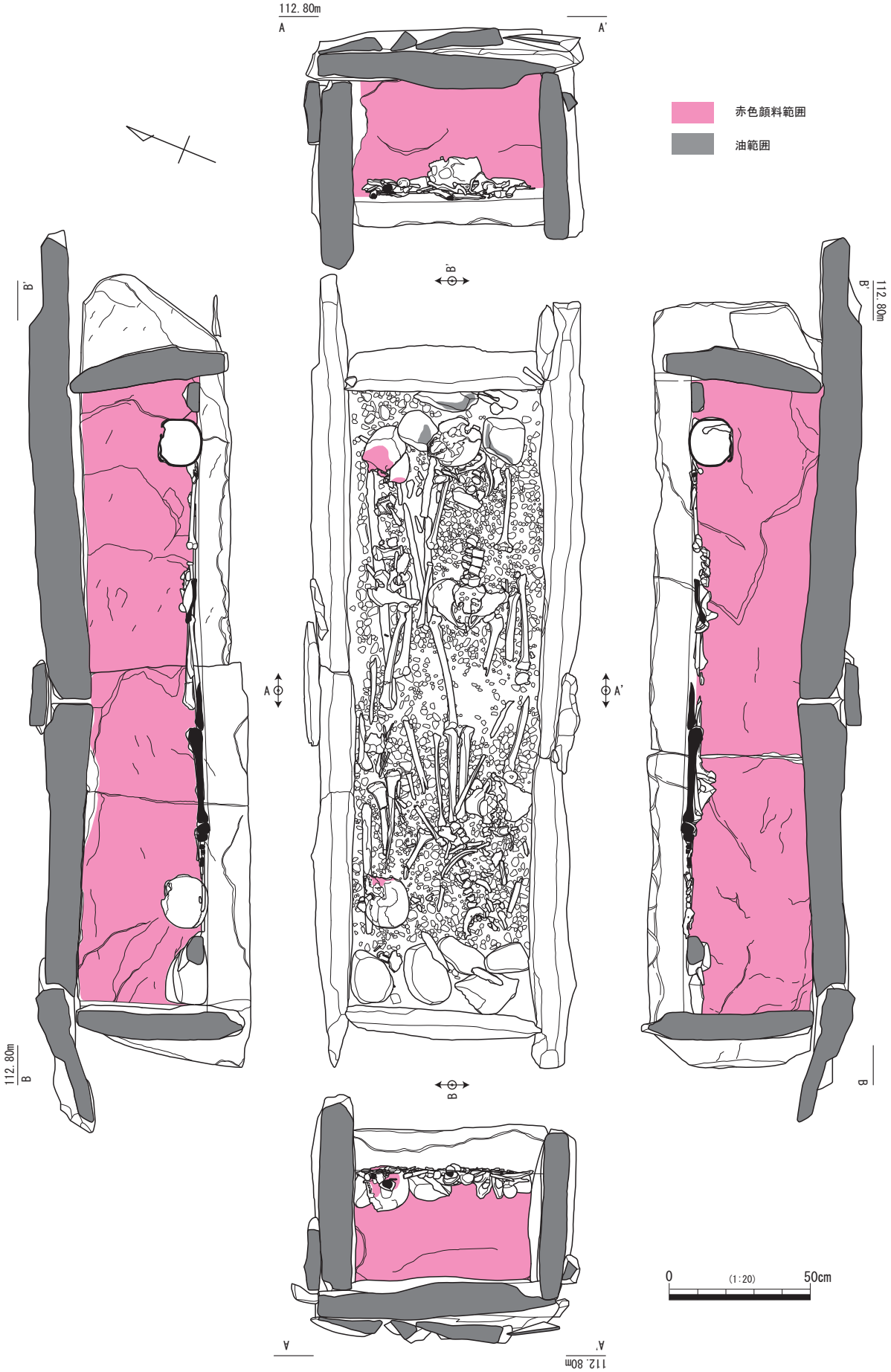
1　7.5YR6/8 橙色土 (しまりやや良、白色粒を多く、ブロックを少し含む)
2　7.5YR5/2 灰褐色土 (しまりやや良、白色粒を多く、ブロックを少し、炭を僅かに含む)
3　7.5YR5/6 明褐色土 (しまりやや良、白色粒を多く、ブロック、炭を少し含む)
4　10YR6/6 明黄褐色土 (しまりやや良、白色粒を含む)
5　7.5YR5/4 にぶい褐色土 (しまりやや良、白色粒を多く含む)

第57図　越敷山51号墳埋葬施設１追葬時掘り方

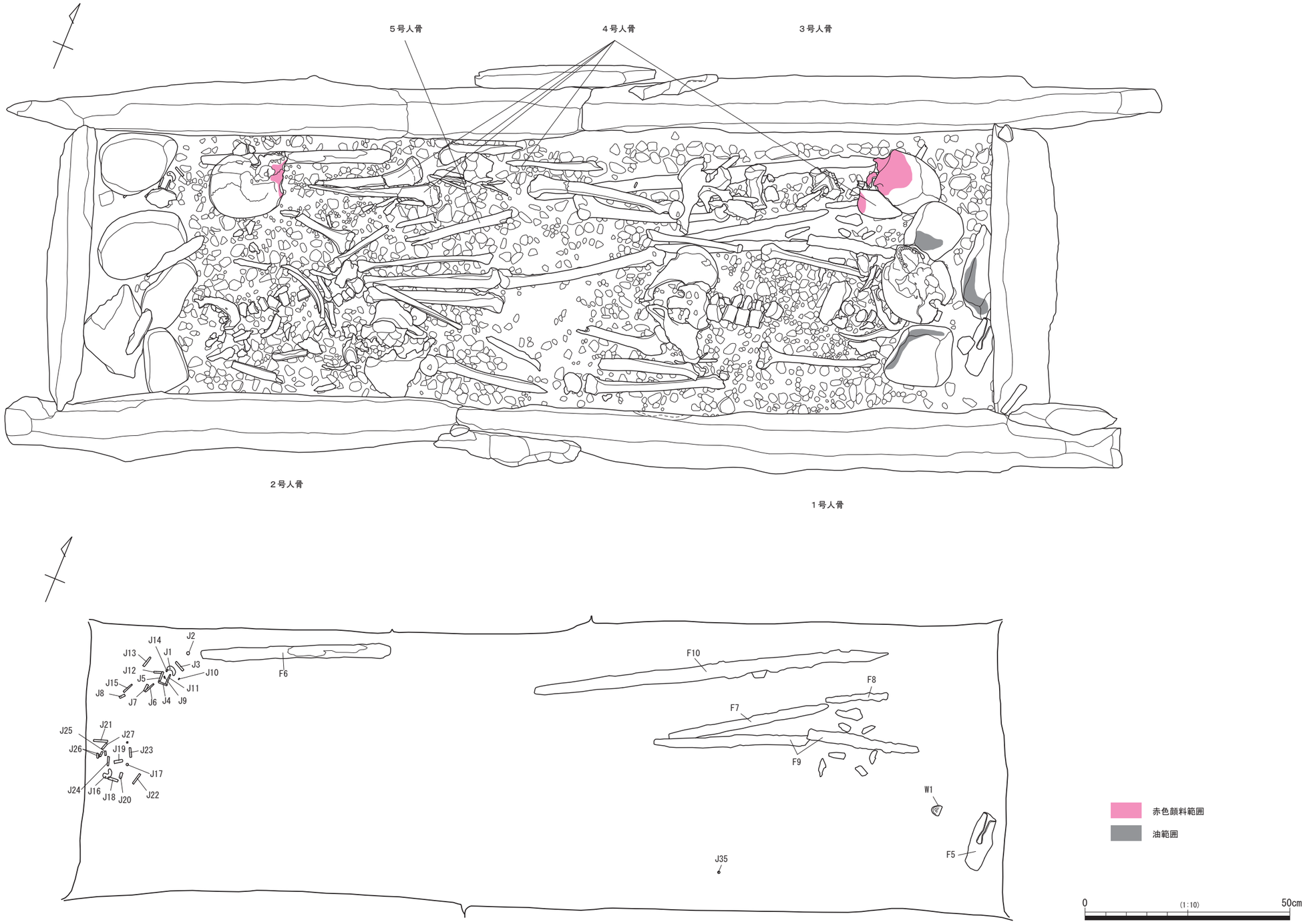


1　0.5～３㎝の亜角～円形の礫（棺床）
2　10YR6/8 明黄褐色砂（しまり不良）
3　7.5YR4/6 明赤褐色土（しまり良、粘性有）

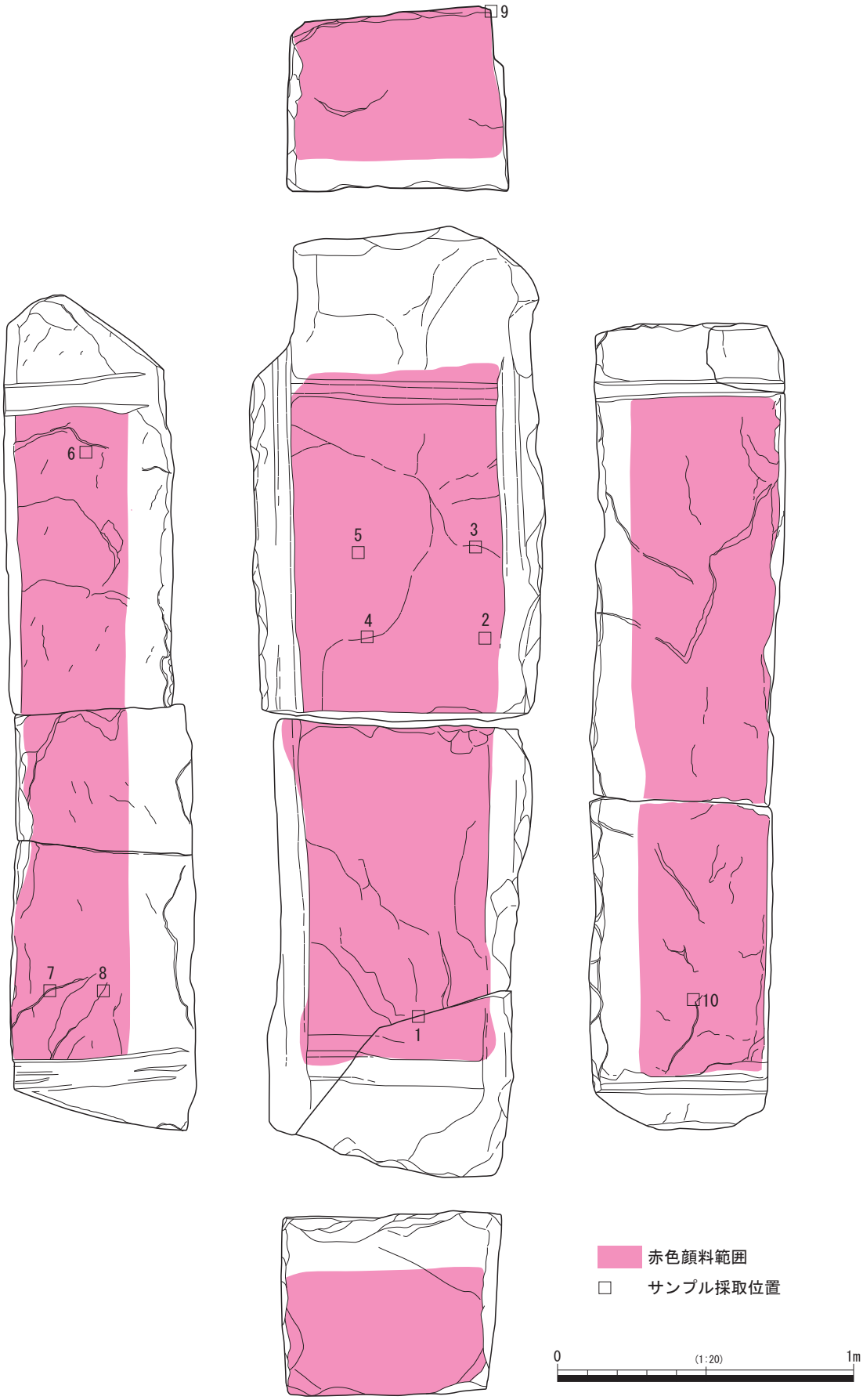
第58図　越敷山51号墳埋葬施設１①



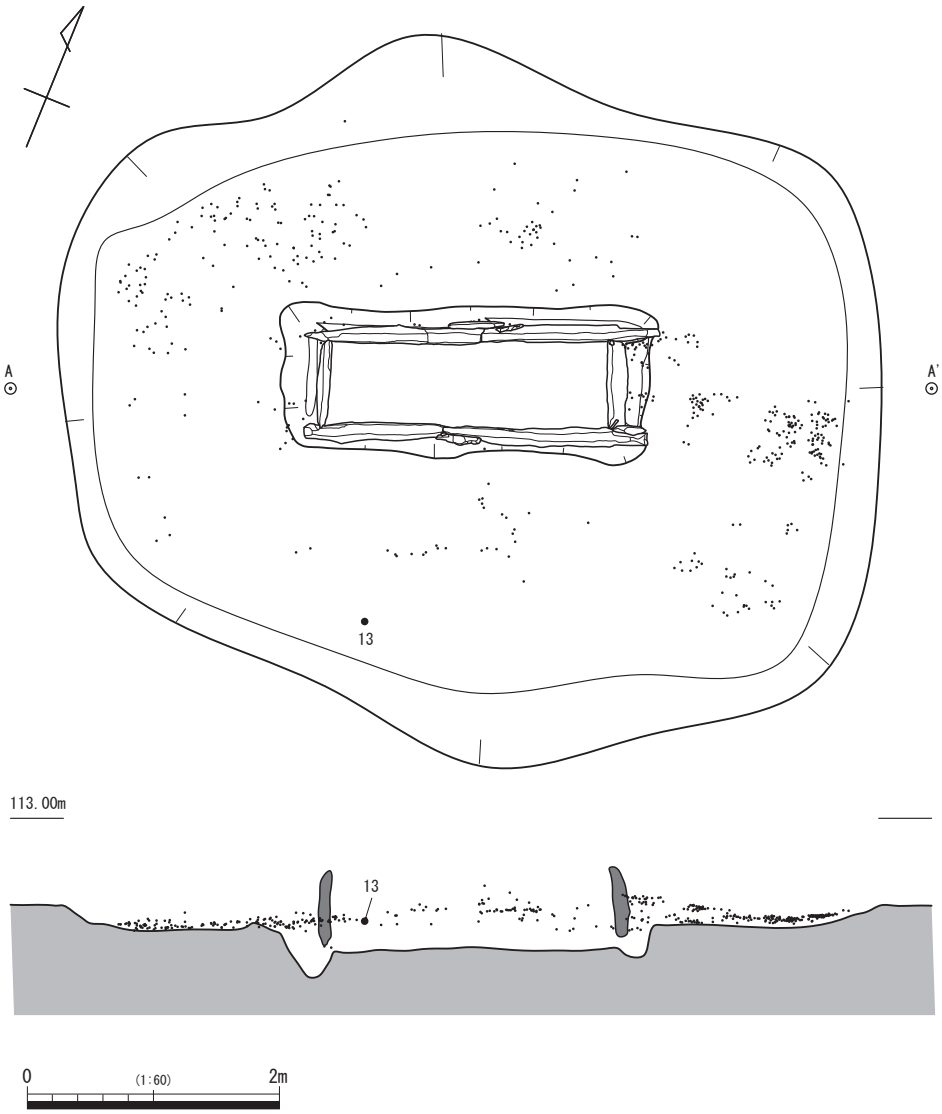
第59図　越敷山51号墳埋葬施設１②



第60図　越敷山51号墳埋葬施設１石棺内人骨・遺物出土状況



第61図　越敷山51号墳埋葬施設１石棺石材施溝状況



第62図　越敷山51号墳埋葬施設１石棺調整剥片散乱状況

埋土は地山を破砕した土であり、表土ブロックなどを含まない均質なものである。このため、掘削時の土をそのまま埋め戻したとは考えにくく、新たに地山を掘削した土を埋めた可能性がある。埋土中から遺物は出土しなかった。

追葬の土坑掘削後、箱式石棺を確認した。石棺の規模は長軸2.52m、短軸0.67m、深さ0.45mを測る。主軸の方向はE－22°－Nであり、東西方向を向く。棺内には人骨が５体埋葬されており、鉄刀、鉄剣、鉄鉾、鉄斧、玉類、竪櫛が副葬されていた。

蓋石は２枚からなり、石の継ぎ目には10～30㎝ほどの石棺の石材と同じ礫が５つ並べられる。なお、越敷山49号墳でみられたような目張りの粘土は認められない。蓋石に用いられた石は長方形を呈する板石であり、端部は加工が施され、特に蓋石同士の継ぎ目については平坦になるよう丁寧に仕上げられている。規模は、東側が長さ1.67m、幅0.98m、厚さ0.15m、西側が長さ1.53m、幅0.88m、厚さ0.17mを測る。石材は長側石や短側石と同様、調査地周辺の山に含まれる岩を使用したとみられる（第４章第１節参照）。内面には長側石と短側石との設置部分に浅い溝が彫り込まれる。この浅い溝の内側、

すなわち棺内にあたる部分には赤色顔料が塗布されている。この顔料は一部溝にかかり、溝の外側にもみられることから、蓋を閉める前にはすでに塗布されていたと考えられる。なお、赤色顔料の成分はベンガラである（第４章第１節参照）。

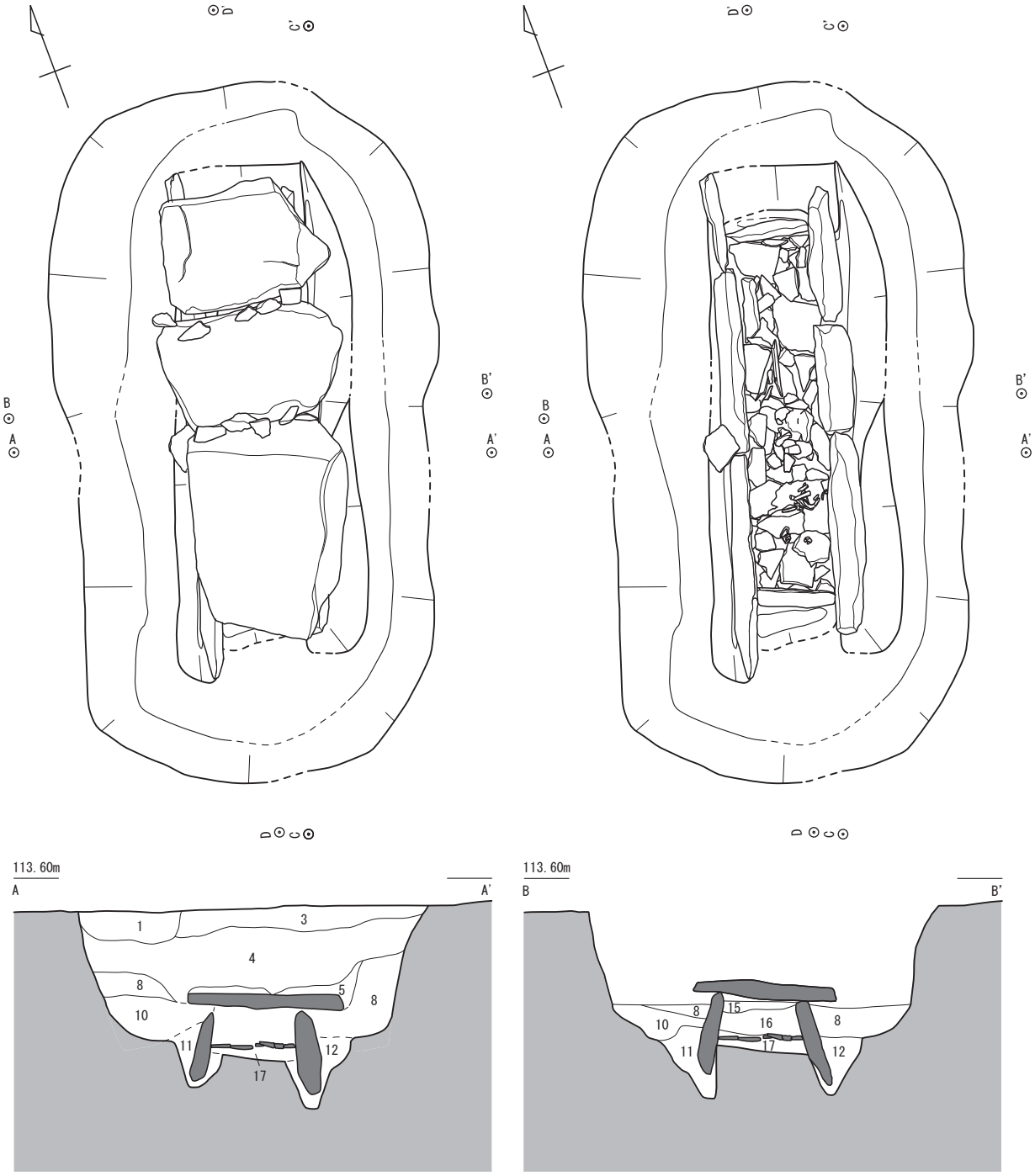
石棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに２枚の板石を用い、平継ぎによって並べられ、石の継ぎ目には板石が配置される。長側石は概ね長方形を呈する板石を使用しており、端部を丁寧に加工する。とりわけ蓋石との接地面は丁寧に仕上げられ、平坦にしている。また、短側石との接地面には浅い溝が彫り込まれている。板石の規模は幅1.10～1.65m、高さ0.50～0.60m、厚さ0.09～0.13mである。短側石は、端部を丁寧に加工した方形をなす板石を用いており、その規模は幅0.70m、高さ0.56～0.60m、厚さ0.09～0.12mを測る。長側石、短側石ともに内側には赤色顔料が塗布されている。なお、長側石の溝の外側、短側石の左右の端部、棺床よりも下方にあたる部分には赤色顔料の付着が認められないことから、石材を組み合わせた後に塗布されたと考えられる。

石棺の棺床には明黄褐色を呈する砂の上に玉砂利を敷く。東西の端には石枕が３組配置される。石枕は東側と南西隅にあるものは３つの石で構成され、残りの北西側は２つの石からなる。石材は概ね河原石であるが、東側と南西隅の中央にあるものについては、石棺と同様の石材を使用している。

棺の掘り方は、墳丘の下で検出した。２段に掘り込まれており、上段は長軸6.50m、短軸5.80m、深さ0.20mの歪な隅丸方形を呈する。周囲には石棺の石材を調整した際に生じた剥片が散乱する。この中央には長軸2.92m、短軸1.19m、深さ23㎝の長方形を呈する掘り方があり、その底面には石を設置する際の溝が掘り込まれる。底面には20㎝ほど土が盛られ、石棺を組んだ後、砂、玉砂利を敷き棺床としている。

棺内には５体の人骨が埋葬されていた。これらの人骨は、棺内に雨水が多量に入り込んだ状況が認められないことから、埋葬の最終段階の状況をよく残していると思われる。なお、人骨の取り上げは、鳥取大学医学部井上貴央教授に依頼して行った。

１号人骨は南東側にあり、ほぼ完全な状態で残る。元位置を保っているとみられることから、最後に埋葬された人物と考えられる。頭蓋骨は顔面を西側に向けた状態で置かれているが、天地が逆であり、若干動いた形跡がある。また、顔面には赤色顔料が塗布され、側頭部分には陥没骨折が治癒した様子が認められる。性別は男性であり、年齢は熟年である。身長は162㎝が想定される。頭部の下には３石からなる石枕が配置されており、その表面には脂が付着する。２号人骨は南西側にあり、１号人骨と対置する。１号人骨と同様、ほぼ完全な状態で残る。下肢骨が長側石側に動かされており、１号人骨の埋葬時に移動されたものとみられる。石枕の上には下顎骨しか認められず、頭蓋骨は北側に移動している。顔面には赤色顔料が塗布されている。性別は男性であり、年齢は熟年である。３号人骨は北東隅にあり、４号人骨と重複する。人体の正常な位置があまり保たれていないことから、腱が残った状態で動かされたとみられ、１号人骨などの埋葬時に移動された可能性がある。１号人骨や２号人骨と同様、顔面には赤色顔料が塗布される。頭蓋骨の下に石枕はない。性別は女性であり、年齢は壮年後半から熟年とみられる。４号人骨は北東側にあり、３号人骨とほぼ重複する。頭蓋骨の一部と下肢骨のみしか認められない。性別は男性の可能性があり、年齢は不明である。５号人骨は北西側にある。大腿骨しか認められず、年齢、性別など詳細は不明であるが、骨の状況から小児の可能性が高い。さて、これらの埋葬順序であるが、５号人骨については情報が乏しく不明であるが、位置関係や骨の残り具

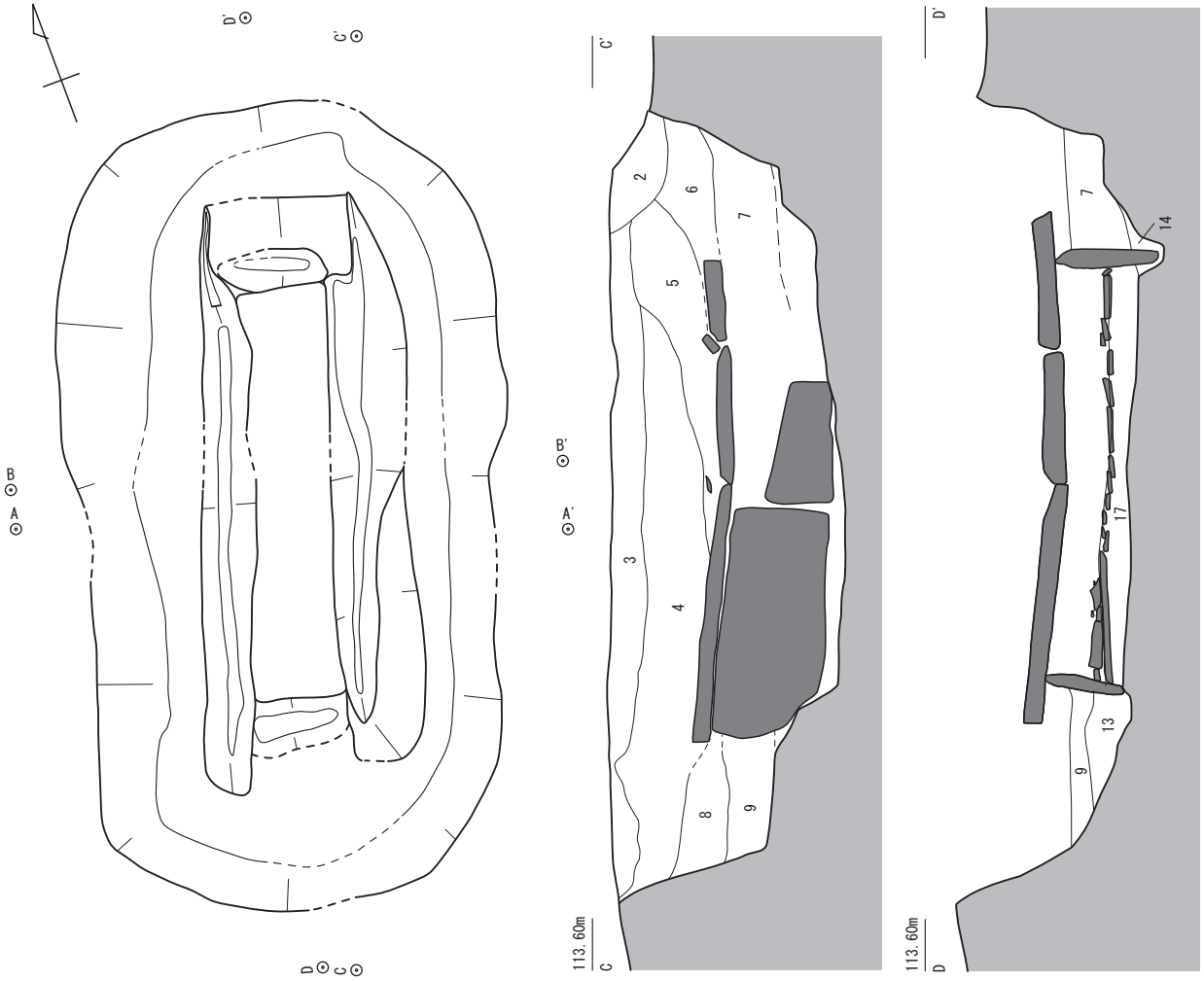


第63図　越敷山51号墳埋葬施設２①

合から判断すると、４号人骨→３号人骨→２号人骨→１号人骨の順に埋葬されたとみられる。

ところで、１号人骨や２号人骨、３号人骨に塗布された赤色顔料は、分析結果から水銀朱であり、棺内に使用されたものとは異なっている。このため、人骨と棺内とで塗布する顔料の種類を使い分けていたとみられる。人骨の鑑定結果や顔料の分析結果の詳細は第４章に掲載しているのでそちらを参照されたい。

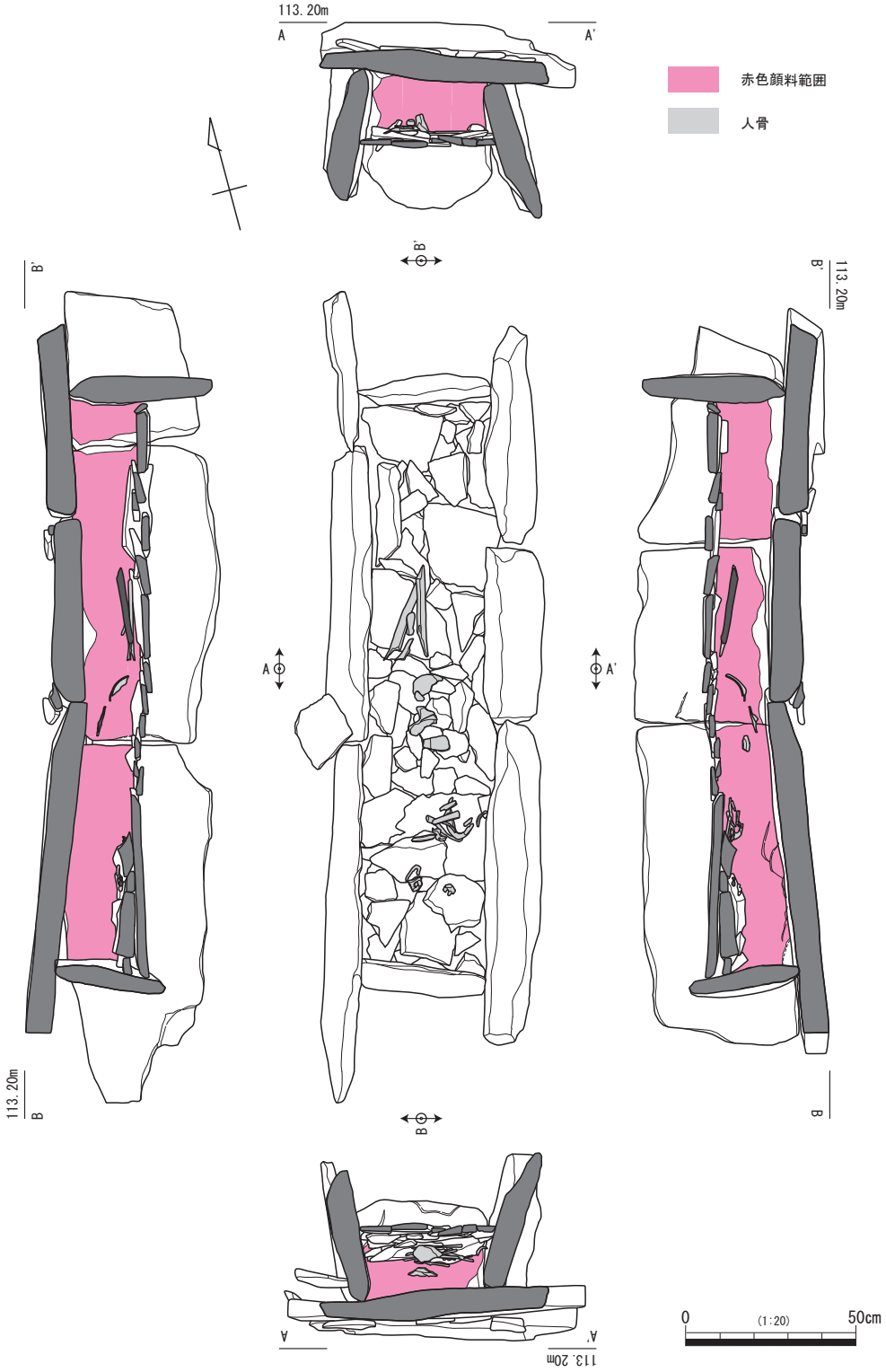
副葬品は前述のとおり、鉄刀、鉄剣、鉄鉾、鉄斧、玉類、竪櫛が出土した。F5は鉄斧であり、棺



1　10YR4/2 灰黄褐色土
2　10YR3/2 黒褐色土
3　10YR5/4 にぶい黄褐色土
　(白色粒を多く、ブロックを少し含む)
4　10YR5/4 にぶい黄褐色土
　(白色粒を多く、ブロックを多く、炭を少し含む)
5　7.5YR3/2 黒褐色土
6　7.5YR3/2 黒褐色土 (ブロックを多く含む)
7　7.5YR2/2 黒褐色土
8　7.5YR4/3 褐色土
　(しまりやや不良、ブロック、炭を含む)
9　7.5YR4/3 褐色土
　(しまりやや不良、ブロックを少し、炭を少し含む)
10 10YR4/3 にぶい黄褐色土
　(しまりやや不良、ブロックを少含)
11 10YR4/2 灰黄褐色土 (しまりやや良、ブロックを少し含む)
12 10YR5/4 にぶい黄褐色土
　(しまりやや良、ブロックを少し含む)
13 10YR4/2 灰黄褐色土 (しまり良、ブロックを含む)
14 10YR4/4 褐色土 (しまり不良)
15 10YR3/2 黒褐色土 (しまり不良)
16 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (しまり不良、礫を少し含む)
17 10YR4/4 褐色土 (しまり不良)

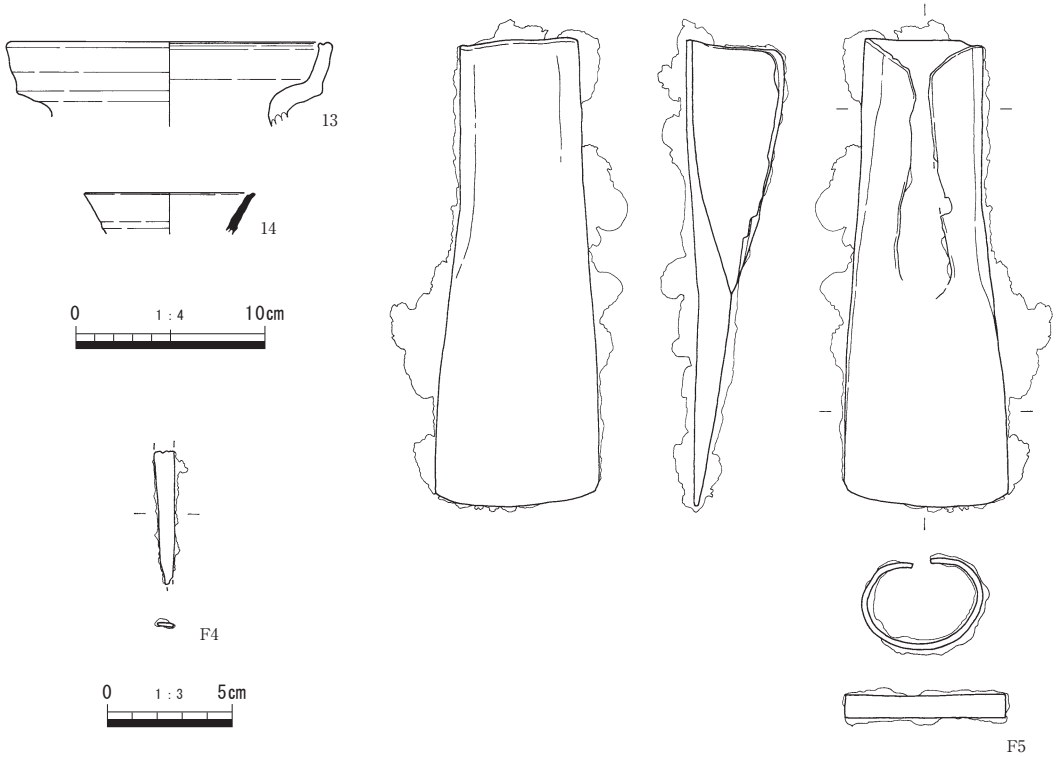
第64図　越敷山51号墳埋葬施設２②

の南東隅にあり、１号人骨のすぐ東側にある。刃部を南側に向けている。F6は鉄剣であり、棺の北西側にあり、刃先を中央に向ける。F7は鉄剣、F8は鉄鉾、F9・10は鉄刀であり、棺の北東側にまとめられている。これらはすべて刃先を中央に向けて配置される。なお、鉄鉾は刃先を中央に向けていることから、柄が装着されていなかったとみられる。これらは３号人骨の下にあることから、１号人骨に伴うとは考えにくい。W1は竪櫛であり、漆膜部分がかろうじて残る。１号人骨の頭蓋骨の下から出土しており、これに伴う可能性が高い。J35は臼玉であり、１号人骨の左の上肢骨付近にある。



第65図　越敷山51号墳埋葬施設２③

J1～15、J16～27は勾玉、ガラス玉、管玉であり、J1～15は棺の北西隅にある石枕付近、J16～27はその石枕の下からまとまった状態で出土した。



第66図　越敷山51号墳出土遺物①

第66図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
13	墳丘盛土	底面	甕	※16.8	△4.5	―	内外面：ナデ	明黄褐色	土師器
14	墳丘	表土	甕	※ 9.1	△2.2	―	内外面：ヨコナデ	灰色	須恵器

第66図　鉄器観察表

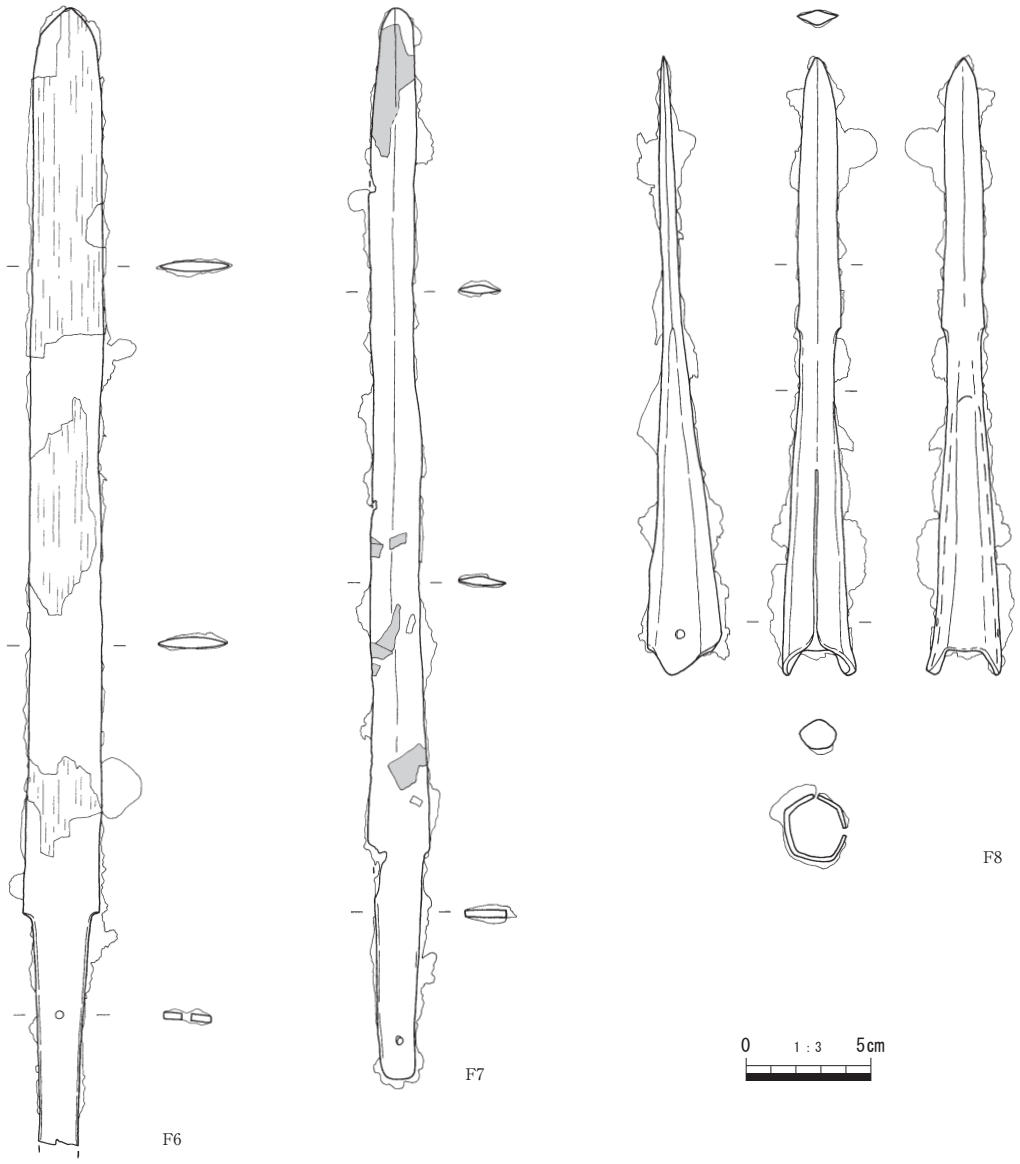
遺物番号	遺構名	層位	器種	法量（cm・g）	備　考
F4	埋葬施設1	棺床	棒状鉄器	最大長：△5.3、最大幅：0.8、最大厚：0.2、重量：△2.6	
F5	埋葬施設1	棺床	鉄斧	最大長： 18.5、最大幅：6.5、最大厚：1.4、重量：775.0	

埋葬施設２

埋葬施設２は箱式石棺であり、墳丘の北西側に位置する。墳頂部から掘り込んで構築している。盗掘は受けておらず、ほぼ完全な状態で検出した。石棺の規模は、長軸1.69m、短軸0.4m、深さ0.25mを測る。主軸の方向はN－14°－と南北方向を向き、埋葬施設１の主軸と異なる。棺床には板石が敷かれており、東側には石枕とみられる板石が配置される。そこから人骨１体を確認した。副葬品は出土しなかった。

蓋石は３枚からなり、頭が置かれる南側は、長軸1.10m、短軸0.72m、厚さ0.08mの長方形を呈する大型の板石を用い、そのほかは長軸0.75～0.85m、短軸0.52～0.54m、厚さ0.08mの小型の板石を使用する。この上には10cm前後の石によって蓋石の継ぎ目を覆う。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は左右ともに３枚の板石を用い、平継ぎによって並べられる。長側石に用いられた板石は、南西側の２枚と南東側の１枚は幅0.83～1.05m、高さ0.39～0.44m、厚さ0.08mと大型であるのに対し、ほかは幅0.42



第67図　越敷山51号墳出土遺物②

第67・68図　鉄器

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量（cm・g）	備考
F6	埋葬施設1	棺床	鉄剣	最大長：45.0、最大幅：3.3、最大厚：0.4、重量：243.9	木質付着、目釘孔有
F7	埋葬施設1	棺床	鉄剣	最大長：42.3、最大幅：2.5、最大厚：0.4、重量：166.9	布付着、目釘孔有
F8	埋葬施設1	棺床	鉄鉾	最大長：24.4、最大幅：2.9、最大厚：2.9、重量：137.7	身部鎬造、有関、袋部五角形、両側面に目釘孔有
F9	埋葬施設1	棺床	鉄刀	最大長：△63.5、最大幅：2.9、最大厚：0.5、重量：△239.8	木質・布付着
F10	埋葬施設1	棺床	鉄刀	最大長：85.1、最大幅：3.5、最大厚：0.8、重量：745.0	布・糸巻き付着

～0.63m、高さ0.35～0.40m、厚さ0.08mと小型である。短側石については幅0.37～0.40m、高さ0.35～0.41m、厚さ0.08mを測る。長側石、短側石ともに蓋石との設置面は平坦に加工されているが、床側については加工の痕跡が認められない。長側石と短側石の内側には赤色顔料が塗布される。敷石は２～３㎝ほどの板石を敷いており、南側の隅では板石をさらに５枚のせ、一段高くし、石枕状にしている。

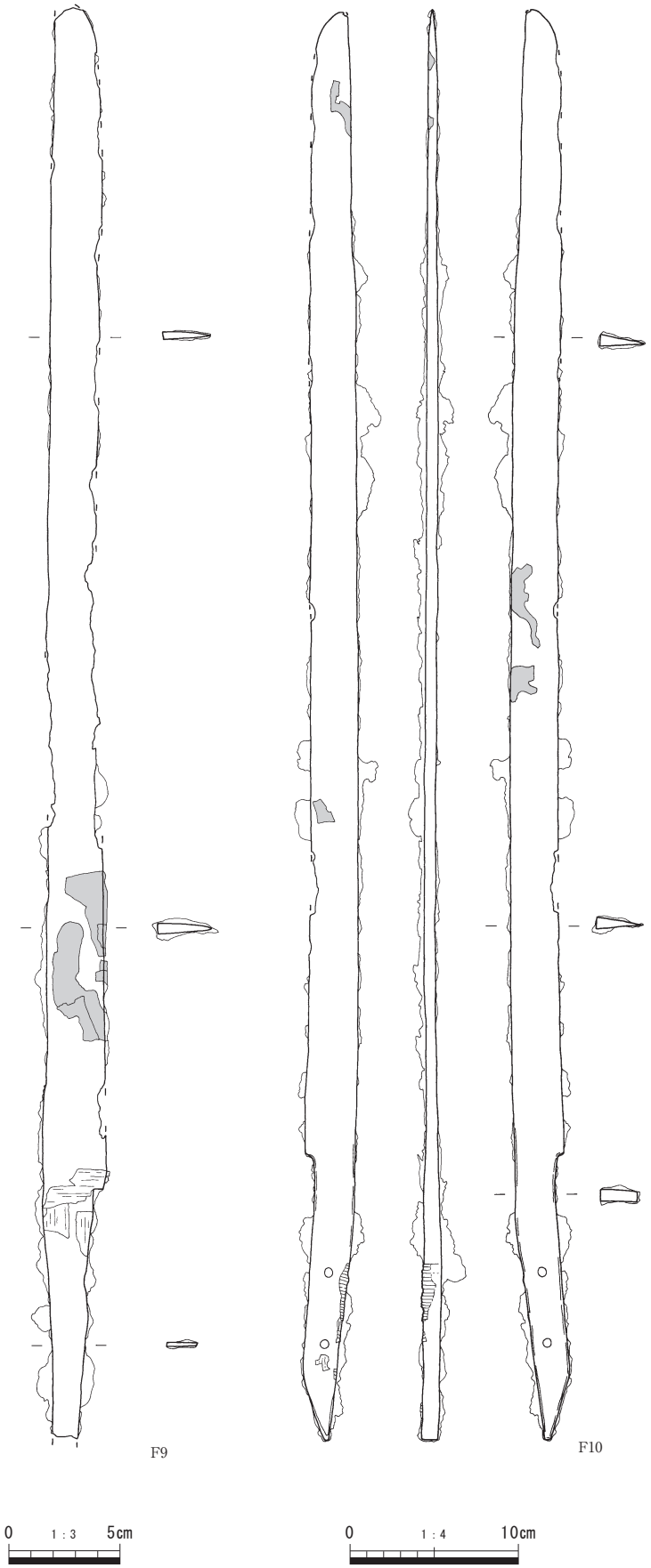
棺の掘り方は、隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸1.70m、深さ0.70mを測る。底面には石棺を設置するための溝が掘り込まれる。底面には６㎝ほど土を盛り、その上に板石を置き棺床とする。

棺内には１体の人骨が埋葬されていた。人骨は頭蓋骨から下肢骨が断片的に認められる程度であり、残りが悪い。南側に頭を置いたと考えられるが、頭蓋骨や肩甲骨が腹部付近で認められ、動かされている可能性がある。

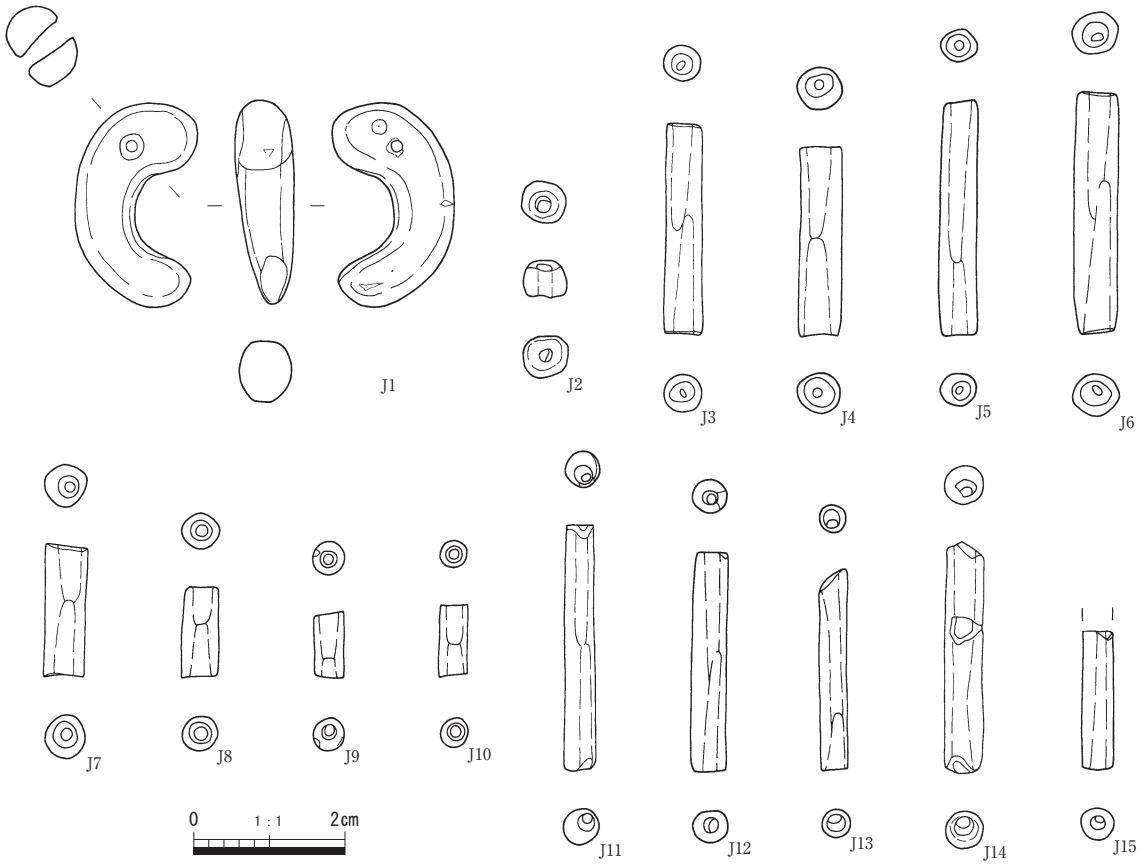
出土遺物

副葬品は埋葬施設１から鉄刀、鉄剣、鉄鉾、鉄斧、玉類、竪櫛などが出土した。出土状況については先に述べたとおりである。

F4は棒状鉄器であり、片方の端部が欠損する。F5は袋状鉄斧であり、袋部分の断面形は歪な円形となる。F6・7は鉄剣である。F6の刃部には、鞘の一部とみられる木質が付着し、F7には布の痕跡が残る。ともに目釘孔が認められる。F8は鉄鉾である。身部は鎬造りであり、袋部との境に関がみられる。袋部は断面形が五角形を呈し、両側面には目釘孔がある。F9・10は鉄刀であり、ともに刀身部に布の痕跡が残る。F9は茎胴部に木質が付着する。F10は茎胴部に糸巻きの痕跡が残り、目釘孔が２つ認められ、茎尻を斜めにカットする。J1・16は瑪瑙製の勾玉である。J2・17・28～31はガラス玉であり、J28～31はふるいがけによって出土した。J3～10・18～20は碧玉製の管玉であり、両面穿孔による。



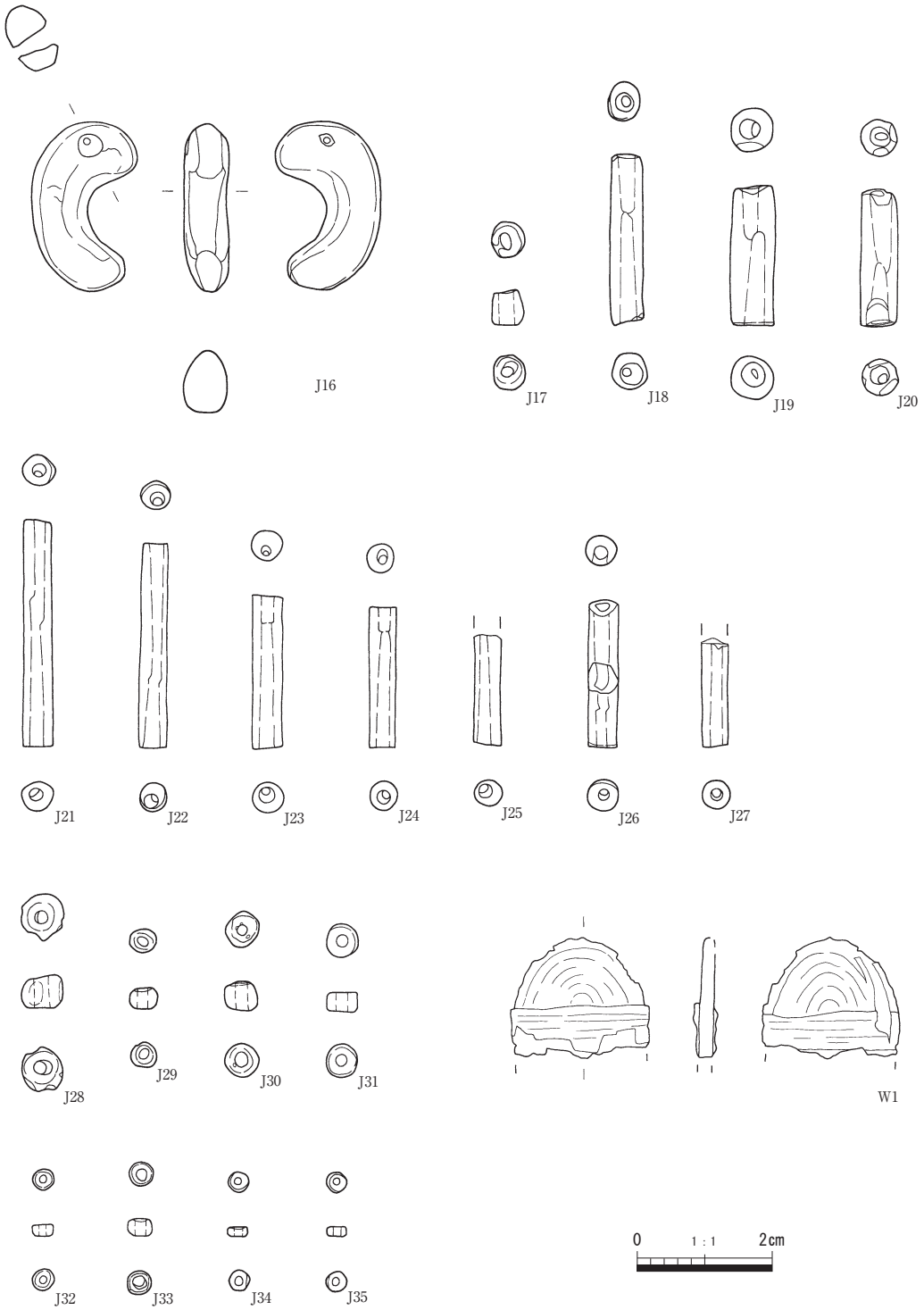
第68図　越敷山51号墳出土遺物③



第69図　越敷山51号墳出土遺物④

第69図　玉類観察表①

遺物番号	遺構名	層位	器種	法量（cm・g）	備考
J1	埋葬施設1	棺床	勾玉	最大長：2.7、最大幅：1.6、最大厚：0.8、重量：3.8	瑪瑙、片面穿孔、穿孔に失敗した孔有
J2	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長：0.6、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：0.2	ガラス、青緑色
J3	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.8、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：1.1	碧玉、両面穿孔
J4	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.5、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：1.2	碧玉、両面穿孔
J5	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：3.1、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：1.2	碧玉、両面穿孔
J6	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：3.3、最大幅：0.6、最大厚：0.6、重量：1.6	碧玉、両面穿孔
J7	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：1.8、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：0.6	碧玉、両面穿孔
J8	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：1.7、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：0.4	碧玉、両面穿孔
J9	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：0.9、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.3	碧玉、両面穿孔
J10	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：1.0、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.2	碧玉、両面穿孔
J11	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：3.3、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：0.8	緑色凝灰岩、両面穿孔
J12	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.9、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.9	緑色凝灰岩、両面穿孔
J13	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.7、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.4	緑色凝灰岩、両面穿孔
J14	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：3.0、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：0.8	緑色凝灰岩
J15	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：△1.9、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：△0.4	緑色凝灰岩、両面穿孔
J16	埋葬施設1	棺床	勾玉	最大長：△2.5、最大幅：1.6、最大厚：0.7、重量：3.2	瑪瑙、片面穿孔
J17	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長：0.5、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：0.2	ガラス、青緑色
J18	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.6、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：1.0	碧玉、両面穿孔
J19	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.1、最大幅：0.7、最大厚：0.7、重量：1.5	碧玉、両面穿孔
J20	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.0、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：0.8	碧玉、両面穿孔
J21	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：3.4、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.7	緑色凝灰岩、両面穿孔
J22	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：3.1、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.7	緑色凝灰岩、両面穿孔
J23	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.3、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.6	緑色凝灰岩、両面穿孔
J24	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.1、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.5	緑色凝灰岩、両面穿孔
J25	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：△1.7、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：△0.4	緑色凝灰岩



第70図　越敷山51号墳出土遺物⑤

第70図　玉類観察表②

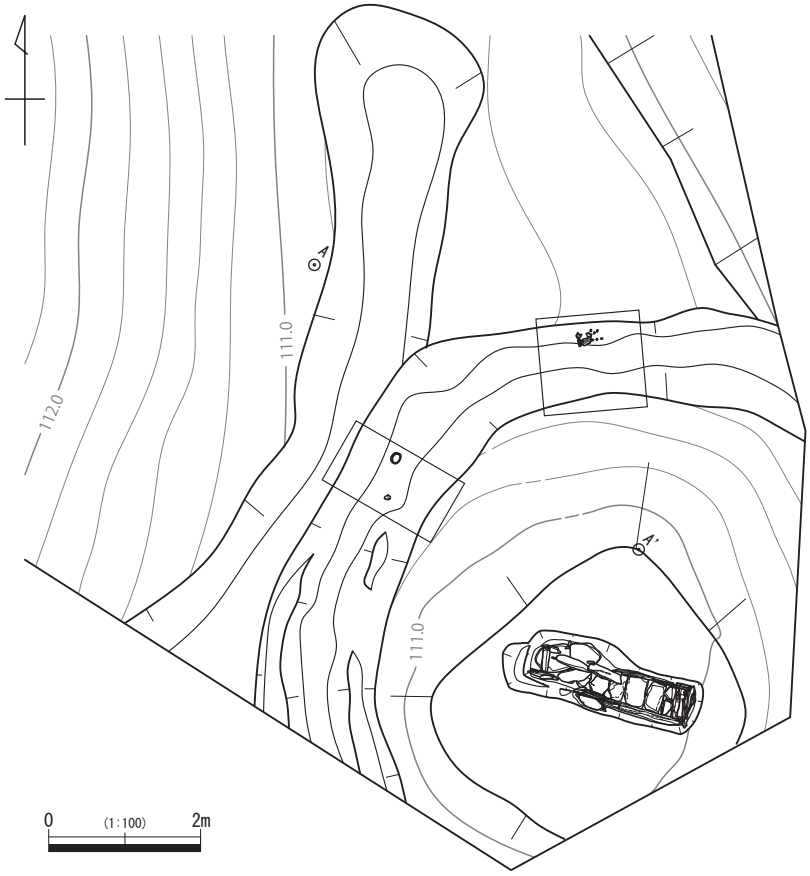
遺物番号	遺構名	層位	器種	法量(cm・g)	備考
J26	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：2.2、最大幅：0.5、最大厚：0.5、重量：0.6	緑色凝灰岩
J27	埋葬施設1	棺床	管玉	最大長：△1.6、最大幅：0.4、最大厚：0.4、重量：0.3	緑色凝灰岩
J28	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長：0.7、最大幅：0.6、最大厚：0.5、重量：0.2	ガラス、青緑色、気泡が顕著に認められる
J29	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長：0.4、最大幅：0.4、最大厚：0.3、重量：0.1	ガラス、紺色
J30	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長：0.5、最大幅：0.5、最大厚：0.4、重量：0.2	ガラス、紺色
J31	埋葬施設1	棺床	小玉	最大長：0.5、最大幅：0.4、最大厚：0.3、重量：0.1	ガラス、紺色、両端平坦
J32	埋葬施設1	棺床	臼玉	最大長：0.3、最大幅：0.3、最大厚：0.2、重量：0.1以下	滑石
J33	埋葬施設1	棺床	臼玉	最大長：0.4、最大幅：0.4、最大厚：0.3、重量：0.1	滑石

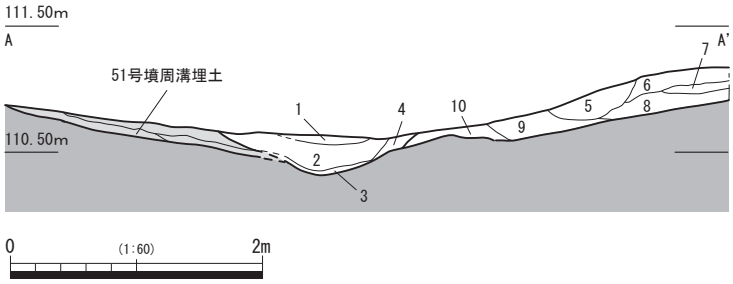
第70図　玉類観察表③

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	法量（cm・g）	備　　考
J34	埋葬施設1	棺床	臼玉	最大長：0.3、最大幅：0.3、最大厚：0.1、重量：0.1以下	滑石
J35	埋葬施設1	棺床	臼玉	最大長：0.3、最大幅：0.3、最大厚：0.2、重量：0.1以下	滑石

第70図　その他観察表

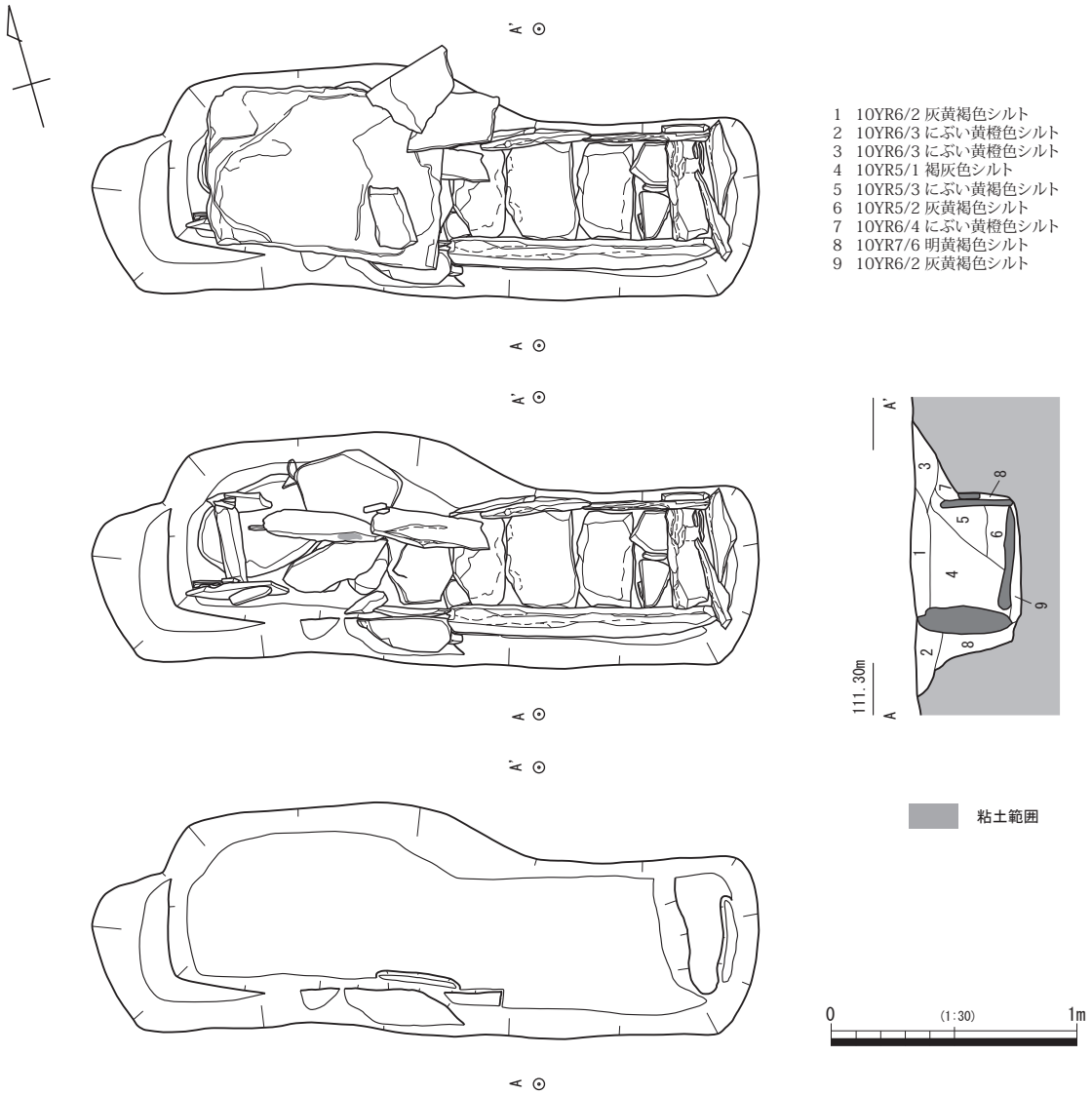
遺物番号	遺構名	層　位	器　種	法量（cm・g）	備　　考
W1	埋葬施設1	棺床	櫛	最大長：△1.9、最大幅：2.0、最大厚：0.4	





1　10YR3/1 黒褐色シルト
2　10YR1.7/1 黒色シルト (周溝埋土)
3　10YR5/1 黒褐色シルト (墳周溝埋土)
4　10YR1.7/1 黒色シルト
　(灰黄褐色シルトを含む、周溝埋土)
5　10YR6/1 褐灰色シルト
6　10YR7/6 明黄褐色シルト
　(褐灰色シルトを含む)
7　7.5YR5/1 褐灰色シルト
8　7.5YR6/6 橙色シルト
　(灰褐色シルトを含む)
9　10YR6/2 灰黄褐色シルト
　(明黄褐色シルトブロックを含む)
10 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト

第71図　越敷山99号墳



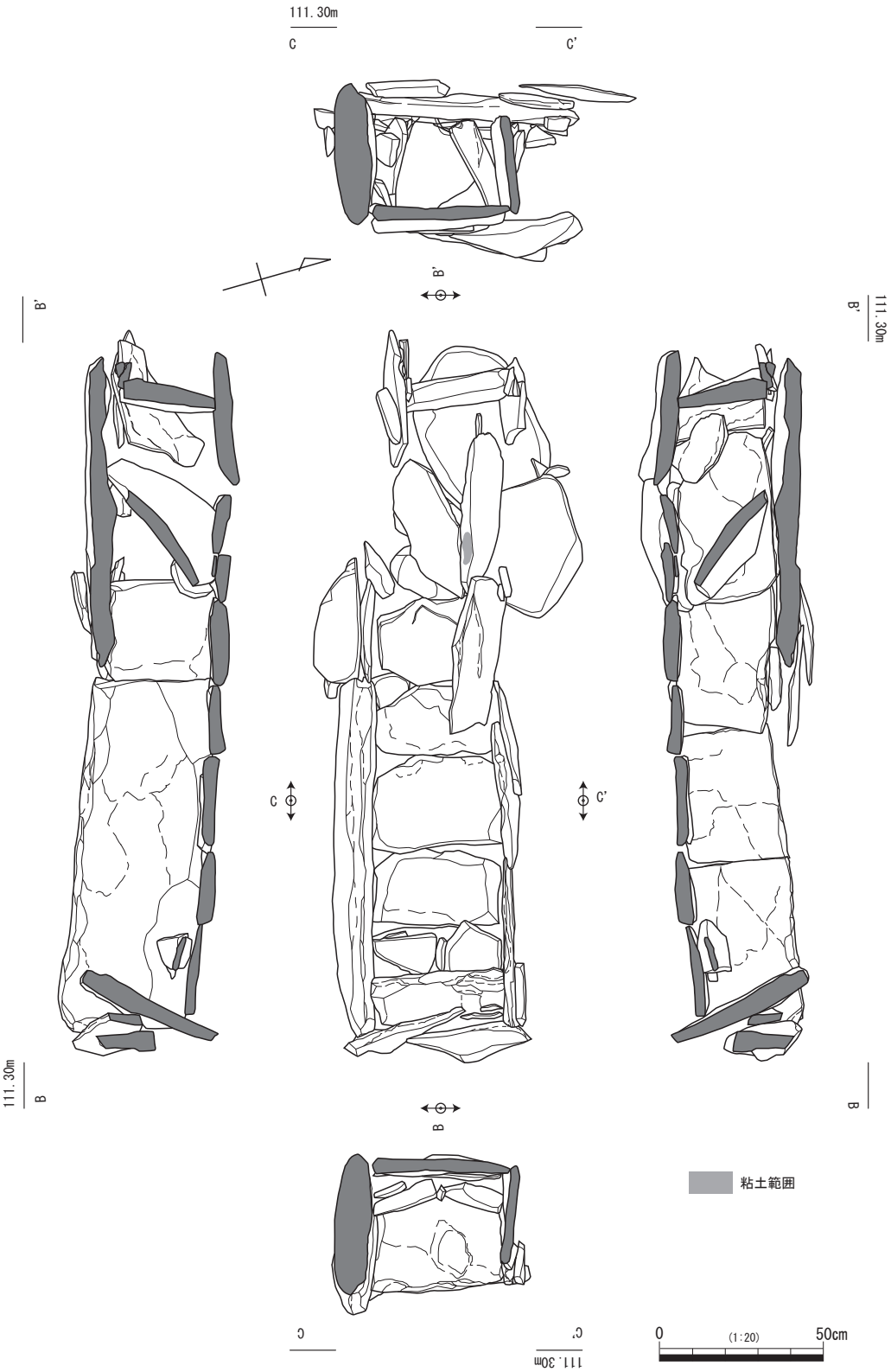
第72図　越敷山99号墳埋葬施設①

このうちJ8～10は青灰色を呈し、他のものと異なる。J11～15・21～27は緑色凝灰岩製の管玉、J32～35は滑石性の臼玉であり、このうちJ33～35はふるいがけによって出土した。W1は竪櫛である。

このほか、墳丘除去後の埋葬施設１の掘り方から、石棺の剥片とともに13、墳頂部の表土から14が出土した。13は土師器の甕、14は須恵器の瓿である。時期は副葬品や出土遺物から古墳時代中期前葉から後葉頃と考えられる。

越敷山99号墳（第71～74図、PL.35・46・47）

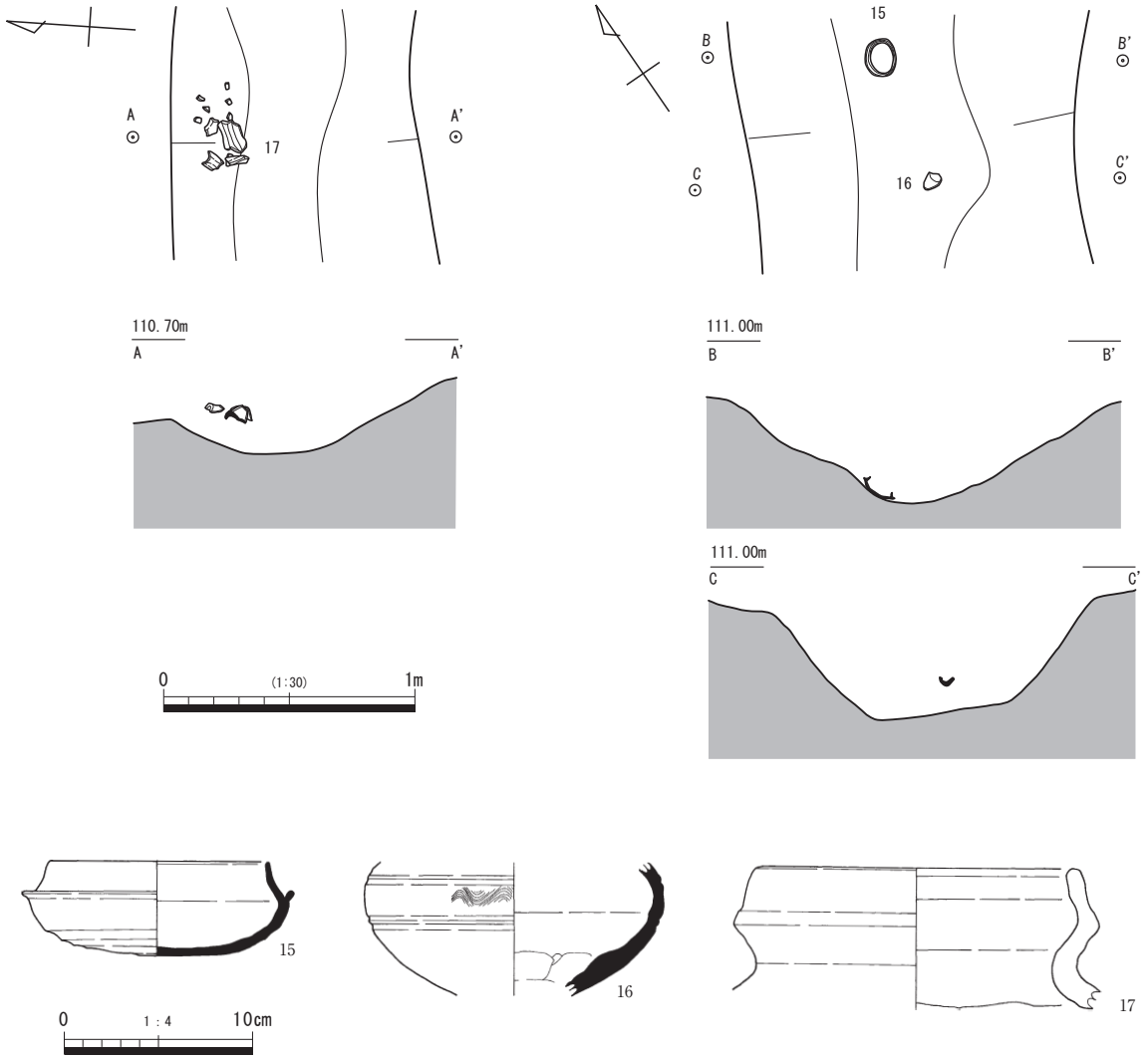
T73-10d-3G-2j・3jグリッドにある。調査区南東隅にあり、古墳の約1/3については、調査区外にあたるため、調査を行っていない。丘陵頂部の尾根上にあり、標高111m付近にある。北西側は越敷山51号墳と接しており、これを切る。また、西側には越敷山52号墳がある。



第73図　越敷山99号墳埋葬施設②

墳丘・周溝

墳丘は周辺を削り出して墳形を整え、盛土をしたものであり、盛土の厚さは0.26mほどである。周



第74図　越敷山99号墳遺物出土状況・出土遺物

第74図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	施文・調整	色調	備考
15	周溝	埋土	杯身	11.5	5.0	—	外面：ヨコナデ、ヘラケズリ、内面：ヨコナデ、ナデ	灰色	須恵器
16	周溝	埋土	𤮈	—	△7.2	—	外面：ヨコナデ、波状文、内面：ヨコナデ	灰色	須恵器
17	周溝	埋土	甕	※16.4	△7.4	—	外面：ナデ、内面：ナデ、ヘラケズリ	黄橙色	土師器

囲には幅1.60m、深さ0.32mの周溝が巡る。平面形は円形であり、規模は周溝内側で直径7.10m以上、周溝を含めると8.00m以上を測る。墳丘の高さは、周溝底面から墳頂部までが1.03mを測る。

埋葬施設

埋葬施設は箱式石棺であり、墳丘のやや南側に位置する。棺の規模は、長軸1.86m、短軸0.42m、深さ0.28mを測る。主軸の方向はW－15°－Nと東西方向を向く。蓋石は西側の１枚が残存するが、東側は抜き取られており確認できなかった。棺床には板石が敷かれており、東側には石枕が配置される。副葬品は出土しなかった。

棺の構造は、短側石を長側石で挟みこむようにして組まれており、「H」字形をなす。長側石は南

側が４枚、北側が５枚の板石を用い、平継ぎによって並べられる。石の継ぎ目には部分的に板石が配置される。長側石や短側石に用いられた板石は、南東側が長さ110㎝、幅45㎝、厚さ11㎝と大型の石材を使用しているのに対して、他は厚さ３～５㎝と薄い板材を用いている。長側石、短側石ともに蓋石との設置面は平坦に加工される。敷石は長方形の石材を横長に配置しており、長側石に挟まれるように置かれるが、西側隅では、敷石の上に長側石や短側石がのる。

蓋石は、長さ95㎝、幅58㎝、厚さ８㎝の長方形を呈する大型の板石を用いている。この上にはさらに別の板石が認められ、蓋石の境目を覆っていたものと考えられる。なお、蓋石を平坦に設置するため、蓋石下の長側石の周囲には、板石が置かれている。

棺の掘り方は、北西側がやや膨らむ歪な隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.59m、短軸0.92m、深さ0.44mを測る。

出土遺物

遺物は周溝の埋土中から15～17が出土した。15は須恵器の杯身、16は須恵器の瓿、17は土師器の甕である。時期は出土遺物から、古墳時代後期前半頃と考えられる。

第３節　古墳以外の調査

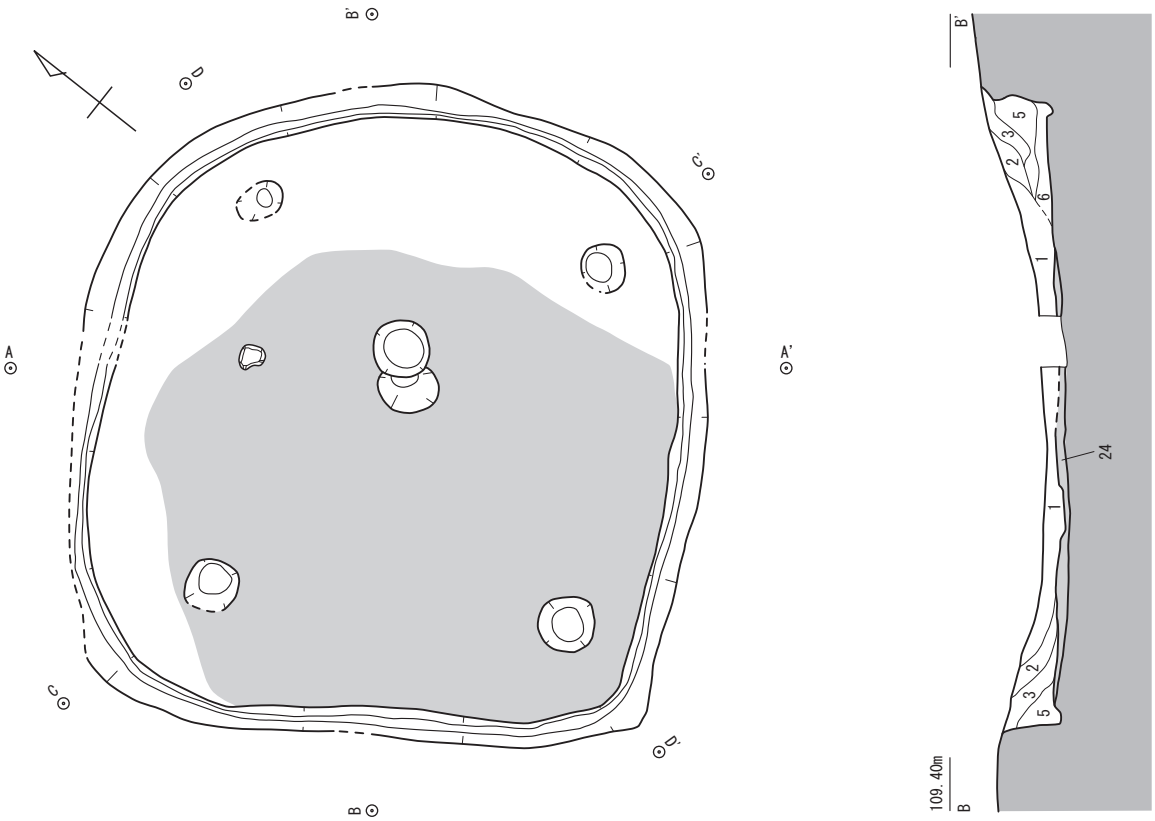
SI1（第75・76図、PL.37・47）

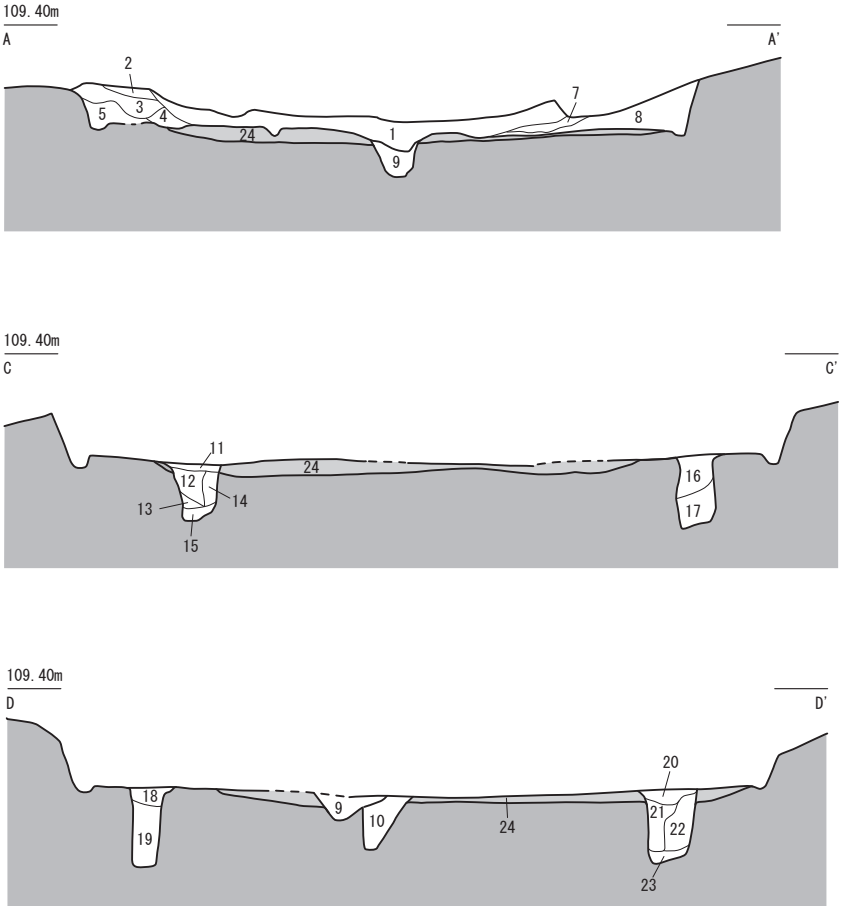
T73-10d-3H-2aグリッドにある。ここは丘陵頂部の先端部にあたり、緩斜面となるが、北側約60㎝からは斜面となる。越敷山77号墳の墳丘除去後に検出し、南側は周溝によって切られている。検出面は窪んでおり、古墳を構築する直前まで窪地であったとみられる。

平面形は東側が張り出す歪な隅丸方形を呈し、規模は長軸5.15m、短軸5.00m、深さ0.35mを測る。床面にはピットが６基あり、このうち、P1～4は柱穴、P5・6は中央ピットと考えられる。P1～4の平面形は円形を呈し、規模はP1が直径37㎝、深さ64㎝、P2が直径38㎝、深さ55㎝、P3が直径44㎝、深さ57㎝、P4が直径43㎝、深さ45㎝を測る。このうちP3・4では、断面においてそれぞれ直径13㎝、17㎝の柱痕跡が認められる。柱間の距離は、P1から時計回りに2.74m、2.86m、2.85m、3.07mと斜面下方にあたるP1とP4の間がやや広くなる。P5・6は中央やや東側にあり、P5がP6を切る。平面形は円形を呈し、規模はP5が直径45㎝、深さ18㎝、P6が直径49㎝、深さ43㎝を測る。床面の南西側において貼床が認められ、その厚さは最大で12㎝ある。壁際には幅15㎝、深さ10㎝の壁溝が巡る。

写真10　SI1１層除去状況

埋土は１～８層を確認し、平面や断面の観察から、８層から１層の順に堆積したと思われる。これらの層の広がりについては、７・８層が南側の壁際、２～６層がその他の壁際において認められ、この竪穴建物は、斜面上方にあたる南側の壁際から堆積が始



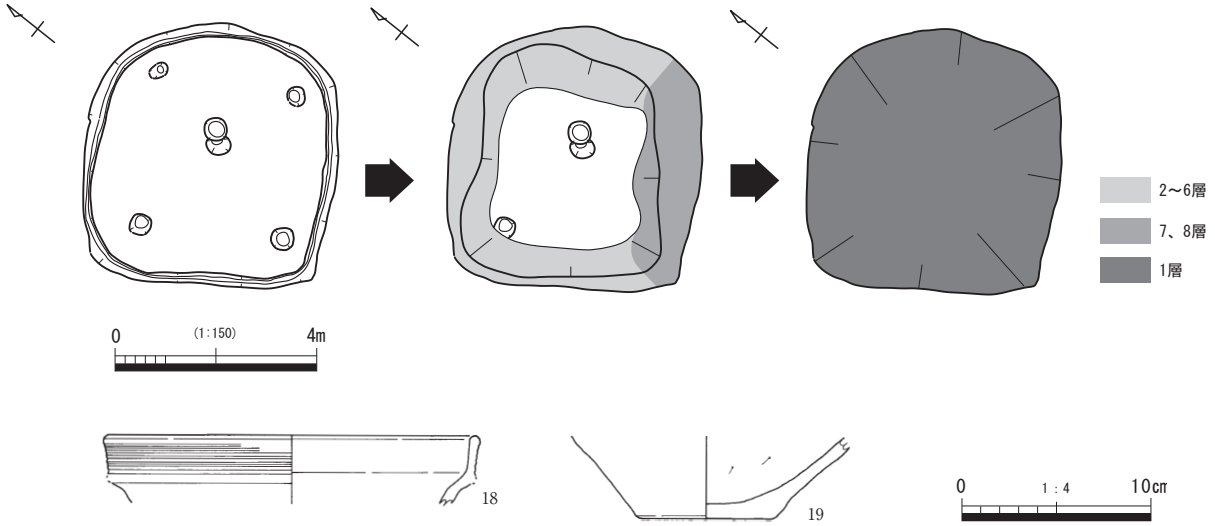


貼床範囲

1　10YR2/1 黒色土 (炭を少し含む)
2　10YR4/2 灰黄褐色土
3　10YR4/4 褐色土 (黄褐色土を含む)
4　10YR3/2 黒褐色土 (炭を少し含む)
5　10YR5/4 にぶい黄褐色土
6　10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
7　10YR3/2 黒褐色土
8　10YR3/3 暗褐色土
　(ブロック、黒褐色土、炭を含む)
9　10YR5/2 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
10 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
11 10YR3/2 黒褐色土
　(礫、白色粒、炭を少し含む)
12 10YR3/1 黒褐色土
13 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
14 10YR6/4 にぶい黄橙色土
　(褐灰色土を少し含む)
15 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
16 10YR4/2 灰黄褐色土
　(ブロック、炭を少し含む)
17 10YR5/4 にぶい黄褐色土
　(ブロックを多く含む)
18 10YR5/3 にぶい黄褐色土
　(白色粒、炭を少し含む)
19 10YR6/4 にぶい黄橙色土
20 10YR4/2 灰黄褐色土
　(白色粒、ブロックを含む)
21 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
22 10YR6/4 にぶい黄橙色土
　(ブロックを多く含む)
23 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを含む)
24 10YR4/2 灰黄褐色土
　(ブロックを多く含む、貼床)

0　(1:60)　2m

第75図　SI1



第76図　SI1埋没状況模式図・出土遺物

第76図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色　調	備　考
18	SI1	検出面	甕	※19.5	△3.7	―	外面：ナデ、擬凹線文、内面：ナデ	明黄褐色	弥生土器、煤付着
19	SI1	検出面	壺	―	△4.4	―	外面：ナデ、内面：ヘラケズリ	橙色	弥生土器、黒斑有

まり、次に他の壁際、そして中心と埋まっていったと考えられる。なお、中央付近において埋土が15cm程度の厚さしかなかったことから、堆積速度は比較的ゆっくりとしたものであったと思われる。

遺物は埋土中から弥生土器、床面から作業台が出土し、このうち18・19を図示した。18は甕、19は壺の底部である。時期は弥生時代後期中葉から後葉頃と考えられる。

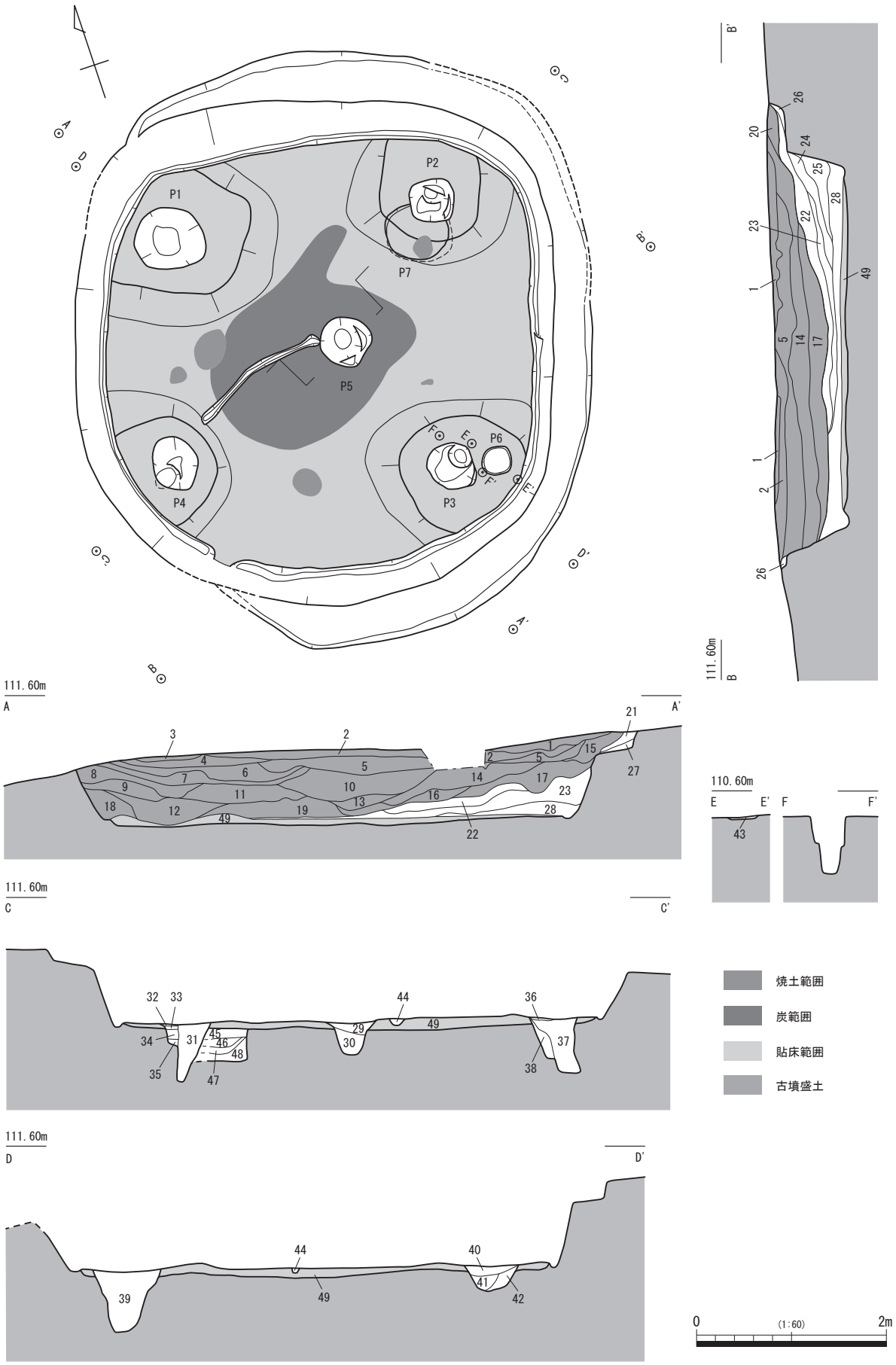
SI2（第77～79図、PL.38・47）

T73-10d-2H-9cグリッドにあり、越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。ここは丘陵頂部先端の緩斜面にあたり、北側の斜面下方にはSI1がある。

平面形はやや胴の張る隅丸方形を呈し、掘り方上部には、西側を除き幅56cm、深さ20cmの段が認め

写真11　SI2検出状況

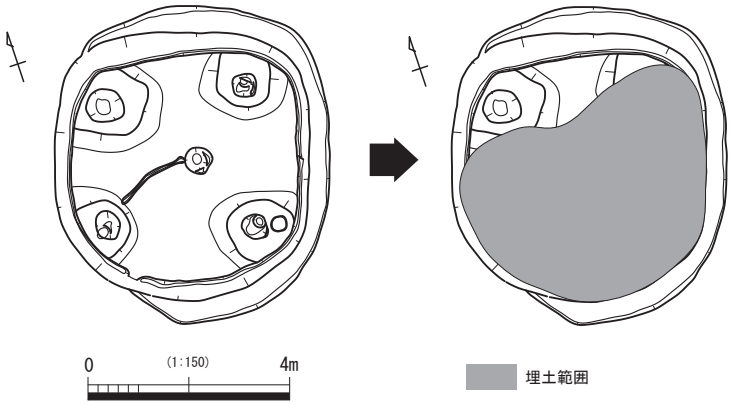
写真12　SI2床面検出状況


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
111.60m
110.60m
焼土範囲
炭範囲
貼床範囲
古墳盛土
0
(1:60)
2m

第77図　SI2①

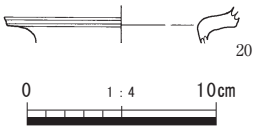
1　7.5YR3/1 黒褐色土
2　10YR5/2 灰黄褐色土
3　10YR4/2 灰黄褐色土
4　10YR4/1 褐灰色土 (ブロックを少し含む)
5　10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
6　10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
7　10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを少し含む)
8　10YR6/4 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く含む)
9　10YR5/2 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
10 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
11 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
12 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
13 10YR4/2 灰黄褐色土
(ブロックを多く、炭を僅かに含む)
14 10YR6/3 にぶい黄橙色土
(ブロックを多く、炭を少し含む)
15 10YR4/2灰黄褐色土 (炭を僅かに含む)
16 10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
17 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを少し含む)
18 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
19 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
20 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
21 10YR3/2 黒褐色土
22 10YR3/1 黒褐色土 (ブロックを少し含む)
23 10YR2/1 黒色土 (しまり良、ブロック土僅含)
24 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
25 10YR2/1 黒色土
(しまり良、ブロックを少し、炭を僅かに含む)
26 10YR5/3 にぶい黄褐色土
27 10YR4/2 灰黄褐色土 (白色粒、ブロックを少し含む)
28 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
29 10YR4/2 灰黄褐色土
30 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
31 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
32 10YR6/3 にぶい黄橙色土
33 7.5YR6/8 橙色土 (白色粒を含む)
34 10YR5/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを少し含む)
35 10YR6/3 にぶい黄橙色土
36 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (ブロックを含む)
37 10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く炭を僅かに含む)
38 10YR6/6 明黄褐色土 (ブロックを多く含む)
39 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
40 10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
41 10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
42 10YR6/3 にぶい黄橙色土 (ブロックを多く含む)
43 10YR5/4 にぶい黄褐色土
44 10YR3/4 暗褐色土 (橙色土を少し、炭を含む)
45 7.5YR6/6 橙色土 (ブロックを含む)
46 10YR3/1 黒褐色土
47 10YR4/1 褐灰色土 (橙色土を少し含む)
48 10YR3/1黒褐色土
49 7.5YR7/6 橙色土
(白色粒を多く、灰黄褐色土を多く含む)

焼土　2.5YR4/6 赤褐色



第78図　SI2②・埋没状況模式図

られる。規模は、段を含め長軸6.30m、短軸5.40m、深さ0.80mを測る。床面には貼床が貼られており、そこでピット６基を確認した。このうちP1～4は柱穴、P5は中央ピットであり、P6についてはP3に近接する直径34cm、深さ３cmの浅いピットである。P1～4の平面形は歪な円形を呈し、規模はP1が直径75cm、深さ63cm、P2が直径51cm、深さ61cm、P3が直径52cm、深さ57cm、P4が直径61cm、深さ56cmを測る。柱間の距離はP1から時計回りに2.81m、2.74m、3.10m、2.46mとなる。これらの周辺には貼床が厚く盛られており、若干高くなる。P5は平面形が円形を呈し、規模は直径55cm、深さ34cmを測り、西側には幅７cm、深さ６cmの溝がP4へとのびる。その周囲には炭が広がっており、炭の周りには焼土面が５ヶ所認められる。なお、貼床除去後には、建て替え前のものとみられるP7を確認した。P7は平面形が歪な円形を呈し、規模は直径63cm、深さ32cmを測る。

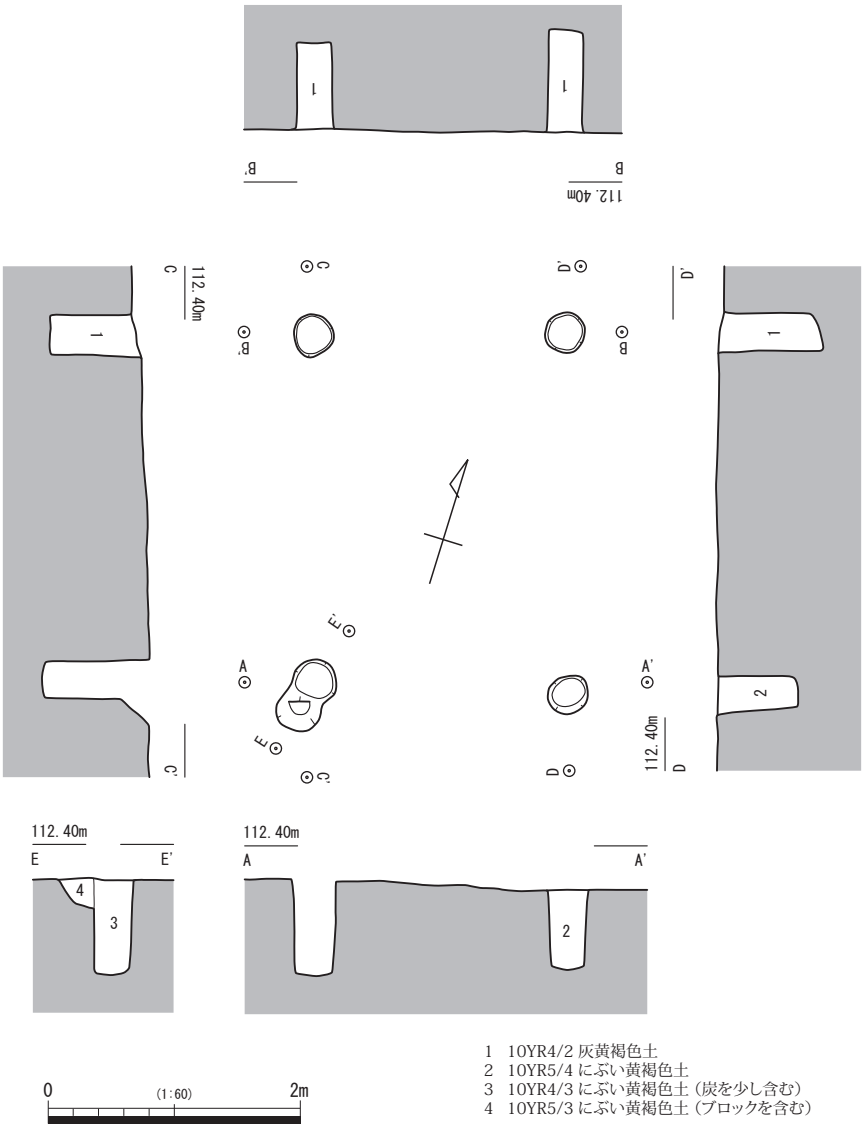


第79図　SI2出土遺物

埋土は１～20層が越敷山49号墳の築造に伴う造成土と見做

第79図　土器観察表

遺物番号	遺構名	層　位	器　種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	施文・調整	色　調	備　考
20	SI2	検出面	甕	—	△1.9	—	外面：ナデ、沈線文、内面：ナデ	橙色	弥生土器



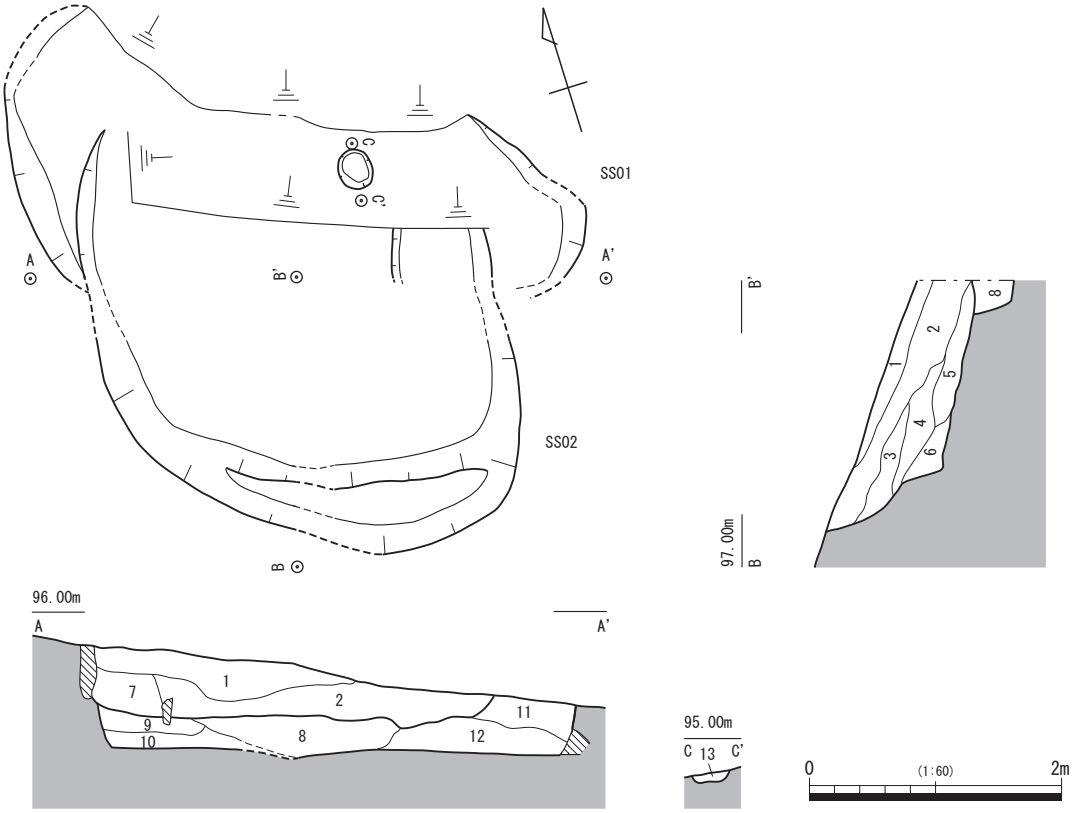
第80図　SB1

せることから、SI1と同様、古墳を構築する直前まで窪地であったとみられる。それ以外の21～28については、南側を中心に堆積しており、北側ではほとんど認められないことから、SI2は斜面上方にあたる南側から徐々に埋没したものと考えられる。なお、越敷山49号墳の築造直前において床面全体に埋土が堆積していなかった状況を考えると、SI1と同様、堆積速度はかなりゆっくりとしたものであったと思われる。

遺物は埋土中から僅かに土器片が出土し、このうち20を図化した。20は甕の口縁部の一部であり、弥生時代後期頃の特徴を示す。時期は出土遺物や遺構の形状、埋土の堆積状況などを考えると、SI1と時期差はあまりなかったものと思われる。

SB1（第80図、PL.39）

T73-10d-3H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSK27・28がある。



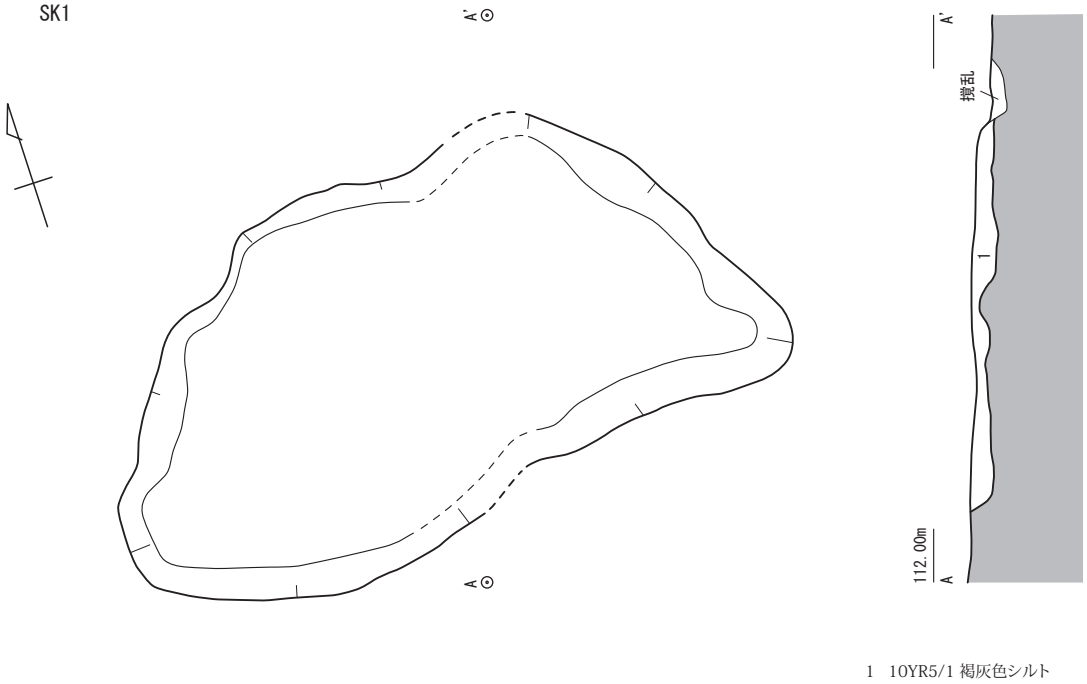
1　10YR6/2 灰黄褐色シルト
　(にぶい黄褐色シルトブロックを含む)
2　10YR4/1 褐灰色シルト
3　10YR5/1 褐灰色シルト
4　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト
5　10YR5/1 褐灰色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
6　10YR5/6 黄褐色シルト
7　10YR4/2 灰黄褐色シルト (にぶい黄褐色シルトを含む)
8　10YR5/2 灰黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
9　10YR3/3 暗褐色シルト
10 10YR5/2 灰黄褐色シルト (にぶい黄褐色シルトを含む)
11 10YR6/2 灰黄褐色シルト
12 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト (明黄褐色シルトブロックを含む)
13 10YR3/2 黒褐色粘土

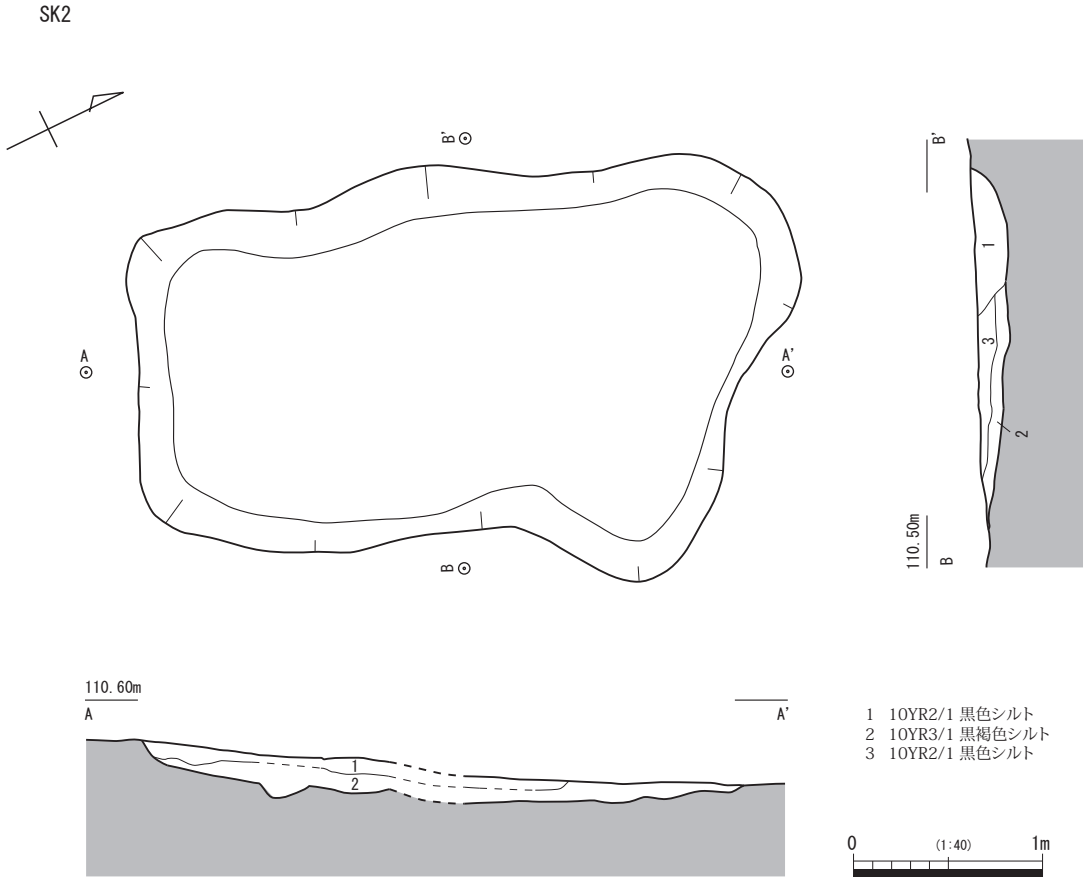
第81図　SS1・2

１間×１間の掘立柱建物であり、柱間距離はP1から時計回りに2.00m、2.86m、1.99m、2.77mを測る。柱の掘り方は概ね円形を呈するが、P4については南側に段があり、「８」の字形を呈する。これらの規模については、P1が直径34cm、深さ68cm、P2が直径31cm、深さ82cm、P3が直径33cm、深さ52cm、P4が長軸60cm、短軸33cm、深さ75cmである。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山51号墳との関係から、古墳時代中期以前と考えられる。

SS1（第81図、PL.39）

T73-10d-2H-1eグリッドにある。ここは南西から北東へと下る斜面上にあたる。SS2によって切られており、南側の一部は壊されている。また、北側は撹乱によって失われている。平面形は歪な楕円形を呈しており、規模は長軸4.6m、短軸1.6m以上、深さ0.30mを測る。底面は南側へと傾斜しており、南北の高低差は30cmある。底面の北側では直径25cm、深さ7cmのピットを１基確認した。遺物は埋土中から出土しておらず、時期は不明である。


SK1
A'
A
A'
撹乱
1
112.00m
A
1　10YR5/1 褐灰色シルト


SK2
B'
A
A'
B
B'
1
3
2
110.50m
B
110.60m
A
A'
1
2
1　10YR2/1 黒色シルト
2　10YR3/1 黒褐色シルト
3　10YR2/1 黒色シルト
0
(1:40)
1m

第82図　SK1・2

SS2（第81図、PL.39）

T73-10d-2H-7a・bグリッドにある。SS1と重複しており、これを切る。南側はSS1と同様、撹乱によって失われている。平面形は南西側が張り出した歪な円形を呈し、規模は長軸3.24m、短軸2.44m以上、深さ0.66mを測る。底面は、東西方向はほぼ平坦であるが、南側へ傾斜しており、南北の高低差は20cmある。また、底面の北東隅において幅80cmの溝状の掘り込みが認められる。遺物は埋土中から出土しておらず、時期は不明である。

SK1（第82図、PL.40）

T73-10d-2H-10bグリッドにあり、越敷山49号墳の墳頂部で検出した。平面形は歪な方形または楕円形を呈し、規模は長軸3.42m、短軸1.94m、深さ0.13mを測る。底面には凹凸が認められ歪である。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山49号墳との関係から、古墳時代中期後半以降と考えられる。

SK2（第82図、PL.40）

T73-10d-2H-10a・3H-1aグリッドにある。越敷山49号墳・51号墳の周溝と重複しており、これらを切る。平面形は歪な隅丸方形を呈しており、規模は長軸3.22m、短軸1.92m、深さ0.15mを測る。底面は概ね平坦だが一部で凹凸がみられる。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山49号墳・51号墳との関係から古墳時代中期後半以降と考えられる。

SK3（第83図、PL.40）

T73-10d-1H-9d・eグリッドにある。ここは丘陵尾根上にあたり、北から南へと下る緩斜面となる。すぐ東側にはSK4がある。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.28m、短軸1.09m、深さ0.76mを測る。底面は平坦であり、その周囲には幅14cm、深さ２～５cmの溝が巡る。壁面は外傾しながら立ち上がり、断面形は逆台形をなす。埋土中から遺物は出土しなかった。

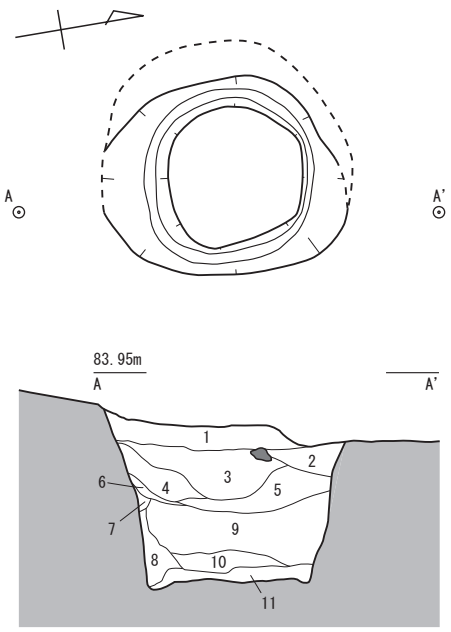
SK4（第83図、PL.40）

T73-10d-1H-9dグリッドにあり、SK3と近接する。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸1.00m以上、深さ0.79mを測る。底面は平坦であり、壁面はやや外傾しつつ立ち上がる。このため断面形は逆台形となる。埋土中から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK5（第83図、PL.40）

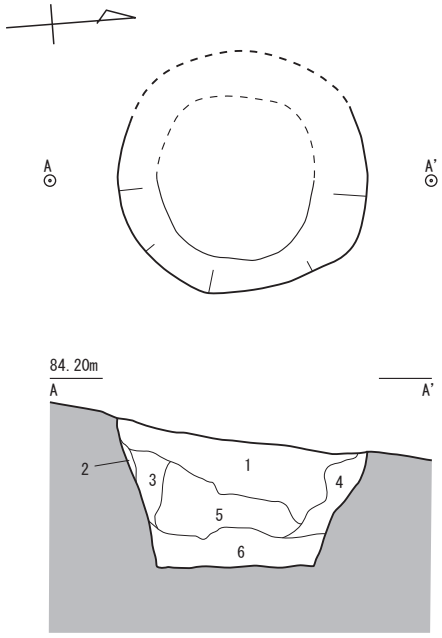
T73-10d-2H-5bグリッドにあり、西側にはSK14、東側にはSK6がある。ここは南西から北西へと下る斜面であるが、後世において掘削がなされており、段状の地形となるため、遺構上面は削平を受けているとみられる。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.61m、短軸0.60m、深さ0.68mを測る。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がるため、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

SK3



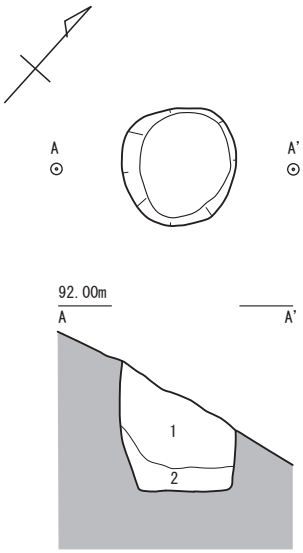
1　7.5YR2/1 黒色細砂
2　7.5YR3/1黒褐色微砂
3　10YR3/1 黒褐色微砂 (にぶい黄橙色微砂が混じる)
4　10YR3/1 黒褐色微砂
5　10YR4/1 黒褐色微砂 (にぶい黄橙色微砂が混じる)
6　10YR2/1 黒色微砂
7　7.5YR4/1 褐灰色微砂 (壁の崩落土)
8　10YR3/1 黒褐色微砂
9　10YR4/1 黒褐色微砂
10 7.5YR3/1 黒褐色微砂
11 7.5YR4/1 褐灰色微砂

SK4



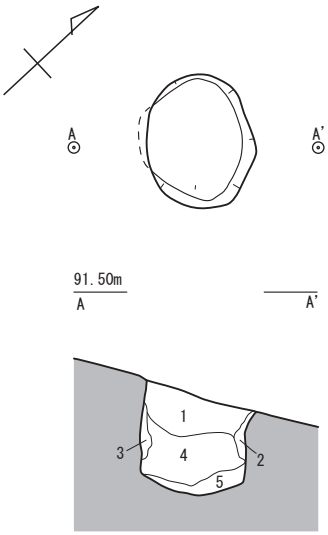
1　10YR5/2 灰黄褐色微砂 (にぶい黄褐色粘土ブロックを含む)
2　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土
3　10YR4/1 褐灰色微砂
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト
5　10YR5/2 灰黄褐色微砂 (にぶい黄褐色粘土を含む)
6　10YR4/1 褐灰色微砂 (にぶい黄褐色粘土を含む)

SK5



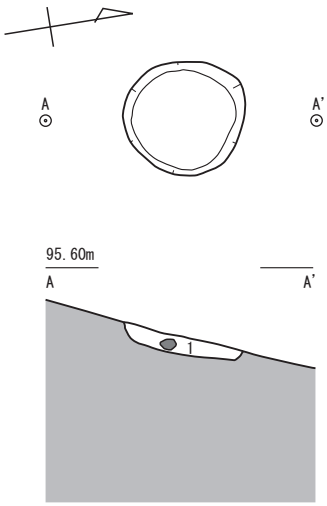
1　7.5YR3/2 黒褐色シルト (礫を多く含む)
2　7.5YR3/3 暗褐色シルト
　(にぶい黄色シルトを含む)

SK6



1　10YR3/1 黒褐色粘土
2　10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
　(明黄褐色シルトを含む)
3　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
4　10YR2/1 黒褐色粘土 (礫を多く含む)
5　10YR3/2 黒褐色粘土

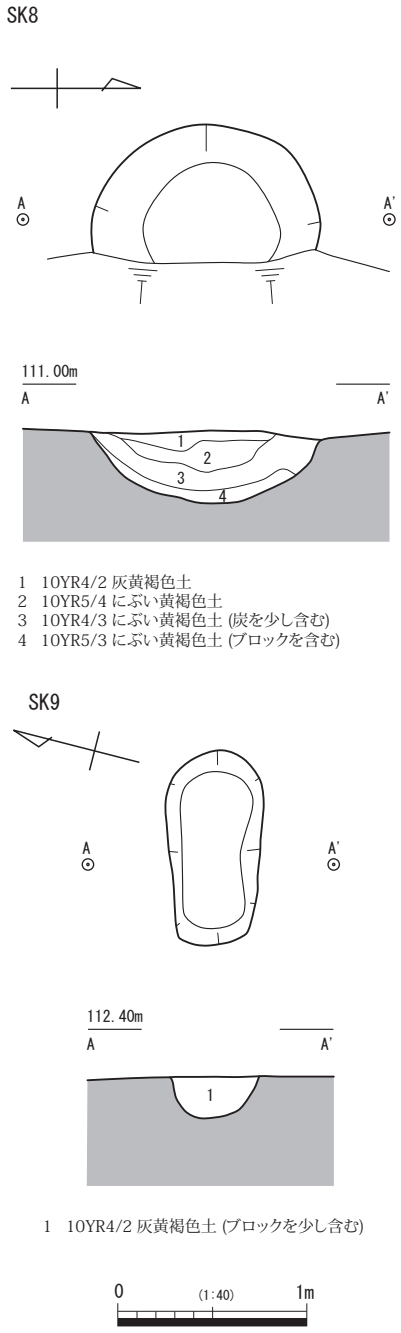
SK7



1　10YR5/1 褐灰色粘土

0　(1:40)　1m

第83図　SK3～7



第84図　SK8・9

SK6（第83図、PL.40）

T73-10d-2H-5bグリッドにあり、周囲にはSK5・14がある。SK5・14と同様、遺構上部は削平を受けていると考えられる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.57m、深さ0.60mを測る。底面は中央付近がやや窪み、皿状となる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

SK7（第83図）

T73-10d-2H-7aグリッドにあり、SS1・2の東側に近接する。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.63m、短軸0.60m、深さ0.10mを測る。底面は南から北へとやや傾斜しており、壁面は外傾して立ち上がる。断面形は皿状を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。このため時期は不明である。

SK8（第84図、PL.41）

T73-10d-2H-10cグリッドにある。越敷山49号墳の築造に伴い削平を受けている。東側はSI2によって切られており、半分近くが失われている。平面形は円形を呈し、規模は直径1.22m、深さ0.38mを測る。底面は中心部にかけて窪み、壁面は外傾して立ち上がる。このため断面形は半円形をなす。埋土は４層を確認しているが、その色調が灰黄褐色、にぶい黄褐色となっており、周辺には黒色土が堆積していなかった状況がうかがわれる。遺物は埋土中から出土しなかった。時期はSI2との関係から弥生時代後期以前と考えられる。

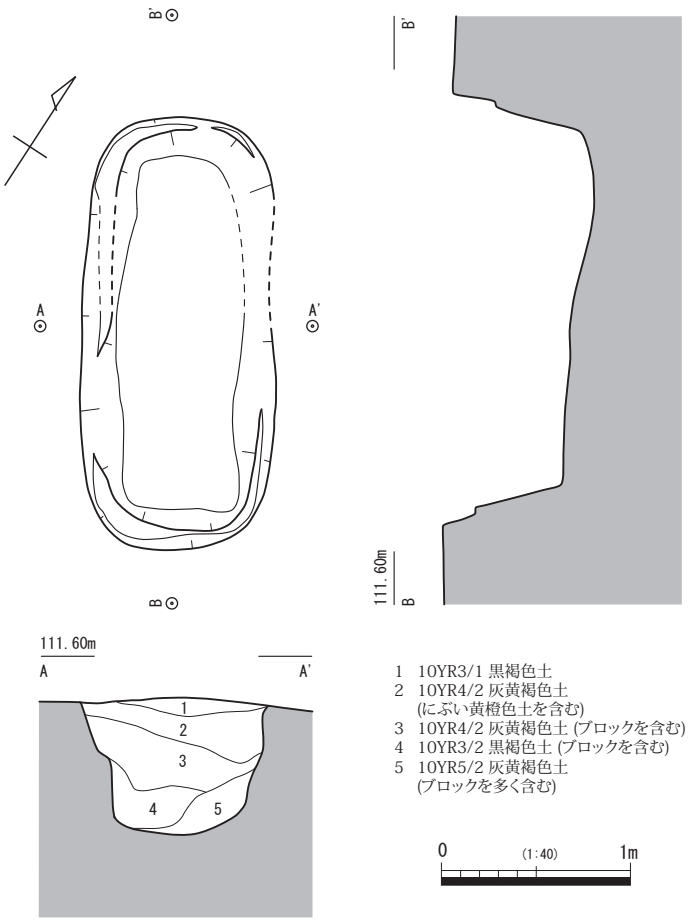
SK9（第80図、PL.41）

T73-10d-2H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の盛土除去後に検出した。平面形は東側が丸味をもつ歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.04m、短軸0.47m、深さ0.22mを測る。埋土中から遺物は出土しなかった。時期は越敷山51号墳との関係から、古墳時代中期以前と考えられる。

SK10（第85図、PL.41）

T73-10d-2H-10bグリッドにあり、越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSI2、SK21～23があり、このうちSK23を切る。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.30m、短軸1.00m、深さ0.74mを測る。遺構上部には段が認められ、２段に掘り込まれている。底面は概ね平坦であるが、SK23と

重複する部分ではやや窪む。埋土は５層を確認し、このうち下層にあたる３～５層は、地山ブロックが含まれており、埋め戻されたか、盛られた土が落ち込んで堆積した可能性などが考えられる。遺物は埋土中から出土しなかった。時期は越敷山49号墳との関係から、古墳時代中期以前と考えられる。また、遺構の性格については､形状から土坑墓と考えられる。



第85図　SK10

SK11（第86図、PL.41）

T73-10d-2H2eグリッドにあり、越敷山75号墳によって切られる。ここは丘陵の尾根にあたり、南から北へと下る斜面となる。SK12・13とほぼ直線的に並び、SK12との距離は15.50mである。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.80m、深さ1.18mを測る。底面は平坦となり、その中心部には長軸19㎝、短軸15㎝、深さ23㎝の歪な円形を呈するピットがある。壁面はやや外傾しながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から落とし穴と考えられ、時期は縄文時代頃と思われる。

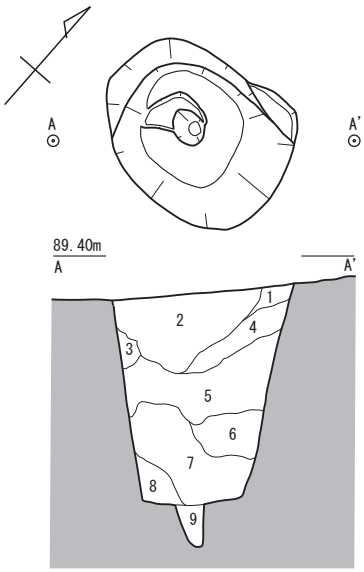
SK12（第86図、PL.41）

T73-10d-2H-3eグリッドにあり、越敷山98号墳の埋葬施設によって切られる。SK11・13とほぼ直線的に並び、SK11との距離は15.5m、SK13との距離は18.5mである。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.04m、短軸0.96m、深さ0.84mを測る。底面は概ね平坦であり、その中心には直径16㎝、深さ25㎝の円形のピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK13（第86図、PL.42）

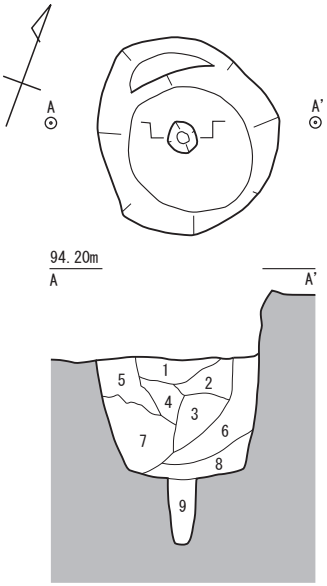
T73-10d-2H-5dグリッドにあり、越敷山123号墳の埋葬施設によって切られる。SK11・12とほぼ直線的に並び、SK12との距離は18.5mである。平面形は歪な隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.16m、短軸0.69m、深さ0.99mを測る。底面は概ね平坦であり、その中心には長軸22㎝、短軸17㎝、深さ19㎝の歪な円形を呈するピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、断面形は逆台形をなす。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK11



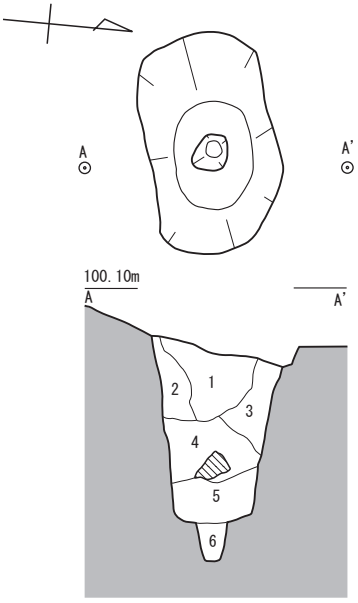
1　10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
2　10YR2/3 黒褐色シルト (炭を多く含む)
3　10YR5/8 黄褐色シルト
4　10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭を含む)
5　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (3層を含む)
6　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
7　10YR3/1 黒褐色シルト
　(3層ブロックを含む)
8　7.5YR5/6 明褐色シルト
9　10YR3/2 黒褐色シルト

SK12



1　10YR2/1 黒色シルト
2　10YR3/1 黒褐色シルト
3　10YR3/3 暗褐色シルト
4　10Y2/1 黒色粘土
　(黄褐色シルトブロックを含む)
5　7.5YR5/6 明褐色シルト
　(灰黄褐色シルトを含む)
6　7.5YR5/1 褐灰色シルト
　(明褐色シルトブロックを含む)
7　7.5YR3/1 黒褐色粘土
8　10YR3/2 黒褐色粘土
9　10YR4/1 褐灰色シルト

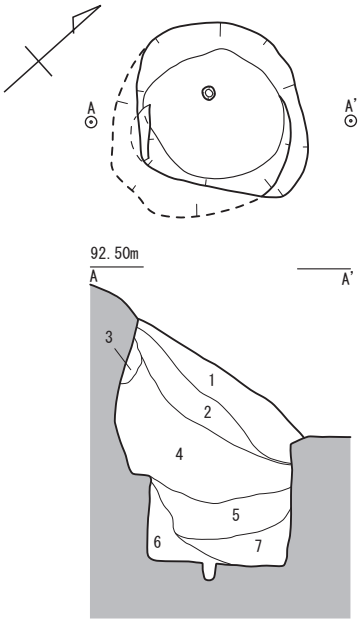
SK13



1　10YR5/1 褐灰色シルト (炭を多く含む)
2　7.5YR5/2 灰褐色シルト
　(にぶい橙色シルト、炭を含む
3　7.5YR5/2 灰褐色シルト (炭を含む)
4　7.5YR4/2 灰褐色シルト (炭を含む)
5　7.5YR5/1 褐灰色シルト
6　7.5YR4/4 褐色シルト
　(粘性有、灰褐色シルトブロックを含む)

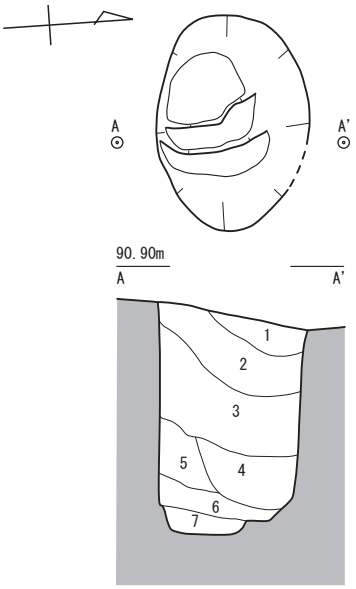
0　(1:40)　1m

SK14



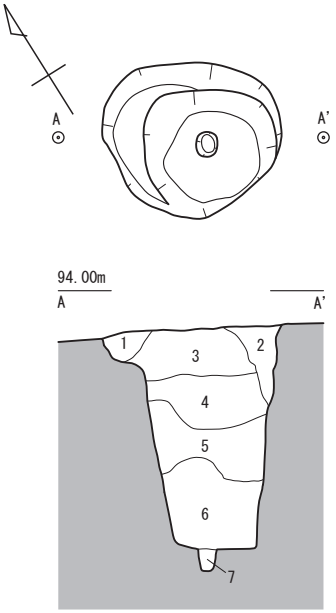
1　7.5YR5/1 褐灰色粘土
2　7.5YR3/2 黒褐色粘土
3　7.5YR3/2 暗褐色シルト
4　7.5YR3/1 黒褐色粘土
5　7.5YR3/2 黒褐色シルト
6　7.5YR3/4 暗褐色粘土
7　7.5YR4/2 灰褐色シルト

SK15



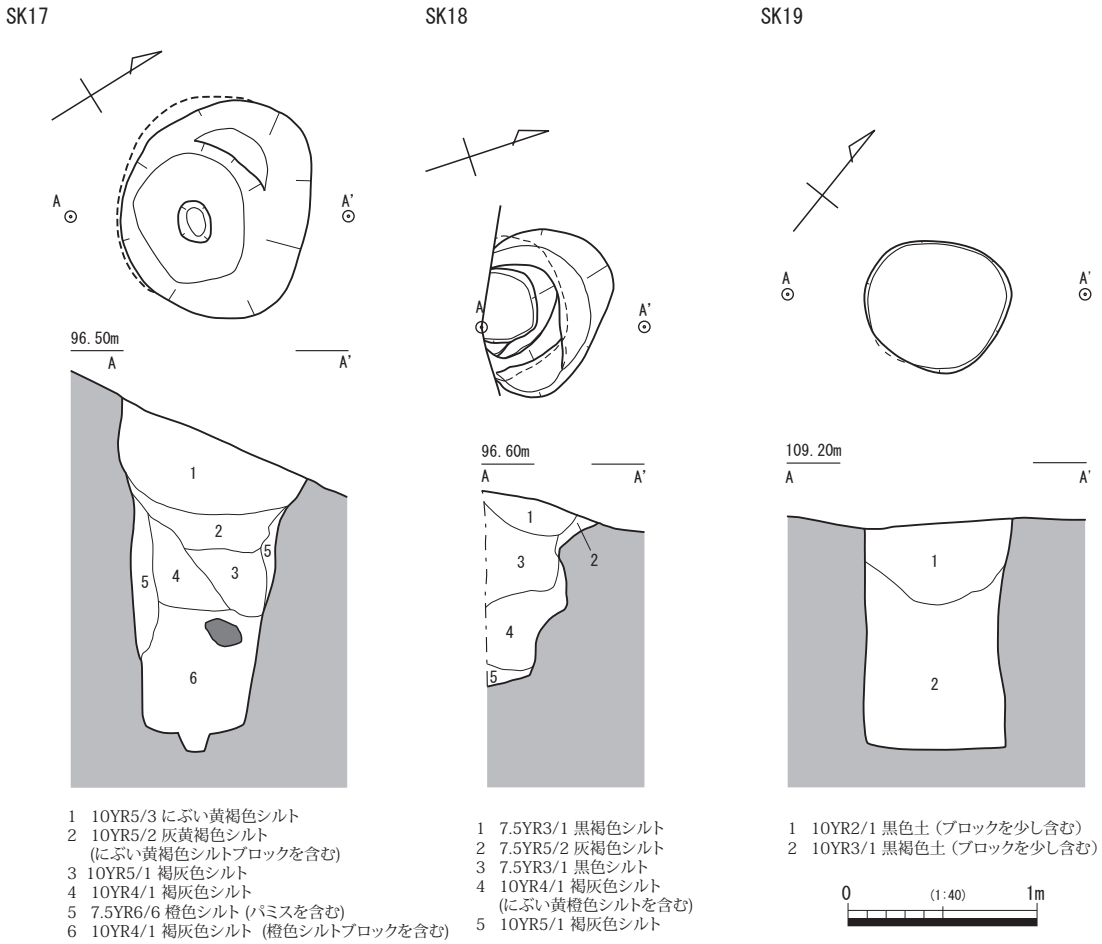
1　10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (炭を含む)
2　10YR4/2 灰黄褐色シルト (炭、パミスを含む)
3　10YR4/2 灰黄褐色シルト
　(にぶい黄褐色シルトを含む)
4　10YR4/2 灰黄褐色粘土
5　10YR4/4 褐色粘土 (パミスを含む)
6　10YR4/1 にぶい黄褐色粘土 (パミスを含む)
7　10YR2/2 黒褐色粘土 (炭を含む)

SK16



1　7.5YR4/1 褐灰色シルト
2　7.5YR4/1 褐灰色シルト
3　7.5YR2/1 黒色粘土 (礫、パミスを含む)
4　7.5YR2/1 黒色粘土 (パミスを含む)
5　10YR3/1 黒褐色粘土
6　10YR2/1 黒色粘土
7　10YR4/1 黒褐色粘土
　(褐色粘土、パミスを含む)

第86図　SK11～16



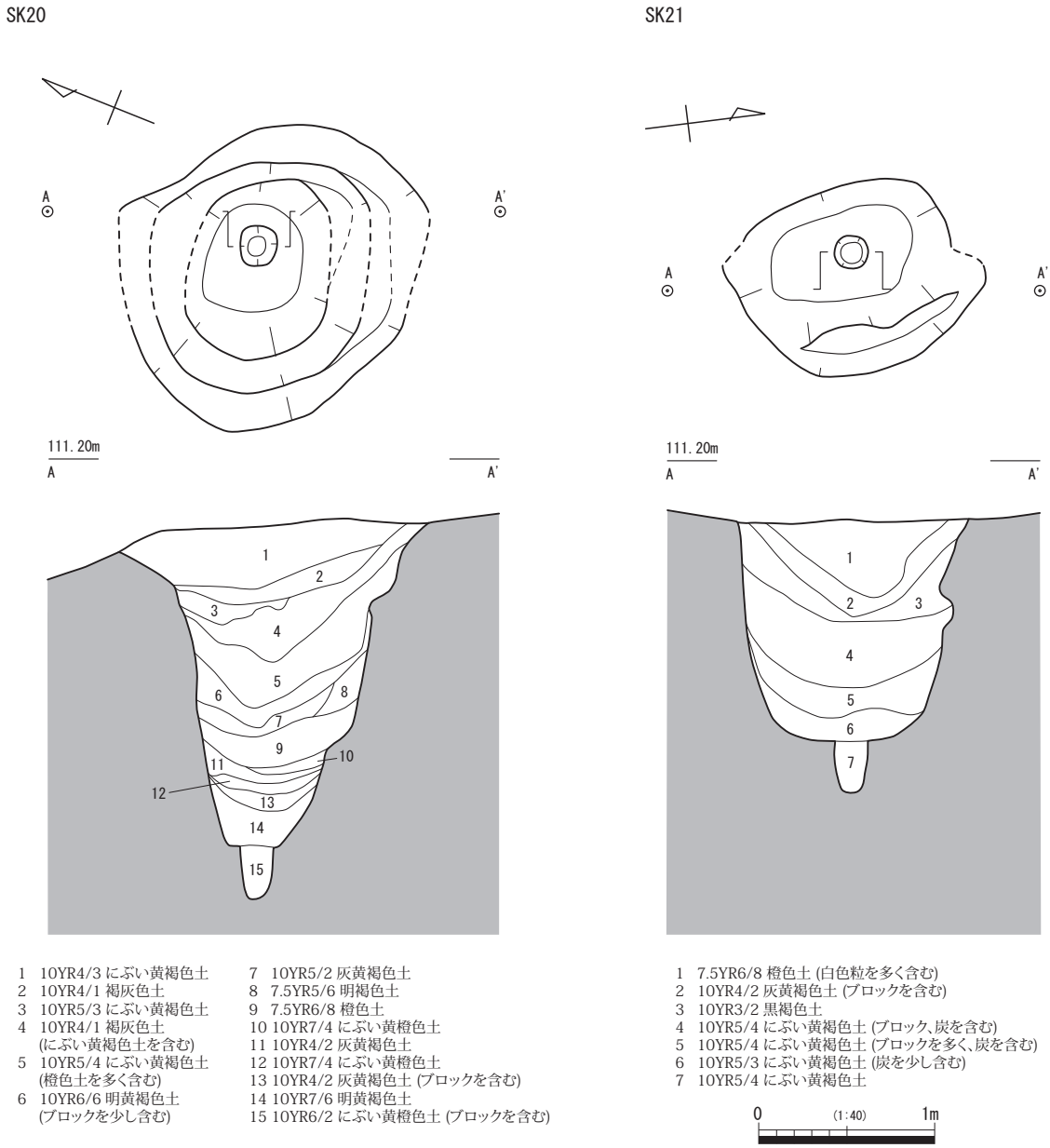
第87図　SK17～19

SK14（第86図、PL.42）

T73-10d-2H-5bグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にあり、後世の掘削によって周囲は削平されている。東側はSK5と接する。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.98m、短軸0.88m、深さ1.31mを測る。底面は平坦であり、その中心には直径８㎝、深さ８㎝の円形のピットがある。壁面は垂直に立ち上がるが、南側の上部は抉られており、崩落したものと考えられる。断面形は概ね箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK15（第86図、PL.42）

T73-10d-2H-5aグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にある。９m西側にはSK6、13m南側にはSK16がある。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.14m、短軸0.81m、深さ1.22mを測る。底面は西側にかけて段状に落ち込む。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は概ね箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。



第88図　SK20・21

SK16（第86図、PL.42）

T73-10d-2H-7aグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にあり、周囲にはSS1・2、SK7・17・18がある。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.95m、短軸0.83m、深さ1.18mを測る。底面は平坦であり、その中心には直径12cm、深さ12cmの円形のピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、北西側の上部には段がある。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK17（第87図、PL.42）

T73-10d-2H-7aグリッドにある。南西から北東へと下る斜面にあり、周囲にはSS1・2、SK7・16・18がある。平面形は円形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.98m、深さ1.77mを測る。底面は平坦であり、その中心には長軸22㎝、短軸16㎝、深さ10㎝の歪な円形を呈するピットがある。壁面はやや外傾して立ち上がり、上部は「ハ」の字形にやや広がり、断面形は概ね逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK18（第87図、PL.42）

T73-10d-2H-7aグリッドにある。南側半分は調査区外にある。南西から北東へと下る斜面にあり、周囲にはSS1・2、SK7・16・17がある。平面形は円形を呈し、規模は長軸0.88m、短軸0.62m以上、深さ1.03mを測る。底面は平坦であるが、南側に向かってやや傾斜する。壁面は垂直に立ち上がるが、中程が崩落によって抉れており、上部は外側に広がっている。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK19（第87図、PL.43）

T73-10d-2H-9cグリッドにある。南東から北西へと下る斜面にあり、越敷山77号墳の周溝によって切られる。東側にはSI1が近接する。平面形は円形を呈し、規模は直径0.78m、深さ1.18mを測る。底面は平坦であり、ピットは認められない。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK20（第88図、PL.43）

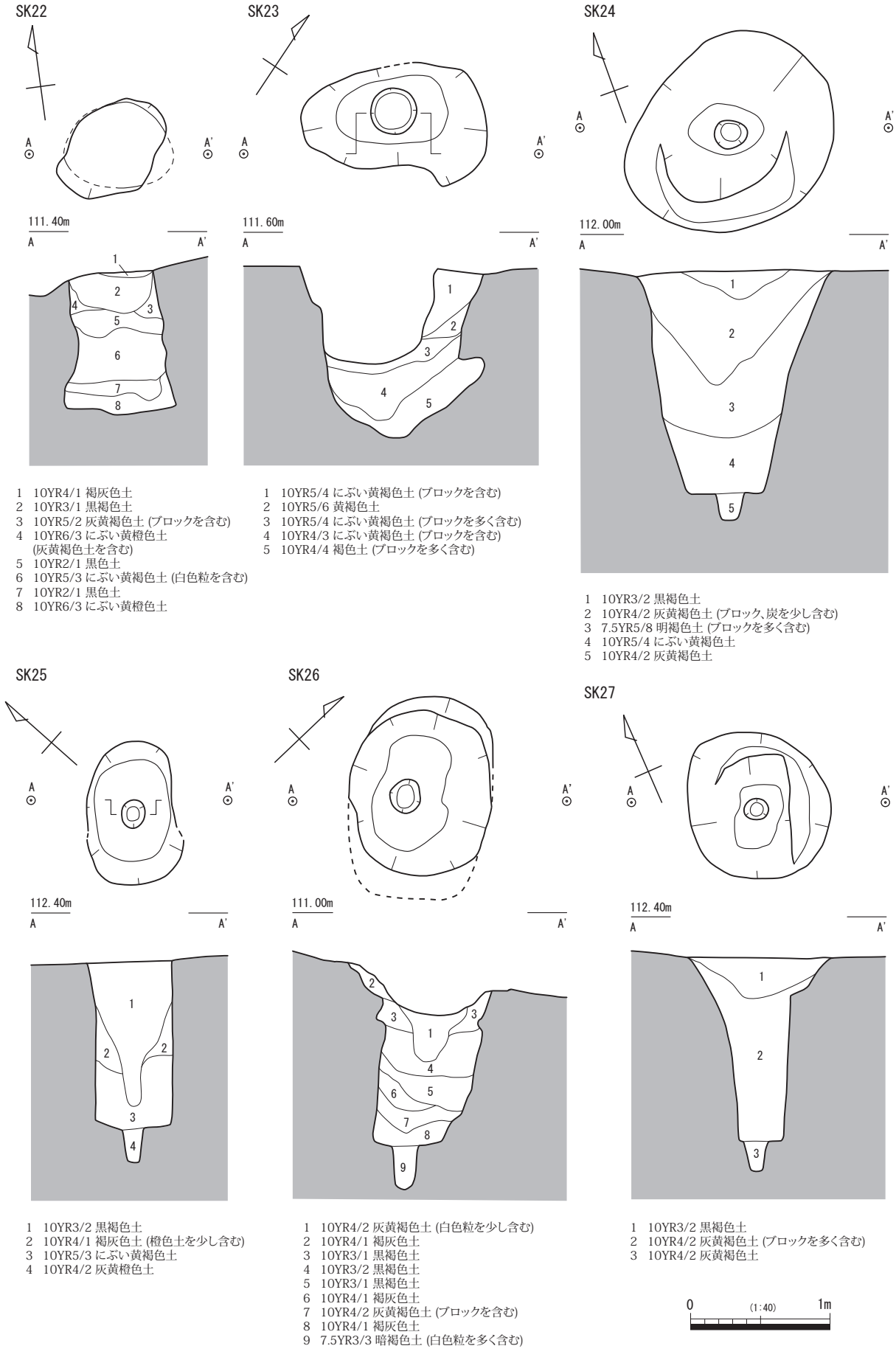
T73-10d-2H-9b・10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。周囲にはSI2、SK21～23があり、このうちSK21～23と直線的に並ぶ。SK21との距離は４mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は直径1.76m、深さ1.82mを測る。底面は中心にかけて僅かに窪んでおり、その中央に直径22㎝、深さ30㎝の隅丸方形を呈するピットがある。壁面は外傾して立ち上がり、上部で「ハ」の字形に広がる。断面形はすり鉢状を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK21（第88図、PL.43）

T73-10d-2H-10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。西側はSI2によって切られる。SK20・22・23と直線的に並んでおり、SK20との距離は４m、SK22との距離は３mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は長軸1.12m、短軸0.70m、深さ1.22mを測る。底面は平坦であり、中央に直径18㎝、深さ30㎝の円形のピットがある。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK22（第89図、PL.43）

T73-10d-2H-10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。SK20・21・23と直線的に並んでおり、SK21との距離は３m、SK23との距離は2.50mである。平面形は歪な楕円形を呈し、



1　10YR4/1 褐灰色土
2　10YR3/1 黒褐色土
3　10YR5/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
4　10YR6/3 にぶい黄橙色土
　(灰黄褐色土を含む)
5　10YR2/1 黒色土
6　10YR5/3 にぶい黄褐色土 (白色粒を含む)
7　10YR2/1 黒色土
8　10YR6/3 にぶい黄橙色土

1　10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
2　10YR5/6 黄褐色土
3　10YR5/4 にぶい黄褐色土 (ブロックを多く含む)
4　10YR4/3 にぶい黄褐色土 (ブロックを含む)
5　10YR4/4 褐色土 (ブロックを多く含む)

1　10YR3/2 黒褐色土
2　10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロック、炭を少し含む)
3　7.5YR5/8 明褐色土 (ブロックを多く含む)
4　10YR5/4 にぶい黄褐色土
5　10YR4/2 灰黄褐色土

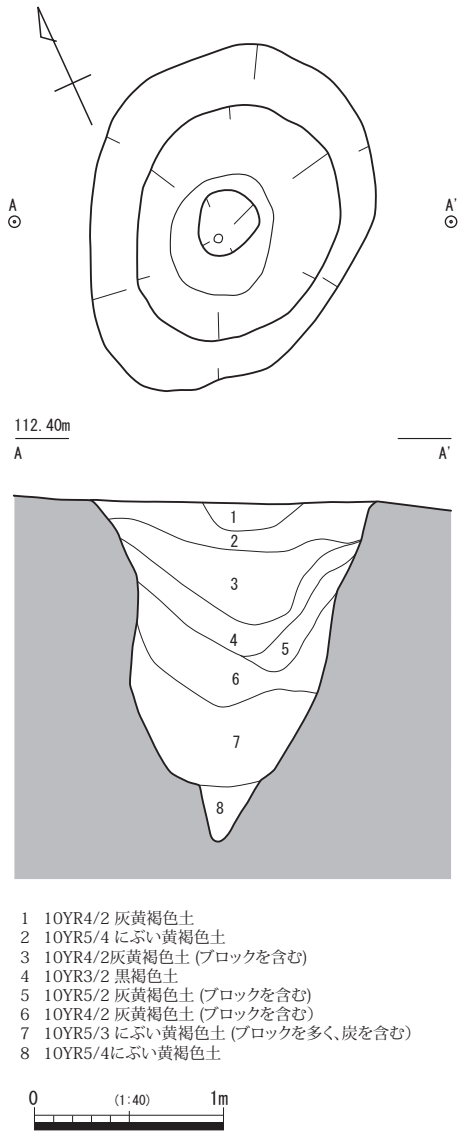
1　10YR3/2 黒褐色土
2　10YR4/1 褐灰色土 (橙色土を少し含む)
3　10YR5/3 にぶい黄褐色土
4　10YR4/2 灰黄橙色土

1　10YR4/2 灰黄褐色土 (白色粒を少し含む)
2　10YR4/1 褐灰色土
3　10YR3/1 黒褐色土
4　10YR3/2 黒褐色土
5　10YR3/1 黒褐色土
6　10YR4/1 褐灰色土
7　10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを含む)
8　10YR4/1 褐灰色土
9　7.5YR3/3 暗褐色土 (白色粒を多く含む)

1　10YR3/2 黒褐色土
2　10YR4/2 灰黄褐色土 (ブロックを多く含む)
3　10YR4/2 灰黄褐色土

第89図　SK22～27

規模は長軸0.86m、短軸0.62m、深さ1.00mを測る。底面は概ね平坦であるが、中心部がやや窪む。壁面はやや内傾して立ち上がり、断面形は台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。



第90図　SK28

SK23（第89図、PL.43）

T73-10d-2H-9b・10bグリッドにある。越敷山49号墳の墳丘除去後に検出した。西側はSK10によって切られる。SK21～23と直線的に並んでおり、SK22との距離は2.5mである。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は長軸1.32m、短軸0.74m、深さ1.16mを測る。底面は窪み、中央に直径34㎝、深さ８㎝の浅いピットがある。壁面は底面付近が抉られるが、やや外傾して立ち上がる。埋土中から遺物は出土しなかった。縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK24（第89図、PL.43）

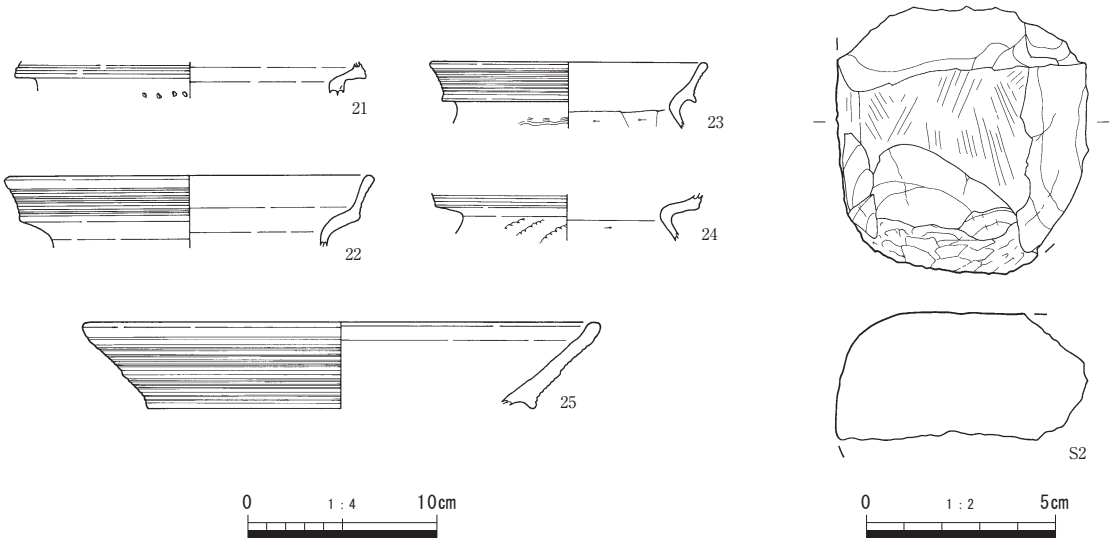
T73-10d-3H-1a・2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周囲にはSK25･26があり、直線的に並ぶ。SK25との距離は7.5m、SK26との距離は5.5mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は直径1.42m、深さ1.60mを測る。底面は平坦であり、中央に直径10㎝、深さ10㎝の円形のピットがある。壁面は外傾して立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK25（第89図、PL.44）

T73-10d-3H-1a・2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。SK24・26と直線的に並び、SK24との距離は7.5mである。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は直軸1.02m、短軸0.62m、深さ1.20mを測る。底面は平坦であり、中央に直径16㎝、深さ24㎝の円形のピットがある。壁面は垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK26（第89図、PL.44）

T73-10d-3G-1jグリッドにあり、越敷山51号墳の周溝によって切られる。SK24・25と直線的に並んでおり、SK25との距離は5.5mである。平面形は楕円形を呈し、規模は直軸1.28m、短軸1.00m、深



第91図　遺構に伴わない遺物

第91図　土器観察表

遺物番号	包含層名	層位	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	施文・調整	色調	備考
21	2H-10b	盛土	甕	—	△2.0	—	外面：ナデ、凹線文、刻目付突帯、内面：ナデ	浅黄橙色	弥生土器
22	2H-10b 3H-2a	盛土	甕	※19.0	△3.9	—	外面：ナデ、擬凹線文、内面：ナデ	橙色	弥生土器
23	3H-2b	表土	甕	※14.2	△3.6	—	外面：ナデ、擬凹線文、波状文、内面：ナデ、ヘラケズリ	明黄褐色	弥生土器
24	2H-10b	盛土	甕	—	△2.4	—	外面：ナデ、沈線文、貝殻による刺突文、内面：ナデ、ヘラケズリ	橙色	弥生土器
25	3H-3a	旧表土	器台	※26.3	△4.6	—	外面：擬凹線文、内面：不明	黄橙色	弥生土器

第91図　石器観察表

遺物番号	包含層名	層位	器種	法量（cm・g）	備考
S2	2H-10d	盛土	敲石	最大長：△7.0、最大幅：6.6、最大厚：△6.1、重量：△229.7	

さ1.24mを測る。底面は平坦であり、中央に直径22cm、深さ32cmの円形のピットがある。壁面は南西側が内傾し、北東側が外傾して立ち上がり、断面形は歪な箱形を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK27（第89図、PL.44）

T73-10d-3H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSB1、SK28がある。平面形は上部に段があり、段から上が歪な円形、段から下が長方形を呈する。規模は直径1.02m、深さ1.30mを測る。底面は平坦であり、中央に直径14cm、深さ22cmの円形のピットがある。壁面は東から北側が垂直に、西から南側が外傾して立ち上がり、断面形は歪な逆台形となる。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

SK28（第90図、PL.44）

T73-10d-3H-2aグリッドにある。越敷山51号墳の墳丘除去後に検出した。周辺にはSB1、SK27が

ある。SK20～24と直線的に並んでおり、SK24との距離は8.5mである。平面形は歪な円形を呈し、規模は直軸1.84m、短軸1.52m、深さ1.50mを測る。底面は窪んでおり、中央に直径28㎝、深さ28㎝の歪な円形を呈するピットがある。壁面は崩落により抉れた部分もあるが、概ね外傾して立ち上がり、断面形はすり鉢状を呈する。埋土中から遺物は出土しなかった。その形状から縄文時代頃の落とし穴と考えられる。

第４節　遺構に伴わない遺物

表土や墳丘盛土中から弥生土器片や石器が若干出土した。弥生土器は中期後葉頃のものを僅かに含むが、大半は弥生時代後期中葉から後葉頃のものであり、丘陵尾根の頂部で確認したSI1やSI2とほぼ同じ時期に属する。

21～24は甕であり、21の頸部には刺突文を施した突帯がつき、24の肩部には二枚貝による刺突文がみられる。25は器台と考えられ、口径が26.3㎝と大型である。S2は磨製石斧を敲石として転用したものとみられ、先端部に敲打の痕跡が認められる。

第４章　自然科学分析の成果

第１節　越敷山51号墳埋葬施設１の赤色顔料および石棺石材について

岡山理科大学生物地球学部　白石　純

１．はじめに

この分析では、以下のことについて検討した。

（１）越敷山51号墳埋葬施設１の石棺石材（蓋・側壁）に付着している赤色物質について

（２）石棺石材の岩石種類とこの石棺石材が同古墳群周辺で産出する石材に肉眼観察では似ていることから、遺跡周辺の石材と岩石学的に類似しているかどうか。

２．分析結果

（１）赤色物質について

分析試料は、石棺石材（蓋・側壁）の内面に付着していた赤色物を、８カ所からサンプリングした試料を分析した。

分析は、蛍光Ｘ線分析法により、赤色物に含まれている成分（元素）について調べた。

なお測定装置・条件・試料は次の通りである。測定装置はSEA5120A（エスアイアイ・ナノテクノロジー社製）を使用した。測定条件はＸ線照射径2.5㎜、電流50～200mA、電圧50kV/15kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。試料は、赤色物質が付着している石材にＸ線を直接照射し測定した。従って非破壊分析である。また、定量値は、FP法（理論値計算法）により算出した。

分析の結果、第３表に示しているように、８点の試料とも11%～15%の鉄（Fe）が検出された。また、試料８からは微量の水銀（Hg）が検出された。以上のことから、この赤色物はベンガラと推定される。また、試料８で検出した微量の水銀は、石棺内から出土した人骨に水銀朱が塗られていたことがわかっており、この水銀朱が石材に付着したものと考えられる。

（２）石棺石材について

埋葬施設１の石棺石材に類似する板状石材が、古墳群周辺の露頭に多く露出している。この分析では、蛍光Ｘ線分析法と岩石学的観察法（偏光顕微鏡）により、石棺石材と遺跡周辺の露頭から採取した石材を分析し、同じ石材なのかどうか検証した。

まず、蛍光Ｘ線分析では、第４表に示しているように石棺石材２点、遺跡周辺露頭石材２点を分析した。すると、４点の石材ともすべて同じ分析値を示しており、分析値では同じ岩石と推測される。

岩石学的観察では、肉眼的に暗灰色、緻密で班晶鉱物はあまり目立たない。鏡下では、かんらん石（0.5㎜以下）班晶を含み、石基は斜長石、かんらん石、鉄チタン鉱物などからなる（第92図、写真１～４）。そして、第４表のように、珪酸の含有量が52%以下の塩基性岩である。以上の分析からこの岩石は、かんらん石玄武岩である。また、金廻古墳群が立地する地質基盤層は、前期更新世に形成されたアルカリ火山岩類（玄武岩・安山岩類）で構成されている。つまり、この石棺石材は遺跡周辺の露頭石材を使用していることが推定される。

第３表　越敷山51号墳埋葬施設１赤色顔料分析結果（%）

試料番号	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Ca	Na	K	Hg	Total
2	48.19	1.75	25.67	12.02	0.26	6.79	2.18	2.03	—	98.89
3	48.89	1.36	26.01	11.07	0.23	7.46	2.70	1.90	—	99.62
4	47.04	2.01	24.53	14.65	0.23	4.07	2.51	2.96	—	98.00
5	46.01	2.14	26.55	17.56	0.35	3.07	1.79	1.97	—	99.44
6	48.38	1.79	25.27	11.70	0.18	7.25	1.93	1.70	—	98.20
7	48.15	1.58	29.45	12.74	0.19	4.72	1.30	1.54	—	99.67
8	47.09	1.71	28.89	13.04	0.19	4.00	1.37	1.58	0.06	97.93
10	48.29	1.75	29.99	11.84	0.16	4.50	1.57	1.48	—	99.58

第４表　越敷山51号墳埋葬施設１石棺石材分析値（%）

試料番号	種類	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Total
1	No.1石材	52.23	1.17	17.09	8.08	0.14	6.07	8.66	5.19	1.23	0.04	99.89
2	No.9石材	51.57	1.20	17.20	8.28	0.14	6.00	8.68	5.53	1.25	0.04	99.88
3	遺跡内露頭	51.99	1.07	18.08	8.79	0.14	5.61	7.75	5.24	1.17	0.03	99.89
4	周辺露頭	51.47	1.17	17.86	8.53	0.14	6.17	8.38	5.03	1.09	0.02	99.88

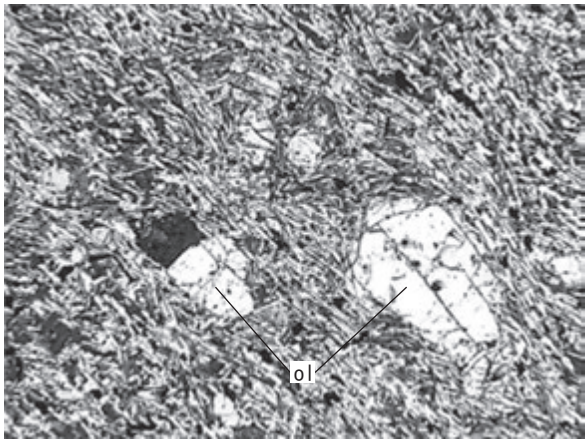


写真１　No.1石材

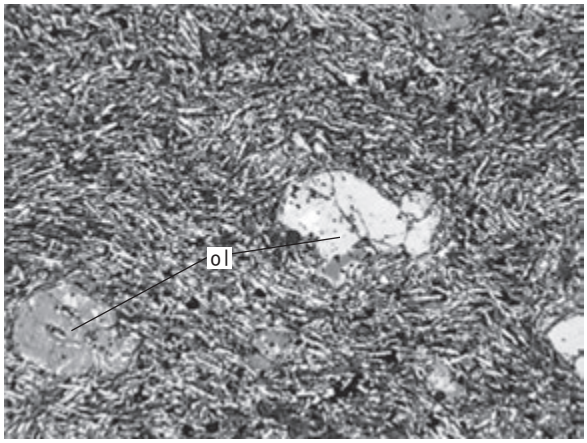


写真２　No.9石材

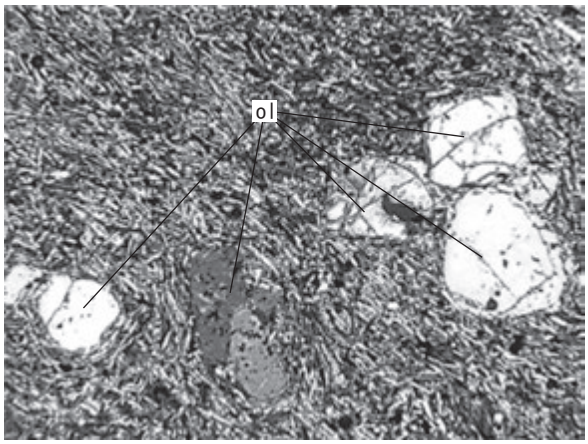


写真３　遺跡内露頭石材

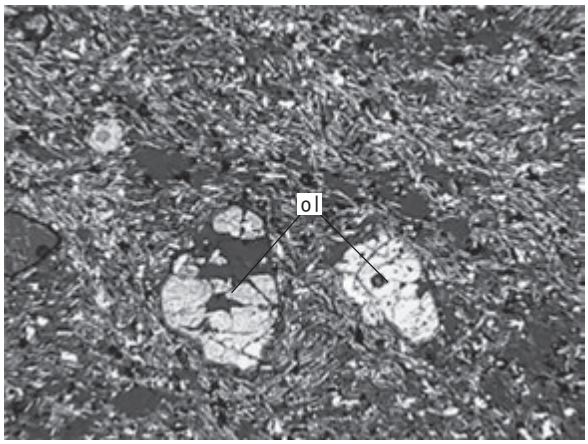


写真４　遺跡周辺露頭石材

0　1mm

ol：かんらん石

第92図　越敷山51号墳埋葬施設１石棺石材および周辺露頭石材の偏光顕微鏡写真（直交ニコル）

第２節　金廻家ノ上ノ内遺跡から検出された人骨について

鳥取大学医学部形態解析学分野
井上貴央、松原章範、岡﨑健治、江田真毅*
鳥取大学医学部技術部
足立昭子

１．はじめに

本報告は鳥取県西伯郡伯耆町の金廻家ノ上ノ内遺跡から検出された人骨に関するものである。この遺跡の越敷山49号墳埋葬施設１、越敷山51号墳埋葬施設１、越敷山51号墳埋葬施設２の３カ所から人骨が検出された。

酸性土壌の広がる伯耆町においては、人骨が保存されることは極めてまれであるが、今回検出された人骨は比較的保存が良好であった。これらの人骨は当時の埋葬風習を明らかにするとともに、将来この地域の人類学的形質を明らかにする上で貴重な資料になるものと考えられる。本稿では、その概要を報告する。

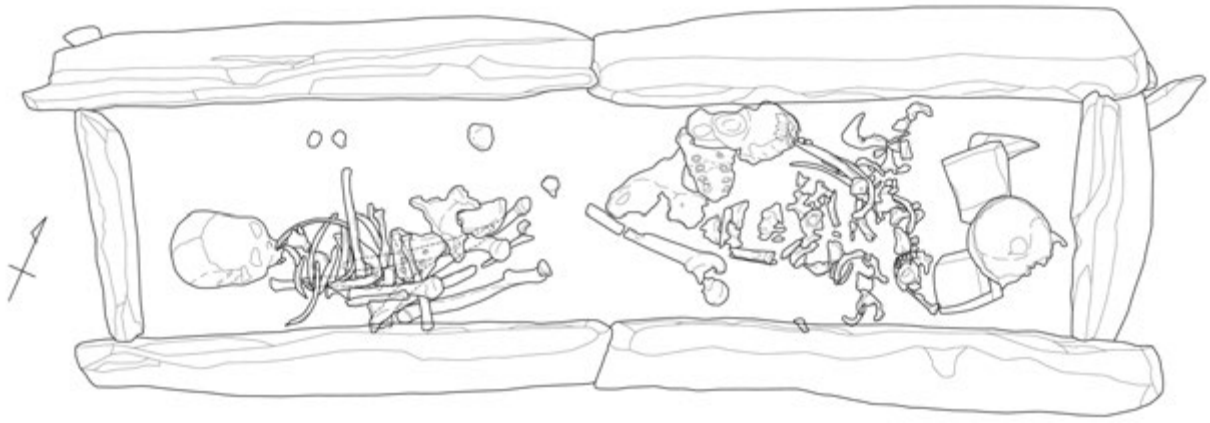
２．越敷山49号墳埋葬施設１の人骨

【人骨の検出状況】

北東～南西に長軸方向を有する箱式石棺に埋葬されていた人骨である。棺床の両端にはそれぞれ１個の頭蓋骨が認められ、それぞれの頭蓋骨から石棺中央にかけて骨が集蔟しており、少なくとも２体の埋葬があったものと考えられた（第93図）。

棺床の南西端には枕と思われる構造物は存在しないが、南西端から頭蓋骨が頭蓋底を下に向け、顔面が石棺の中央部を向いた状態で検出された。その頭蓋骨から石棺の中央寄りには、この人骨のものと考えられる骨が無秩序に散乱した状態で検出されている。これらの人骨を1号人骨と呼ぶことにする。

棺床の北東端には枕と考えられる角礫が認められ、その上に頭蓋骨が認められた。頭蓋骨は顔面が



第93図　越敷山49号墳埋葬施設１の人骨の検出状況

*現在：北海道大学総合博物館

下を向いた状態で検出されている。それから中央寄りには胸椎や肋骨などの胸郭の骨が、さらに中央寄りには骨盤や大腿骨の骨が散乱していた。これらの人骨を２号人骨と呼ぶことにする。

（１）１号人骨

頭蓋は、頭蓋底が風化のため大きく欠損しているが、顔面頭蓋はほぼ完存している。前頭部には赤色顔料が斑状に付着していた。

頭蓋骨の三主径は、脳頭蓋の下部1/3を欠くため計測できない。残存する顔面頭蓋も、上顔高は67 ㎜であるが、中顔幅や頬骨弓幅は破損のため計測できない。眼窩高と眼窩幅から求めた眼窩示数は81.0となり、低眼窩 chmaeknoch に属している。鼻示数は53.1で広鼻chamaerrhinに属している。

前頭部の膨隆は著明で、眉弓の突出の程度は少ない。乳様突起は欠損していてその形状は不明であるが、頬骨弓は細くて弱々しい。左側頭骨の一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。

三主縫合のうち、冠状縫合と矢状縫合が残存していたが、これらの縫合は内板・外板ともに未閉鎖である。骨口蓋縫合は、破損が大きく詳細は不明であるが、残存する右切歯縫合は癒合閉鎖をきたしている。上顎には歯槽性突出が認められる。

下顎骨は左下顎枝の上部を欠くが、ほぼ完存している。歯の咬耗は、前歯以外はあまり進んでおらず（Martin１～３度）、左下顎第３大臼歯は埋伏状態にある。なお、上顎歯は、大部分が遊離歯として検出されたものである。歯式は以下の通りである。

M_2	M_1	P_2	P_1	C	脱	脱	脱	I_2	C		P_2	M_1	
M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	脱	M_1	M_2	M_3

上肢帯の骨では、肩峰端を欠く左鎖骨と左肩甲骨の外側縁の一部が残っているにすぎない。

上肢の骨では、右上腕骨の骨体部の部分、左上腕骨の近位1/2、遠位端を欠く右橈骨、右尺骨の遠位1/2、ほぼ完形の左尺骨が残っている。

脊柱の骨では、椎体片が１点と仙骨の第１～４仙椎に相当する部分が残っているにすぎない。胸椎以外の胸郭を構成する骨では、左右の肋骨が14点検出されている。

下肢帯の骨では、左右の寛骨が残存している。右寛骨は腸骨翼の大部分を欠き、左寛骨は腸骨翼の一部を欠く。寛骨の大坐骨切痕は広く、女性骨をうかがわせる。

下肢骨では、右大腿骨は近位・遠位骨端の一部を欠く。左大腿骨は近位骨端～骨体部にかけての部分とその内側顆、右脛骨の外側の部分、左脛骨の遠位1/3、右腓骨の近位端が検出されている。

本人骨の骨端を見ると、骨端線が閉鎖しておらず、骨端が未癒合な部分がある。つまり、上腕骨の近位骨端、尺骨の遠位骨端は未癒合で、大腿骨の骨頭は一部が未癒合で、脛骨の近位骨端と腓骨の近位骨端は癒合が完了したばかりである。脛骨の遠位骨端は癒合が完了している。また、仙骨の横線はS1―S2間が未癒合で、そのほかの部分はほぼ癒合を完了している。また、寛骨の坐骨結節は完全に癒合が完了していない。

本人骨の性別は女性、年齢は骨端の癒合状況から判断して、15～17歳程度と推定される。最大長を計測できる骨がないので、身長は推定できない。

（２）　２号人骨

頭蓋骨は顔面頭蓋を欠き、左右の側頭部、後頭部、頭蓋底の部分が残存しているのみである。頭蓋骨は全体的に大きく、頑丈である。

頭蓋骨の三主径は、脳頭蓋の大部分を欠くため、頭蓋最大幅が151 ㎜と計測できたのみである。顔面頭蓋を欠くためその形状も不明である。

外後頭隆起は比較的よく発達しており、乳様突起は大きく発達している。

三主縫合で確認できるのはラムダ縫合のみである。その閉鎖状況を見ると、外板では癒合閉鎖がかなり進んでおり、内板はほぼ完全に閉鎖をきたしていて、高齢者であることがうかがえる。

下顎骨は、オトガイ部から左下顎枝にかけての部分と右下顎枝の上部が残存している。一部、遊離歯として検出された歯もあるが、大部分は下顎骨に釘植していた。咬耗はやや進んでおり、Martinの2～3度である。歯式は以下の通りである。

M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_3

上肢帯の骨では、右鎖骨の肩峰端、右肩甲骨の烏口突起の部分、左肩甲骨の烏口突起の部分と上・下角のほか、左右不明の関節窩の一部が認められる。

上肢の骨では、左上腕骨の遠位端の一部、左橈骨の近位1/3が残っている。

脊柱の骨では、環椎の右半分、軸椎のほか２個の頚椎、８個の胸椎、５個の腰椎、部位を特定できない椎体片や棘突起の部分、仙骨と仙骨片が残っている。胸椎以外の胸郭を構成する骨では、左右の肋骨が12点検出されている。

下肢帯の骨では、左右の寛骨が残存している。右寛骨は腸骨・坐骨の一部を欠くが、ほぼ完存している。左寛骨は腸骨翼の一部を欠くが、ほかはほぼ完存している。大坐骨切痕は狭く、男性骨であることがうかがえる。

下肢骨では、右大腿骨の近位側～骨体部にかけての部分と遠位の外側顆および内側顆の部分が検出されているのみである。

本人骨の性別は頭蓋骨や寛骨の形状から判断して男性、年齢は縫合の閉鎖状況や歯の咬耗度から考えて、熟年と考えられる。最大長を計測できる骨が残存していないので、身長は推定できない。

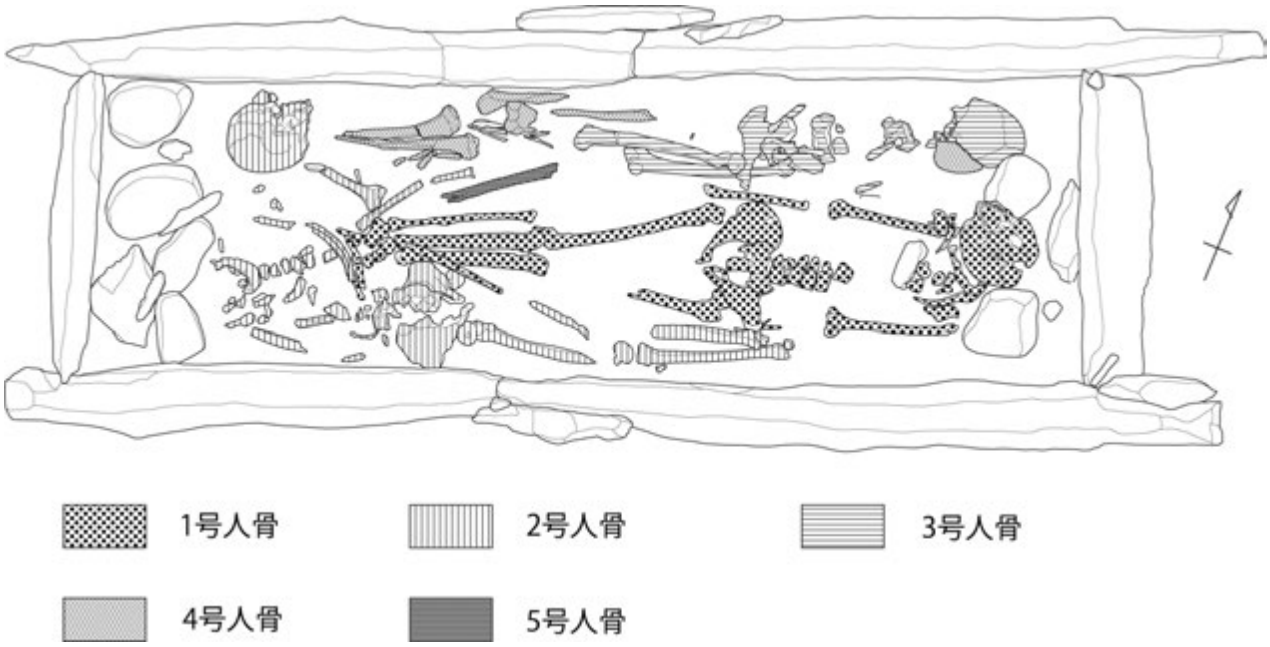
３．越敷山51号墳埋葬施設１の人骨

【人骨の検出状況】

北東～南西にかけて長軸方向を有する箱式石棺に埋葬されていた人骨である。

石棺の北東端には３個の角礫～亜角礫の枕と考える石が認められ、２個の頭蓋骨を伴っていた。そのうち南東側に位置する頭蓋骨と、同一人骨のものと考えられる上肢骨、椎骨、骨盤、下肢骨がほぼ交連状態を保っているように見受けられ、この人骨を１号人骨とする。

石棺の南西端には、５個の円礫～亜角礫の枕と考えられる石が認められた。その南寄りの石枕には頭蓋骨の本体は存在せず、下顎骨が認められるのみである。この下顎骨を有すると考えられる人骨の椎骨、肋骨、上肢帯の骨、上肢骨、骨盤、下肢骨は、石棺の南東側の側板に沿って、ほぼ交連状態を



第94図　越敷山51号墳埋葬施設１の人骨の検出状況

保って検出されている。この人骨を２号人骨と呼ぶ。

石棺の北西端に位置する頭蓋骨の人骨は、右の前腕骨、骨盤、および下肢骨の配列がほぼ元位置を保っているように見受けられる。この人骨を３号人骨と呼ぶ。この人骨の頭蓋骨は、眼窩上方の脳頭蓋の部分と上顎部の２つに大きく割れており、お互いに少し離れた位置から検出されている。眼窩はほぼ西方向を向いて検出されている。この頭蓋骨の左側頭部には、別個体の前頭骨が寄りかかるようにして検出された。この前頭骨は骨の取り上げ時には３号人骨の頭蓋骨と一括して取り上げたが、その後の詳細な検討によって、後述する４号人骨のものであることが明らかになった。

石棺の長軸方向の北西側の側板に注目すると、その中央部の内側に保存状況の悪い長骨がほぼ平行に並んだ状態で検出されている。詳細に検討すると、北東側から、左右の大腿骨、左右の脛骨があり、大腿骨の遠位端と脛骨の近位端はほぼ交連状態にある。この人骨を４号人骨と呼ぶ。この４号人骨は頭を北東端に置き、伸展仰臥位で埋葬されていたものと考えられ、３号人骨の頭蓋骨に寄り添うようにして検出された前頭骨が本人骨のものであると考えられた。

最後に、１号人骨の右下腿と４号人骨の下肢骨の間に、所属人骨が不明の大腿骨が１本認められた。この大腿骨は、上述のいずれの人骨にも属さない骨であるので、この大腿骨を５号人骨として取り扱うことにした。本埋葬施設の人骨の検出状況と１～５号人骨の分布を第94図に示す。

（1）１号人骨

頭蓋骨は、左頭頂部の一部と後頭部を欠くが、ほかはほぼ完存している。左右の頬部、前頭部、鼻部、上顎部に赤色顔料が塗布されていた。さらに、右側頭部の前方と左側頭部の後方にも同様の顔料が付着していた。

頭蓋骨の三主径のうち頭蓋最大長は欠損のため計測できないが、頭蓋最大幅は148㎜、バジオン・ブレグマ高は137 ㎜で、頭蓋幅高示数は92.6となり、頭型はmetriokran（中頭）に属している。顔面頭蓋の幅径、高径について見ると、頬骨弓幅、中顔幅はそれぞれ142 ㎜、102 ㎜で、上顔高は74 ㎜であ

る。従って、コルマンおよびウィルヒョウの上顔示数はそれぞれ51.4、71.6であり、messen（中上顔）、chamaeprosop（低顔）を示している。眼窩高と眼窩幅から求めた眼窩示数は84.1となり、中眼窩 mesoknochに属している。鼻示数は54.3で広鼻 chamaerrhinに属している。

頭蓋の前頭部はやや膨隆しており、眉弓の部分もわずかに突出している。乳様突起は破損しており、その形状は不明である。項面のレリーフはやや著明である。

三主縫合は、内板・外板ともに癒合閉鎖をきたしており、高齢者であることがうかがえる。骨口蓋縫合を見ると、切歯縫合、横口蓋縫合、正中口蓋縫合口蓋骨部ともに、ほぼ全長に渡って癒合閉鎖をきたしている。

上顎・下顎ともに歯槽が閉鎖している部分が多い。残存歯の咬耗はかなり進んでおり（Martin ３度）、左上顎第１小臼歯に相当する歯槽には、外表面に開口する歯根嚢胞が認められた。また、右上顎第１大臼歯の咬合面には、ほぼ全面にわたって歯石の沈着が認められる。このことは、咬合時に相対する下顎の同名歯がすでに脱落していたことを示しており、歯の衛生状況がよくなかったことを物語っている。また、右上顎第１大臼歯の歯頚部の近心面、左上顎中切歯の咬合面、左上顎犬歯の咬合面と歯頚部の遠心面に３度のカリエスが認められた。

下顎骨は、左下顎体の後方と左下顎枝を欠く。歯槽の大部分は、吸収閉鎖をきたしている。歯式は以下の通りである。

閉	M_1	脱	脱	脱	脱	脱	I_1	I_2	C	脱	脱	閉	閉
閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	閉	脱	脱	閉	

本頭蓋骨で認められた重要な病理学的所見は、左側頭部に陥没骨折が認められたことである。異常所見として、左側頭部の錐体部と側頭鱗の境界部に、頭蓋の内外に及ぶ卵円形と涙滴形の開口が認められた。これらの開口部の下部にある錐体の外表面には、骨増殖によると考えられる膨隆構造が認められた。これらの開口の並びから後上方にかけて、骨折線と考えられる弧状に走る溝状構造が観察され、また開口部から約３㎝上方には、前後に走る溝状構造（骨折線）が観察された。これらの所見は、側頭部の陥没骨折の治癒例であることを物語っている。左側頭部に何らかの形で打撲を受け、側頭骨の側頭鱗と頭頂骨に骨折をきたしたものの、その後、生きながらえて治癒したものと考えられる。

上肢帯の骨では、右鎖骨の体部、胸骨端を欠く左鎖骨、左右の肩甲骨の関節窩周囲が残っている。

上肢の骨では、近位端の一部を欠く左右の上腕骨、完形の右橈骨、左と考えられる尺骨片が検出されている。これらの上肢骨は細くて華奢である。手の骨は検出されていない。右橈骨の最大長は238 ㎜で、藤井式で推定身長を求めると161.2 ㎝、Pearson式で推定身長を求めると163.8 ㎝となる。

脊柱の骨では、胸椎の椎体片が２点、第１～５腰椎、仙骨の上位1/3が残っている。肋骨は検出されていない。

下肢帯の骨では、腸骨下方から坐骨を欠く右寛骨、腸骨翼の大部分と坐骨を欠く左寛骨が残存している。恥骨下角は狭く、男性骨をうかがわせる。

下肢の骨では、近位端を欠く右大腿骨、左大腿骨の近位1/2、近・遠位端の一部を欠く左右の脛骨、完形の右腓骨、近位部を欠く左腓骨が検出されている。また、右足の骨では、距骨、踵骨、舟状骨、立方骨、第２～５中足骨が、左足の骨では外側楔状骨、第１基節骨が検出されている。

本人骨の性別は、四肢骨が華奢であり女性をうかがわせるが、頭蓋骨や寛骨の形状から判断して男性と推定される。年齢は縫合の閉鎖状況や歯の咬耗度から考えて、熟年と考えられる。橈骨の最大長から身長を推定すると、162 cm前後と考えられる。

（２）２号人骨

頭蓋は左側頭部を欠くが、ほかはほぼ完存している。左頬部～側頭前部のほか、前頭部～上顎部にかけての部分と左下顎後方に赤色顔料が塗布されていた。

頭蓋の前頭部はやや膨隆しており、眉弓はやや著明に突出している。眼窩上縁は鈍である。乳様突起は大きく、項面のレリーフは著明である。

頭蓋骨の三主径は、頭蓋最大長が179 ㎜、頭蓋最大幅が138 ㎜、バジオン・ブレグマ高が144 ㎜で、頭蓋長幅示数は77.1、頭蓋長高示数は80.5、頭蓋幅高示数は104.4となり、頭型はmeso-、hypsi-、akrokran（中・高・狭頭）に属している。顔面頭蓋の幅径、高径について見ると、頬骨弓幅は破損のため計測できないが、中顔幅は102 ㎜で、上顔高は71 ㎜である。従って、ウィルヒョウの上顔示数は69.6であり、chamaeprosop（低顔）を示している。眼窩高と眼窩幅から求めた眼窩示数は79.6となり、低眼窩 chamaeknochに属している。鼻示数は52.5で広鼻 chamaerrhinに属している。

三主縫合は、冠状縫合とラムダ縫合の外板はやや癒合閉鎖が進んでおり、矢状縫合の外板はかなりの部分で癒合閉鎖が進んでいる。また、三主縫合の内板はほぼ完全に癒合閉鎖をきたしている。骨口蓋縫合を見ると、切歯縫合は外側部が閉鎖しているが内側部は痕跡的である。横口蓋縫合は外側部は閉鎖しているが、内側部は痕跡的である。正中口蓋縫合の口蓋骨部は大部分が閉鎖している。

下顎骨は、左下顎枝の後方と右下顎体の第２大臼歯より後方を欠く。残存歯は少ないが、咬耗はかなり進んでいる（Martin ２～３度）。右下顎第１大臼歯と左下顎第1大臼歯の咬合面には、２～３度のカリエスが認められる。歯式は以下の通りである。

閉	閉	脱	脱	脱	I_2	脱	脱	脱	脱	脱	脱	脱	閉
	M_1	P_2	P_1	C	I_2	脱	脱	脱	脱	P_1	脱	M_1	M_2

上肢帯の骨では、右肩甲骨の外側縁の一部と、左右不明の鎖骨片が残っているにすぎない。

上肢の骨では、右の上腕骨片、左上腕骨の遠位1/3、左右の橈骨の骨体部、左尺骨の近位2/3、左手の第１末節骨が検出されているにすぎない。

脊柱の骨では、胸椎の椎体片が７点、第４、５腰椎、仙骨の上位1/2が残っている。胸椎以外の胸郭を構成する骨では、胸骨柄の後面の一部、右第１肋骨のほかに左右の肋骨片が７点検出されている。

下肢帯の骨では、腸骨翼の後部～坐骨結節にかけての部分を欠く右寛骨と、腸骨翼～坐骨結節にかけての部分を欠く左寛骨が検出されている。右寛骨の恥骨体の外側面と寛骨臼に、わずかながら赤色顔料の付着が認められる。左右の寛骨がなす恥骨下角は小さく、男性骨であることをうかがわせる。

下肢の骨では、遠位部を欠く右大腿骨、左大腿骨の大腿骨頭、右脛骨の内側半分、左脛骨の骨体部などが検出されているのみである。残存する四肢骨は頑丈であり、脛骨のヒラメ筋線も発達していて、脛骨の骨体部の扁平化も認められる。

本人骨の性別は、頭蓋骨や寛骨の形状や四肢骨の頑丈さから考えると、男性と推定される。年齢は

縫合の閉鎖状況や歯の咬耗度から考えて、熟年と考えられる。最大長を計測できる骨がないので、身長は推定できない。

（３）3号人骨

頭蓋は、右眼窩外側～右側頭部にかけての部分と、後頭部～頭蓋底にかけての部分を欠くが、顔面頭蓋はほぼ残存している。前頭部～上顎にかけての部分と左頬部～左側頭部にかけては、赤色顔料が塗布されている。特に、前頭部と眼窩・梨状口の周囲は厚く一面に塗られている。眼窩、鼻腔、頭蓋腔の内面には少量の赤色顔料が付着しているが、これは顔面に塗られた赤色顔料が落ち込んだものであろう。本頭蓋骨が検出された位置からは、別個体と考えられる前頭骨片と右下顎第１大臼歯が検出されている。

頭蓋骨の三主径は、脳頭蓋の大部分を欠くため計測できない。残存する顔面頭蓋の幅径、高径について見ると、頬骨弓幅は破損のため計測できないが、中顔幅は101 ㎜で、上顔高は73 ㎜である。従って、ウィルヒョウの上顔示数は72.3であり、chamaeprosop（低顔）を示している。眼窩は一部に欠損があり、計測できない。鼻示数は50.5で中鼻 mesorrhinに属している。

頭蓋の前頭部はやや膨隆しており、眉弓は著明に突出している。眼窩上縁は鈍である。乳様突起は欠損していて、その形状をうかがうことはできない。後頭部を欠くため、項面のレリーフは不明である。

残存している三主縫合は、冠状縫合と矢状縫合のみである。冠状縫合の外板は未閉鎖であるが、矢状縫合の外板はやや癒合閉鎖が進んでいる。これらの縫合の内板は、ほぼ完全に癒合閉鎖をきたしている。骨口蓋縫合を見ると、切歯縫合は外側部が閉鎖しているが内側部は未閉鎖である。横口蓋縫合は口蓋骨が脱落していて詳細は不明である。残存する上顎歯はかなり咬耗が進んでおり、象牙質がほぼ全面にわたって露出している（Martin ３度）。左上顎犬歯に３度のカリエスが認められる。

下顎骨は検出されていない。歯式は以下の通りである。

脱	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	脱

上肢帯の骨は検出されていない。上肢の骨では、右橈骨の骨体部～遠位端にかけての部分と、右尺骨の骨体部～遠位端にかけての部分、右第５中手骨の遠位部が検出されているにすぎない。橈骨と尺骨にはベンガラと思われる赤色顔料の付着が認められる。

脊柱の骨では、腰椎の椎体片が１点と、仙骨の上部1/4が残っているにすぎない。肋骨片は２点検出されているのみである。

下肢帯の骨では、恥骨結合～坐骨および腸骨翼の一部を欠く右寛骨と、左寛骨の恥骨と寛骨臼周囲が残存している。左恥骨の外側面にはベンガラと思われる赤色顔料の付着が認められる。

下肢の骨では、ほぼ完形の左右の大腿骨、左右不明の脛骨片が検出されている。大腿骨は細く、粗線は中等度に発達している。左大腿骨の最大長は375 ㎜であり、藤井式で推定身長を求めると145.2 ㎝、Pearson式で推定身長を求めると145.8 ㎝となる。

本人骨に認められた赤色顔料のうち、橈骨、尺骨、寛骨に認められたものは、その色彩から見て明

らかにベンガラに由来するものと考えられたが、これは意図的に塗布したものではなく、棺床のベンガラに由来するものであろう。

本人骨の性別は、頭蓋骨や寛骨の形状や、大腿骨が細いことから女性と推定される。年齢は縫合の閉鎖状況や歯の咬耗度から考えて、壮年後半～熟年前半と考えられる。大腿骨の最大長から求めると、本人骨の身長は145 cm位と推定される。

（４）４号人骨

３号人骨の頭蓋骨の近傍から検出された頭蓋骨片が、本人骨の頭蓋骨であると考えられる。残存していた部位は前頭骨の前頭鱗の部分であるが、冠状縫合の部分は残存していない。この前頭骨の外側面には、赤色顔料の付着が認められた。

上肢帯、上肢、脊椎、下肢帯の骨は検出されておらず、検出された骨は下肢の骨に限られる。残存していた骨は、右大腿骨の骨体部と遠位端、左大腿骨の骨体部片と遠位端、近位端～骨体部にかけての左右の脛骨である。脛骨は太くてがっしりしている。

本人骨は成人であることは確かであるが、年齢を特定することはできない。また、性別は脛骨の形状から男性をうかがわせるが、確言できない。

（５）５号人骨

検出された骨は、左大腿骨の骨体部の１本のみである。近位・遠位骨端は欠損しており、最大長は知ることができない。骨体部は細く、全体に短い印象があり、小児のものである可能性が高いと思われる。性別は不詳である。

この大腿骨に属する小児の人骨はほかには検出されておらず、元々、この５号人骨が本石棺に埋葬されていたものか、あるいはほかの墓域で埋葬されていた小児骨を本石棺に再埋葬したのかは明らかではない。

４．越敷山51号墳埋葬施設２

【人骨の検出状況】

北北東～南南西に長軸方向を有する箱式石棺から検出された人骨である。石棺の両端には枕と考え

第95図　越敷山51号墳埋葬施設２の人骨の検出状況

られる石は存在せず、その床には板状安山岩が敷かれていた。

人骨は石棺の中央部を中心に分布しており、骨の保存状況は悪く、交連状態を保っていない。頭蓋骨は石棺の中央部から検出されている（第95図）。これらの検出状況から、本石棺の人骨は再埋葬骨であるか、最終埋葬後に人為的に動かされたものであることは明らかである。

【検出された人骨】

頭蓋骨は、ブレグマ付近の左右の頭頂骨と前頭骨、および後頭骨の後頭隆起付近が残存しているのみである。外後頭隆起はほとんど発達していないようである。認められる矢状縫合と冠状縫合は、内・外板ともに未閉鎖で、まだ若い個体であることがうかがえる。下顎骨は右下顎枝を欠くが、ほかはほぼ完存している。この下顎の下層からは、右下顎第２大臼歯が遊離歯として検出されているが、下顎骨から脱落したものである。歯の咬耗はほとんど進んでいない（Martin１～２度）。歯式は以下の通りである。

M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2

上肢帯の骨では、左鎖骨と左肩甲骨の関節窩周囲の部分が残っている。いずれも全体的に小さくて華奢である。

上肢骨では、左上腕骨の骨体部片が検出されているにすぎない。上腕骨は細くて華奢である。

脊柱の骨では、頚椎片が１点と胸椎片などの４点が残っているにすぎない。胸椎以外の胸郭を構成する骨では、肋骨片が３点検出されているのみである。

下肢帯の骨では、左寛骨の恥骨体～恥骨上肢にかけての部分と寛骨片が残っているのみである。

下肢の骨では、左右の大腿骨の骨体部が検出されているのみである。これらの大腿骨はその形状から同一人物のものと考えられる。大腿骨は細いが、粗線はやや発達している。

検出された人骨は、“同名同部位の骨の重複が認められないこと”と“骨の形態学的特徴から同一個体のものと考えられること”から判断して、１体の埋葬があったものと考えられる。

本人骨の性別は、骨が全体的に小さくて華奢であることから、女性骨と判断してよい。頭蓋縫合の閉鎖状況や歯の咬耗度から判断して、年齢は壮年前半と考えられる。

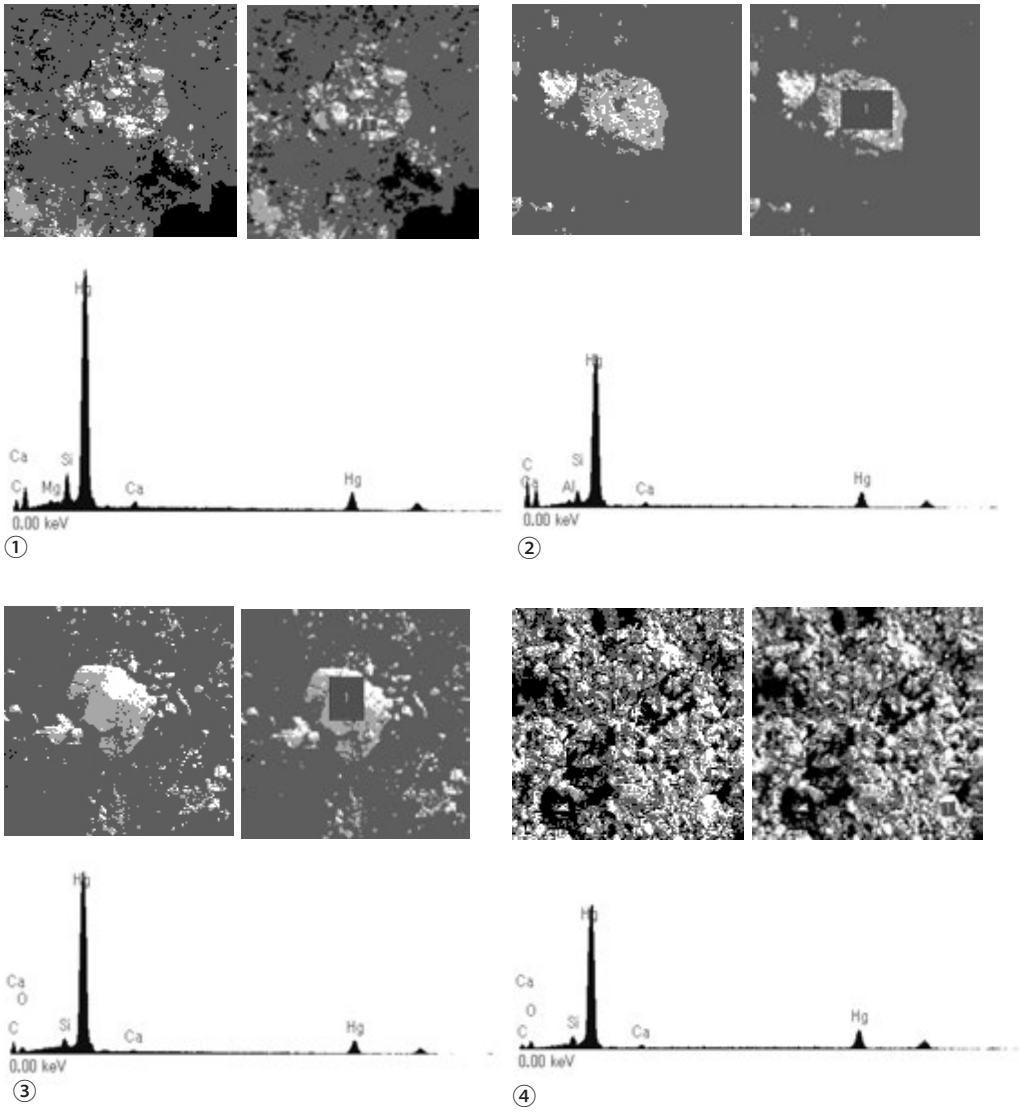
本石棺に埋葬された人骨は、交連状態を保っていないが、検出された骨の位置を見ると、石棺の南側に下顎骨、頚椎、上腕骨、肋骨などがほぼ南側から順に検出されている。頭蓋骨は石棺中央から検出されている。寛骨は若干動いているように見えるが、大腿骨は近位端を南側に向けて検出されている。これらのことから、本人骨は頭を南側に置き、下肢を北側に向けて、伸展仰臥位で埋葬されていたものと考えてよい。頭部は被埋葬者の腹部に置かれていることになるが、遺骸の骨化後、頭蓋骨を腹部に再び埋葬した類例は、山陰地方のほかの古墳でも知られている。

本石棺で特異な点は、骨の下層にかなりの厚さの流入土が認められたことである。人骨周囲の土を除去しながら骨の取り上げ作業を行ったが、その際、周囲の土は小塊状を呈し、土塊の間隙が多く、単なる流入土とは異なった印象があった。この石棺が後世に盗掘を受け、人為的に骨が撹乱された可能性があるが、蓋石の間には石が置かれていて、盗掘の痕跡は認められないとのことである。

５．人骨に付着した赤色顔料の分析

本遺跡から出土した人骨のうち、赤色顔料の付着した人骨について、顔料の分析を行った。分析に供した試料は以下の４点である。

試料①：越敷山49号墳埋葬施設１から出土した1号人骨頭蓋に付着した赤色顔料
試料②：越敷山51号墳埋葬施設１から出土した1号人骨頭蓋に付着した赤色顔料
試料③：越敷山51号墳埋葬施設１から出土した2号人骨頭蓋に付着した赤色顔料
試料④：越敷山51号墳埋葬施設１から出土した3号人骨頭蓋に付着した赤色顔料



第96図　人骨に付着した赤色顔料の分析結果

①：越敷山 49 号墳埋葬施設１から出土した１号人骨頭蓋に付着した赤色顔料の分析結果
②：越敷山 51 号墳埋葬施設１から出土した１号人骨頭蓋に付着した赤色顔料の分析結果
③：越敷山 51 号墳埋葬施設１から出土した２号人骨頭蓋に付着した赤色顔料の分析結果
④：越敷山 51 号墳埋葬施設１から出土した３号人骨頭蓋に付着した赤色顔料の分析結果
各データの左上は反射電子像、右上は分析範囲、下はＸ線分析結果を示す。

いずれの試料も１㎜程度の小片を竹串で削り取り、カーボンテープに貼り付け、Ｘ線微小分析装置を備えた低真空走査型電子顕微鏡で反射電子像を観察し、微小エリアにおける定性分析を行った。

試料①～③を反射電子像で観察すると、大小不同のサイズの顆粒からなり、特性X線の分析においては著明なHgのピークが認められた。また、微小ピークとして認められたCaは骨に由来するものと考えられる。さらに、Siは赤色顔料に混じっていた石英などの砂粒に由来するものであろう。このうち、試料②ではごく微量のAlも検出されているが、これは粘土鉱物に由来するものではないかと考えられる。試料④を反射電子像で観察すると、大きさが揃っている微細な顆粒状物質からなり、特性X線の分析においては、試料①～③と同様に著明なHgのピークが認められた。また、Siの微小ピークも認められた。

試料①～④からは、Feのピークはまったく検出されていない。これらの試料からは高いHgのピークが認められたことから、赤色顔料は水銀朱に由来するものと断定できる。

６．まとめ

金廻家ノ上ノ内遺跡から検出された人骨をまとめると次の通りである。

（１）越敷山49号墳埋葬施設１

２体の埋葬が確認され、１号人骨は15～17歳程度の女性、２号人骨は熟年男性と考えられる。

（２）越敷山51号墳埋葬施設１の人骨

１号人骨は熟年男性で身長は162 ㎝前後、２号人骨は熟年男性、３号人骨は壮年後半～熟年前半の女性で身長は145 ㎝位、４号人骨は男性らしい年齢不詳の成人、５号人骨は性別不詳の小児らしいと考えられる。

（３）越敷山51号墳埋葬施設２の人骨

１体の埋葬が確認され、埋葬されていた人骨は、壮年前半の女性と考えられる。

稿を終わるにあたり、本人骨の調査の機会を与えていただいた鳥取県教育文化財団に御礼申し上げる。とりわけ、岸本調査事務所の玉木秀幸調査員には、人骨の取り上げや遺構の検討などでお世話になった。期して御礼申し上げる。

第５表　出土人骨一覧表

越敷山49号墳埋葬施設１

No.	部位	左右	残存部位	備考	所属人骨
1	尺骨	左	P-C-D		１号人骨
2	肋骨	左			１号人骨
3	肋骨	右	肋骨頭		１号人骨
4	肩甲骨片				１号人骨
5	肋骨片	不明			１号人骨
6	肋骨	左			１号人骨
7	肋骨	右			１号人骨
8	肋骨	左			１号人骨
9	肋骨	右	破片		１号人骨
10	大腿骨	左	D*:内側顆		１号人骨
11	肋骨	左			１号人骨
12	肋骨	左		赤色顔料付着	１号人骨
13	肋骨	右			１号人骨
14	第12肋骨	右			１号人骨
15	下顎骨		左下顎枝の上部を欠く		１号人骨
16	肋骨	左			１号人骨
17	肩甲骨	左	外側縁の一部		１号人骨
18	肋骨	左			１号人骨
19	肋骨片	左			１号人骨
20	尺骨	右	C-D	D骨端：未閉鎖	１号人骨
21	上腕骨	左	P-C	P骨端：未閉鎖	１号人骨
22	橈骨	右	P-C-D*	赤色顔料付着	１号人骨
23	仙骨		S1～4相当部分	横線：未閉鎖	１号人骨
24	寛骨	右	腸骨翼：欠	坐骨結節：骨端線未閉鎖	１号人骨
25	寛骨	左	腸骨翼の一部欠		１号人骨
26	頭蓋		頭蓋底を欠	赤色顔料付着	１号人骨
27	鎖骨	左	肩峰端欠		１号人骨
28	上腕骨	右	C		１号人骨
29	大腿骨	左	P-C	P骨端：一部未閉鎖	１号人骨
30	脛骨	右	P*/C/D* 外側部分	P骨端：ほぼ閉鎖完了	１号人骨
31	腓骨	右	P*	P骨端：ほぼ閉鎖完了	１号人骨
32	脛骨	左	C-D	D骨端：完全閉鎖	１号人骨
33	大腿骨	右	P*/C/D*		１号人骨
34	椎体片				１号人骨
35	骨片				１号人骨
36	骨片				１号人骨
37	頭蓋骨		側頭～後頭～頭蓋底		２号人骨
38	軸椎				２号人骨
39	頚椎				２号人骨
40	鎖骨	右	肩峰端		２号人骨
41	肩甲骨	右	烏口突起		２号人骨
42	下顎骨		オトガイ～左下顎枝		２号人骨
43	肋骨片	右			２号人骨
44	下顎骨	右	筋突起・下顎頭		２号人骨
45	胸椎		椎弓		２号人骨
46	肩甲骨	左	烏口突起		２号人骨
47	肩甲骨		関節窩の一部		２号人骨
48	椎骨		棘突起		２号人骨
49	胸椎		椎弓		２号人骨
50	肩甲骨	左	下角		２号人骨
51	肋骨	左			２号人骨
52	胸椎		椎体		２号人骨
53	肋骨片、骨片				２号人骨
54	肋骨片				２号人骨
55	肋骨片				２号人骨
56	肋骨片	左			２号人骨
57	肋骨片				２号人骨
58	環椎		右半分		２号人骨
59	胸椎片				２号人骨
60	頚椎		右半分		２号人骨
61	肩甲骨	左	上角		２号人骨
62	肋骨	右			２号人骨
63	胸椎		椎体片		２号人骨
64	胸椎		椎体片		２号人骨
65	椎骨片				２号人骨
66	肋骨片	右			２号人骨
67	腰椎		椎体欠		２号人骨
68	胸椎		椎弓		２号人骨
69	胸椎				２号人骨
70	肋骨	右	肋骨頭・頚		２号人骨
71	肋骨片				２号人骨
72	仙骨片		右仙骨翼周辺		２号人骨
73	胸椎		左1/2		２号人骨
74	胸椎片		棘突起		２号人骨
75	橈骨	左	P*		２号人骨
76	骨片				２号人骨
77	腰椎		左1/2		２号人骨
78	腰椎		前部1/3		２号人骨
79	肋骨片	左			２号人骨
80	腰椎		椎体片		２号人骨
81	寛骨	左			２号人骨
82	上腕骨	左	D*		２号人骨
83	仙骨		近位1/2		２号人骨
84	寛骨	右	良好		２号人骨
85	大腿骨	右	近位1/2		２号人骨
86	大腿骨	右	外側顆		２号人骨
87	大腿骨	右	内側顆		２号人骨

越敷山51号墳埋葬施設１

1	頭蓋		良好	赤色顔料付着	１号人骨
2	頭蓋		破片		１号人骨
3	鎖骨	右	鎖骨体		１号人骨
4	椎体片				１号人骨
5	胸椎椎体				１号人骨
6	胸椎椎体				１号人骨
7	骨片				１号人骨
8	骨片				１号人骨
9	鎖骨	左	胸骨端欠		１号人骨
10	肩甲骨	左	関節窩周辺		１号人骨
11	上腕骨	左	P*-C-D		１号人骨
12	肩甲骨	右	関節窩周辺		１号人骨
13	第1腰椎				１号人骨
14	第2腰椎				１号人骨
15	第3腰椎				１号人骨
16	第4腰椎				１号人骨
17	第5腰椎				１号人骨
18	下顎骨		右と左1/3		１号人骨
19	骨片				１号人骨
20	上腕骨	右	C-D*		１号人骨
21	橈骨	右	P-C-D		１号人骨
22	仙骨		上部（S1, 2相当）		１号人骨
23	寛骨	右			１号人骨
24	寛骨	左			１号人骨
25	尺骨の骨間縁片	左？			１号人骨
26	尺骨片？	左？			１号人骨
27	大腿骨	右	C/D*		１号人骨
28	大腿骨	左	P*-C		１号人骨
29	腓骨	左	C-D*		１号人骨
30	腓骨	右	P-C-D		１号人骨
31	脛骨	左	P*-C-D		１号人骨
32	脛骨	右	P*-C-D*		１号人骨
33	距骨	右			１号人骨
34	踵骨	右	後骨端欠		１号人骨
35	第5中足骨	右	近位端欠		１号人骨
36	足の第１基節骨	左			１号人骨
37	立方骨	右	外側2/3		１号人骨
38	外側楔状骨	左			１号人骨
39	足の舟状骨	右	上部1/2		１号人骨
40	骨片				１号人骨
41	第4中足骨	右			１号人骨
42	第3中足骨	右	遠位端欠		１号人骨
43	第2中足骨	右			１号人骨
44	頭蓋			赤色顔料付着	２号人骨
45	肋骨片	不明			２号人骨
46	鎖骨片				２号人骨
47	下顎骨			左側の一部に赤色顔料付着	２号人骨
48	肩甲骨	右	外側縁の一部		２号人骨
49	上腕骨片	右	C		２号人骨
50	橈骨	右	P*-C		２号人骨
51	第1肋骨	右			２号人骨
52	肋骨	右	肋骨頭		２号人骨
53	胸骨柄		後面		２号人骨
54	胸椎椎体		破片		２号人骨
55	胸椎椎体		破片		２号人骨
56	胸椎椎体		破片		２号人骨
57	胸椎椎体		破片		２号人骨
58	胸椎椎体		破片		２号人骨
59	胸椎椎体		破片		２号人骨
60	胸椎椎体		破片		２号人骨
61	肋骨片				２号人骨
62	肋骨片	左			２号人骨
63	肋骨	左			２号人骨

64	肋骨片				２号人骨
65	肋骨片				２号人骨
66	骨片				２号人骨
67	骨片				２号人骨
68	第５腰椎、第４腰椎片				２号人骨
69	不明				２号人骨
70	仙骨		上部（S1, 2相当）		２号人骨
71	寛骨	左	腸骨欠		２号人骨
72	寛骨	右			２号人骨
73	大腿骨片	左	P*		２号人骨
74	大腿骨片	不明	C		２号人骨
75	大腿骨	右	P-C		２号人骨
76	大腿骨片	不明	D*		２号人骨
77	脛骨	左	C/D*		２号人骨
78	脛骨	右	P*-C-D*、内側半分		２号人骨
79	骨片			踵骨（？）	２号人骨
80	手の第１末節骨	左			２号人骨
81	頭蓋			赤色顔料付着。４号人骨の前頭骨あり。	３号，４号
82	肋骨片	不明			３号人骨
83	肋骨片	不明			３号人骨
84	腰椎椎体片				３号人骨
85	仙骨		上部（S1相当）		３号人骨
86	寛骨	左	恥骨	91と対、外側面に赤色顔料	３号人骨
87	橈骨	右	C-D	赤色顔料付着（ベンガラ）	３号人骨
88	尺骨	右	C-D	赤色顔料付着（ベンガラ）	３号人骨
89	第５中手骨	右	遠位側		３号人骨
90	寛骨	左	寛骨臼周辺	B91と対	３号人骨
91	寛骨	右	恥骨結合、坐骨腸骨翼の一部欠	寛骨臼、腸骨翼の外側面に赤色顔料	３号人骨
92	大腿骨	右	P-C-D*		３号人骨
93	大腿骨	左	P-C-D*		３号人骨
94	脛骨片		C		３号人骨
95	上腕骨	左	C-D		２号人骨
96	尺骨、上腕骨片	左	尺骨：P-C		２号人骨
97	橈骨	左	C		２号人骨
98	大腿骨片	左	C		４号人骨
99	大腿骨	左	D		４号人骨
100	大腿骨	右	C/D*		４号人骨
101	脛骨	左	P*-C		４号人骨
102	脛骨	右	P*-C		４号人骨
103	大腿骨	右	C		５号人骨

越敷山51号墳埋葬施設２

1	大腿骨	右	C	３と対
2	恥骨	左	恥骨体～恥骨上枝	
3	大腿骨	左	C	１と対
4	寛骨片	不明		
5	頭蓋骨片	左右	ブレグマ付近	
6	肩甲骨	左	関節窩周辺	
7	後頭骨		後頭隆起周辺	
8	肋骨	左		
9	上腕骨片？	不明		
10	胸椎		椎弓片	
11	肋骨片	不明		
12	上腕骨片	左	C	13と接合可
13	上腕骨片	左	C	12と接合可
14	下顎骨		右下顎枝を欠く	
15	肋骨片	左		
16	鎖骨	左		
17	右下顎第２大臼歯、骨片			14の下顎骨のもの
18	椎骨片			
19	胸椎		椎弓	
20	第７頚椎		椎体	

P：近位、C：骨体、D：遠位、*：骨端が完存していないものを示す。

第５章　総括

第１節　越敷山古墳群（金廻地区）について

１．はじめに

越敷山古墳群は、標高226mの越敷山一帯に広がる丘陵に分布しており、125基の古墳が確認されている。これらは発掘調査が行われておらず、いつ頃から形成されたのかなど、詳細な情報は得られていない。今回、越敷山古墳群の北西側において、20基の古墳がまとまって分布する金廻周辺に国道181号（岸本バイパス）道路の改良工事が行われることとなり、工事範囲にあたる金廻家ノ上ノ内遺跡内の10基の古墳（越敷山49・51・75～77・98・99・121～123号墳）の調査を実施した。その結果、古墳時代中期から後期にかけて築造された古群であることが明らかとなった。詳細については前章までに報告した通りであるが、ここではそれを若干整理し、まとめとしたい。

２．古墳群の形成過程

造営開始時期は、最も古いものが中期前葉頃の越敷山121号墳であり、この頃からとみられる。反対に最も新しいものは、後期前半頃の越敷山99号墳であるが、南西側へと続く丘陵頂部に横穴式石室を伴う越敷山55号墳があるため、後期後半頃まで古墳の築造が行われていたと考えられる。

これらの築造順については、まず標高85m付近の緩斜面において越敷山121号墳が築造され、その後標高112m付近の丘陵頂部に移動し、越敷山51号墳が築かれる。そして、そこを起点として後期前葉にかけて、丘陵頂部から北側へ下る尾根上に越敷山49号墳→越敷山77号墳→越敷山123号墳→越敷山122号墳→越敷山98号墳→越敷山76号墳→越敷山75号墳の順につくられる。後期前半頃には再び丘陵頂部へと移動し、越敷山99号墳が築造される。なお、越敷山55号墳がさらに南西側にあることから、

第６表　越敷山古墳群（金廻地区）一覧

古墳名	立地	時期	形状	周溝	盛土	土量	規模（m）　※括弧内は周溝を含む値	埋葬施設		調査年度
越敷山49号墳	丘陵頂部	中期中葉	円墳	有	有	45.8㎥	直径：19.00（20.30）、高さ：2.30	箱式石棺	2	平成23・24年度調査
越敷山51号墳	丘陵頂部	中期前葉～後葉	円墳	有	有	205.5㎥	直径：25.00（27.00）、高さ：3.00	箱式石棺	2	平成24年度調査
越敷山77号墳	丘陵頂部	中期中葉	円墳	有	有	11.0㎥	直径： 8.00（12.00）、高さ：1.00	箱式石棺	1	平成24年度調査
越敷山99号墳	丘陵頂部	後期前半	円墳	有	有		直径： 7.10 （8.00）、高さ：1.03	箱式石棺	1	平成23年度調査
越敷山75号墳	斜面部	中期後葉～後期前葉	円墳	有			直径： 6.00 （8.00）、高さ：0.60	箱式石棺	1	平成23年度調査
越敷山76号墳	斜面部	中期後葉～後期前葉	円墳	有			直径： 5.00 （6.00）、高さ：0.26	箱式石棺	1	平成23年度調査
越敷山98号墳	斜面部		円墳	有	有		直径： 3.30 （4.00）、高さ：0.43	土抗墓	1	平成23年度調査
越敷山121号墳	緩斜面	中期前葉	円墳	有			直径：10.50（13.00）		1	平成23年度調査
越敷山122号墳	斜面部	中期後葉～後期前葉	円墳	有			直径： 4.30 （5.80）、高さ：0.35	箱式石棺	1	平成23年度調査
越敷山123号墳	斜面部		円墳	有	有		直径： 8.00（10.50）、高さ：0.80	箱式石棺	1	平成23年度調査
越敷山50号墳	丘陵頂部		円墳				直径：10.00、高さ：1.00			未調査
越敷山52号墳	丘陵頂部		円墳				直径：12.00、高さ：1.00			未調査
越敷山53号墳	丘陵頂部		円墳				直径：12.00、高さ：1.00			未調査
越敷山54号墳	丘陵頂部		円墳				直径：10.00、高さ：1.00			未調査
越敷山55号墳	丘陵頂部		円墳				直径： 9.00、高さ：1.50	横穴式石室	1	未調査
越敷山72号墳	斜面部		円墳				直径：11.00、高さ：1.50			未調査
越敷山73号墳	斜面部		円墳				直径： 6.00、高さ：1.00			未調査
越敷山74号墳	斜面部		円墳				直径：13.00、高さ：1.50			未調査
越敷山124号墳	斜面部		円墳				直径：10.00、高さ：1.20			未調査
越敷山125号墳	斜面部		円墳				直径： 8.00、高さ：1.80			未調査

後期後半頃にかけて丘陵頂部に古墳が築造されたとみられる。

３．墳丘規模

墳丘規模は、越敷山49・51・121号墳のように古墳群の中で古い段階に築造されたものが大きい。とりわけ越敷山51号墳は、古墳築造に用いた盛土の土量が概算で205.5㎥あり、次に大きい越敷山49号墳の45.8㎥に比べて４倍以上もあり、突出した存在である。これ以降、時期の経過とともに墳丘の規模は縮小していくが、越敷山75・76・98・122・123号墳のように、北側へと下る丘陵尾根上につくられた古墳については、地形的な制約のためか規模が小さくなるようである。

４．墳丘の構築方法

築造方法については、周囲を削り出して平面形を整え、盛土をしたと考えられるが、大半の盛土が失われており、この状況がわかるものは越敷山49・51・77号墳のみである。

越敷山51号墳は、平面形を整えた後、盛土範囲を平坦にした上で盛土をする。盛土は基盤となる土を薄く敷き、墳丘の外表側に土手を巡らし、土手の中心の窪みに土を充填する工程を２度繰り返して積み上げられており、西日本で広く認められる方法に準じて築造されている（青木2003）。盛土には地山を破砕した土（A類）、黒色土（旧表土）と地山を破砕した土の混合土（B類）、黒色土や黒褐色土を呈し、地山ブロックが含まれない土（C類）の３種類が使用されており、A類は土手の内部、B類は土手、C類は基盤となる部分で用いられ、使い分けられていたと考えられる。ただし、これらは針貫入強度測定の結果、強度を増すなど構造的な要因というよりも、視覚的な要因によって使い分けられていたと思われる。越敷山49号墳については、越敷山51号墳と概ね同様の工程を経てつくられるが、繰り返す工程がないなど簡略されている。また、越敷山77号墳についても、越敷山49号墳と共通するが、盛土範囲を平坦にする工程は省略されており、時間の経過とともに簡略化するようである。

５．埋葬施設

埋葬施設は、箱式石棺を採用しているものが大半であり、それ以外では、石蓋を伴う土坑墓が越敷山98号墳で認められるにすぎない。これらの主軸は越敷山51号墳埋葬施設２を除き、尾根に直交しており、東西方向を向く。これらの構築方法は越敷山埋葬施設１が構築墓壙と考えられ、それ以外は墳丘の築造後につくられた掘込墓壙とみられる（和田1989）。

箱式石棺の構造については、短側石を長側石で挟んだ「H」字形を呈するものが大半を占め、越敷山122号墳のみが「口」字形となる。長側石は長方形の石材を平継によって組み合わせており、継目には板石を配置するものが多い。なお、長側石についてみると、越敷山49号墳埋葬施設１や越敷山51号墳埋葬施設１では大型の板石を２×２枚使用し、短側石との接地部分には溝が彫り込まれるなど、丁寧に加工する。それに対して、これ以外の埋葬施設では、板石を概ね３×３枚を使用しているが、溝が彫り込まれるなどの加工は認められず、簡略化している。使用された石材については、板状に剥離するものを使用している。これらは分析結果から、遺跡周辺にある露岩とみられ、この周辺から採取されたものと考えられる。

ところで、箱式石棺内には赤色顔料が塗布されるものがある（越敷山49号墳埋葬施設１、越敷山51号墳埋葬施設１・２）。その成分については、分析結果からベンガラと考えられる。なお、越敷山49

号墳埋葬施設１や越敷山51号墳埋葬施設１から出土した人骨の頭蓋骨にも赤色顔料が塗布されているが水銀朱であり、石棺内と人骨では顔料を使い分けていたとみられる。

６．埋葬状況

埋葬頭位については、石枕の状況をみると、概ね東を向く。ただし、同棺複数埋葬が行われているものは対置埋葬のため、西を向くものがある。また、同一墳丘内における複数埋葬のうち、追葬とみられる越敷山51号墳埋葬施設２については南を向き違いが認められる。

人骨は、越敷山49号墳埋葬施設１、越敷山51号墳埋葬施設１、越敷山51号墳埋葬施設２で検出している。このうち越敷山49号墳埋葬施設１と越敷山51号墳埋葬施設１は、１つの棺の中に複数の被葬者が埋葬されており、なかでも越敷山51号墳埋葬施設１は５体の人骨が埋葬されているほか、追葬時の掘り方がみられるなど埋葬された状況がよく残る。なお、これらの埋葬施設の中には片付けられた人骨がみられ、それらには石枕が配置されずに、棺床に頭蓋骨が置かれている。

ところで、一つの棺の中に多数の人骨を埋葬するものは、これまで米子市にある日下古墳群の日下12号墳（後期前半頃）、大山町にある向原古墳群の向原第６号墳第１号埋葬施設（後期前半頃）などが知られており、これらは長期にわたり追葬が行われていたとみられ（岡野2000）、越敷山51号墳埋葬施設１の状況と共通する。そのため、少なくとも当該地域では中期前葉頃において竪穴系埋葬施設で長期にわたり追葬が行われていたとみられ、後期後半頃にかけて存続していたと考えられる。

このほか、越敷山49号墳埋葬施設１の２号人骨と越敷山51号墳埋葬施設２に埋葬された人骨は、散乱していたり（２号人骨）、頭蓋骨や肩甲骨が腹部の周辺にあるなど、埋葬後に動かされた形跡が認められる。

７．副葬品

副葬品は、越敷山51号墳の埋葬施設１と越敷山123号墳の埋葬施設から出土しており、ともに武器や農工具が納められている。とりわけ越敷山51号墳の埋葬施設１からは鉄剣、鉄刀、鉄鉾、鉄斧のほか、勾玉や管玉などの玉類、竪櫛と多彩な副葬品が出土している。なかでも鉄鉾は、袋部が五角形を呈しており、百済・伽耶系のものとみられ、このような鉄鉾は「地方」の有力首長墓や渡来系文物を含む古墳から出土することが多いようであり（高田1998）、副葬品の出土状況や墳丘規模などを踏まえると、越敷山51号墳は、この時期における当該地域の中で突出した存在といえるだろう。

参考文献

青木　敬　2003「古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―」六一書房
岡野雅則　2000「鳥取県内における同棺複数埋葬について」『島古墳群　米里三ノ嵜遺跡　北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）』鳥取県教育文化財団調査報告書64、財団法人鳥取県教育文化財団
清家　章　2010「古墳時代の埋葬原理と親族構造」大阪大学出版会
高田貫太　1998「古墳副葬鉄鉾の性格」考古学研究第45巻第１号、考古学研究会
和田晴吾　1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元６、講談社

第２節　まとめ

金廻家ノ上ノ内遺跡の調査の結果、越敷山古墳群（金廻地区）に属する10基の古墳のほか、竪穴建物２棟、掘立柱建物１棟、段状遺構２基、落とし穴18基、土坑９基、土坑墓１基を確認した。古墳については前節で述べたとおりであるが、それ以外の遺構については、概ね古墳時代以前のものとみられ、縄文時代と弥生時代が主体となすようである。ここでは今回の調査成果について時期ごとに概観し、まとめとしたい。

縄文時代

縄文時代では、今回の調査では落とし穴18基を確認した。これらは底面にピットを伴うものと、伴わないものの２種類が認められる。また、平面形には円形、方形、長方形などがあり、断面形も葉小形やすり鉢状を呈するなど多彩である。このため、つくられた時期に差があるものと想定される。これらの位置についてみると、単独のものが列状に配置されているようである。ところで、周辺遺跡の状況をみると、坂長宮田ノ上遺跡や坂中第５遺跡、越敷野原遺跡、小野越城野原第１・２遺跡などで落とし穴が確認されており、この丘陵一帯は、狩猟場として利用されていたとみられる。

弥生時代

弥生時代では、中期頃の土器の小片がみられることから、集落や墓などが形成されていた可能性があるが、この時期に帰属する遺構は認められない。後期中葉から後葉頃になると、竪穴建物２棟（SI1･2）がみられるようになり、集落が営まれるようになる。ただし、これらは確認された遺構の数や出土遺物の状況から、小規模であり、短期間で廃絶したとみられる。ところで、この集落が営まれた場所は丘陵頂部であり、平地との比高差は60m以上ある。ここは細尾根となっており、平坦地が少ない。ここから米子平野から日本海を望むことができ眺望は良いが、当該期における集落が形成される場所にしては条件が悪い。このため、見張所としての機能を有する高地性集落とみられるが、鏃など武器を示すような遺物が出土しておらず、広義の高地性集落（小野1984）として捉える事ができるだろう。

古墳時代

古墳時代では、中期前葉頃から後期にかけて古墳群が形成されるようになり、この丘陵一帯は墓域となる。これらは、時間の経過とともに場所を移しながら形成されたようである。古墳の築造方法についてみると、墳丘は西日本で広く認められる方法に従って築かれているが、時期の経過とともに簡略化されたと考えられる。埋葬方法については、頭位を東に向けて埋葬するものが大半を占めるが、同一墳丘内に新たに埋葬施設を築き追葬したと考えられるものや、同棺複数埋葬が行われている埋葬施設では、異なる方向のものがある。同棺複数埋葬が行われた埋葬施設の状況をみると、越敷山49号墳埋葬施設１では２体、越敷山51号墳埋葬施設１では５体の人骨が埋葬されている。このうち後者は、長期にわたり何度も追葬が行われていたと考えられる。副葬品については、越敷山51号墳において鉄剣、鉄刀、鉄鉾、鉄斧のほか、勾玉や管玉などの玉類、竪櫛と多彩な副葬品が出土しており、当該地域における有力者が埋葬されていた状況がうかがわれる。

参考文献

小野忠凞　1984「高地性集落論」学生社

PLATE

越敷山49・51・77・99号墳（西から）

越敷山49号墳埋葬施設１（南西から）

越敷山51号墳埋葬施設１（南西から）

越敷山51号墳埋葬施設２（北東から）

１．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト、西から）

２．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト北側、南西から）

３．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト中央、南西から）

４．越敷山51号墳墳丘断面（南北ベルト南側、南西から）

越敷山51号墳埋葬施設 1 出土遺物

越敷山51号墳埋葬施設１出土遺物

越敷山49・51号墳出土人骨

1：越敷山 49 号墳埋葬施設 1 の 1 号人骨。1a；正面観、1b；右側面観。

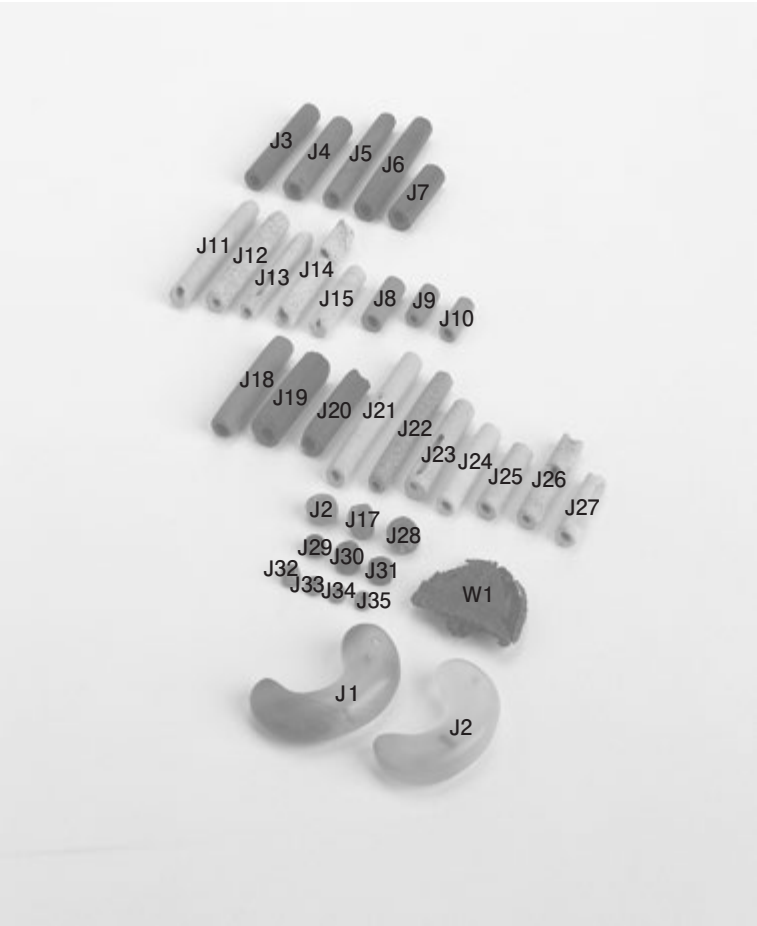
2：越敷山 51 号墳埋葬施設 1 の 1 号人骨。2a；正面観、2b；左側面観、2c；下面観、2d；左側頭部の骨折治癒（矢印は骨の癒合の際に生じた卵円形と涙滴形の開口、矢頭は骨折線を示す）。2a は注記番号跡を消すため、右側頭部に画像処理を施している。

越敷山51号墳出土人骨

1：越敷山 51 号墳埋葬施設 1 の 2 号人骨。1a；正面観、1b；左側面観、1c；下面観、1d；上面観。1a と 1b は注記番号跡を消すため、左側頭部に画像処理を施している。

2：越敷山 51 号墳埋葬施設 1 の 3 号人骨。2a；正面観、2b；右側面観。

PL.10


J3
J4
J5
J6
J7
J11
J12
J13
J14
J15
J8
J9
J10
J18
J19
J20
J21
J22
J23
J24
J25
J26
J27
J2
J17
J28
J29
J30
J31
J32
J33
J34
J35
W1
J1
J2

F6
F10
F9
F7
F8
F5

1．越敷山75・76・98・121 ～ 123号墳調査前状況（北東から）

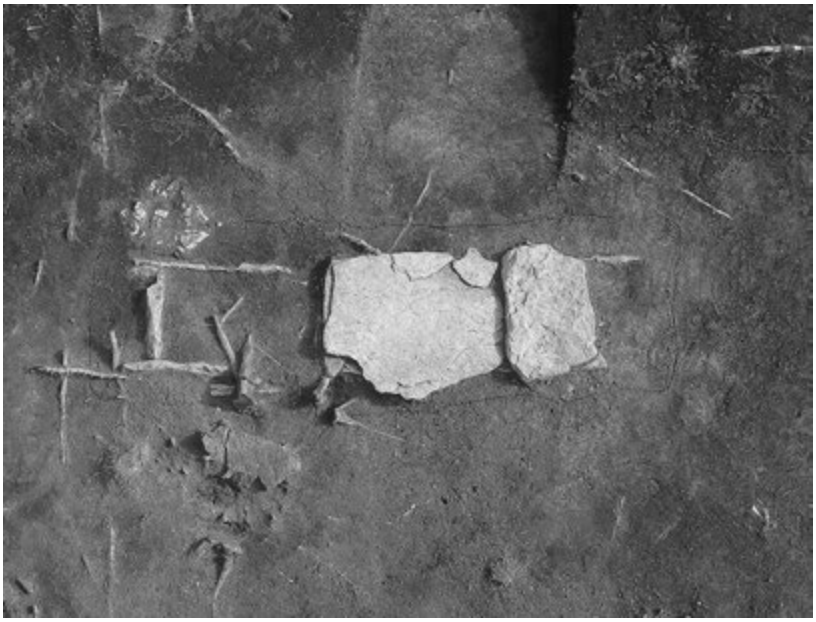
2．越敷山75・76・98・121 ～ 123号墳（北東から）

1．越敷山75・76・98・122・123号墳（北から）

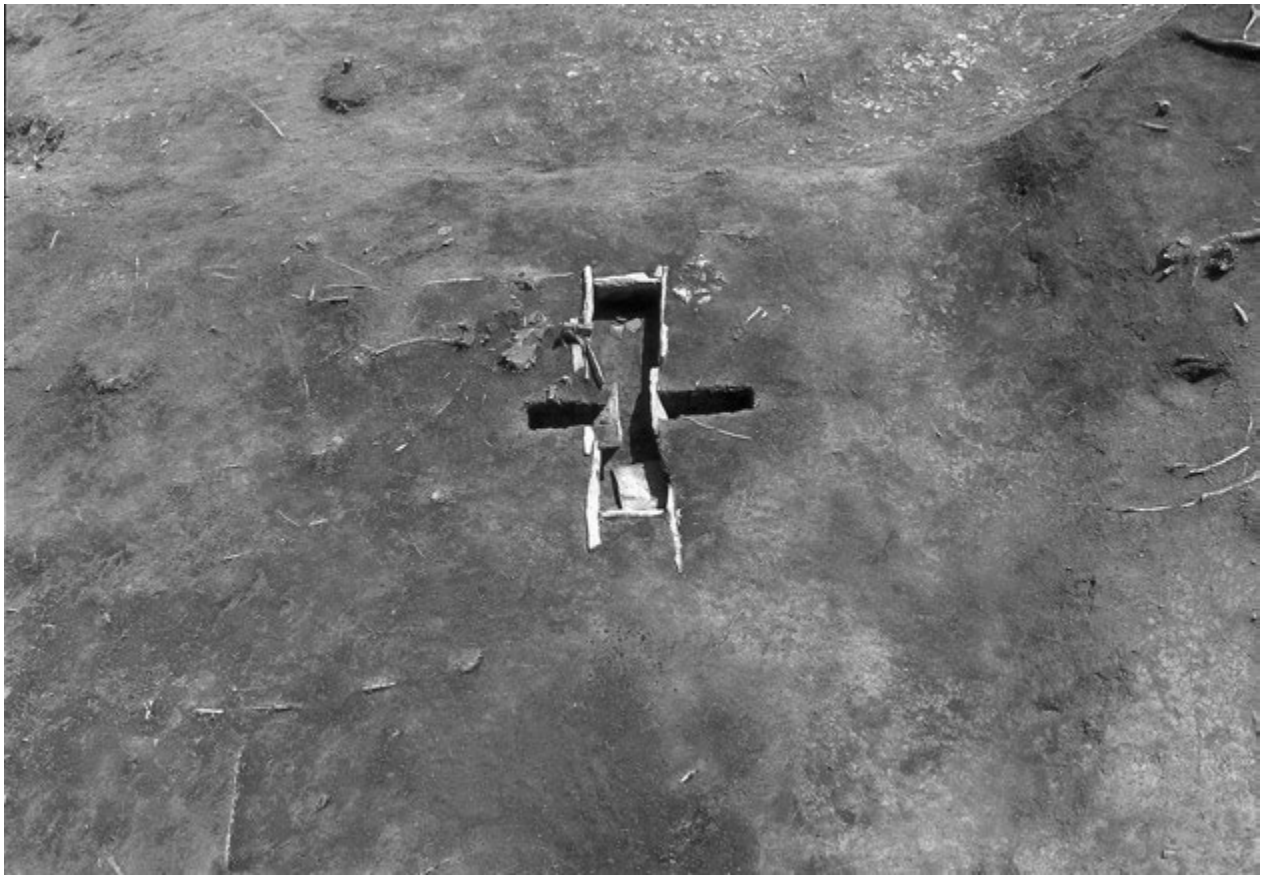
2．越敷山49・51号墳（北から）

1．越敷山121号墳完掘状況
（東から）

2．越敷山75号墳検出状況
（北から）



3．越敷山75号墳埋葬施設検出状況
（北から）

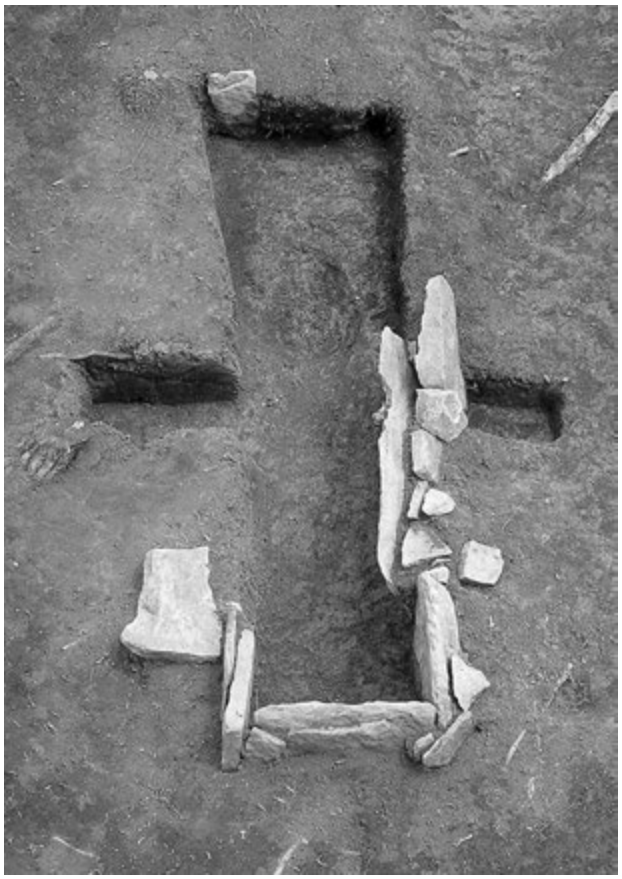


1．越敷山75号墳完掘状況（西から）

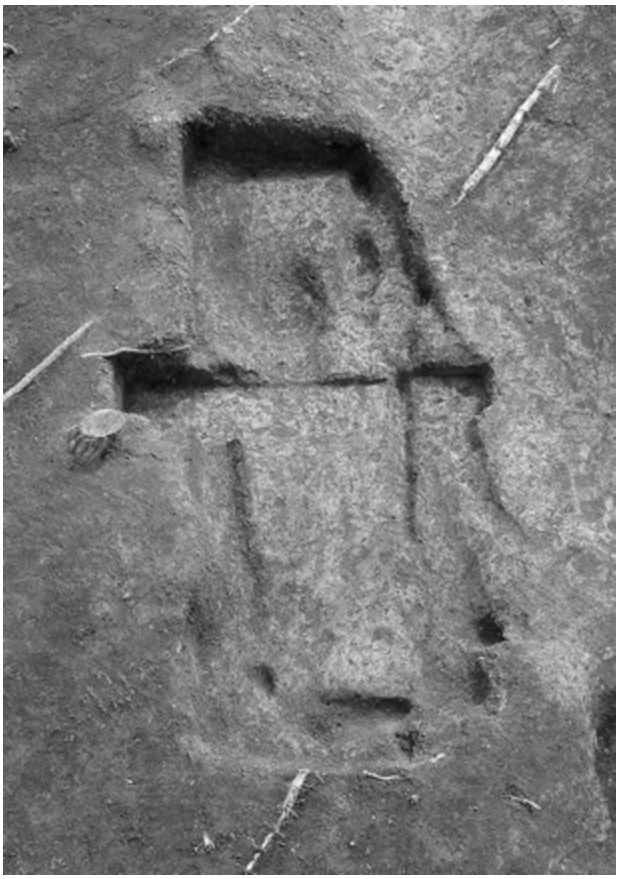
2．越敷山75号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）

3．越敷山75号墳埋葬施設完掘状況（西から）

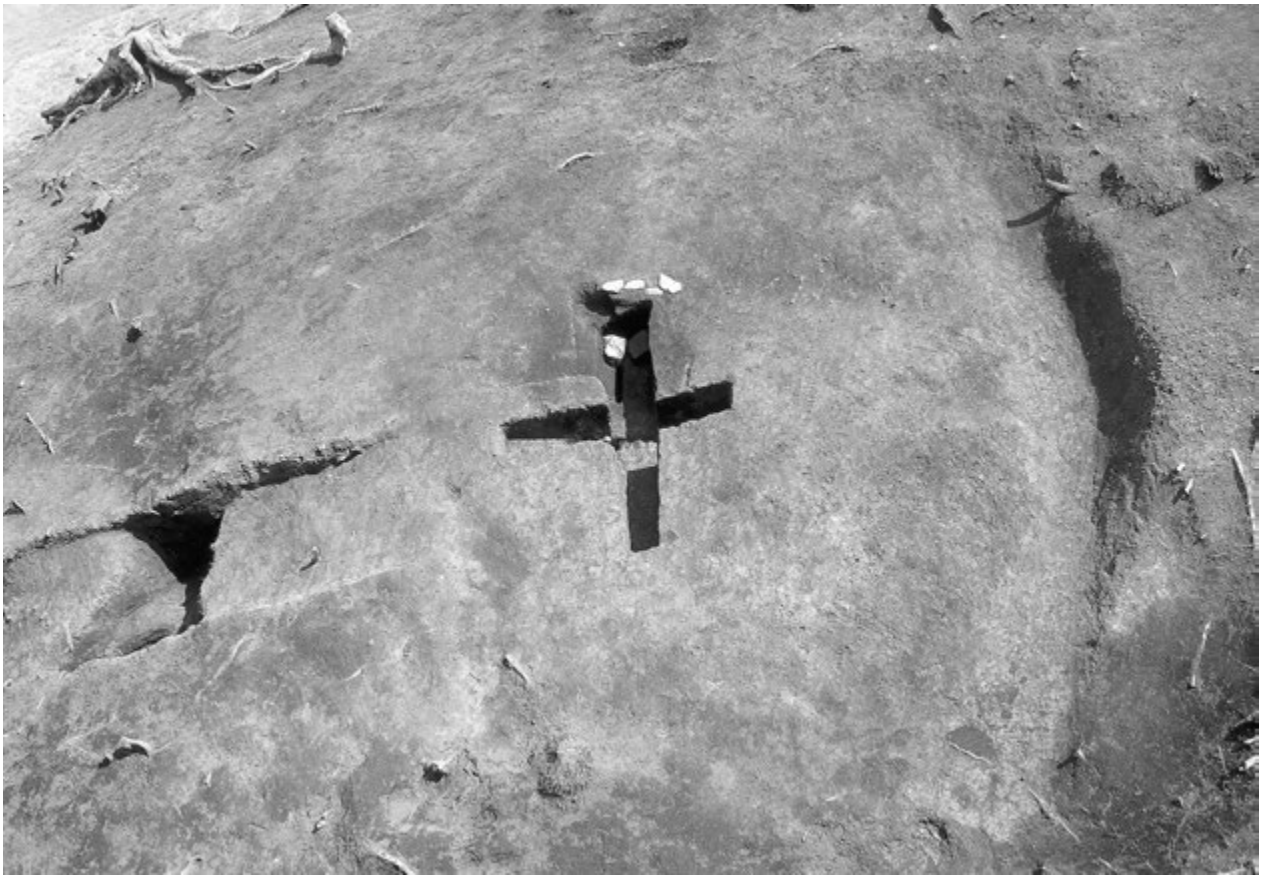
1．越敷山76号墳完掘状況（西から）



2．越敷山76号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）



3．越敷山76号墳埋葬施設完掘状況（西から）

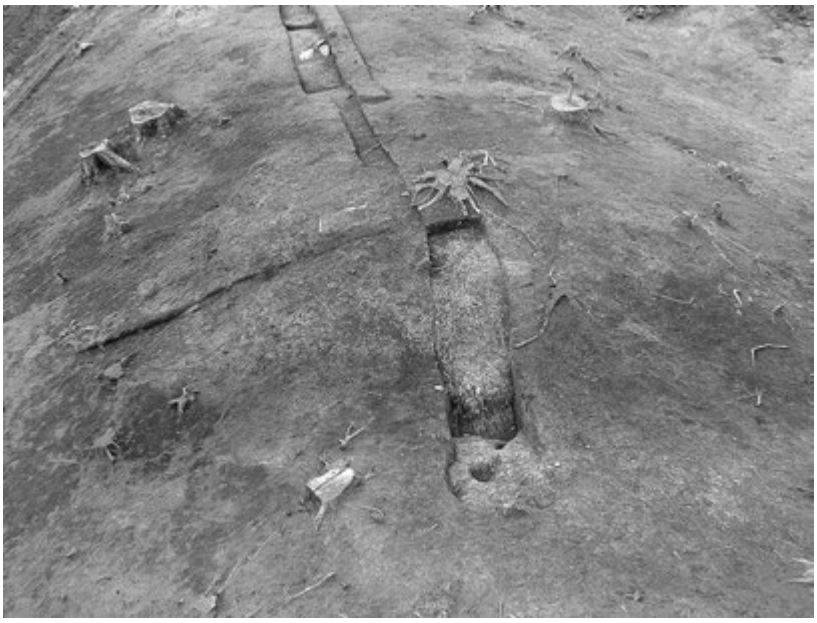


1．越敷山98号墳完掘状況（西から）

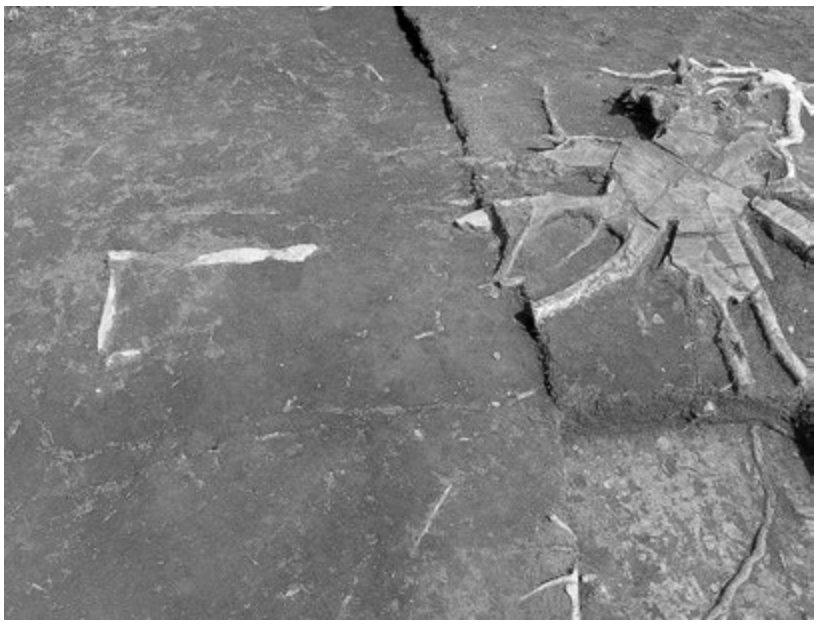
2．越敷山98号墳埋葬施設検出状況（西から）

3．越敷山98号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）

1．越敷山98号墳埋葬施設完掘状況
（西から）



2．越敷山122号墳検出状況
（南から）



3．越敷山122号墳埋葬施設検出状況
（南から）

1．越敷山122号墳完掘状況（西から）

2．越敷山122号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）

3．越敷山122号墳埋葬施設完掘状況（西から）

1．越敷山123号墳完掘状況（西から）

2．越敷山123号墳埋葬施設棺内完掘状況（西から）

3．越敷山123号墳埋葬施設完掘状況（西から）

1．越敷山77号墳調査前状況
（南から）

2．越敷山77号墳墳丘検出状況
（南から）

3．越敷山77号墳完掘状況
（南から）

1．越敷山77号墳完掘状況
（上空から）

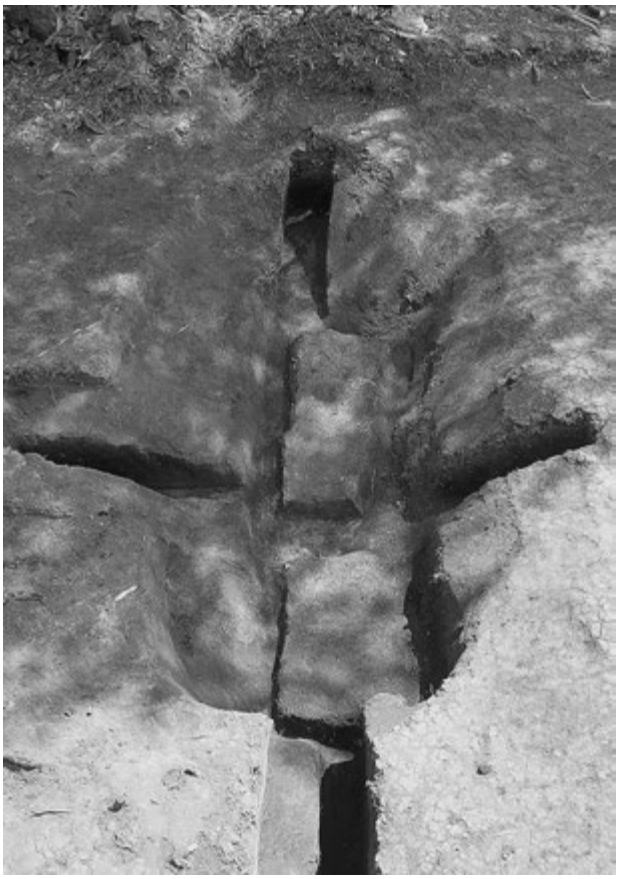
2．越敷山77号墳墳丘盛断面
（南から）

3．越敷山77号墳墳丘除去後
（南から）

1．越敷山77号墳埋葬施設検出状況（南西から）

2．越敷山77号墳埋葬施設棺内完掘状況（南西から）

3．越敷山77号墳埋葬施設石棺検出状況（南西から）



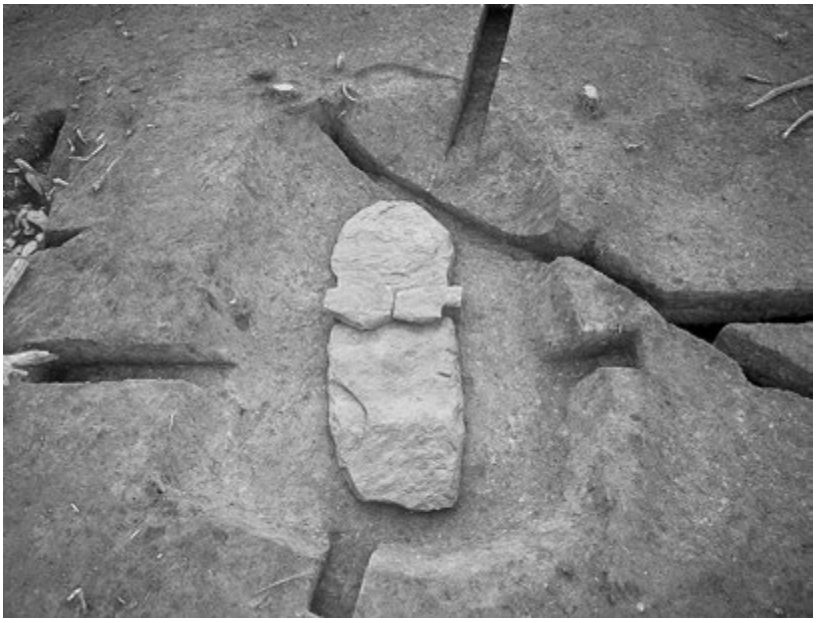
4．越敷山77号墳埋葬施設完掘状況（南西から）

1．越敷山49号墳調査前状況（南から）

2．越敷山49号墳完掘状況（南から）

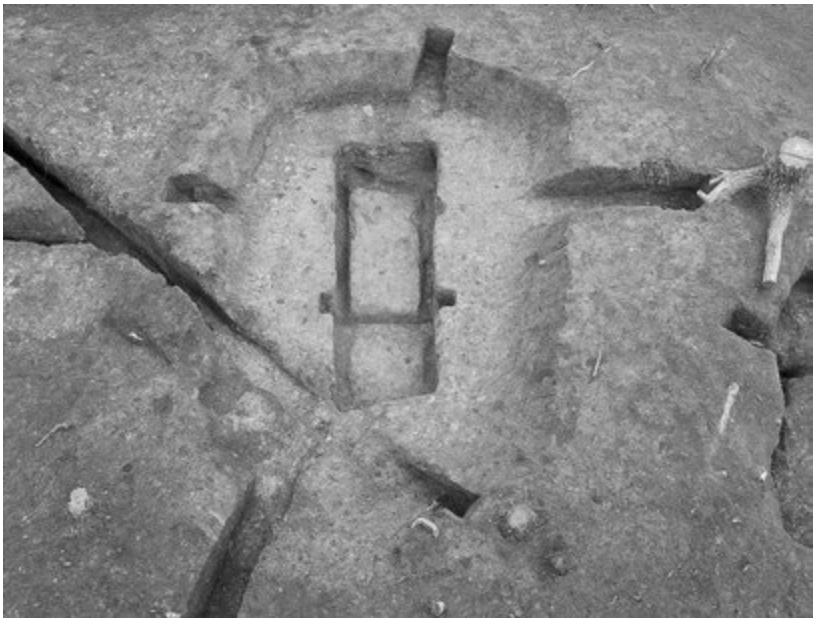
１．越敷山49号墳第３工程盛土除去状況（南から）

２．越敷山49号墳盛土除去後（南から）



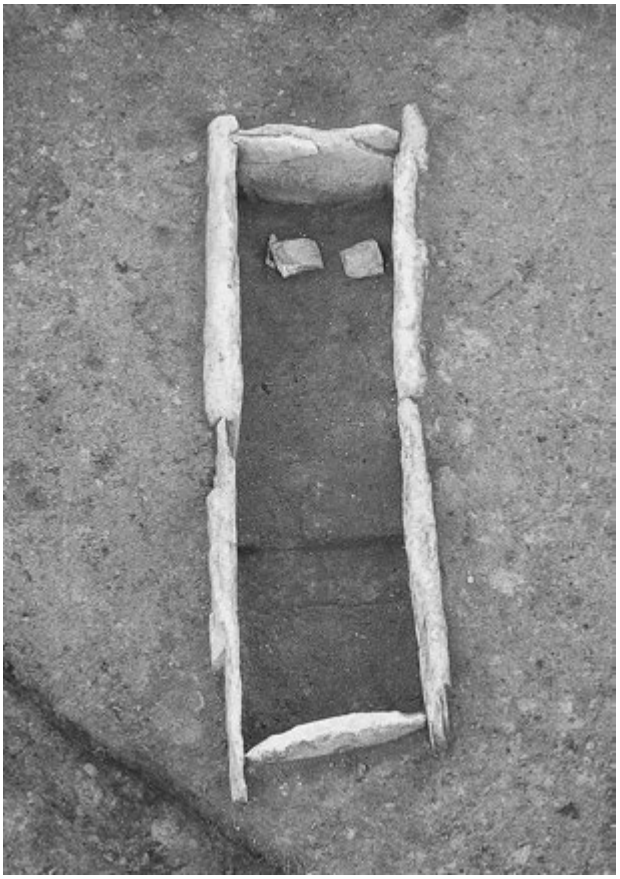
1．越敷山49号墳埋葬施設１蓋石検出状況（東から）

2．越敷山49号墳埋葬施設１棺内人骨検出状況（東から）



3．越敷山49号墳埋葬施設１完掘状況（西から）

1．越敷山49号墳埋葬施設１人骨検出状況（東から）



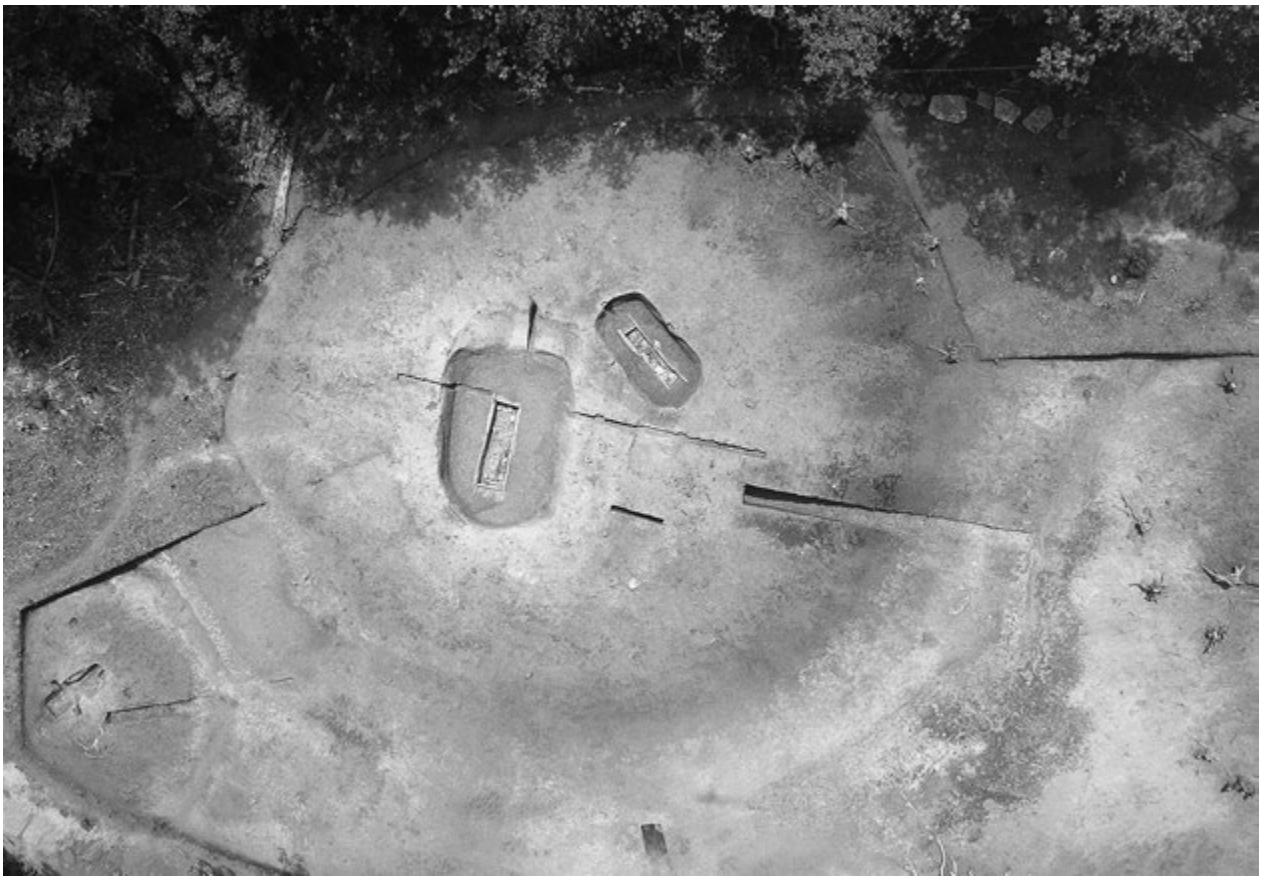
2．越敷山49号墳埋葬施設１棺内完掘状況（西から）

3．越敷山49号墳埋葬施設２棺内完掘状況（西から）

4．越敷山49号墳埋葬施設２完掘状況（西から）

1．越敷山51号墳調査前状況（北東から）

2．越敷山51号墳完掘状況（北東から）



１．越敷山51号墳完掘状況（上空から）

２．越敷山51号墳埋葬施設１・２棺内完掘状況（上空から）

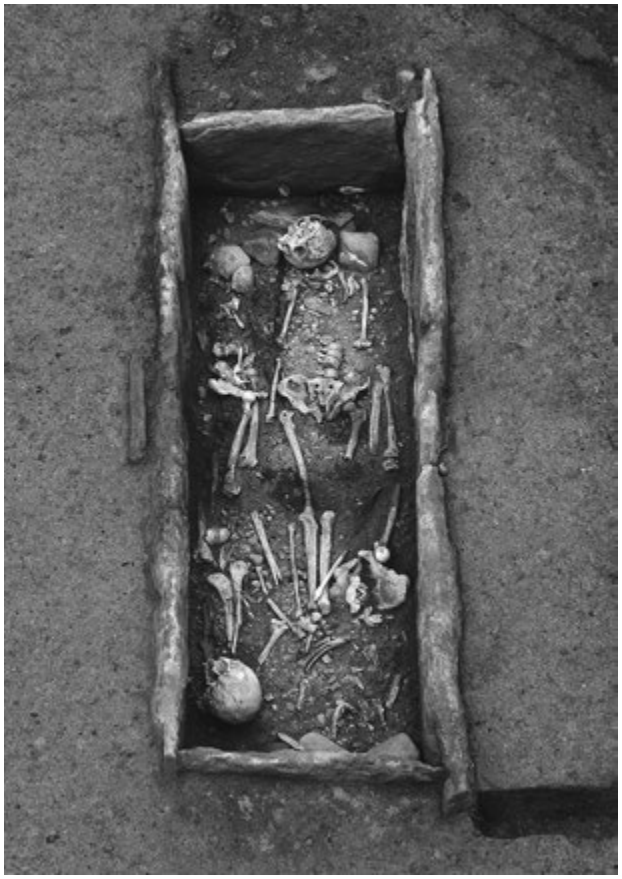
１．越敷山51号墳第５・６工程盛土除去状況（北から）

２．越敷山51号墳盛土除去後（北から）

1．越敷山51号墳埋葬施設１追葬時
掘り方断面（北東から）

2．越敷山51号墳埋葬施設１
蓋石検出状況（東から）

3．越敷山51号墳埋葬施設１
蓋石検出状況（西から）



1．越敷山51号墳埋葬施設１人骨検出状況（南西から）

2．越敷山51号墳埋葬施設１棺内１号人骨（南西から）

3．越敷山51号墳埋葬施設１棺内２号人骨（北東から）

4．越敷山51号墳埋葬施設１棺内３号人骨（南西から）

1．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況
（F5・7 ～ 10、南西から）

2．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況
（W1、南西から）

3．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況
（F6、北東から）

4．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況
（J1 ～ 15、北東から）

5．越敷山51号墳埋葬施設１遺物出土状況
（J16 ～ 28、北から）

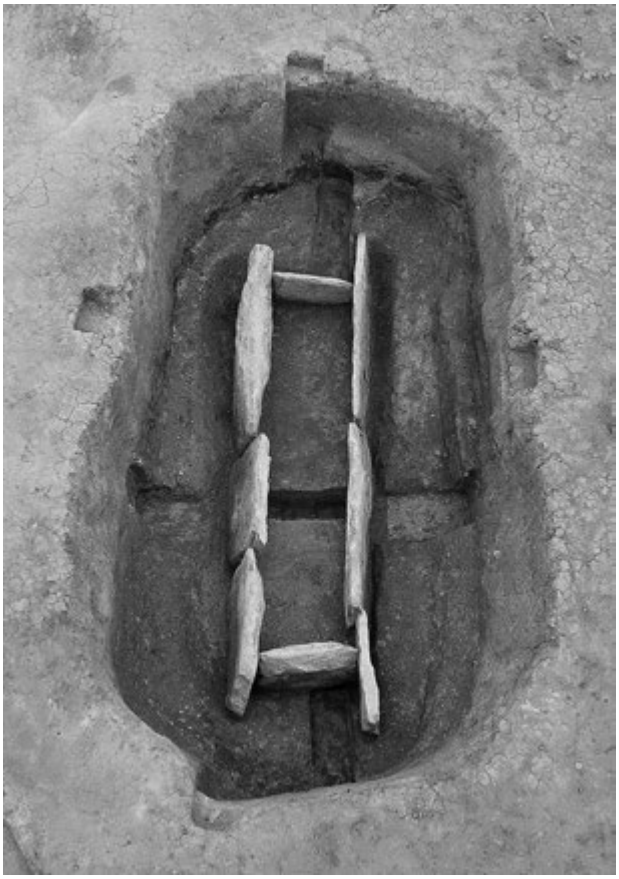
1．越敷山51号墳埋葬施設１
剥片散乱状況（北から）

2．越敷山51号墳埋葬施設１
石棺検出状況（南西から）

3．越敷山51号墳埋葬施設１
石棺検出状況（西から）

1．越敷山51号墳埋葬施設２蓋石検出状況（南西から）

2．越敷山51号墳埋葬施設２棺内完掘状況（北東から）



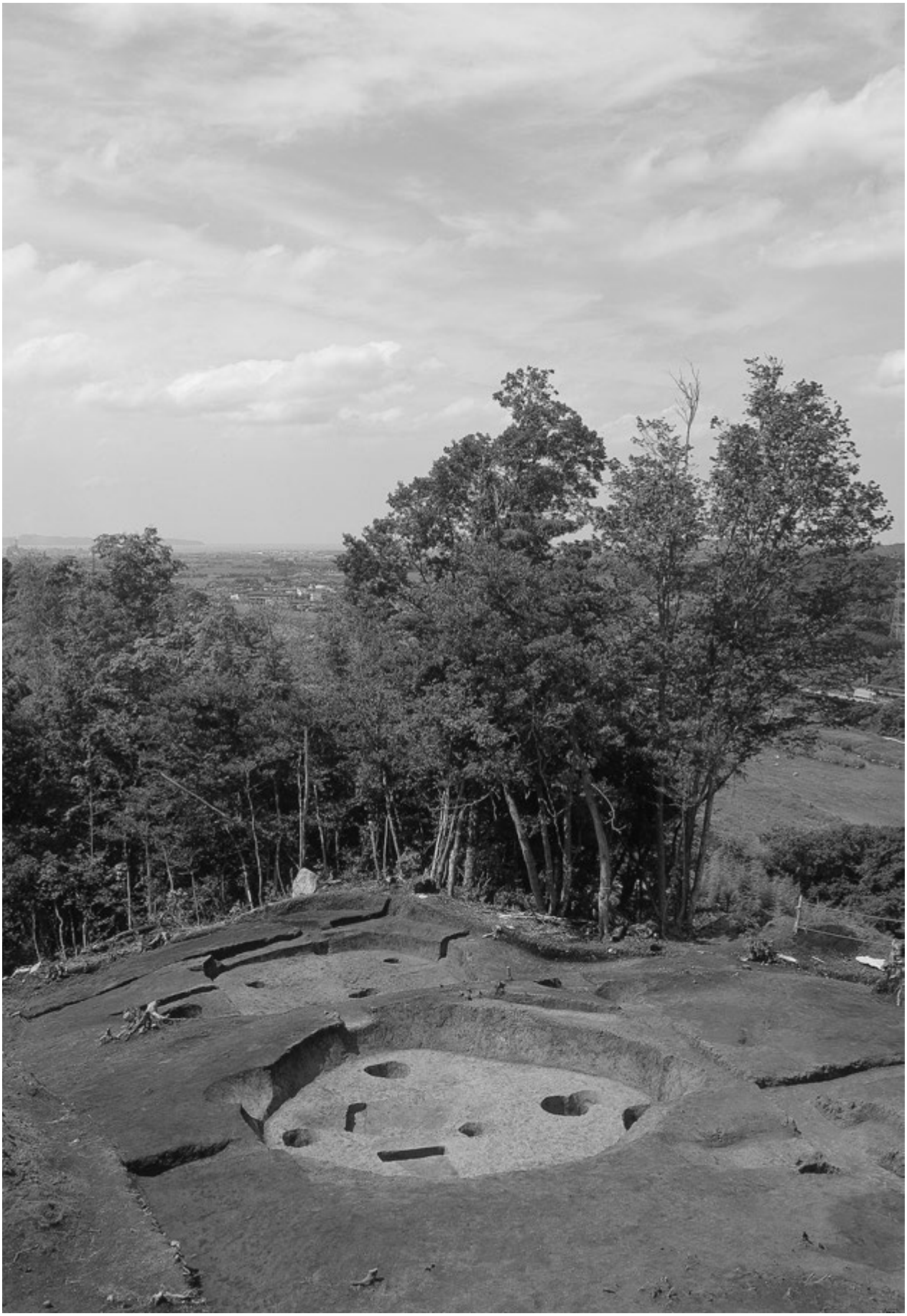
3．越敷山51号墳埋葬施設２石棺検出状況（北東から）

4．越敷山51号墳埋葬施設２完掘状況（北東から）

1．越敷山99号墳完掘状況（西から）

2．越敷山99号墳埋葬施設石蓋検出状況（北東から）

3．越敷山99号墳埋葬施設棺内完掘状況（北東から）



SI1・2完掘状況（南から）

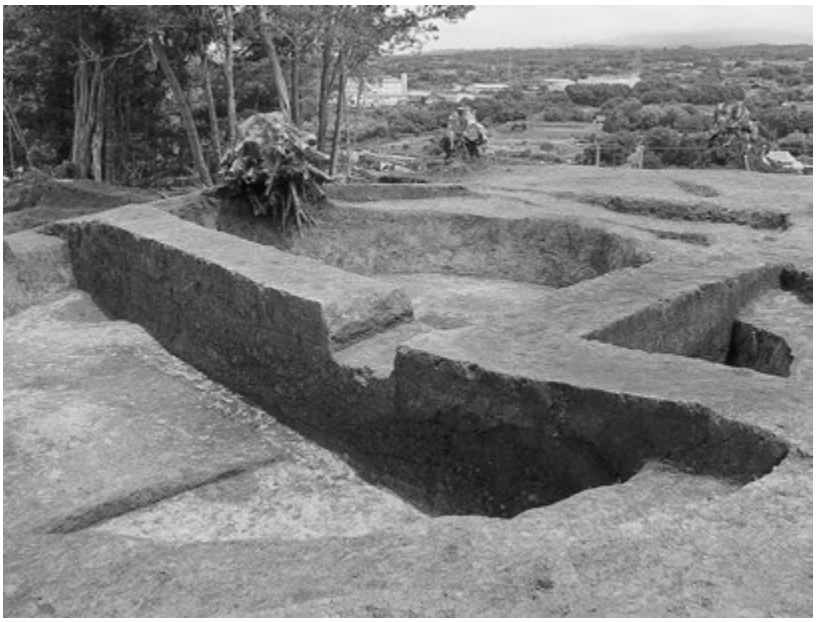
1．SI1完掘状況（南から）

2．SI1貼床除去後（南から）

3．SI1断面（南東から）

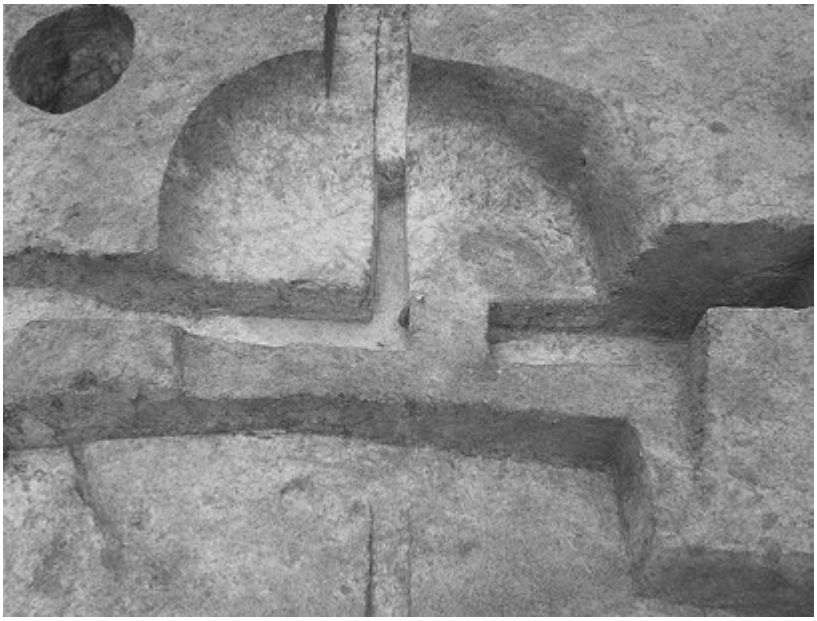
1．SI2完掘状況（南東から）

2．SI2貼床除去後（南東から）



3．SI2断面（南西から）

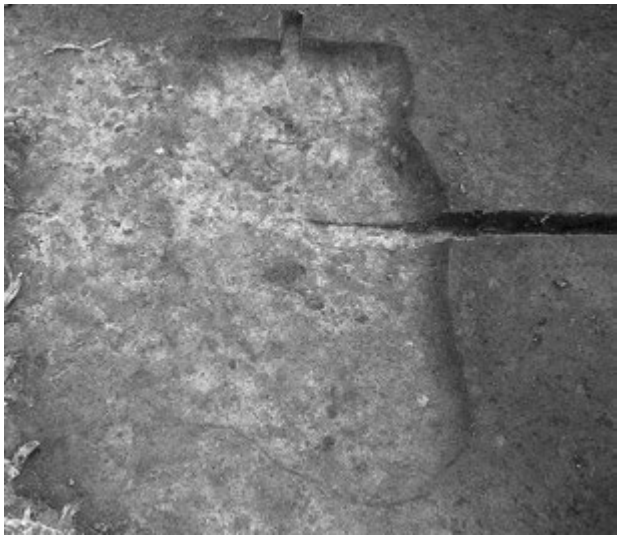
1．SB1完掘状況（北から）



2．SS1完掘状況（北から）

3．SS2完掘状況（北から）

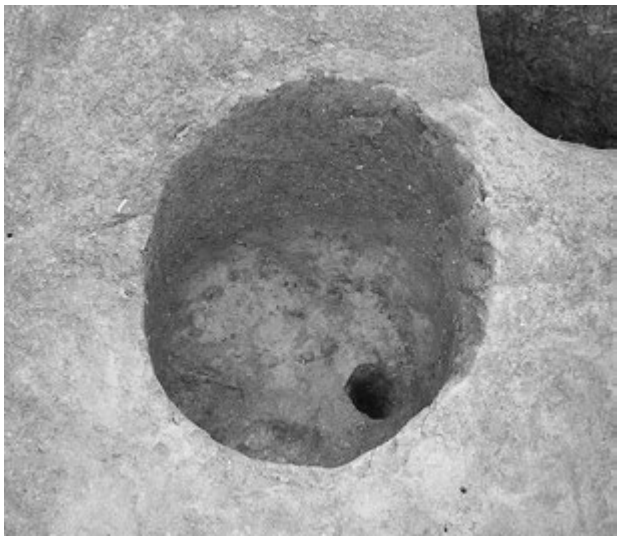
１．SK1完掘状況（東から）



２．SK2完掘状況（北東から）

３．SK3完掘状況（北から）

４．SK4完掘状況（東から）



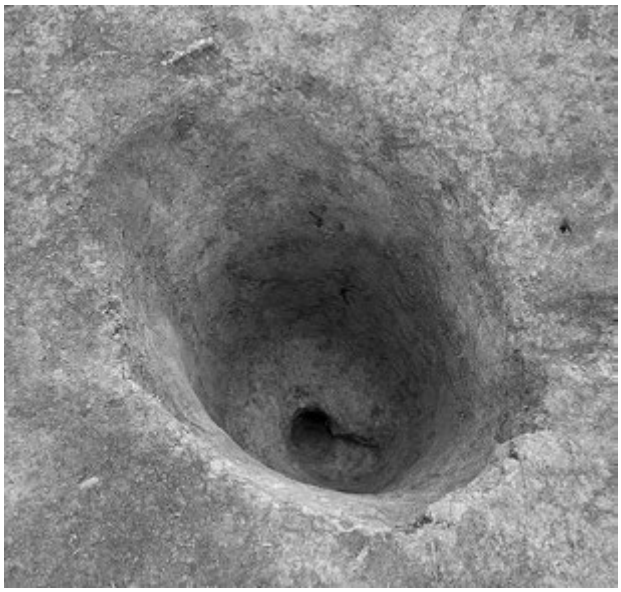
５．SK5完掘状況（東から）

６．SK6完掘状況（東から）

1．SK8完掘状況（北から）

2．SK9完掘状況（北から）

3．SK10完掘状況（北から）



4．SK11完掘状況（西から）

5．SK12完掘状況（西から）

１．SK13完掘状況（東から）

２．SK14完掘状況（北から）

３．SK15完掘状況（東から）

４．SK16完掘状況（南から）

５．SK17完掘状況（東から）

６．SK18完掘状況（北から）

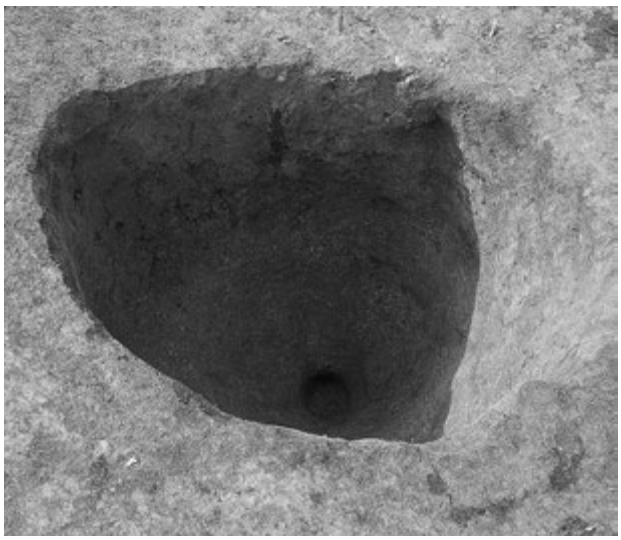
1．SK19完掘状況（西から）

2．SK20完掘状況（南から）

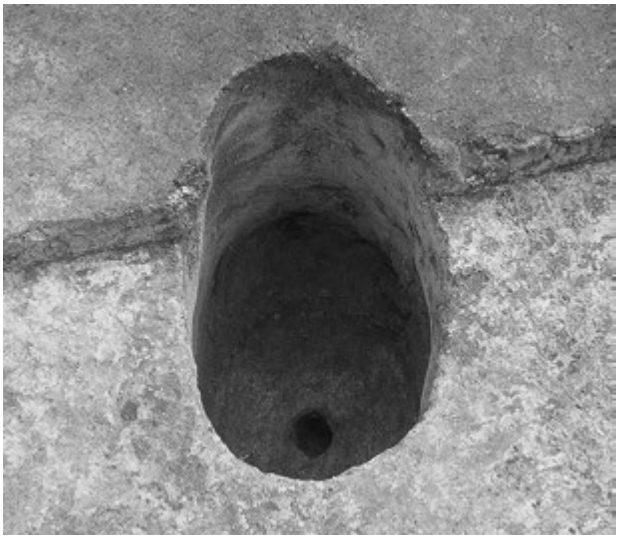
3．SK21完掘状況（南から）

4．SK22完掘状況（北から）

5．SK23完掘状況（北から）



6．SK24完掘状況（南から）



１．SK25完掘状況（東から）

２．SK26完掘状況（南から）

３．SK27完掘状況（北から）

４．SK28完掘状況（北から）

1．越敷山121号墳出土遺物

3．越敷山76号墳出土遺物

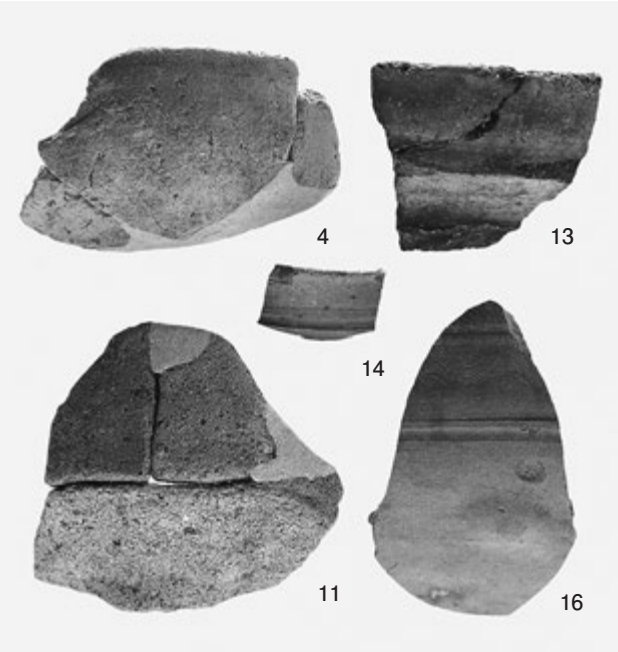
2．越敷山75号墳出土遺物

4．越敷山122号墳出土遺物

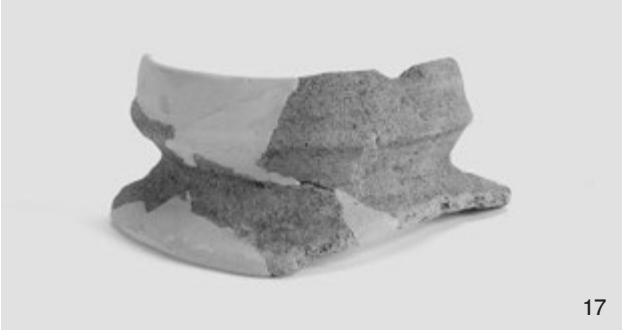
1．越敷山123号墳出土遺物

2．越敷山77号墳出土遺物

3．越敷山49号墳出土遺物

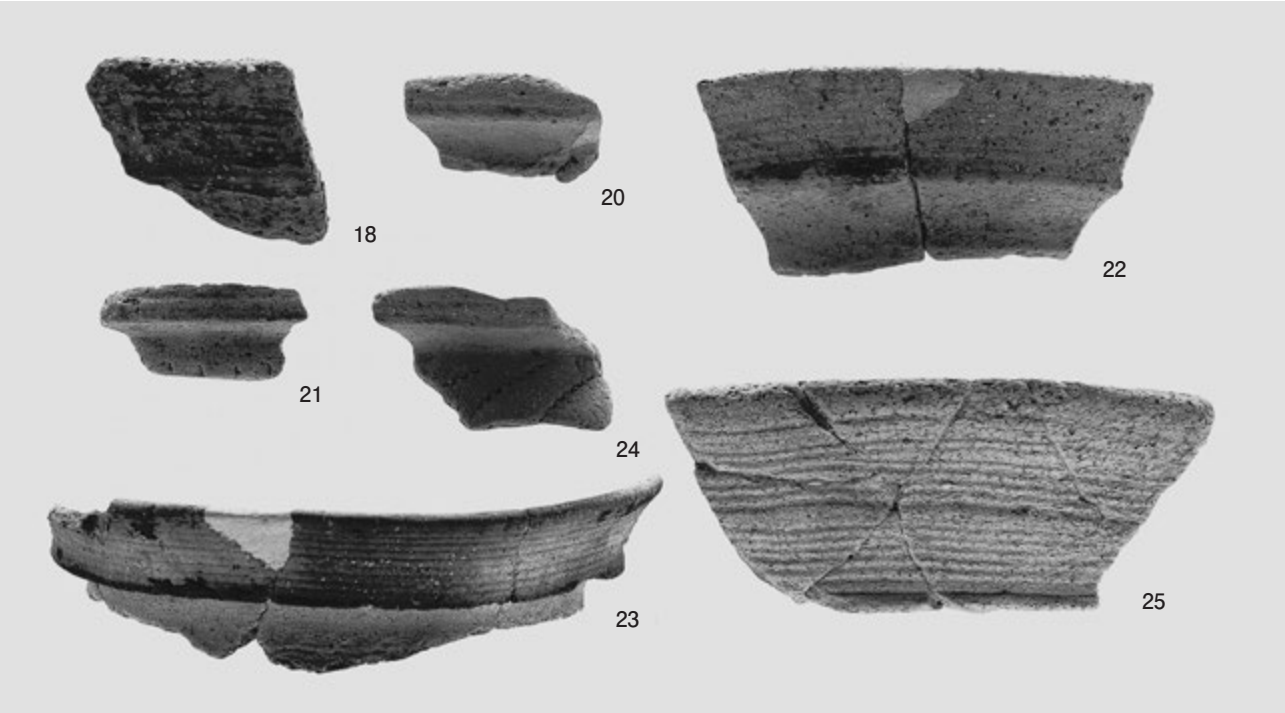


4．越敷山51・75・77・99号墳出土遺物



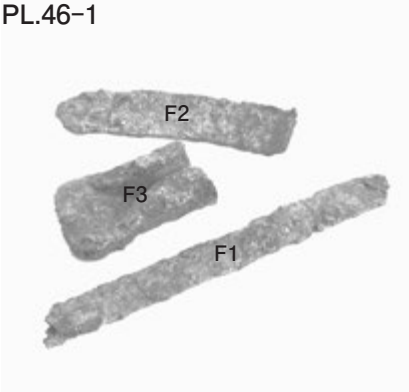
1．越敷山99号墳出土遺物

2．越敷山76号墳・遺構に伴わない遺物

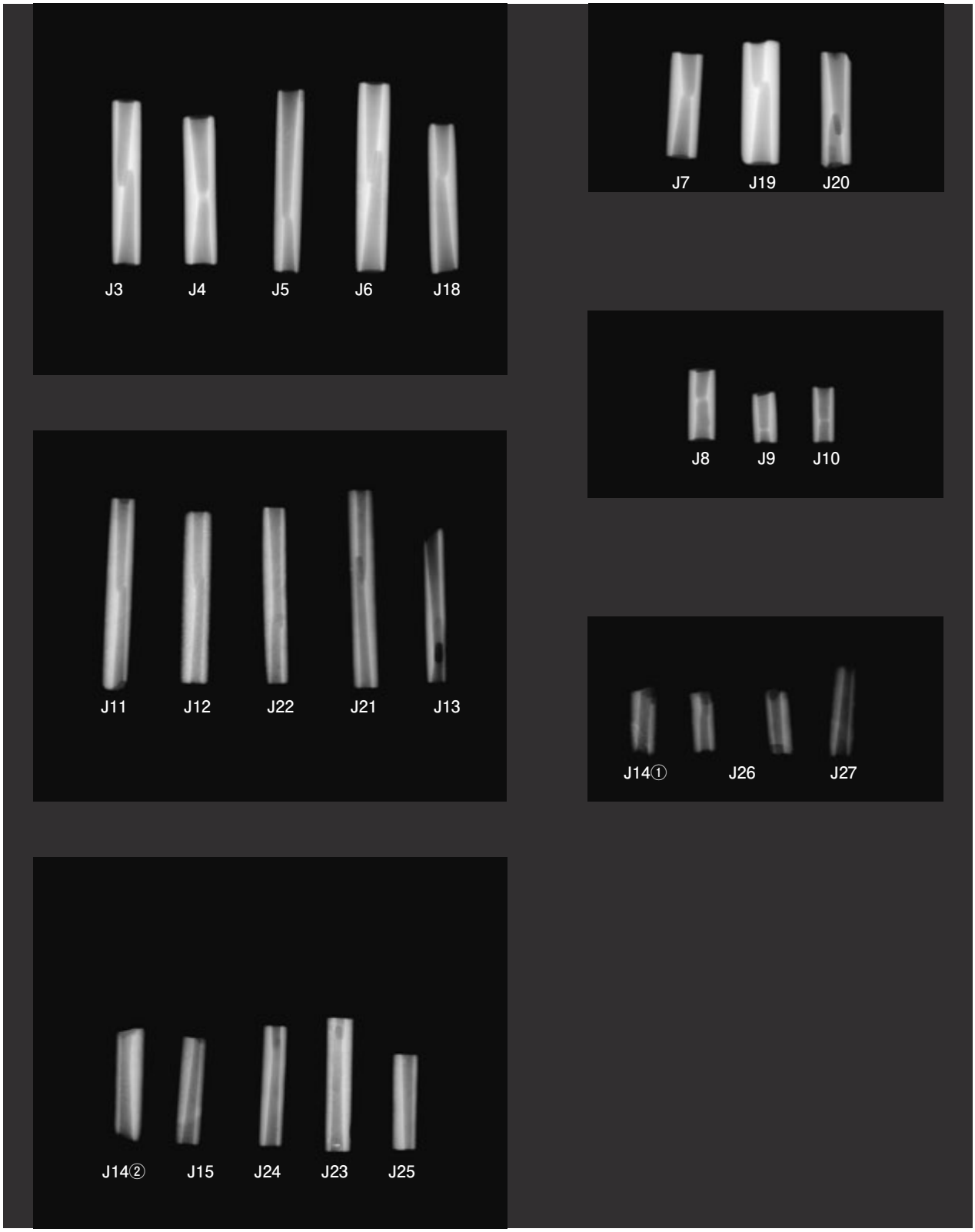


3．SI1・2・遺構に伴わない遺物

PL.46-1



PL.47-2



越敷山51号墳埋葬施設１出土管玉X線写真

報告書抄録

ふりがな	かなまわりいえのうえのうちいせき　こしきさんこふんぐん(かなまわりちく)
書名	金廻家ノ上ノ内遺跡　越敷山古墳群(金廻地区)
副書名	一般国道１８１号(岸本バイパス)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	X
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	119
編著者名	玉木秀幸、白石純、井上貴央、松原章範、岡﨑健治、江田真毅、足立昭子
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団　調査室
所在地	〒680－1133　鳥取県鳥取市源太12番地　電　話(0857)51－7552
発行年月日	2013(平成25)年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
金廻家ノ上ノ内遺跡 越敷山古墳群 (金廻地区)	鳥取県西伯郡伯耆町金廻字家ノ上ノ内21-2番地ほか	31371	1-114・116・140～142・163・164・379～381・384	35 22′26″	133°24′42″	20110526～20120706	4,544.5㎡	一般国道１８１号(岸本バイパス)道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金廻家ノ上ノ内遺跡 越敷山古墳群 (金廻地区)	集落 古墳	縄文時代	落とし穴		
		弥生時代	竪穴建物	弥生土器	
		古墳時代	古墳	鉄剣、鉄刀、鉄鉾、勾玉、管玉	

要約

金廻家ノ上ノ内遺跡は、越敷山から派生する丘陵の尾根上にある遺跡であり、そこには越敷山古墳群に属する古墳が所在する。調査の結果、縄文時代から古墳時代の遺構や遺物を確認した。縄文時代では落とし穴が多数認められ、狩猟場となっていたとみられる。弥生時代では竪穴建物２棟を確認した。通常の集落にしては平坦地が少なく、低地との比高差がある場所にあることから、広義の高地性集落として営まれていたと考えられる。古墳時代では、越敷山 49・51・75～77・98・99・121～123 号墳を確認した。これらは中期から後期に属することから、金廻周辺に分布する古墳は、この頃に築造されたものと思われる。なお、今回調査した古墳のうち、越敷山 51 号墳は、埋葬施設１から５体の人骨を検出したほか、鉄剣、鉄刀、鉄鉾、鉄斧、管玉、勾玉など多彩な副葬品が出土し、また墳丘の築造は、墳丘外表側に土手を巡らせ、その内面に土を充填していく西日本で広く認められる方法によって行われ、さらにその主体部となる埋葬施設１は、墳丘とともに形成する構築墓壙であるなど、当該地域における古墳の埋葬方法や築造方法を知る上で、数多くの情報が得られた。

鳥取県教育文化財団調査報告書 119
一般国道 181 号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

鳥取県西伯郡伯耆町

金廻家ノ上ノ内遺跡
越敷山古墳群（金廻地区）

発　行　2013 年 3 月 18 日
編　集　財団法人鳥取県教育文化財団　調査室
〒 680-1133　鳥取県鳥取市源太 12 番地
電話　（0857）51-7552
発行者　財団法人鳥取県教育文化財団
印　刷　勝美印刷株式会社